
二次元ドリームノベルズ
18
未満
下山田ナンプラーの助
挿絵／シロクマB
FTB!
～ふたなりちんぽタッグバトル～

◉小説 *Shimoyamada Numplanosuke*

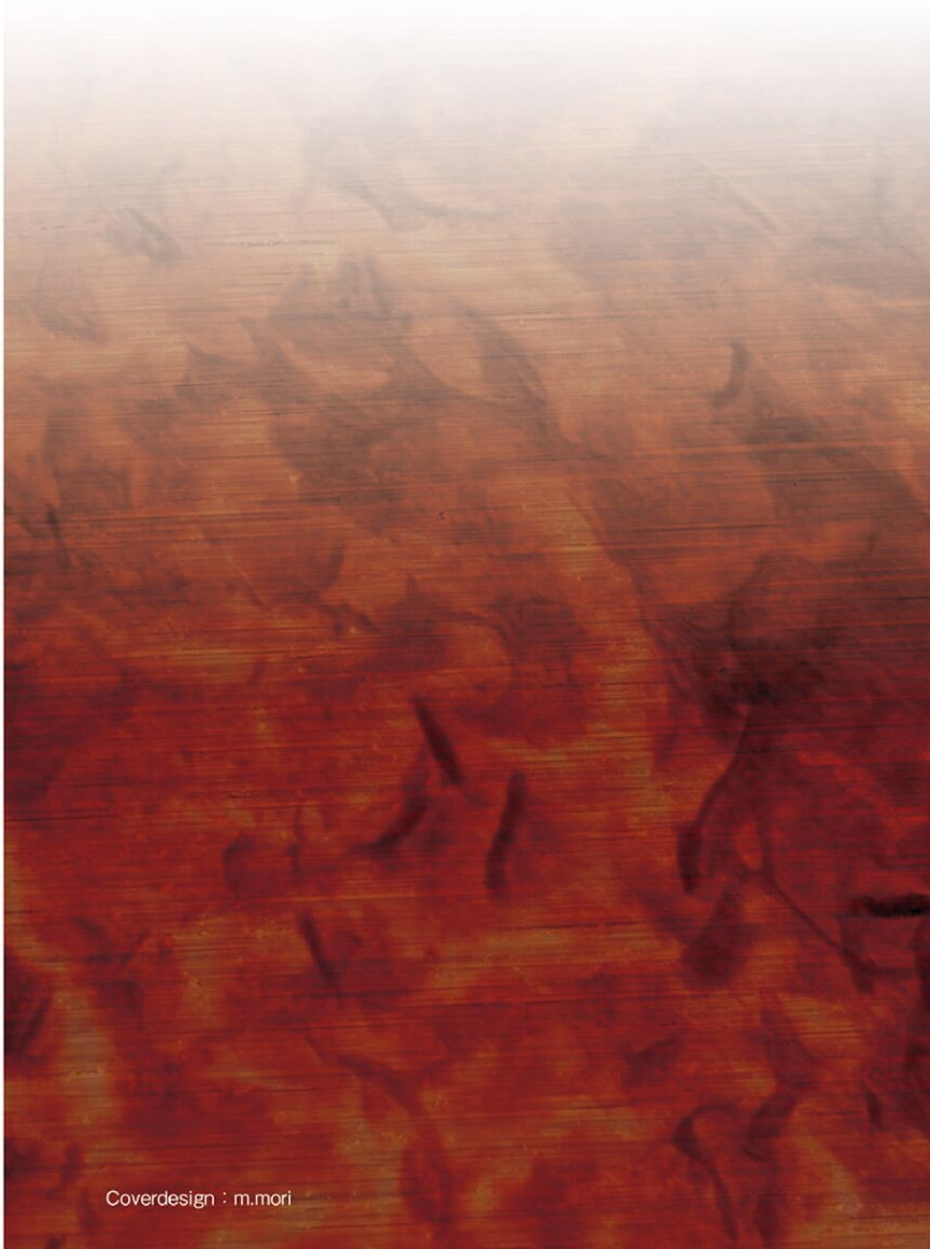
下山田ナンプラーの助

はじめまして、下山田と申します。高熱で倒れたときにふと思いついて書き始めたのでいろいろと頭のおかしい話ですが、楽しんで頂けましたら幸いです。

◉挿絵 *sirokumaA*

シロクマA

北極から氷山に乗って台湾にやってきた野生の絵描き。いつの間にか毎日エロいイラストを描く仕事を始める。最近魔物を狩るハンターに転職して、毎日の晩ごはんに悩む。



Coverdesign：m.mori




小説 下山田ナンプラーの助
挿絵 シロクマA
FTB!
～ふたなりちんぽタッグバトル～



登場人物紹介
Characters



室戸冴香（むろとさえか）

FTB四大流派の血を引くクールなふたなり少女。他者と関わりを持つことを嫌うふしがある。



天音美結（あまねみゆ）

聖珠学園に転入してきたばかりの少女。ふたなりであることにコンプレックスを感じていたが……。

プロローグ 006
第１話 ＦＴＢ部 010
第２話 練習開始 046
第３話 デビュー戦！ 097
第４話 もっと練習！ 136
第５話 新人戦タッグマッチ 177
第６話 都大会迫って 231
第７話 夏季ＦＴＢ都大会一日目 270
第８話 夏季ＦＴＢ都大会二日目 351
第９話 夏季ＦＴＢ都大会決勝 413
エピローグ 473
番外編 催眠敗北 484
番外編 冴香の悪夢 499

プロローグ

「んあぁあああっ！　ダメダメダメ、出ちゃうぅうっ！　もうダメ精液出る出る出るぅうう！」

股間にそそり立つ雄々しき肉棒から天を貫くかと思うほどの白き奔流を噴き上げ、少女の細い身体がマットに崩れ落ちた。

スタジアムを埋め尽くす数十万人の観衆が、一斉に雄叫びを上げ。

少女は倒れてもなおその三十センチ越えの男性器から精液を吹き出し、リングに精液の池を作っていく。

「あはぁあああ……っ！　精液ぃ……止まらない……んはぁ……っ」

「冴香（さえか）っ！」

彼女の戦いをコーナーで見守っていた黒髪の少女が、相方の射精に悲痛な声を上げ、たまらずリングに上がってその身体を抱きかかえる。

和装をアレンジしたような美しいリングコスチュームと、短いながらも美しい銀髪が自身の精液でドロドロに汚れ、色白の整った美しい顔は快感と屈辱に紅潮していた。

「しっかりして、冴香！」

「あはぁあああ……美結（みゆ）さ……ごめんなさ……私っ……ここまで……ああ、出る、出る出る出てるぅ……まだ出てるの……精液ぃ……止まってぇ……」

絶頂の余韻で全身を痙攣させながら切れ切れに零す少女は、まだゴボゴボとペニスから精液を吹き出しつつ相棒に己の失態を詫び。

その時スタジアム中に響き渡る実況の声が、少女たちを現実へと引き戻す。

《ここでついにダウ――ン！　聖珠学園（せいしゅ）の室戸（むろと）冴香、今まで必死に我慢していたがこれには耐えきれず大量射精してしまったあああ――！　聖珠学園はこれで一回射精、もう後がありません！》

天井から吊り下げられた巨大な電光掲示板、そのうち「室戸冴香」と書かれた箇所に赤いランプが一つ灯る。

これはその選手が射精したことの証であり、そして少女たちの命運があとわずかであることの証。

《さあ大変なことになってまいりました！　世界選手権出場の切符をかけた第六十六回ＦＴＢ（ふたなりちんぽバトル）、全国大会トーナメントその最終決戦！　全国初出場ながらここまで駒を進めてきた私立聖珠学園の室戸・天音（あまね）タッグ、強豪校、剛根（ごうこん）学院相手に手も足もペニスも出ない！

三本勝負で二回射精すれば終わりのこの決勝戦、いよいよ追い込まれました！》

「下がって冴香！　あとは私がやるから！」

「美結さん……」

すでに大量に射精し戦えない冴香の代わりに、リングでは黒髪の少女が前に出た。

黒と赤のビキニスタイルのコスチューム、そのスカートからは冴香に勝るとも劣らない巨根が天を衝くように隆々と反り返ってまだ戦えるとばかりに戦闘態勢を整え勃起している。

《タッチ成功！　室戸は下がり天音美結が聖珠学園の命運を背負って飛び出した！　しかしすでに一回射精している聖珠学園、彼女が落ちれば世界初進出の夢は途絶えます！》

実況の声が遠く感じる。

それほどまでに、目の前にそびえ立つ対戦相手の少女とそのペニスは美結に絶望的なまでの威圧感を放っていた。

喉が渇き、脚が震える。

世界への壁は、かくも高く分厚いのか。

どちらの選手も一切隙がなく、自分たちのここまでの懸命な攻撃でも全く射精に導けず。

それればかりか、実力で言えば自分以上であるはずの冴香をあっさりと大量射精させて自

分たちを追い込んだ。

美結が唾を飲み込むと、眼前のふたなり少女は長い金髪をかき上げながら妖艶に笑う。

「フフフ……ここまで食らいついてきただけでも驚くべき健闘だけど、それもここまでね。あなたもすぐにあっちの子みたいに、無様に敗北射精させてあげるわ！」

「っ……」

確かに相手タッグは強大だ。

力も、速さも、そしてその股間の肉棒も自分たちより遥かに勝っている。

しかし、それでも。

自分たちは、諦められない。

「まだ……まだ私たちは負けてないっ！　二人で約束したんだから……！」

長い黒髪を振り乱し、少女――美結は絶叫する。

目の前の相手に、後ろの相棒に、そして自分自身に言い聞かせるがごとく。

「絶対に、世界で戦うって！」

第1話　ＦＴＢ部

「天音美結です！　体を動かすことが好きです！　この学園でみなさんと仲良くやっていけたらなって思うので、よろしくしてやってくださいっ！」

用意してきたセリフを多少つっかえながらも言い終え、クラスの少女たちに拍手で歓迎され、若い女性の担任に指示された空席に腰掛け、少女――天音美結は安堵の息を吐いた。

私立聖珠学園。

ここは美結と同じ――両性具有、すなわちふたなりの少女のみが通う学園。

生徒・教師は全員ふたなり、全員股間に男根を持つ。それがこの学園の入学・編入条件だ。

今まで美結は自分の身体にコンプレックスを抱いており、それゆえいじめ――とまではいかなかったが孤立しがちで。

そんな折にこの学園の存在をインターネットで知り、一念発起して上京、編入してきたのだ。

ここならば劣等感を抱くことなく学校生活を送れると美結は一念発起して単身上京し、

こうして転入生として迎えられた。

（この子も、あの子も……それにこの先生も……みんな私と同じふたなりで、ちんぽついてるんだよね）

これからクラスメイトとなる生徒たちをぐるりと見まわして、信じられないと言うように目を瞬かせる美結。

今までの世界には自分自身しかいなかった両性具有が、この教室という狭い空間だけで三十人。

学園全体で言えば七百人近いふたなりの少女が、ここにひしめいているのだ。

そんなことをぼんやりと考えていたら、ふと右隣から声がかかった。

「ねえねえ、天音さんだっけ？　どこから来たの？」

「えっ、ひゃい！」

突然かけられた陽気な声に驚き美結が振り向くと、そこには栗色の髪をした女の子がニコニコと笑顔を向けていた。もちろんふたなりだ。

「え、えっと……岐阜県のＫ市ってとこから……」

「すごーい！　めっちゃ遠くから来てんじゃん！　え、なに？　地元にふたなり学校なかったからとかそういう理由で？　あ、あたし峰岸（みねぎし）舞（まい）！　分かんないことあったら何でも聞

いていいよ！　その様子だと、ふたなりの友達とかも地元にはいなかった系？」
「う、うん……」
「なるほどねえー。それじゃあさっそく」
「え？　……ひゃあっ！」
何か言っていた――と思う間もなく、隣の席の少女はおもむろに左手を美結のスカートへと伸ばしてきて。
手品のような早業で、スカートをめくり上げてショーツから美結の男性器をズルリと引きずり出してきた。
「うわ、でっか！　でっかあーっ！」
「ちょ、ちょっと……！」
巨根を目の前にした峰岸は歓喜に目をキラキラさせ、美結はあまりにも唐突な事態にスカートを下ろして隠すことも忘れて混乱する。
何の前触れもなく、自らのペニスを他人に見せてしまった。
今まではプールの授業も見学、林間学校も不参加と、あらゆる手段を尽くして隠してきた己のコンプレックスが、こんなにもあっさりと。
恥ずかしさと高揚感がみるみる加速していき、一瞬にして海綿体に血液が集まっていく。

（ひっ、だ、ダメ！　勃起しないで！）

「わ、おっきくなってきた！　ってかすごっ……天音さん、これ何センチあるの？」

「に、二十六セン、チ……」

ふたなりであること自体にコンプレックスを抱いていた美結だったが、この大きすぎる男根にも負い目を感じていた。

並の男よりも遥かに大きな――下手したら二倍以上の長さと太さを誇る己のペニス。

ふたなりの専門学園であってもここまでのものを持つ生徒は少ないようで、周囲からの羨望のため息と「おっきい……」「いいなぁ……」といった声が聞こえてくる。

（だ、ダメぇ……ちんぽ見られちゃってる……いくらふたなり学園だからって、私初日にクラスのみんなにちんぽ見せて勃起しちゃってる……）

異常ともいえる快感と興奮に、美結のペニスは収まることを知らず屹立し続ける。

「金玉もずっしりしてるし……これ相当精液出るんじゃない？　ってことでー……」

「えっ、な、なにを？　やっ、やめ、ダメぇえええ！」

舌なめずりをした峰岸は、おもむろに美結の二十六センチのペニスを握ると激しく扱き始める。

（う、うそっ！　こんなとこで、教室で、転校初日に！　私、初対面の人にちんぽ扱かれ

てる、手コキされてるぅ！）

「ほらほら、イっちゃいなよ天音さん、転校生の射精見たいなあー」

「ダメぇ！　と、止めてぇえ！　お願いぃい！」

家族以外に見せることも、ましてや触らせることもなかった美結の男の部分。

それをこのたまたま隣の席にいたふたなり少女に露出させられ、あまつさえ片手で手コキされている。

（き、気持ちいい！　気持ちいい……っ！）

オナニーなど比べ物にならない快感が、絶えずペニスから脳に送り込まれて射精願望が急速に膨らんでいく。

射精したい。今ここで思い切り精液を出して気持ちよくなりたい。

ダメだ。人前で、ましてや転校初日に射精など絶対にできない。

射精したい、ダメだ、射精したい、ダメだ――。

だがそんな葛藤も、峰岸の慣れた手コキの前には悲しいくらいに無意味で。

あっという間に理性は押し流され、欲望の濁流が射精管を上ってくる。

「ダメ、ダメダメダメぇえええ！　出ちゃう出ちゃう精液出るぅうう！　らめぇイクぅ、ちんぽイクぅうううううう――っ！」

「おー、出た出た出た」

悲鳴も空しく、峰岸の手コキにより美結はあっさりと絶頂を迎え。

その痙攣しながら果てる剛直から、教室の天井にまで届く白濁液がすさまじい勢いで放たれる。

「おおー。すっごい飛ぶね天音さん。ちんぽもでかけりゃ射精量も半端ないし。こんだけ射精できるのクラスにいないんじゃない？」

「わ、分かったら手とめてぇえ！　精液止まんない、止まんないのぉおお！　んあぁああ出る出る出てるぅ、転校初日でクラスのみんなの前で精液おもいっきり出してるのぉおお！」

感心しつつも手の動きを止めない峰岸に、美結の射精は止まるどころかさらに加速して白濁を垂直に噴き上げていく。

あまりの出来事と快感に思考回路はとうに焼き切れ、ただされるがままに峰岸の手コキにより公開射精を続けてしまう。

天井にぶち当たって雨のように降ってくる自分の精液が顔と髪、そして新しい制服を余すところなく汚していく。

クラスメイトの少女たちが息を呑み、「すごい……」などと口々に呟き、中には携帯で

写真を撮り出す少女も何人かいた。
（らめぇえええ……射精見ないで……撮らないで、こんな転校初日で精液出してるはしたないとこ撮らないでぇえええ……）
精液は三十秒経っても噴出を止めず、一分近く経ってようやく収まり、ビクン、ビクンとペニスがわななき続ける。
「やっと止まった？　すごい射精だね、ふたなりでもこんだけ出せる子めったにいないよ。いやー、とんでもない逸材がやってきましたねえ？」
「は……はーっ、はーっ、ああ……」
（出しちゃったぁ……転校して十五分で、初対面の子にちんぽしごかれてクラス全員に射精見せちゃったぁ……）
感動したように目を輝かせる峰岸に、美結は荒い息を吐いて椅子にぐったりと身をもたれさせるので精いっぱいだ。
そんな時、一人の怒号で美結は現実に引き戻される。
「こらぁ峰岸！　いくらなんでも授業始まってないうちから射精させるやつがあるか！」
「ひーっ、すいません先生、つい転校生ちんぽ味見したくて！」
「まったく……ほら雑巾！　さっさと拭かないと一時間目始まるだろう！」

怒った担任から雑巾を投げつけられ、峰岸はその場に屈んで美結の出した大量の精液を拭き取り始めた。

「あ……わ、わたしも……」

呆然と絶頂の余韻に浸っていた美結だったが、いくら理不尽に強制射精させられたからといって自分の出した精液を始末しないのも収まりが悪い。

そう思って自分も雑巾を一枚手に取り、一リットルパックの牛乳をぶちまけたかのような床を峰岸と一緒に掃除することにした。

「いやーごめんね天音さん、あたし、ふたなりちんぽ見ると扱かずにはいられなくて」

「う、ううん……」

ちょっと髪を触ったくらいの軽いノリで床を拭きながら謝ってくる少女に、美結は怒りや呆れよりも混乱に支配されていてそう返すのが精いっぱいだった。

（私、ここでやっていけるか不安だったけど……違う意味で不安になってきたなあ……）

男性器のせいで疎外され、ふたなりであることを必死に隠してきた美結のこれまでが、転入してわずか十五分で音を立てて崩壊していく。

これがふたなり専門学園なのかと、ひたすらにカルチャーショックを受けながらも自分の後始末をしていく美結。

そんな折、斜め後ろから椅子を引く音が聞こえ。
振り向くと、一人の少女が無言で雑巾を手に床掃除に加わっていた。
「あっ、ありがとう……っ」
礼を言おうとした美結は、そこで思わず言葉を失ってしまう。
（うわぁ……すっごい美人）
短くも美しい銀髪に、長いまつ毛と物憂げな眼、整った顔立ちにすらりとしたシルエット。
神秘的ともいえる美少女が、無言で美結の出した精液を拭いていた。
そのさまに美結は雑巾を持つ手を思わず止めてしまい、じっとその少女を見て。
彼女もまた、美結の視線に気づいたようだった。
「……なにか？」
「あ、いや、その……ごめんね、ありがとう」
「いえ、私もこのくらい射精しますので」
まさか「つい見とれて」などとは言えずしどろもどろになる美結に、その銀髪美少女は顔色一つ変えずに平然と返して掃除を続行していく。
（ひえぇ……こんな綺麗な子もふたなりなんだ……ちんぽついてるんだ……というかほん

と申し訳ないなあ、私のせいで精液拭くの手伝ってもらっちゃって……）

銀髪美少女はそれ以上何も言わず、バケツを持ってきて雑巾を絞ると自分の席に戻り、何事もなかったかのように授業の準備を始めていた。

（ほんとすごいなあ、この学園……）

「おはよー！」

「あ、おはよー天音さん」

美結が聖珠学園に転入してから三日が過ぎた。

あまりにもオープンな性の環境に戸惑うことばかりだった美結だが、初日に声をかけてきてそのまま強制射精させてきた峰岸をはじめ、ふたなりの友人も多くできた。

教室に入り何人かの友人と挨拶をかわし、地元ではとてもありえないようなやり取りを聞き流しながら鞄を置いて席につく。

「やっばい、今朝寝坊して抜いてなくてさー」

「あ、じゃトイレいこ？　手伝ったげるよ」

「この時間どこも抜いてる子でいっぱいじゃない？」

「別館の男子トイレならわりと……」

（……ほんと、みんなすごいなあ……ってか、友達同士で抜き合ったりするもんなんだね……？　舞ちゃんなら頼んだらノリノリで抜いてくれそうだけど……い、いけない、考えたら勃起してきちゃった！）

なんとか性欲を抑えてしばらくしたところで、担任教師が入ってきてホームルームが始まり。

終わり際に彼女は、美結の席にまで歩いてきて書類の束を手渡してきた。

「先生、これは？」

「部活の一覧表だ。まあ強制加入じゃないが、興味があるなら見ておけ」

ぶっきらぼうなふたなり女教師はそう言って、そのまま教室を出ていく。

「美結ちん、なんか入りたい部活あんの？」

「舞ちゃんは？」

「んー、帰宅部」

隣の席から峰岸が声をかけてきて、彼女と適当に会話しながらペラペラと資料をめくっていく美結。

ソフトボール部、バスケ部、吹奏楽部、剣道部、絵手紙部、茶道部――。

ふたなりの専門学園であっても、部活動自体は割と普通のようだ。

（ここに来る前は空手部だったけど……）

幼い頃から美結は空手に親しみ、これでも初段は持っている。

しかし身体の成長と共に著しく大きくなる男性器は少女を大いに悩ませ、道着で擦れるだけで勝手に勃起してしまうありさまで、稽古どころではなかったためそのまま空手はやめてしまった。

見たところ空手部はないようだが、よしんばあったとしても続けられないだろう。

文化系か、帰宅部か――。

（……ん？　Ｆ……ＴＢ……部？）

ふとそこで、見慣れない名称が一つ目に留まった。

一瞬ＭＴＢ（マウンテンバイク）部かと思ったが、どう見てもＦＴＢ部と書いてある。

「舞ちゃん、これなに？」

「ん？　あー、ＦＴＢかー。美結ちん割と向いてるかもね」

にゅっと顔を突き出して資料を覗き込む峰岸は、ああこれのことかと納得した表情を見せてから「ＦＴＢって知らない？」と問う。

こくんと美結が頷くと、峰岸はあっさりと答えた。

「ふたなり・ちんぽ・バトル。略してＦＴＢ。ちんぽイカせ合って射精したら負けなやつ」

「へえー、ふたなりちんぽ……え……？」

それが、天音美結にとってＦＴＢとの初めての出会いであり。

その時はまだ、自分がこの道に進むとは思ってもいなかった。

「えええええええええええ――!?」

昼休み、仲良くなった数人の友人たちと机を合わせて弁当を食べながら、美結はふたなり少女たちからそのＦＴＢというものについての説明を受けていた。

ふたなりによる、ふたなりのための、誇りとプライドをかけたちんぽとちんぽの真剣勝負――それがＦＴＢ、ふたなりちんぽバトル。

言われてもピンと来ないのだが、とにかくふたなり同士でリングに上がって相手を射精へと導くことができれば勝利。

勝てばその場で、敗者に公開陵辱する権利が与えられる。

「つまり、勝っても負けても気持ちよくなっちゃうってとこがイイよねっ！」

「そ……そうだね……」

指をビシッと立ててウインクしながら言う峰岸に、美結は汗を垂らして同意するほかなかった。

（でも、ふたなりだけに許された、誇りをかけた戦いかあ……）

弁当を口に運びつつ、美結はほんの少しＦＴＢに興味が湧いてきていた。

もともとふたなりのコンプレックスを解消するために、聖珠学園にやってきたのだ。

ここでならふたなりであること、男性器があることを隠さなくてもいいと考えて。

そうしたら、隠すどころか堂々と肉棒で戦う格闘技があると知り。

（ちょっと、やってみたいかも……）

などと、思っていた。

「ところで、うちのクラスでＦＴＢ部の人いたっけ？」

友人の一人が顎に人差し指を当てて天井を仰ぎつつ、思い出そうとするポーズをとっている。

「どうだろ？　聖珠（うち）、生徒数は多くてもＦＴＢ部はそんな強くなくて規模もそんなでもなかった気が」

「やっぱ剛根学院とかだよね、強豪校っていえば。プロもだいたい剛根出身だし」

ペニスの生えた少女たちは口々に意見を交わし合い。

ふとそこで、思い出したように手をポンと打つ峰岸がいた。

「そうだ室戸さん！　室戸さんＦＴＢ部じゃない？」

「むろ……とさん？」
美結は転校三日目で、まだクラスメイトの顔と名前が一致していない。
言われても誰だったか思い出せないのだが、峰岸は立ち上がって「おーい！　室戸さーん！」と大声でその少女を呼び。
そうすると、少し離れた場所で黙々と一人でサンドイッチを食べていた少女がピクリと反応する。
「ねー、ちょっと美結ちんにさ、ＦＴＢのこと教えてあげてよ？」
「……」
彼女は無言でこちらを向き。
（あっ！　あの綺麗な子じゃん！）
美結はハッと気づく。
三日前の転校初日、自分が峰岸に思い切り手コキで強制公開射精させられた時。
自分の斜め後ろに座っていた銀髪ショートヘアの寡黙な美少女が、無言で精液の始末を手伝ってくれたのだ。
（室戸さんって言うんだ……）
その室戸と呼ばれた銀髪美少女は、静かな足取りで自分たちの輪に近寄って、抑揚のな



い声で「なんでしょう」とだけ言う。
「室戸さんＦＴＢ部でしょ？　美結ちん、ちょっと興味あるみたいでさ。いろいろ教えてあげてよ」
峰岸の促しに、室戸は座っている美結をじっと見下ろして。
少々の沈黙の後、淡々とこう言う。
「……やめたほうがいいですよ、天音さんは」
「えっ……」
美結も、峰岸も、他のふたなり少女たちも、氷のような一言に和やかな雰囲気を打ち消されて沈黙してしまう。
大声で騒ぐので聞きたくもないのに聞こえてくるんですが、と前置きしてから室戸は言った。
「天音さん、ＦＴＢのことを知りもしなかったそうじゃないですか。そんな初心者以前の人がいきなりＦＴＢを始めるなんて無理がありますよ。それに天音さん、初日に峰岸さんの手コキであっさり大量射精してましたよね。そんな我慢弱さでＦＴＢができると本気で思っているんです？」
「ちょ……そんな言い方しなくても」

さすがにノリのいい峰岸も真面目なトーンになって銀髪の美少女を諫めようとするが、室戸は動じない。

「そんな初心者が来られても迷惑なだけです。ＦＴＢはセックスじゃないんです、ちんぽ射精したいならご友人同士で乱交でもしてどうぞ」

「ちょ、ちょっと室戸さんっ！　待っ……」

美結の声にも反応せず、もう話すことはないとばかりに教室を出てどこかへ行ってしまう室戸。

それからややあって案の定、峰岸が金切り声を上げた。

「きー！　なにあの子超ムカつくー！　元から話しづらいなと思ってたけどあんな露骨に言うことなくない？　何様のつもりよほんとにもー！」

「い、いいよ舞ちゃん、私は別に気にしてないから」

机の上に乗って全身で怒りを表そうとする峰岸をなだめつつ、美結はぼんやりと思っていた。

（あそこまでかたくなな態度でいるってことは、室戸さんは相当ＦＴＢに誇りを持ってるのかも……だって、ふたなりの誇りをかけて戦うってくらいだし……室戸さんにも、室戸さんなりの想いがあったのかも）

まだ峰岸は怒っていたが、美結はこの時ますますＦＴＢへの興味を、そして銀髪美少女の室戸への興味を抑えることができなかった。

放課後、掲示板に張られていた部活動新入部員の募集を美結は眺めていた。

そこには、多くの一般的な部活に混じってＦＴＢ部の募集もあり。

活動場所もそこに書いてあって、見学だけでもどうぞとある。どうやら本校舎を一度出た後、校庭を経た別館の地下に部室があるようだ。

一緒に帰ろうと言う峰岸たちの誘いを断って、美結は若干迷いながらも一人で別館地下へたどり着き。

「ここかあ……」

人気（ひとけ）のない廊下、ＦＴＢ部と書いてある部屋の扉の前に立っていた。

この中で、ＦＴＢ部が活動している。

ペニスとペニスでイカせ合い、射精した方が負け――。

中でどのようなことが起こっているのか、想像もつかない。

何度もノックして入ってみようと試みるが、ここにきて緊張してしまいなかなか一歩が踏み出せない。

時間にして十分はそうしていただろうか、ふと横から声がかかった。
「……またあなたですか」
「ひゃっ！　あ……む、室戸さん……」
美結は電気ショックを浴びせられたかのようにその場で跳ね上がり、それから相手の顔を見て無意識に一歩後ずさる。
昼休みにひと悶着あった、ＦＴＢ部のクラスメイト、銀髪の美少女。
彼女が体操着袋を肩にかけ、扉の前で美結と相対している。
「い、今から部活……？」
「それ以外になにかあると？」
呆れたようにため息を一つ吐き、室戸は相変わらずの無抑揚な声で言った。
「やめた方がいいと言ったはずですが」
「う……そ、それは」
氷のような瞳。
昼休みのこともあって、冷徹で無感情な少女だという印象をどうしても受けてしまう。
（けど、室戸さん……初日に私の精液拭いてくれてたし、悪い人じゃないと思うんだよね）
あの日、彼女は自分や峰岸が頼んだわけでもないのに、自発的に精液掃除を手伝ってく

れたのだ。

どうしても美結は、室戸のことをただの非人情な少女だとは思えなかった。

銀髪美少女は淡々と、問い詰めるように言う。

「あなた、ＦＴＢが何か友人から聞いていますよね？」

「き、聞いてるよ！　ちんぽイカせ合って射精した方が負けなんでしょ!?」

「それを知って、早漏のあなたがやってみたいと？　言っておきますが負けるとその場で公開陵辱されるんですよ。そういう願望でもあるんですか」

「わ……分かってるし、そんな気はないよっ」

敗者はリング上で、勝者に好きなだけ犯される。

そこに拒否権はなく、ただ為されるがままに。

ちなみに勝者がリングを降りた時点で敗者を犯せる権利は消滅するため、相手に敬意を払うタイプのちんぽファイターや接戦で自分もいっぱいいっぱいであった場合の選手はこの限りではないが――。

ただ、それでも。

美結は、ＦＴＢをもっと知りたいのだ。

「私、ちんぽついてるのがコンプレックスで、この学園に転校すればなにか変わると思っ

て……そんで、ちんぽで戦うスポーツがあるって知ったら、どうしても気になって……」

室戸はじっと黙って、必死に言葉を紡ぐ少女を見ていた。

不器用で、それでも必死に。

今まで縁のなかったこの世界の門を叩こうとしている彼女を。

そして、三日前のことを思い出す。

（彼女の巨根、確かにＦＴＢで戦える素質はある……）

自分の斜め前の席に座ったと思ったら、信じられない勢いで白濁液を噴き出す美結の姿と、その太く逞しい肉棒を。

数多のふたなりちんぽファイターと対戦を重ねて少女たちのペニスを見てきた室戸であっても、美結のそれは一線級の武器だった。

しかもＦＴＢ自体を知らない、一切鍛えていない原石のままの男性器であれだけ大きいとなればなおのこと。

（けれど早漏すぎます。あの我慢弱さでは新人戦の一回戦も無理……ＦＴＢはスポーツやセックスのように甘くはありません。興味本位で足を踏み入れて再起不能になるちんぽファイターもいる……）

が、この少女は。

未経験にもかかわらず、真剣な面持ちでこちらの世界へ飛び込もうとしている。

「……」

「む、室戸さん？」

「分かりました、見学くらいなら好きにしてください」

その言葉に、美結はパアッと顔を輝かせ。

室戸はもう一度ため息をつくと、今まで美結が開けたくても開けられなかった引き戸をこともなげに開けて部室の中へ入っていき。

振り向いて、美結を促す。

「なにをしてるんです、見てみたいんじゃないんですか」

「あ、う、うんっ……」

言われるまま、美結も部室へと一歩を踏み出し。

その瞬間。

「んほぉおおおお――！　おおっほぉおおおお――っ！　精液出る、出る、出るぅううう！　また強制敗北射精しちゃうのぉおお！　ちっ、ちんぽ、ちんぽぉおおお、ちんぽぉおおおお――っ！」

「え……」

女の子の甲高い絶頂声と共に、美結の顔面に熱い何かが大量に飛んできた。
「んぉおおおお――！　真奈ちゃんそれダメ、それ反則なのぉおおおおお！　後ろから金玉揉み手コキらめぇえっへえええ！　精液止まんない、女の子ザーメン止まんないのぉおおおお――！」
（熱っ！　な、なにこれ!?）
あまりのことに呆然として身動きもできないまま、絶えず顔に浴びせかけられる熱線のごとき白濁。
（せ、精液だ！）
それが部室中央のリングで絡み合っている二人の少女のうち、片方のペニスから噴射される精液であることにようやく気づく。
「ひ、ひいい――っ！」
慌てて――すでに手遅れだが――美結が身を屈めると、ビームのような精液は彼女の身体を通過して開けたままのドアから廊下へと波打ちながら飛んでいく。
「な、な、な……」
「まったく、この程度で驚いてるようではＦＴＢなんて務まりませんよ」
混乱する美結に、入室するなりサッと壁際に退避して精液砲撃を回避していた室戸はい

つものことだとばかりに平静な口調で少女を見下ろしている。
だが、部屋に入って一秒で精液を浴びせかけられて混乱しない方がおかしい。
軽くパニックになる美結に、スッと室戸は手を伸ばして。
「立てますか？」
「……あ、ありがと……」
精液まみれになった美結は、半ば呆然としながらもその手を取って立ち上がる。
「ああ、はあ……もう、真奈ちゃんたら、後ろから金玉揉み手コキだけはダメって言ったじゃない……それされると私、射精確定なんだからぁ……」
「ふっふーん、相手の弱点を突くのは基本中の基本なのでーす」
部室中央のリングではようやく射精が止まった少女がぐったりと倒れており、もう一人の小柄な女の子がガチガチに勃起させたままのペニスを強調するかのように腰を突き出して勝ち誇っている。
（ひえぇ……ほんとにちんぽイカせ合ってたんだ……）
他人の精液をボタボタと足下に垂らしながら、美結は呆然と立ちすくむ。
するとリングの少女二人はこちらに気づき、射精していなかった方の小柄な少女がロープをくぐってぴょんと跳び下り、勃起した男根が着地際にぶるんと揺れた。

「あ、冴香っちじゃんお疲れー。っとー、そっちの子は……もしかして新入部員⁉」
「見学です見学。どうしてもと言うので仕方なく」
期待に目をキラキラさせる少女――どう見ても子どもにしか見えない体型とそれに不釣り合いな男性器を持つ彼女に、室戸は首を振って否定する。
会話の態度からして、この小柄な少女は上級生のようだが、自分や室戸より背が低い上に顔立ちも幼い。
まじまじと美結が見ていたら、その少女はギロリと美結を睨み上げた。
「ちょっと、いま私のこと子どもだって思ったでしょ！　これでも三年生なんだかんね！」
「え？　そ、そんなこと思ってないよ……じゃなくて、思ってませんよ！」
子どもにしか見えず思わずタメ口になってしまい、慌てて訂正する美結。
その少女は金髪で、中途半端な長さのツインテールを無理やりドリル状にしたような髪型だ。胸は皆無と言ってもよいほど平坦で、それに比べて股間にそそり立つそれは自分の二十六センチの巨根に迫るほど大きい。身長が低いぶん、余計に大きく見える。
（ちっちゃな体におっきなちんぽ……うっ、勃ってきちゃった……）
美結が思わず前かがみになってスカートを押さえていると、リング上でぐったりしていたもう一人の少女も騒ぎに気づいて降りてくる。

自らの精液でドロドロになったまま、絶頂後で力が入らないのか転がるようにリングから降りてきたためにベチャッと粘性の高い音がして、それから文字通りズルズルと音を立てながらナメクジのように近づいてくる全裸の美少女。

「あらぁ……？　あらあら……？」

（ひいっ！）

気だるげな表情と紫色でウェーブのかかった長い髪、全身精液まみれでテラテラと輝いている卑猥で豊満な肉体。

先ほどの少女とは真逆に、百センチを超えるかと思うほどの爆乳だった。美結も九十センチＦカップとかなりの大きさなのだが、それを遥かにしのぐ質量。

股間の肉棒は先ほど大量に射精したこともあって萎えてはいたが、それでも十五センチを超える大きさのそれがぶら下がっていた。勃起すれば何センチになるというのか――先ほど射精していた時は遠目かつ一瞬だったため拝めなかったが、おそらく三十センチは超える大業物だろう。

「あなた、見ない顔ねぇ……？」

「あ、あのっ、私ＦＴＢ部に興味あって、見学に」

緊張と恐怖でカチコチになりながら美結が答えると、ナメクジのような美少女はそこで

ふわあっと笑う。
「あらぁあああ……！　嬉しいわぁ、やっと二人目の新入部員さんが来てくれたのねぇ？」
「い、いえ、ですから見学で……」
「いいのいいの、ゆっくりしていってねぇ？　あらあら、私の精液いっぱいかかっちゃったわね、ごめんなさいねぇ」
おっとりした口調の美女はいまだペニスから白濁液の残りを滴らせながら、ハンカチで美結の顔についた精液を拭い取った。
「今年は一年生の新入部員が冴香ちゃんだけで、このままじゃ廃部になっちゃうところだったのよぉ。もう一人来てくれてとっても嬉しいわぁ」
「そうよ！　今うち二年がいないんだかんね！　来年どうなるのかなって思ってたんだから！」
本当にありがたそうに目を細めている彼女の笑顔を見ていたら、なんだか申し訳ない気分になってきた。
まだ見学だけで、本当にＦＴＢ部に入るかどうかは決めていないのだが。
「私はぁ、一応部長さんやってるぅ、夕月紫（ゆうづきゆかり）ですよぅ。よろしくねぇ」
「末藤真奈（すえどう）よ！　ちゃんと先輩って呼んでよね！」

「あ、天音美結です。転校してまだ三日目です、よろしくお願いします」
大柄でおっとりした部長こと夕月紫に、小柄で貧乳な金髪の三年生、末藤真奈。
この二人と室戸の三人だけが、今の聖珠学園ＦＴＢ部員だという。
自己紹介を終えた二人の先輩が、さあああなたの番よと言わんばかりにじっと室戸の方を見ている。
その視線に気づき、「同じクラスなんですが……」と室戸は呟いてから改めて名乗った。
「……室戸冴香です。一応ランク7でそこそこ協会には顔が利きます。よろしくどうぞ」
「う、うん、よろしくね」
（下の名前、冴香って言うんだ……クールな室戸さんにピッタリ……というか、ランク7ってなに？　ランクあるの？　空手の段位みたいなものかな？）
関心と疑問に美結が包まれていると、横から小さい方の先輩の真奈が口を挟んできた。
「冴香っちはすごいんだよ。なんたって『あの』室戸流だかんね！」
自分のことのようにない胸を張ってふんぞり返る、小さな上級生。
「室戸流……？」
「知らないの？　ＦＴＢ四大流派の一つで、ちょー名門なんだよ！　ちんぽファイターの常識だよ」

「ＦＴＢのことを知らなかったんですから、室戸流のことも知ってるはずないでしょう」

呆れ気味に室戸は言う。

それから銀髪の美少女は、ぽかんとする美結に平淡な声で解説を始めた。

「いいですか――」

ＦＴＢの歴史は古く、そもそもの起源は紀元前千五百年頃のエジプトにあったと言われている。

当時のＦＴＢは神聖な儀式であり敗者はその場で神への供物となり生贄に捧げられていたとされ、現代の「敗者は勝者に公開陵辱される」といったルールは、ここから来ているとされている。

その後ＦＴＢは世界中に広まり、日本では飛鳥時代に仏教の伝来とともに持ち込まれたという説が最有力で当時は「魔羅闘（まらとう）」と呼ばれ、しばしば御前試合などで魔羅闘が行われていたと史料には残っている。

江戸時代中期に時の将軍により禁止され明治時代に復活するものの第二次世界大戦のあおりを受けて再び禁止となり、戦後にルールを世界規定に合わせ「ＦＴＢ」として復活し現在に至る。

そして当時のＦＴＢを日本に持ち込んだ一人のちんぽファイターと日本人男性の間に生

まれた四つ子のふたなりが日本ＦＴＢ四大流派の開祖と言われており、室戸流はそのうちの一派であると彼女は教えてくれた。

「――わかりましたか？」

「う、うん……」

長々と冴香は説明したが、美結の頭には半分も入ってこない。

覚えられたのはＦＴＢの起源が古代エジプトだということと、室戸はＦＴＢの名門出身ということだけだ。

「じゃあ、室戸さんはその室戸流の継承者的な感じなの？　すごいんだね！」

「……」

手放しで美結は彼女を褒めたつもりだったのだが、意に反してそこで沈黙してしまう室戸。

（あ、あれ？）

何かまずかったかな、と美結が思っていたら。

「……すみません、今日は体調が悪いのでこれで」

「ああっ、室戸さん！」

有無を言わさず銀髪美少女は踵（きびす）を返し、スタスタと歩いて部室から出ていってしまう。

（うわー……怒らせちゃったのかなあ）

自らの軽率な発言を後悔しても、本人はすでにいなくなってしまった。

気落ちしていると、背後から小さな上級生が慰めるように声をかける。

「冴香っちはね、家のことあんまりしゃべらないんだよ」

「末藤先輩」

私も前にそのことで冴香っちのこと怒らせちゃったんだ、と金髪貧乳ふたなり少女は言った。

そこに部長こと紫が続ける。

「そうなのよねぇ。四大流派がなんでこんな弱小校にいるのかも、よく考えてみたらおかしな話だし。ＦＴＢの名家はＦＴＢの名門校に無条件で入れるものだしねぇ。まあ、ああいった家だから、跡取り問題みたいなのがあるのかしらぁ？　うちに来てくれたのは嬉しいけど、廃部間際だし、なんだか才能の無駄遣いな気がして、ちょっともったいないわよねぇ」

（室戸さんは、室戸流の正式な継承者じゃない……？）

名家の跡取り問題などといった漫画のようなことが、身近で起きているらしい。

だが推し量る材料がなく、これ以上考えても無駄のようだ。

「それはそれとして、天音さん。どうかしらぁ、ＦＴＢ部に入らない？」
話を戻すかのように、紫がねっとりとした口調で誘ってくる。
「えっ……で、でも室戸さんがなんて言うか……」
「入る入らないは美結ちゃんの自由じゃん。やってみたいって気持ちがあればそれで十分だよ」
一瞬室戸のことが頭をよぎったが、上級生たちは気にせず美結の意志を尊重する構えを見せている。
美結は考えた。
（ＦＴＢ……ふたなり同士の誇りをかけた戦い……）
そこに本当に身を投じて、果たして良いのか。
自分はこの、女の身体にあるまじき大きすぎる男性器に悩まされてきた。
それだけにこれまでの反動もあり、胸の高鳴りを抑えきれない。
まだ、実際のＦＴＢを見たわけでもないが。
そうしたら、実に便利な言葉が部長の口から零れ出た。
「仮入部でもいいのよぉ？」
仮性包茎の「仮」。その一字が入るだけで、ふっと気持ちが軽くなる。

（うん、やってみる！　ダメそうならやめればいいんだし！）

美結は決意して。

ＦＴＢへの第一歩を、踏み出した。

「わかりました！　じゃあとりあえず仮入部で！」

「わぁあ。ようこそＦＴＢ部へー。歓迎するわぁ」

「やったー！　これで部員四人！」

紫も真奈も、満面の笑みで美結を歓迎する。

「……あ、そういえば顧問の先生っているんですか？」

そこで、ふと美結は思った。

部活である以上は顧問がいるだろうから、挨拶はしておきたい。

すると、真奈と紫は首を振って順番に答える。

「んーん、今はいない」

「神薙（かんなぎ）先生は今年の二月に海外出張に行っちゃってねぇ。今このＦＴＢ部には顧問いないのよぅ」

「私たちはエンジョイ勢っていうか、大会に出るような実力でもなかったし、好きにやってなって言ってね。だからホントにフリーダムなんだよ。でも冴香っちもいるし、美結ち

んも入ったし、今年は大会に出られるかもね」

どうやら顧問は不在で、それゆえに自由な雰囲気らしい。

あまり厳しい顧問がいても困るし、この空気ならコンプレックスも忘れて楽しくやれそうだ。

こうして美結は、ＦＴＢ部に仮入部することになった運びだが。

次の瞬間、二人のふたなり先輩から不穏な気配が漂い出し。

「それじゃあ早速……新入部員ちゃんには歓迎の意味でいっぱい気持ちよくなってもらわないとねぇ？」

「ふふーん、先輩の命令には絶対従わないとダメなんだかんねー？」

（あ……これはアレだ……めちゃくちゃちんぽ気持ちよくされちゃうやつ……）

美結は直感で危険を悟ったが、すでに遅く。

不気味な笑顔と共に迫ってきた二人の手によって、美結はあっという間に制服を脱がされ全裸にされてしまい。

「あらぁ、初心者なのに立派なちんぽねぇ」

「これはたっぷり精液出させてあげないと、ね」

「ひ……っ」

上級生はそれぞれのペニスを怒張させ、怯える小動物のような新入部員ににじり寄っていく。

白濁液にまみれた歓迎会は、帰りの電車がなくなる頃まで続いた――。

第2話　練習開始

（うう……眠い……結局昨日は三十五回も射精させられちゃった……）

転校四日目、昨日ＦＴＢ部に仮入部した際の「歓迎会」と称した先輩二人の快楽責めにより、足腰立たなくなるほどの身体に鞭を打って、美結はなんとか教室にまでたどり着く。

昨日はどうやって帰ってきたか記憶になく、家に着くなり疲労感と快楽の余韻で倒れ込むように寝てしまった。

隣の席の峰岸が話しかけてくる内容もほとんど頭に入らず、ぐったりと机に突っ伏して。

いまだに下半身にうずくように残る快楽に身を任せていたら、不意にドンと机を叩く者がいた。

「ふぇっ⁉」

驚いて美結が跳ね起きると、目の前には自分の机に手をついて立ったままこちらを睨むように見下ろしている銀髪の美少女。

「……あ、室戸さん……」

美結が仮入部したＦＴＢ部に所属しているふたなりちんぽファイター、室戸冴香がそこ

にいる。
「ちょっと来てください」
「え、なに？　ちょっ、ひゃああ！」
彼女はそう言うが早いか、半ば強引に美結を立たせると。
ズルズルと引きずるように、有無を言わせず彼女を女子トイレへと連れていく。
「先輩から聞きましたよ、あの後ＦＴＢ部に入ったっていうのは本当ですか」
「か、仮入部だよ」
個室に連れ込まれ、密室で顔を突きつけられて問い詰められる。
近くで見ると本当に綺麗だ――思わず美結はそんな感想を抱いたが、室戸冴香の表情は厳しい。
「まったく、やめた方がいいと言ったのに……迷惑なんですよ、あなたみたいな初心者が入部なんて」
「だ、だって先輩たちがいいって……それに、誰だって最初は初心者でしょ？」
至極まっとうな意見で美結は返すと、冴香は返答に困ったように沈黙して。
それから顔を離し、ため息をついてから言った。
「分かりました、ただし条件があります」

「じょ、条件？」

戸惑う美結に、冴香は平淡な声でその条件を告げる。

「ええー!?　新人戦で負けたら退部――!?」

放課後、ＦＴＢ部室で室戸はその旨を二人の先輩にも話し、小さい方の三年生、末藤真奈は甲高い声で絶叫した。

一か月後のＦＴＢ新人戦シングルマッチ、そこで一勝すること。

「なんでそんなこと決めちゃうの冴香っちー！　せっかく一年生もうひとり増えたのにー！」

「新人戦は一本勝負の勝ち抜きトーナメント戦で行われるのよぉ？　つまり一回射精したら終わり、一回負けたらもうそこで終わりじゃない。ちょっと厳しいと思うわぁ」

おっとりした大柄の部長、紫も頬に手を当て困ったように言う。

「それくらいの条件をクリアして頂かなくては、どのみち今後他の選手に潰されるだけです。初心者以前の天音さんが再起不能になるのを未然に防ぐ意味合いも兼ねていると思ってください。これは意地悪などではなくプロとして最低限の配慮です」

三年生相手にも動じず、平静に返す冴香。

幼い頃から家の名のもとＦＴＢの修練を積んできた彼女にとって、自分の目の届く範囲で新人が潰れてしまうことは避けたいということらしい。

「もちろん右も左も分からない新人を放置などしません。これでもこの学園に入学する前は室戸流師範代、新人ちんぽファイターの育成指導など飽きるほどやってきました。私が直接ひと月指導すればよほどの強敵に当たらない限り新人戦の一回戦程度、誰でも勝てるように仕上げられます」

つまり、これからの指導に美結が一か月ついてこられるかどうかという、彼女の本気度を図ることが目的であり、勝利はその結果おのずとついてくるものに過ぎないと冴香は言った。

「むー……大丈夫かなあ」

真奈が心配するが、すでに美結は心が決まっていた。

室戸冴香は自分が本気であるか確かめようとしている。

本気でなければ許さないとばかりに。

それは冴香自身も、ＦＴＢにいつも本気で向かい合っていることの証拠でもあるのだ。

（室戸さんに私のＦＴＢに対する想いをちゃんと見てもらって、それで新人戦で勝つ！）

「私やるよ！　室戸さん、一か月よろしく！」

グッと拳を握り、美結は同学年のクラスメイトに頭を下げて指導を乞う。
長い黒髪がばさりと落ち、冴香はその頭頂部をじっと見つめて。
「いいでしょう、下だけ脱いでリングに上がってきてください」
そう言って、先に部室中央の闘技場へと上がっていく。
美結もバッと頭を上げ、迷うことなくスカートとショーツを脱ぎ捨てて。
二十六センチの巨根を揺らし、冴香と反対側からリングへと上がる。
そこで美結が見たものは、下半身を露出させた室戸冴香の肢体と、そしてその股間に雄々しくもそびえ立つ、細い身体に似合わない勃起した男の象徴――。
その威容に、美結は思わず口元を押さえて息を呑む。
(は、初めて見た……室戸さんのちんぽ……)
大きい。部長のものほどではないが、三十センチを優に超える大きさと十分な太さ。
それでいながらしなやかな曲線を描き、まさに徹底的に鍛え抜かれた切れ味鋭い名刀のようなペニスだった。
そしてその先端は意外にも包皮で覆われており、亀頭も見えない真性包茎――。
(すごく綺麗……それに、皮かぶってるんだ……)
「なんです、人のちんぽじろじろと」

「あ、ご、ごめん……綺麗だなって思って」
「はあ……お世辞など結構です。始めますよ」
美結の賞賛にも、冴香はノーリアクションで返す。
彼女にとってペニスを褒められることなど慣れっこなのだろうか、一切の浮かれが感じられない。
改めて美結が冴香に向き合うと、そこで銀髪美少女は説明を始めた。
「まず、先ほど部長も言っていたように新人戦シングルマッチのルールは一本勝負。すなわち一回射精してしまえば即負けということです」
一度のミスも許されない、それこそ一発勝負。
美結は唾を呑み込んだ。
「逆に言えば射精さえしなければ勝てるとも言えるわけです。しかしながら今の天音さんはとにかく早漏で、これをなんとかしない限り勝機はありません。ですので天音さんにはこれから、ちんぽ耐久力の強化を重点的に、基礎体力トレーニング、射精テクニックの練習などを織り交ぜたメニューを一か月後の新人戦までに基本毎日こなしてもらいます。いいですね」
「う、うん！」

聞くだけで頭がおかしくなりそうな単語が次々と出てくるのだが、これこそＦＴＢの世界なのだと美結は感じ、自ずとペニスにも力が入る。

「家でもできる早漏改善トレーニング法も昼休みにパソコン室で刷っておきましたので、それは帰宅後寝る前にでもやっていただくとして、とりあえず今は――」

「え……」

フッ、と眼前の冴香の姿が消えて。

次の瞬間、美結のペニスはひんやりとした何かに握られる。

（速……っ！）

「どれほどまでに早漏なのか、私自身の目と手で確かめさせてもらいます」

瞬間移動のような速さで背後に回って男性器を握ってきた冴香に、美結は戸惑うことすら許されず。

冴香の小さな右手が美結の二十六センチの肉棒を、高速で扱きあげる。

（あ、ああっ、室戸さんの手……！　ちっちゃくて、ひんやりして、すべすべのふにふにでぇ……！　これが今までたくさんの選手をイカせてきた室戸さんの手コキ……！）

昨日の歓迎会でも、真奈と紫に手コキだけで十回は強制射精させられた。

しかし、四大流派の手コキは彼女らと一線を画す半端ではない技量。

ひと扱きごとに動きを微妙に変え、指先に至るまで一切の無駄な力が入っておらず、機械のような正確さで一瞬にして美結を絶頂間際まで導く。

そうしながら、冴香は美結の耳元で囁くように解説を始める。

「ＦＴＢで最も基本的な戦術が手コキです。挿入や逆挿入、兜合わせなどは相手に与える快楽こそ大きいですが、自分のちんぽにも刺激が及ぶ諸刃の剣。しかし手コキはデメリットなしで相手にのみ快感を与えるうえ、パイズリと違って誰でもできるため、最もオーソドックスな攻撃として初心者から玄人まで幅広く用いてくる戦術で、当然ながら対策必須です」

「ひ、ひああ、手、手ぇ止めてぇえええ……ダメそれ、よすぎっ、気持ち良すぎぃいいい……！」

後ろから正確無比な手コキ、耳元では冴香による無感情ながらもどこか艶っぽい囁きが美結をどんどん追い詰めて理性の壁を削り取る。

全く身動きがとれない。

冴香の手コキが強力かつ甘美すぎて、全身に力が入らず抜け出そうと思っても抜け出せない。

そしてそのまま、必死の抵抗も空しく。

「んぁあああ――っ！　ちんぽ、ちんぽイクぅううう！　出る、出る、出るぅうう！　金玉汁いっぱい出ひゃうのぉおおお！　おほぉおおお、室戸ひゃんの手コキ強すぎぃいいい――！」

絶叫と共に身体を仰け反らせ、巨根から敗北の証である白濁液を盛大に噴き上げる。

「もう射精ですか。三十秒持たないとはとんだ早漏新人ちんぽファイターですね、先が思いやられますよ」

「無理無理ムリムリ無理ぃいいいっ！　こんなの耐えられない、プロの手コキすごいひぃいいい――っ！　室戸しゃん手ぇ止めてぇえ、精液止まんない、止まんないのぉおお――っ！」

「まったくだらしないちんぽですね、そんな体（てい）たらくでＦＴＢに出るつもりですか。ほら全部出してください、大きいだけで根性のかけらもない貧弱早漏ちんぽから精液を一滴残らず情けなく」

呆れつつも手コキをやめない冴香に、美結のペニスは壊れたように精液を噴き上げ続け、たっぷり一分が経過した頃にようやくビク、ビクと大きく波打って最後の一滴を放ったのちにぐったりと萎え、同時に美結自身もリングに崩れ落ちた。

「まあ、予想通りの早さでしたね」



「はー……はー……すごいぃぃ……こんなの……はじめてぇえええ……」

全身を痙攣させながらマットに沈む美結を、逸物を勃起させたまま冴香は見下ろし、氷のように冷たい声をかける。

「ほら勃ってください、指導はまだ始まったばかりですよ。それとも今すぐ退部しますか」

「や……やだぁ……退部しない……わたし、ＦＴＢやりたいんだからぁ……」

「……その気概は結構、なら続けますよ」

必死に立ち上がり勃ち上がってきた美結に襲い掛かってきたのは、執拗なまでのさらなる冴香の手コキ。

「お、おほぉおっ！　い、今すぐはダメ、イったばっかりで敏か……んぁあああ出る出る出るぅ、二回目早漏射精来ちゃうぅうう！　初心者敏感ちんぽイクぅううう――っ！」

結局美結はその日、冴香の容赦のない手コキによって二十回以上の強制射精をさせられ。

夜八時にようやく解放され、精液まみれのリングに倒れ込んだ。

「今日は初日ですし、軽めにこのくらいで上がりましょうか。明日から1.5倍の練習量ですからね、精液溜めてまた放課後来てください」

「あぁ……あああ……すごいぃぃ……ちんぽぉ……こわれちゃう……」

うわごとのように呟く美結をその場に残し、冴香はサッと身なりを整えるとスカートを

穿いて部室を出ていく。
あとに残された白濁まみれの美結に、特訓の様子を見守っていた二人の上級生が心配そうに声をかける。
「大変ねえ美結ちゃん。大丈夫？」
「あ……せんぱい……はい、らいじょうぶれす……」
快楽地獄から這い出せずまだ呂律の回っていない美結に、真奈が肩を貸して立ち上がらせた。
「冴香っちがあんなに容赦なく搾り取ってくるとこ初めて見たよ。ちょっとひどいんじゃないかなあ。やっぱり、美結ちんのこと退部させたくてわざとあんな激しくやってるんじゃ……」
「それは違うわよぉ、真奈ちゃん」
眉をひそめる真奈の反対側から肩を貸す部長の紫が、ゆるゆると首を横に振ってからおっとりとした口調で言った。
「冴香ちゃんも本気なのよぅ、本気でＦＴＢの舞台に立ちたいって言った美結ちゃんの想いに応えるために、冴香ちゃんも本気で指導してくれてるのよぅ」
「そ……そーいうもんなの？」

「あんな態度だから誤解されちゃうけどねぇ。そもそも本当に退部させたいなら、指導なんて買って出ないでしょうしぃ？」

新人戦シングルマッチ――天音美結のデビュー戦まで、あと二十六日。

「あはぁああ――っ！　ダメダメダメ、イクイク、精液出ちゃう、男の子のミルクいっぱい出しちゃぅうううう――！」

美結が冴香に直接ＦＴＢの指導を受けるようになってから、およそ半月が過ぎた。

この日十回目となる大量の白濁汁を噴き上げ、美結はリングに崩れ落ちる。

倒れてからもまだドクドクと男のエキスを漏らし続ける少女を見下ろし、冴香はふうと息をついて言った。

「最初のころに比べればマシになりましたが、まだ我慢強さが足りていませんね。まあ計画に支障をきたすほどではない……家での早漏改善トレーニングも一応はやっているようで、その勤勉さは評価に値します」

「は、はひぃ……まだ出てるぅ……女の子精液止まらないのぉ……」

混濁する意識の中、冴香の言葉に必死で頷く美結。

ここ半月、ほぼ毎日放課後は部室で練習、冴香のテクニックに耐えて射精を我慢するト

レーニングを中心に、基礎体力作りに射精テクニックの練習など、ハードなメニューを今のところは順調にこなせている。

「お疲れー。ちょっと休憩しよ、二人とも」

「そうですね、この辺で」

小柄で貧乳の中途半端なドリルツインテールの三年生、末藤真奈に声をかけられ冴香はリングから降りて自分のペットボトルに口をつけた。

美結も射精の余韻と脱力感を振り切り、フラフラと立ち上がってペニスを拭きつつリングから降り、タオルで体中を拭いて水分を摂取する。

「どうかしらぁ冴香ちゃん、美結ちゃんの様子は」

「空手をやっていただけあって体はある程度作れていますね。瞬発力、ちんぽ攻撃力は高い水準にあると思います。長所の伸びはよく、これまでの指導に耐えられるだけの精神的強さもあります」

手元のバインダーに記録していた美結のこれまでのデータを見つつ、冴香は部長――紫の問いに淡々と答えていく。

「ただやはり致命的とも言えるちんぽ耐久力については課題が残ります。ここまではカリキュラム通りですが、あと半月の期間で伸びが悪くなると試合が心配ですね」

「冴香っちは真面目だなあー。よくそんな細かくデータ作れるね」
バインダーを覗き込みながら感心する真奈に、まあ元師範代としての職業病ですと冴香は返した。
「……室戸さんすごいんだね、こんなに私のコト詳しく分析してくれてるんだ」
呼吸が整ってきた美結も冴香たちのそばに寄ってきて、彼女の持つバインダーを覗き込む。
「このくらい当然です。それよりあなたはもう少し持ちこたえてください、今のままでは試合でも手コキでイカされてしまいますよ」
「う……ど、努力します……」
「手コキはやっている方も続けていると手が疲れるんです。ある程度耐えれば向こうからやめて、フェラなりパイズリなり別の方法でイカせようとしてきます。その一瞬の隙を逃さず脱出して態勢を整え反撃するのが対手コキの常套手段。ですがそれにはとにかく相手が疲れるまでの間、手コキに耐えるちんぽ耐久力が必要なんです。もう少し我慢強くならないと一度ちんぽ握られたら終了ですよ」
冴香は淡々と教導する。
ただ闇雲に耐えろと言うのではなく、合理的かつ的確な助言で「ここまでやればいい」

といった目標を明確に見せる。
元とはいえ四大流派の師範代に恥じない指導力だと、その場の誰もが思った。
「ところでぇ、そろそろ試合までの日もないしぃ、一度美結ちゃんの選手登録をしに協会へ行かないとねぇ？」
「へ？　登録？」
話題を切り替えてきた紫に、美結は首をかしげる。
すると冴香も思い出したかのように、少しだけ目を大きく開いて言った。
「あ……そうですね、今のうちに済ませておきますか」
「ＦＴＢに出場する選手はね、必ずＦＴＢ協会に登録の申請をして選手カードを発行しなきゃいけないんだよ！　選手の免許みたいなもんで、それ持ってないと試合に出られないんだかんね！」
何も知らない美結に、ここぞとばかりに真奈がない胸を張って先輩風を吹かせる。
それじゃあ今日はちょうどいいし練習は切り上げて、今から美結ちゃんの選手登録をしに行きましょうかとの紫の一声で、ＦＴＢ部は活動を終了しめいめいシャワーを浴びて着替えると学園を後にした。
電車を乗り継いで三十分、都内中心部にそそり立つ巨大なビルが目的地。

受付の女性に、冴香が前に出て。
定期入れから一枚の銀色に輝くカードを提示して、手短に用件を伝える。
「お疲れ様です。こちらの方の新規登録をお願いしたいのですが」
「む、室戸様!?　お、お世話になっております！」
（うわ、室戸さんって分かった途端に受付の人の態度が……）
もともと丁寧な応対だったが、冴香が提示したカードを見るや否や受付女性の態度は露骨に変わり。
もはや召使いか何かと思うほどの態度で、冴香とついでに登録者である美結にも慇懃（いんぎん）に接してきた。
「こちらのお方の新規登録で間違いございませんでしょうか、お、お客様、失礼ですが身分のわかるものなどはお持ちで……？」
「あ、はい、学生証で……」
「畏（かしこ）まりました、お預かりいたします！」
美結から学生証を預かると、機敏な動作でどこかへと消えていく受付女性。
（室戸さん、ほんとにすごい家柄の人なんだなあ）
美結が無言で感心していると、先ほどの受付女性がパタパタとこちらへやってきて。

「大変お待たせいたしました、こちらが天音様の選手カードになります」
「え、もう？」
今日は手続きだけしてカードは後日に届くものかと思いきや、ものの十分で選手カードを手渡された。
学生証のものをコピーしたと思われる顔写真もあって見た目は免許証に近いが、右上に大きく「１」と書いてあり、そのすぐ下には小さな星マークが一つ刻印されている。カードの右下にはビルの入り口で見たものと同じペニスが交差しているマークが刻まれていた。
「本来は手続きにかなり時間がかかるんですが、こういうときだけ室戸の名前は助かりますね」
（これが選手カード……これで私も正式にふたなりちんぽファイターになれたんだ……）
何とも言えない高揚感が、美結の全身を駆け巡って海綿体に集中していく。性的なものではなく、ふたなりとしての本能から彼女の男性器は屹立していた。
「それがないと試合に出られないので、失くしたらすぐ再発行の手続きをしてください。身分証にもなりますので常に携帯してくださいね」
たった今もらったばかりの白いカードを勃起しながらまじまじと見つめる美結に、冴香が横から忠告した。

「そういえば、室戸さんのと色が違うね」
「ちんぽファイターランクで色が異なるんです。あなたはランク1なので白です」
ＦＴＢで一定の成績を収めると協会に昇段が認定され、その通知が届く。
それからしばらくして新しいカードが交付され、色も変わるのだという。
（ますます空手の帯みたいになってきたなあ……）
ちなみに真奈と紫はそれぞれランク2と3で、色は黄色と青。
「3まではねえ、頑張れば割といけたりするのよぅ？　でもランク4からは厳しいわねぇ、全国大会レベルだしぃ」
（……確か室戸さん、自己紹介の時ランク7って言ってたよね……）
紫の言葉から考えてみても、冴香のそれは尋常でない高レベルだということが分かる。
「ね、室戸さんの選手カード見てもいい？」
「どうぞ」
無造作に手渡された冴香のカードは、先ほど一瞬だけ目にしたように眩い銀色の光を放っていた。
右上には大きく「7」と刻まれており、それに重なるように小さな七つ星が北斗七星の並びで刻印され、美結のものとは格調からして別物のようだ。

（きれい……ん？　〝雪月花〟室戸冴香……？）

無表情の顔写真の横に彼女の名前が書かれているのだが、その前に「雪月花」とあることに美結は気づく。

「室戸さん、この雪月花って？」

「それは二つ名です。ちんぽファイターランク５以上の選手は協会から二つ名を賜りカードにも記載され、公式試合などでも二つ名がついて呼ばれるんです」

「すごい！　かっこいい！　雪月花なんて、クールで綺麗な室戸さんにピッタリだよ！」

子どものように目をキラキラさせる美結に、「雪月花」こと冴香は呆れてため息をつき。

「二つ名があるってだけでふたなりからは尊敬と畏怖の対象なのよねぇ。ほとんどのＦＴＢ関連施設はもちろん、協会と提携しているラブホテルやレジャー施設にもカード見せるだけで入れるのよぅ。冴香ちゃんのおかげで部費も浮いて助かるわぁ」

紫の説明に、美結はますます高揚し勃起する。

（ＦＴＢってそんなにメジャーなものだったんだなあ、それにランクが上がればちんぽファイターに限らず、ふたなりにとって憧れの的になるんだ……もう今までみたく、ちんぽにコンプレックス抱かないでよくなるかも！）

「室戸さん、私も頑張ったら二つ名もらえちゃったりするかな？」

「あなたはまだ一勝どころかデビューすらしていないでしょうが」
「カッコいいのがいいな！　バーニングファイターとかなんかそんな感じの！」
「聞いてますか話を？」
つつがなく選手登録が終了してから三十分後、四人は協会本部の最寄り駅前で解散し、三年生は別の電車で帰るために先に改札内へ消えていく。
あとに残され自分も帰ろうとした美結に、不意に横から冴香が声をかけた。
「ところで天音さん、選手登録も済んだところで一応確認のためにお伺いしますが」
「えっ？　なに？」
「童貞と処女の喪失はお済みですよね？」
その言葉に、少女の身体は石になったかのようにピシリと固まる。
何を言っているのか分かっているのに分からない。
そんな体験は初めてで、思考が停止してしまったのだ。
「なにをちんぽ以外のところまで固まってるんです、セックスしたことあるかと聞いてるんですよ」
「え、いや、その……なんで？」
困惑しきってようやく絞り出した三文字に、冴香は美貌を歪めて露骨に苛立ちを見せる。

その反応ではどちらもまだのようですね、とランク７の美少女は呟いた。
「なんでじゃないですよ、新人戦だろうが試合は挿入も逆挿入もアリなんです。あなた知らない選手に処女を奪われていいんですか」
「い、イヤだけど……」
「そう思うなら試合までにちゃちゃっと捨てて来てください」
「そんな週二で捨てられる燃えるゴミみたく簡単に捨てらんないよ！」
この身体がコンプレックスで、異性はもちろん同性にすら肌を見せたことなどまともにない。
だが、確かにＦＴＢの舞台に立つにあたっては最低でも処女は捨てなければならない。
処女はＦＴＢに捧げる――それはふたなりちんぽファイターの心意気とも言えるのだ。
「とにかく、適当な相手を見繕ってせめて後悔しない初セックスをしておいてください。峰岸さんをはじめとして、あなたにはご友人も多いでしょう」
「う……簡単に言われても」
そうは言っても、初めてをそう簡単に捨てる気にはなれない。
もし、いるとすれば――。
「……なに見てるんです？」

美結は目の前の美少女をじっと見つめた。
クラスメイトであり、師匠でもあり、厳しいように見えて自分のことを案じてくれるふたなりの美少女を。
自分の本気を買い、ＦＴＢで戦えるように面倒を見てくれる美少女を。
これまでもたくさんたくさん、気持ちよくしてもらった美少女を。
そうしたら、半ば無意識に言葉が漏れた。
「……室戸さんがいいな」
「は……？」
これにはさすがに冴香も虚を突かれたように、ぽかんと口を開けている。
が、もう彼女しか考えられなかった。
「室戸さん、私の処女……もらってくれない？」
夕方の駅前、人々の雑踏の中。
顔を赤らめ口元に手を当て、美結は恥じらいながらも女の子の一生に一度のお願いを乞う。
ちんぽファイターはＦＴＢに処女を捧げる。
ならば自分が処女を捧げる相手は、自分をＦＴＢの舞台へ導くこの美少女以外にいない。

（室戸さんなら……優しくしてくれそうだし）

「……」

冴香は少し黙って考えていたが。

ややあって、諦めたように答えた。

「……試合まで日がありません、この際仕方ありませんね。ですが本当に私でいいんですか？」

「う、うん……室戸さんだったら……いいよ」

「はあ……分かりました、これっきりですからね」

どうやらＯＫらしい。

もしかしたら断られるかもと思っていたが、色よい返事に美結も顔を輝かせた。

しかし。

「善は急げです。今からホテル行きますよ」

「え、今すぐ!?」

「当たり前でしょう、日がありませんしここなら協会にも近いので提携ホテルもたくさんあります。夕飯の支度もありますし、サクッと終わらせて帰りますよ」

「ええーっそんなノルマみたいな感じで!?　溜まった作業を片付ける感覚で私の初エッチ

やっちゃう流れなの？　ちょっと室戸さん、室戸さんってばー！　置いてかないでー！」

さすがに今から始めるのかと美結も目を白黒させるが、冴香は表情を変えず携帯で地図を開いてラブホテルを手早く検索すると、ずんずん先に歩いていく。

必死に彼女の背を追いかけてホテルへたどり着き部屋に入るなり、その豪華さと広さに美結は仰天した。

「うわー広い！　それに綺麗！　ラブホってもっとこう狭くて、ピンク色の照明ついてるやらしいもんだと思ってたよ」

「いつの時代の話してるんです、最近はどこもこうですよ」

後から入ってドアを施錠した冴香は、呆れたように言ってさも自分の家であるかのように制服の上着を脱いで鞄を置き、ブラウスのボタンも緩めていく。

ちなみにこの部屋も冴香が提示した銀色の選手カードの威光により、デラックススイートルームを無料で使うことができる。

つくづく二つ名を持つ高ランクちんぽファイターさまさまだと、美結は思った。

「面倒なのでさっさと始めますよ」

「う……もうちょっとこう、雰囲気というか……」

美結は口を尖らせるが、冴香は全く表情を変えない。

この少女は一つしか表情を持っていないのではないかと、美結も思い始めてきた。
「服脱いで横になってください」
「そのあたかも病院で検査しに来たときのお医者さんみたいな言い方っ！」
無表情しかない顔で言いながら、冴香はどんどん服を脱いで律儀にも畳んでいく。
美結は脱げと命じられたことも忘れ、冴香の肢体に思わず目を奪われた。
これまでの練習では下半身しか露出していなかったが、全裸になった彼女は首から足先まで非常にすらっとしていて、彫刻のように流麗な曲線を描いていた。
肌も雪の中で逆に目立つほどに白く、どこにも傷や汚れの一つすらない。
あらわになる胸の二つのふくらみも、九十センチの美結ほどではないが十分な大きさで、開花を待つ蕾のような小さく可憐な乳首はわずかに上を向いている。
それとは真逆の雄々しさで、股間には怒張する三十センチ越えの包茎ペニス。
（室戸さん、やっぱり綺麗……それにちんぽすごい……）
「聞こえなかったんですか、早く脱いでください」
「あ、う、うん……」
同性ながら見とれてしまった美結に、全裸の冴香は若干苛立ったように言って。
かと思えば美結に詰め寄り、目にも留まらぬ早業で彼女の制服を脱がせていく。

「ちょ、ちょっと室戸さん、自分で脱げるから――あっ……」
「さっさと終わらせたいんですよ、早く帰って夕飯の支度しないといけないので」
純白のFカップブラを慣れた手つきで外すと、少女の豊満な乳房を零れさせ。
左手で優しく揉みしだきながら、もう片方の乳首を甘噛みする。
「ん……」
「ひゃう……っ、むろとさん、それっ……」
まだ始まったばかりだというのに、すでに美結のペニスは最大にまで膨れ上がり。
その下の玉袋に隠された彼女の女の子としての部分も、早くも湿り気を帯び始める。
「ちんぽだけかと思えば全身敏感なようですね、まあ早く終わりそうで助かりますが」
「は……っ、ダメ……あん……っ」
赤面し、恥ずかしさと快楽で艶っぽい声を上げる美結に対し、ひたすら作業のように相手に快感を植えつけていくだけの冴香。
「あ、今さらですが多少なら演技しましょうか？　恋人プレイとか」
「も、もうおそ……ひいんっ」
（表情変わんなすぎるよぉ……こんな淡々とされちゃうんだ私……あ、でも逆にそれはそれで興奮するような……）

「ではこのままいきますよ」
「んううっ！」
ついに、冴香の細くしなやかな指が美結の秘所へと伸びてくる。
クレバスをなぞるように這わせ、指先を潜り込ませ、陰核をこね上げる――。
「っ、ああっ、ダメ……！」
安っぽい恋愛小説どころの比ではなかった。
ドラマチックさやロマンスなど欠片もなく、それでいて生々しさは創作のそれではない。
彼女に気持ちよくしてもらったことはこれまでに百や二百ではないにもかかわらず、純粋にセックスで「してもらっている」というのは初めてで、これまでとは別次元の快感と興奮が押し寄せる。
（それに室戸さん、指すごい正確に……私が反応したところ容赦なく責めてくるから……っ）
きっと冴香はこれが初めてでないのはもちろんのこと、ずっとＦＴＢで戦ってきただけあって試合経験と同じくらいセックスの経験も豊富なのだろう。
今のように新人ちんぽファイターの処女を奪うことも多かったに違いない。
そんなことを押し流される理性の中で考えたが、思考はまとまらない。

そうしていたら、冴香のもう片方の手がふと胸から離れ。
瞬間、電撃のような感覚が美結の全身に奔る。
「ひいっ！　それダメ、今ちんぽダメえっ！」
冴香は両手で、美結の男性器と女性器を同時に愛撫し始めたのだ。
男と女、二人分の快楽が寄せては返す波のように連続で押し寄せ、美結はたまらずシーツを掴んで身悶えする。
「今は試合でも練習でもないので、射精したいならいくらでもどうぞ」
「あっダメそれ、まんこくちゅくちゅしながらちんぽしごくのダメぇ……」
「もう精液出そうなのが伝わってきますよ。出してしまいますか？　一度出します？　一度で済むか分かりませんが」
「ら、らめえ……くちゅくちゅしこしこしないでぇ……どっちかひとつに、っ、んううっ！　ダメ、ダメダメ、ちんぽイク、精液出ちゃううっ！　ちんぽだけ先に気持ちよくなっちゃう、わがままなちんぽがまんこ押しのけて先に射精したいって言ってるのぉおおおっ！」
「はい、射精してどうぞ」
面倒くさそうにそう言って、手コキの動きを速める冴香。

その快楽に抗えず、美結は絶叫と共に大量のスペルマを放射した。
「んぁあああ――っ！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽイクぅうううう！　練習じゃないセックスで初射精してるぅうう――！」
「はあ……本当に早い上によく出ますね」
「出る出る出てるぅうう――っ！　射精！　射精！　しゃせいいいっ！　まんこイク前にちんぽ先にイって高級ホテルに精液まき散らしてるぅうううっ！　気持ちいい――！　ホテル汚して気持ちぃいいいい――っ！」
消防車の放水もかくやといった勢いで、美結のペニスから特濃ザーメンが放物線を描いてデラックススイートルームを汚していく。
「まだ出るんです？　こんなに出してさぞ掃除の方には迷惑でしょうね」
「ごめんなしゃいいい！　お掃除の人ごめんなしゃいいい！　美結は初ラブホセックスでお部屋じゅうめちゃくちゃに精液で汚してっ、迷惑かけて喜んでる最低ちんぽファイターなんですぅうっ！　んぁあああああ精液止まんない、もっともっとお部屋汚しちゃうのぉ、お掃除の人に嫌な顔されちゃうのぉおおっ！」
顔も名前も知らない清掃員に必死に詫びつつ、それでも冴香の手コキに射精を止められず快楽に飲まれていく美結。

三十秒ほどの射精の後、ようやく精液が尽きてぐったりとシーツに身を横たえ、全身を痙攣させながら荒く息づく美結。

「はー……はー……」

「とりあえず一回イって落ち着きましたね、セックスはここからですよ」

そんな美結にまるで興味がないかのように、冴香は美結の濡れた秘所へとまた指を伸ばしていく。

「ひんっ……」

「こっちの反応は女の子らしいですね。さっきはあんなにちんぽちんぽと絶叫していたくせに」

「……あ、……っ」

ペニスとは違い、体の内部を這いまわるような女の子特有の快楽の中、美結はふと思う。

（室戸さんは今、どんな気持ちで私を……）

こんなに近くで、吐息のかかる距離で。

肌を触れ合わせ、脈動を感じ合っているのに。

目の前の銀髪美少女が、途方もなく遠い。

（やっぱり、ただ義務感でしてくれてるだけなのかな……）

彼女のことをもっと知りたいのに。
その本人の心は氷の壁のごとくかたくなで、冷たい。
しかし、それでいてどこか優しく、温かい――。
（あっ、ダメ、もうイク……イクイクイク、イっちゃ……）
「んうううううっ！」
冴香の指技に耐え切れず、美結は全身を震わせて絶頂し。
興奮状態にあるペニスも、ヴァギナの快感にシンクロするように射精しなかったもののビクビクと震えた。
（ああ……っ……私のまんこ……イカされちゃった……室戸さんの指で気持ちよくなっちゃったぁ……）
「割とあっさりイキましたね。では挿入しますよ」
「あぁ……そんな……もう……」
目的はあくまで試合に備えた処女の喪失だ。
ただ淡々と、それを果たすためだけに冴香は股間の怒張を向け。
大洪水を起こしている美結のそこへ、先端をあてがう。
「や……優しく……して」

本当に自分の口からこのセリフが出てくるとは思っておらず、状況が状況でなければ自分で笑い出してしまうのではと美結は思った。

が、冴香は笑うことはもちろん何の反応も見せず淡々と返す。

「まあ努力はします。痛かったら言っていただくか、声が出せなければ右手を挙げてください」

「そんな歯医者さんみたいな……あああっ！」

今まで一度も異物の侵入を許したことのないそこに、冴香のモノが強引に侵入していく。体の中をかき分けていく感覚、それが冴香のペニスであるという事実。

混濁する意識と絶えず訴えかけてくる違和感、そしてそれはほどなくして痛覚一つに支配され。

「――ッ！」

ブチブチと何かを引きちぎられた感覚と、直後に襲い来る破瓜の痛み。

（ああ……私……室戸さんに奪ってもらえたんだ……私の初めて……室戸さんのちんぽで……）

「大丈夫です？」

「あ……ああ……なん、ぁ……っ」

言葉も出てこない。
意識を持っていかれそうな激痛に耐えていると、そんなことは知らないとばかりに冴香が声をかけてきた。
「これで一応工程は終了ですが、どうします、もう終わりにしますか」
「やだぁ……っ、最後まで……してえっ」
目を腕で覆い、泣きながら美結は懇願する。
こんな中途半端なところで、はい処女喪失は済んだので終わりですなどと言われたくない。
すると。
「分かりました、では徹底的にイカせて差し上げます」
「え……」
言うが早いか、冴香は挿入したまま美結を起こすと瞬時に体勢を変え。
ベッドから引きずり下ろすと彼女の腕を左手で掴み、後ろからペニスを突き入れる——いわゆる立ちバックで激しく犯し始めた。
「あああああっ！　む、室戸さん、それダメえええええっ！」
「ベッドに手をついてください、立ちバックしながら手コキでちんぽイかせます。この方

がやりやすいので。好きなだけ射精してください」

数分前に大量の射精を行ったにもかかわらず、冴香の手コキと挿入で美結の精液タンクは一瞬にして満タンにされてしまい。

あとは生産された精液が射精管を経由して尿道を駆け上がり、外へと排出されていくだけ。

後ろからは冴香の正確無比なピストンで、まだ痛みの残る膣を蹂躙され。

「おほぉおおちんぽぉおおおっ！　ちんぽイク、ちんぽイクぅうっ！　処女捨てたばっかりなのにっ、空気読まないちんぽが射精したいって言ってるぅうう！」

「はい、二発目どうぞ」

「んぁあああちんぽぉおおおお！　室戸さんのちんぽでまんこ犯されながらちんぽ射精してるっ、ズポズポされながらドバドバ精液出てるぅうううう！　後ろから室戸さんに犯されてイクぅうううう――っ！」

立ちバック手コキで逃げ道もなく、二十六センチのペニスは激しく波打ちながら大量の白濁液をまき散らしていく。

「本当に情けないちんぽですね、処女奪われた痛みも忘れて精液出すことだけに支配されて……まあ私としては助かりますが」



「もうやめてむろとしゃあああん！　それ以上まんこ突かれながら手コキされたら金玉壊れちゃう、精子工場稼働停止しちゃうのぉおおお！　金玉の中で精液作ってる人たちみんな過労死しちゃうう！　工場長の私が無能なばっかりに、私がダメちんぽなせいで作業員さんみんな死んじゃって、精子工場廃業に追い込まれちゃうのぉおおお！　おおお、おほぉおお、まだ出る、出る出る、出る出る出りゅううう――！」

自分でも何を言っているのか分からないまま、美結は睾丸で精液を生産しそれを尿道口から放出するだけの作業を延々と繰り返す。

すでにシーツどころかベッド全体が精子を吸い込み切れず、ベッドから溢れて床まで零れ、美結と冴香の足下に垂れ落ちていく。

度重なるペニスのほうでの快楽に美結の脳は焼け焦げ、ヴァギナのほうの破瓜の痛みが完全に麻痺している。

それでいながら冴香の三十二センチの男根で膣奥をえぐられ続けたら、もはや快感しかそこにはない。

「ではこのまま最大速まで持っていきます。気絶するまでイカせるのでどうぞ存分に」

「んほぉおおおお――っ！　そっ、それぇえええっ！　ちんぽ！　まんこ！　ちんぽ！　まんこおおっ！　両方、両方、りょうほおおおおっ！　ちんぽとまんこの両方気持ちいい

っ！　まんことちんぽ同時にイキ続けてるのぉおおっ！　んっほぉおおおデュアルアクメきついぃいいい――！」

いよいよラストスパートをかけてきた冴香に、この時点で狂ったように射精を続けていた美結が抗えるはずもなく、精液の放出量がさらに倍加する。

思いつく限りの卑猥な言葉を絶叫しながら、ただただ男性器と女性器による二人分の絶頂を強制的に味わい、脳に快楽を暴力的なまでに叩きこまれ続けるだけ。

（こんな射精、こんな精液の量、今まで一度もない……！）

今まで一人寂しくオナニーをして慰めていた時よりも。

転校初日に隣の席の峰岸に射精させられた時よりも。

ＦＴＢ部に仮入部した際、歓迎会として真奈と紫に三十五回射精させられた時よりも。

これまでずっと経てきた冴香との特訓で、耐えきれずに出してしまったどの射精よりも。

（今日のセックスが、室戸さんとのセックスが、今までで一番気持ちいいのぉおおおおっ！）

精通を経験してからの数年間で、美結にとって今日が一番快楽漬けになった日だった。

「射精止まんない、まんこイキも止まんないぃいいっ！　ちんぽとまんこ同時無限イキしてるぅうううっ！　おお――！　おお――っ！　んぉおおおお、死ぬ、しぬ、しん

じゃううう！　イキすぎて死んじゃう、しんじゃうのぉおおお――っ！　んほぉおおお死んじゃう、これ以上出したら死んじゃう、人生最後の射精になっちゃうう！　最後で最高の絶命射精くるぅううう――！」

「はいどうぞ、絶命でも絶頂でも……っ！」

この期に及んでも淡々と、冴香はそう言って死の宣告を下し。

最後の一突きで、美結を死の快楽へと叩き落とす。

「んぁあああ――っ！　きたぁあああああ、特大絶命射精きたぁあああああ！　んぉおおおおおお、んほおおおおっ！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽ死ぬぅううう！　ちんぽ死んじゃうのぉおおお――！」

爆発したかのような噴射。

ダムが決壊したかのような奔流。

そしてホテルが揺れるほどの嬌声。

人生で最高にして最大量の射精を味わった天音美結は、そのまま自分の精液まみれのベッドに倒れ込み意識を失い。

「ふう、こんなものですか。これもまあ早漏訓練の一環であると思えば無駄な時間ではないでしょう」

冴香は彼女の蜜壺から一度も射精することのなかった自身を引き抜き、肉棒に絡みついた美結の愛液をティッシュで拭いゴミ箱に投げ込んだ。

二時間後、美結が目を覚ました瞬間に感じたのは、大量の精液を吸ってべちゃりとしたシーツの不快感。

「あ、気づきましたか」

そして耳に届く、冴香の平淡な声。

すでにシャワーを浴びて制服を着てソファに腰掛けている彼女は、退屈そうに携帯をいじっていた。

「室戸さん……そっか、私……」

全裸のままの美結は、意識を失う前のことをぼんやりと思い出した。

試合を間近に控え、処女を捨てる必要に迫られ。

ならばと頼んだ彼女のペニスに貫かれ、さらには立ちバックと手コキで無尽蔵に精液を放ち。

最後には死ぬかと思うほどの大量射精で、そのまま意識を失ってしまった。

そうして天音美結の初めてのセックスは終わったのだ。

「お疲れ様でした、処女は無事に喪失できましたね。シャワー浴びてきてください、もう帰りますので」
「は、はーい……」
一夜を――と言っても若いため回復も早く二時間程度寝ていただけだったが――過ごしたとは思えないほどあっさりとした態度で冴香は淡々とシャワーを促し、美結はズルズルとベッドから降りて全身から精液を滴らせてバスルームへと赴く。
温かい湯で精液を洗い落とし、急いで着替えて身なりを整えて。
チェックアウトしたホテルから出て、二人は駅への道を並んで歩く。
協会で選手登録を済ませた時はまだ夕方だったが、すでに日は落ち空が暗い。
（そういえば……）
考えてみると、こうして冴香と二人きりで歩くのは初めてだ。
部活の折はたいてい先輩もいるし、帰る時も冴香は一人でそそくさと帰ってしまう。
せっかくだからこの機に色々と話してみたいと、美結は思って。
「……室戸さんは、いつからＦＴＢやってたの？」
なんとなしに浮かんだ疑問を、横の少女に投げかける。
冴香はしばらく無言で歩いていたが、やがて「覚えていません」と返した。

「生まれた時から室戸流の継承者になる運命を与えられ、大きくなった私自身もそうあるべく修行や肉体改造を施してきました」

「に、肉体改造……!?」

サラッと恐ろしい単語が出てきて、美結はビクリとすくんでしまう。

「意図的に皮を伸ばし包茎にして感じにくくするとか、機械でちんぽに圧力をかけることで手コキや膣内でイキにくくするとか、吸引機で胸を大きくしてパイズリできるようにするといった人工的なものです」

そのようなことを彼女はしていたのかと戦慄する。

冴香はその全身が、相手のペニスを射精させるためだけに磨かれ研がれ続けてきた武器というわけだ。

生まれながらにしてＦＴＢで生きるため、名家の跡取りとして課せられた使命だと冴香は言った。

「それらすべてが勝つためであり、私が私であるために必要なことでした。厳しい修行も肉体改造も、その先にあるはずだった正統継承者としての未来を思えば苦ではありませんでした」

「そ、そうなんだ……すごいね、本当に……」

「ですが、あの日……」
そう言って、ふと室戸冴香は足を止め。
自分だけ先に数歩進んでいた美結も、慌てて立ち止まって振り返る。
「……」
「室戸さん……？」
彼女は力なくそこに立ち尽くしたままうつむき、短い銀髪がパラリと垂れていた。
しなやかな体がかすかに震えているさまを、美結は一瞬だったが見逃さず。
「――少し、話し過ぎました」
何事もなかったように彼女は前を向いて再び歩き出し、美結を追い越して駅へ向かい。
美結も彼女についていく形で、また歩き出す。
前を歩きながら、振り返らず冴香は言う。
「天音さん、あなたは私の指導によく耐え、身も心もちんぽも十分に鍛えられました。よほど運が悪くない限り一回戦負けはなく――いえ、たとえ負けたとしても私はあなたを退部させるつもりはありません」
「……」
「ですが、ＦＴＢの世界はあなたが想像しているほど華やかではない」

泥臭く、汗臭く、精液臭く、血生臭い。
そんな舞台で輝けるのは、ごく一部の選ばれたふたなりだけ。
冴香は再び足を止め、今度は美結のほうをまっすぐ見て。
問いかける。
「それでも、あなたはこちらへ来るのですか」
銀髪の奥からのぞくエメラルドの瞳が、まだＦＴＢをほとんど知らない少女を射貫く。
リングで脚光を浴び持て囃される者は、ほんのひと握りに過ぎない。
残りはひたすら底辺で喘ぎ続け、生臭い精液を情けなく放出しつつ陵辱され続ける。
精液で汚れずにいられるのは、広大な砂漠から神の手にすくい上げられたわずかな砂粒のみ。
生まれながらに将来を約束されていたはずの、四大流派正統継承者候補であった自分でさえ。
たった一瞬の判断の迷いで、その手からこぼれ落ちていった――。
「精液と愛液にまみれ、快楽と屈辱が同居する敗北射精を幾度も味わってなお、あなたはこの道を往くと――」
「その気持ちが伝わったから、室戸さんは私に特訓つけてくれたんでしょ？」

美結の答えに、冴香は黙らされてしまい。
「私、まだ試合もしてないし、一か月しか練習してないけど、それでも自分の居場所はここしかないんだって今も思ってる。こんな、ちんぽついてる自分でも堂々と戦える、自分に自信を持っていられる……それってＦＴＢでしかできないことで、他じゃ絶対に得られないことだと思うから」
まっすぐに冴香の瞳を見て、美結はハッキリと言い切った。
その純粋な黒い瞳を見て、冴香はわずかばかり視線が泳ぐ。
（天音さん……この人は……）
過去にＦＴＢですべてを失った自分。
何も持たず、これからＦＴＢに挑む彼女。
自分と真逆の存在のはずなのに、なぜか目の前の彼女が鏡に映した自分のように思える。
そこに映っているのは、かつての自分だったのかも知れない。
（対して私は……あの日からずっと……）
「室戸さん？」
「……なんでもないです。話が済んだなら帰りますよ」
「あ……」

今度こそ冴香は足を止めず、先だって歩いていき。
美結は慣れない都会の明かりと喧騒の中、一人取り残されていた。

それからさらに日が過ぎ、ついにＦＴＢの新人戦を翌日に控えた放課後。
美結が部室に赴くと、そこにはすでに三人が集まっていて。
部長の紫が例のごとくナメクジのようにズルリと近寄って、包装紙とリボンでラッピングされたゴワゴワしたものを美結へと手渡す。
「美結ちゃん、一か月練習お疲れ様ぁ。コレ、私たち三人からのプレゼントよぅ？」
「あ……ありがとうございます。なんだろ……？」
「いま開けて！　今！」
子どものように真奈が急かすので、美結はさっそく包装紙を破って開けてみる。
するとそこからは三枚の布が、ふわりとまろび出てきた。
女の子だけに許されるヒラヒラした腰穿きと、形が似て大きさの違う一組の布。
「ブラと……スカート……それと金玉ブラ？」
「リングコスチュームよぅ？　デビューする美結ちゃんにお祝いぃ」
「え、えええっ!?」

美結は驚愕する。

プロレス選手のように、自分がそのような格好をするなどと思わなかった。

一応特訓の合間にＦＴＢに関する書籍なども学園の図書館で貪るように読んでいたのだが、学生は体操着の上だけだったりＴシャツのみだったりすることが多く、華美なリングコスチュームはプロのちんぽファイターが身に纏うものだという認識があったのだ。

（私なんかがこんな、立派なコスチューム着てＦＴＢしていいのかなあ……）

「初陣なんだもん、かわいくしないとね！　というわけで美結ちん、着てみて着てみてー！」

「えっ、ちょっと待っ……ひゃあああああ！」

戸惑う美結に真奈はグイグイと布を押し付け、かと思えば半ば強引に服と下着を脱がされて無理やり着替えさせられる。

そして、数分後。

「わー！　これすっごくかわいいー！」

リングコスチュームに着替えた美結は姿見で自分の格好を確かめ、その華美さに黄色い声を上げた。

「馬子にも衣装ですね」

「冴香っち、そういうコト言わないの！」

黒を基調にところどころ赤でアクセントを入れたビキニタイプの水着のようだが、下はひらひらのスカート状。

そのスカートは正面中央部が大きくえぐれるデザインになっており、美結の二十六センチの巨根がほとんど隠れず露出している。

そして二つの睾丸には胸のブラとおそろいの金玉ブラが装着されており、引き締まったデザインの中に女の子らしさをさりげなくアピールすることに成功している。

さらに格闘技ということで膝にはプロテクター、靴もプロレスで用いるようなリングシューズを装備して、オーソドックスながらも無駄なくまとまったリングコスチュームに仕上がっている。

サイズもぴったりだ。

「これ、どこで買ってくれたんですか？」

「私がデザインして、それをメーカーに依頼して作ってもらったの！　一か月かかったんだからね！」

真奈がない胸を張ってふんぞり返る。

そこで美結は気づいた。

「一か月……ってことは、私が練習始めたときから？」
「そうよぉ？　冴香ちゃんがね、あの人はきっとクリアするって言ってたからぁ」
「ゆ……夕月部長、それは言わないと」
頬に手を当てて嬉しそうに言う紫に、冴香はわずかばかりその表情に焦りを浮かべていた。
（室戸さん……）
美結の胸が温かくなる。
彼女のあの冷たい態度の裏には、あの時から自分を認めてくれていたという事実があったのだ。
それで真奈もデザインした衣装を発注し、この日のために間に合わせてくれた。
「みんな……ありがとうっ」
「ここまでさせておいて負けたら許しませんよ」
「もー、プレッシャーかけないの冴香っち！　これからも一緒にＦＴＢで戦うんだから、それ着て精いっぱいがんばって来てよね！」
みんなの優しさが身に染みて、思わず涙ぐみそうになる。
それをなんとかこらえて、美結は精いっぱい彼女らに礼を述べる。

「うん……三人とも、ホントにありがとう！　私、嬉しいっ……！」
「試合の時はね、コスチュームの上に普通の服を着て、リングに上がってから服を脱いでコスチューム姿になるのが正式な方法なんだからね！」
「まあ我々は部活なので、この場合は制服を着こみます」
真奈の説明に冴香が続け、それから彼女は明日に備えた注意事項を述べていく。
「試合の二十四時間前からは、いかなる理由においても射精が禁じられます。セックスはもちろんオナニーも禁止、試合直前の検査で精液濃度が規定値に達していなければ失格となります。したがって今日は練習しません、家に帰ったら十分な栄養と睡眠をとってください。間違っても明日起きたとき朝勃ちを処理してしまうなどといったバカなことがないように。うっかり抜いて失格となったら本当に退部させますからね」
「う、うん！　分かった！」
「では、明日は現地集合で」
いよいよ、デビュー戦――ＦＴＢ新人戦シングルマッチの時が迫ってくる。
緊張、不安、そして期待――。
（大丈夫！　ここまで練習にも耐えてきた！　こんなかわいいリングコスチュームももらった！　私、絶対に明日のシングルマッチで勝ってみせるんだから！）

天音美結の人生における真なる一歩が、まさに踏み出されようとしていた。

第3話　デビュー戦！

そして、翌日。

美結たちＦＴＢ部は都内の大体育館で行われる、ＦＴＢ新人戦の会場に赴いていた。

「リングに入ったらレフェリーに一礼、大きな声で名前を言って、口上を述べて制服脱いでコスチュームになって……それから相手に向かい合って礼、ゴングが鳴ったら試合開始……」

リング上での正式作法を繰り返しブツブツと呟く美結に、冴香は落ち着かせるように彼女の肩に手を乗せる。

「落ち着いてください。学生ＦＴＢでそれも新人戦、多少作法が間違っていても咎められませんから」

「リングに入ったらレフェリーに一礼、大きな声で名前と口上を……」

「聞いてませんね」

延々と作法を呟く美結に、冴香は呆れてため息をついた。

五回ほどそれを繰り返してから、美結は長々と息を吐く。

「うう……緊張するなぁ」
「大丈夫です、練習を思い出して。臆する必要はありません」
会場内に散らばる無数の小さなリングで試合が今も行われており、あちらで喘ぎ声が聞こえたと思えばこちらで精液の柱が噴き上がる。
一か月の指導に耐えてきた美結も、すでにエントリーと精液濃度検査を通過して、自分の出るリングのすぐそばで仲間と共に出番が来るその時を待っていた。
一万人以上の観客が詰めかけており、中には将来プロの舞台で活躍すべき逸材に粉をかけておく目的でやってきた業界人たちと思しき面々も見られる。
思っていた以上に大規模の大会に、美結も緊張して平常心を失いかけていた。
「ここまで頑張ってこれたんだから大丈夫よぅ？　ほとんどの一年生は初試合だし、美結ちゃんとおんなじに緊張してるわぁ？　自分だけじゃないんだから気楽にねぇ？」
紫部長のねちっこい言葉はしっかりと聞こえているのだが、どうにも頭にまで入ってこない。
美結はひたすらＦＴＢの作法を繰り返したり、何度も何度も見たトーナメント表を見返したりと落ち着きがない。
「美結ちん、だいじょぶだよ。さっき偵察してきたけど、一回戦の相手はそんな強くなさ

そうだったし、美結ちんと同じくらい緊張してたから」
「うう……真奈ちゃん先輩助けてぇ……」
「平気平気……って、なにその呼び方!?」
励まそうとしたちびっこの三年生末藤真奈は、返ってきた自分への呼称に頭から湯気を上げて憤慨する。
選手は四つのブロックに分かれてトーナメント戦を行い、それぞれのブロックで一位となったちんぽファイターが準決勝に進出する。
美結はＡブロック、冴香はＤブロックに割り当てられていた。
（しかしＡブロックにも二人ほど頭抜けた実力者がいますね。私も何度か対戦している相手ですが、当たるとしても三回戦。初戦の相手も無名の新人……彼女の白星デビューにはちょうどよさそうですね）
冴香も美結の持つＡブロックトーナメント表を横から眺めて無言で考えていたが、彼女が一回戦敗退する可能性は低そうに見えた。
「んっふふー、美結ちんが負けないと分かって安心してるみたいだね冴香っち？」
「そんなことはありません、勝って当然なレベルまで仕上げていますから。……っと、そろそろですよ天音さん」

リング上では選手の片方が白濁液を噴き上げ勝敗が決し、もう片方がたった今精液を噴き上げた少女にペニスを挿入、勝者の特権である公開陵辱を行っていた。

敗者はそこでまたも嬌声と精液を放ち、デビュー戦を快楽の黒星で飾る。

「わ、私も負けたらああなっちゃう……ちんぽ連呼しながら勝った人に犯されて、知らない観客さんたちに精液かけちゃうんだ……」

「新人戦は時間も限られているので公開陵辱時間は十分のみと決められています。それにまだＦＴＢに慣れていない選手も多く、勝った後に公開陵辱までいけるほど余裕のある選手は少ないですからレイプされない可能性もあります、そんなに心配しないで」

リングを見上げてガタガタ震える美結に、冴香は何度目かのため息をついて落ち着かせようと試みる。

すでに彼女から見て美結の勝率は九割を超えているのだが、やはり当人はどうしても不安らしい。

だからこそ、勝てるように鍛え上げたのだ。

（初陣を白星で飾ることは大事……その後のちんぽファイターとしての生命に少なからず影響を与えますし。多くの負けをこれから経験するからこそ、初戦は勝って前向きな気持ちでいてほしいですね）

そしてついに、スタッフにより美結の出番が来たことを告げられ。
「い、いってくりゅ！」
「はいどうぞ、がんばって来てください」
若干噛んだ美結を無表情で冴香は送り出し、美結はおぼつかない足取りでリング下までふたなりのスタッフに誘導され。
「大丈夫ですよ、落ち着いて、ね。それではリングインしてください」
「は、はいっ！」
案内に従い、ロープをこじ開けるように隙間からリングに飛び込む。
眩い照明、少し低い位置に見える観客席。
すぐそばには冴香たち三人もちゃんといる。
（これが、これがＦＴＢの舞台……！）
初めて上がるリング。
初めて見る景色。
これこそが自分の立ちたかった場所なのかと思うと、美結は自然と高揚し二十六センチの男根はみるみるうちに勃起していく。
「美結ちん、名前と口上言って服脱いで！」

「！」

（そうだ、リングインの作法！）

とはいえまだ緊張していたのか、完全にやることを見失っており。

真奈の声で我に返り、美結はレフェリーに一礼し。

「聖珠学園、天音美結！　正々堂々ちんぽバトル！」

用意してきた口上を大声で叫び、着こんでいた制服を勢いよく脱ぎ捨てリングコスチューム姿になる。

試合前日に冴香たち三人からプレゼントされた、ビキニスタイルの戦闘服。

体操着の上、もしくはTシャツのみがほとんどの新人戦において華麗なコスチューム姿の選手が混じっていると、それだけで観衆も期待にざわつく。

ひらひらのスカートから覗くむき出しの肉槍は、戦いの高揚感で臨戦態勢。観客も口々に「でけえ！」「新人にしてはいいちんぽですね」「俺の二倍以上あるぞ」と絶賛し、美結をますます興奮させる。

（よし、うまくできた！　だいじょぶだよね！）

リングの外に目をやると、冴香が目を閉じてうんうんと頷いている。

どうやら正式作法を間違えることはなかったようだ。

そこで、相手選手もリングインして主審に頭を下げ。
「――白皮学園、大河内清花！　全力で参ります！」
こちらへ向かって名乗りと口上を述べ、制服を脱いで戦闘態勢に入った。
いよいよ、始まる。
《一回戦第六試合！　五分一本勝負、はじめ！》
高らかなゴングの音と共に、美結のデビュー戦が幕を開けた。
相手は美結よりも少し背の高い少女で、ややスレンダーでペニスも美結よりは小さい。
肉感的な体かつ二十六センチの巨根を持つ美結とは対照的だ。
リングコスチュームではなく、学園の体操服を上だけ着用し下半身は裸。
（相手にとって不足はないよっ！）
マットを蹴り、美結は一気に突進する。
冴香や紫や真奈に、今まで鍛え上げてもらった。
精液以外の出せるものをすべて出し切り、この一回戦に勝利してみせる。
「頑張れ美結ちん！　イカせちゃえー！」
（天音さん、慎重に）
仲間からの声援を背に、まずは接近してペニスに触れる。

何にせよ相手の性器を掴まなくては、勝ちなど訪れない。

だが相手も簡単に許さず、しばし互いの男根へ腕を伸ばし合い妨害し合う小競り合いが展開される。

（空手やっててよかった！　この辺の攻防は得意だよっ！）

相手の手ではなく目を見て、動きを予測する。

空手経験者としての美結の地力がここで花開き、攻防は美結有利に運び、何度か掠るように相手のペニスへ触れることもできてきていた。

「っ……」

敏感な男性器に触れるたび、相手選手――大河内清花といったか――はかすかに喘ぎ声を漏らす。

そのたびに彼女の体勢が崩れていき、小さな穴を広げるがごとく美結はそこにつけ込んでチャンスを作ろうとさらに動きを加速させる。

が、それが仇となった。

「てえっ！」

不意に左足に、強く打たれたかのような衝撃が奔り。

（足払い……!?）

相手の手のみに意識が行っていた美結の不意を衝く形で、相手は美結の軸足を払ってきた。

転倒こそしなかったものの美結は片膝をつき体勢が大きく崩れ、そこに覆いかぶさるように相手が迫る。

「ああっ、美結ちん！」

「身体攻撃は認められています。ちゃんと教えたはずですが、初試合の緊張感で飛んでしまいましたか」

真奈が高い声を上げ、冴香は腕を組んで冷静に推移を見守る。

ＦＴＢの攻撃手段は快楽攻撃だけではない。

そこへ持ち込むため、相手の体勢を崩して攻め込むための「身体攻撃」も認められている。

顔面や性器への打撃や、絞め技、髪を引っ張るなどの行為は反則だが、胴体や手足への打撃や、投げ、関節技などは問題ない。そのあたりの攻防も観戦するうえでの見所なのだ。

（し、しまった……室戸さんに教えてもらってたのに！）

「もらった！」

体勢の崩れる美結の股間に清花は手を伸ばし、彼女の勃起するペニスを握り込む。

「いいちんぽしてるじゃない、このおっきいのからたくさん精液出したいんでしょ？　びゅーっ、びゅーって、お客さんの前でたくさん敗北射精して、デビュー戦を黒星で飾りたいのよね？」

「くっ、くうっ……ちっ、ちんぽ……気持ちいい……」

相手は言葉責めしながら美結の二十六センチのペニスを、勢いに任せて扱きあげる。

汗ばんだ相手の手がしっとりと心地よく、刺激による快感が急速にペニスから脳へと流れ込んでいく。

新人戦は一本勝負、一回射精すれば終わりだ。

「ほらほら、いつでもイっていいのよ？」

「っ、んうっ……ちんぽぉ……」

「落ち着いて！　手コキへの対処法を思い出してください！」

快楽が脳に送り込まれ始める美結に、リング外から冴香の声が飛ぶ。

手コキはやっている方も腕が疲れるため、ある程度耐えれば向こうから必ず責め方を切り替えてくる。

その一瞬の隙を逃さず反撃するのだ。

「くっ、まだっ……こんなの、室戸さんの手コキに比べたら……！」

確かに気持ちいいが、冴香の厳しい手コキ指導に比べれば大したことはない。
意識を集中させ快楽をなるべく考えないようにし、一瞬の隙を眈々と窺う。
「大丈夫かしらぁ？」
「平気でしょう、まだ声に余裕があります。ダメな時はちんぽ連呼しますので。早漏訓練の結果が出ていますね」
紫が頬に手を当てて案じるが、冴香は腕を組んだまま淡々と返す。
まだ大丈夫だ。
冷静に機を窺えば、逆転の余地はある。
「ちっ……ちんぽぉ……」
「まだイカないの……？　だったらこれでトドメよ！」
やがて美結の我慢にしびれを切らし、腕も疲れてきた清花はペニスから手を離すと、そのままフェラに移行するべく口を近づけてきた。
そこで、美結の目が光る。
（今だっ！）
ここが勝負の分かれ目。
この間隙を逃せば、そのまま口でイカされて終わりだが。

ここで反撃すれば、活路が見える。
全身のバネを使い、覆いかぶさる相手を跳ねのけ。
「っ!?」
虚を突かれて尻もちをつく清花に、逆に美結が覆いかぶさる。
「お返しだよっ！」
自分のものより劣る十四センチの可愛らしい勃起した肉棒を、美結は両手で扱きあげる。
やられた分だけやり返すとばかりに、丹念かつ大胆に目の前の少女を気持ちよくしていく。
「あっ、ああっ！　なっ……こんな……ちんぽ、気持ちいいよぉ……」
先ほどまで攻めに回っていた少女が、赤面し涙を浮かべて快楽に飲まれている。
四大流派直伝の手コキは、経験の浅い美結が使っても新人相手に対しては十分な快楽攻撃力を備えていた。
「どう？　私自身のちんぽに叩きこんでもらった、室戸さん直伝の手コキは！」
「だ、ダメぇえ……それダメ、ダメ……！　ち、ちんぽ、ちんぽ気持ちいいよぉおお……！」
（いけます、勢いに乗ってそのまま！）

冴香が瞳を引き絞る。
みるみるうちに少女の顔がだらしなくなり、美結も手ごたえを確信し。
より速く激しく、清花を追い詰めていく。
「ダメぇえええっ！　速い、手コキ速いいいいっ！　これ以上気持ちよくなったらっ、出、出ちゃうっ、ちんぽからミルクいっぱい出ちゃうううううっ！」
「いいよ出して！　あなたが射精するところ、誰よりも近くで見ててあげるから！」
「んぁあああああっ、ダメダメダメぇえええっ！　もうイク、ちんぽイクっ、先輩ごめんなさい、私もう精液出ちゃうううう……っ！」
悲痛な声を最後に、彼女は美結の手で快楽地獄に叩き落とされた。
「んっほぉおおおお――！　出る出る出る、出てるぅうう！　デビュー戦で敗北射精しちゃったぁあああああ――！　真っ白な精液で黒星っ、黒星ついちゃったぁあああ！　んぉおお気持ちいい、ちんぽミルクいっぱい出して気持ちいい――！　負けちゃって気持ちいい、負けて気持ちよくなっちゃったのぉおお！　敗北ちんぽからみじめな射精気持ちいいいいい――！」
（や……やった！）
天を貫くかのような白濁射精。

それを自らの手で導き、天音美結はデビュー戦を制した。
一度真上に噴き上がってから落ちてきて自分にかかる特濃の白濁液は、まさに彼女を祝福する勝利のリボンのよう――。
《勝者、聖珠学園天音美結！》
「やったー！　私、勝った……勝った――！」
細胞レベルにまで、勝利の喜びが刻み込まれ。
美結は巨大ペニスをぶるんと揺らし、その場で跳びはねて嬉しい気持ちを爆発させていた。
「やるじゃんあの娘！」
「かわいいし、ちんぽデカいし」
「無名だからチェックしてなかったところに、大物新人きたかもしれませんね」
「にわかが。あの学園は今年室戸流入ってるぞ」
観客たちの自分を評する声さえ心地よく、それだけで射精してしまいそうだ。
ＦＴＢの勝者には栄光と未来が与えられる。
このまま勝ち続けて、自分はどこまで行くのだろう。
きっとその先には、なにより輝かしい未来が待っていると、美結はこの時確信した。

《勝者、天音美結には敗者である大河内清花を公開陵辱する権利が与えられます。時間は今より十分間、なお一度リングを降りると権利は消滅します》

ふと聞こえてきた音声が、美結を我に返す。

（そうだ、勝ったんだから相手を犯していいんだ……でも……）

けれど、今はそんな気にはなれない。

全力を出し尽くして余力がないのもそうだが。

自分の初めての相手として、胸とペニスを貸してくれた彼女にそのようなことをする気は起きなかった。

「はあ、はあ……」

「大丈夫？　立てる？」

ありったけの精液を放出し、リングに大の字に倒れて痙攣している清花に、美結は近寄って手を差し伸べる。

彼女は手を差し出されたまましばし放心していたが、やがて少しだけ残念そうに笑って美結の手を取った。

「負けちゃったかぁ……強いね、天音さんだっけ？」

「ううん、あなたもいいちんぽファイターだったよ」

初めてのＦＴＢで戦った相手。
彼女は決してそこまでの強敵ではなかったが、自分をある程度は追い込み正々堂々と戦った立派なちんぽファイターだった。
冴香の特訓がなければ、どうなっていたか分からない。
そんな彼女に敬意を払い、陵辱はせずに。
代わりに、固い握手を交わす。
「すごい楽しかった、また戦おうね！」
「う、うん！　次は絶対負けないから！」
勝敗の差こそあれど、全力で戦った両者にはどちらにも爽やかな笑みが溢れていて。
こうして天音美結は自身のＦＴＢデビュー戦を、華々しい白星で飾ることができた。
リングを降りて戻ってきた彼女を、真奈、紫、冴香の三人は温かく迎え入れる。
これで退部は免れたばかりか、二回戦にまで駒を進めることができた。
安堵感と高揚感で、美結の九十センチＦカップの胸はいっぱいに満たされる。
「よく成長しました。あれだけ早漏だったのにちゃんと相手の責めを我慢して反撃に転じて勝利を収めた……教科書通りの最も基本的な戦術ですが、それをきちんと体現できる選手はなかなかいません。今の感覚を忘れずに」

「うん！　室戸さん、本当にありがとう！」

ここ一か月、自分の本気に応えるべく本気で指導してくれたクラスメイトであり師匠でもある冴香の賞賛に――相変わらず彼女は無表情のままだったが――美結はすっかり機嫌をよくしていた。

「いかがでしたか。初めて戦った感想は」

「うん、なんていうか、すっごく楽しかった！　私もあの子も、本気でちんぽぶつけ合って戦って……これがＦＴＢなんだって感じで、ほんとに楽しかったよ！」

美結は本心からそう答える。

しかし、冴香は。

「……楽しい、ですか……」

自分から聞いておいて、そこで顔を曇らせる。

何かまたまずいことを言ってしまったのかと美結は考えるが、すぐに彼女は取り繕った。

「いえ、そう感じられることは才能です。何事も楽しくなければ、その場に身を置く意味はありませんから」

（そう言う割に、室戸さんは楽しくなさそうだね……）

とは、言えなかった。

家のことだか跡取り問題だか、よく分からないが。
彼女の無表情の裏には、ＦＴＢ関連での暗い過去があるくらいのことは美結でも推察できていた。何度かそれで彼女の機嫌を損ねてしまったこともある。
冴香は話を切り上げ「では、そろそろ私も出番なので。行ってまいります」と言って。
「あ……室戸さん、頑張ってね！」
三人に見送られ、別のリングへと赴き。
美結たちも追いかけて、彼女の応援へと回る。
Ｄブロック、一回戦最終戦。
室戸冴香の名前は、トーナメント表の右端にあった。
そしてリング周囲に詰めかけた観客の数も、先ほどの美結のデビュー戦とは大違い。
「おい、あの室戸流が出るぞ！」
「〝雪月花〟室戸……四大流派の試合が生で見られる！」
「すっごい美人！　あんなキレイなのにちんぽついてるの、あの子？」
熱心なファンたちの声が、リングのすぐそばにいる美結たちにも聞こえてくる。
美結と違いこれまでに幾度もＦＴＢの舞台に上がっている冴香は別段物怖じもせず、ふわりとした動きでリングに上がり、恭しくレフェリーに一礼。

「――〝雪月花〟室戸冴香。玲瓏（れいろう）なる射精へと誘（いざな）います」

学園名でなく二つ名をつけて名乗り、制服を脱ぎ捨て。

その下から出てきた彼女のリングコスチュームに、思わず美結は息を呑み思考を奪われる。

「っ、わあ……」

自分とは真逆で、白を基調とした清潔感ある格好。

全体のコンセプトは「和」。上半分は着物をアレンジしたようなコスチュームで、お腹や腋の部分は布がなく、袖は服本体と分離して腕に纏わっている。

そして下半身は前後に小さな垂れ布一枚のみ。その薄い布越しにも、彼女の三十二センチの包茎ペニスの形がクッキリと浮かび上がって清楚でありながら煽情的という相反する要素が完璧なまでに両立されていた。

「室戸さん、すっごく似合ってる……」

（コスチュームもそうだけど、こんな綺麗でエッチな衣装を自然に着れるって時点で、室戸さんの実力が分かるなぁ……）

美結はそのデザインの完成度の高さと、その服を最大限に着こなす冴香に、ただただため息を吐くのみだった。

「すげえ……これが室戸流」
「ちんぽもすごいけど、オーラからしてやっぱ違うな」
「でもなんで、聖珠なんて無名の学園に？」
「なんか跡取り問題があったらしいぜ、噂じゃ正統継承者の座も奪われたって――」
さすがに知名度の高い冴香、周囲の噂話も留まるところを知らない。
だがそのざわつきも、鳴り響いたゴングが一掃した。
リング上に沈黙が降り、観客も室戸流の技を見逃すまいと固唾を飲んで注視している。
いきなり四大流派が現れたことに、相手は相当狼狽えているようだ。おそらくトーナメント表を手にした瞬間に、己の不運を呪っただろう。
その何よりの証に、彼女の小さな男性器は獅子を前にした子犬のように縮こまってしまっている。
対して冴香は三十二センチの包茎ペニスを隆々と勃起させたまま、一切の力も入っておらず、ただ淡々と目の前の怯える相手に向き合っている。
（うわー……もう立って向き合ってるだけでオーラが違う……これが戦う室戸さんなんだ……）
その冷たい闘気に、リングコスチュームの上からジャージを羽織っていた美結は身震い

する。

立ち振る舞いからして格が違い過ぎており、もはや相手選手は生簀（いけす）の鯉――冴香のために差し出された生贄であるに過ぎない。

「く……っ！」

緊張に耐え切れなくなったのか、やがて相手選手は冴香に向かって走っていき、傍目にも勝ち目のないと分かる正面突破を試みてきた。

手を伸ばして冴香の巨根を掴もうとするも、彼女はひらりと体の軸をずらして避ける。

大きく動いているわけでも、速く動いているわけでもなく、最低限の動きで柳のように手コキをかわしていく。

「動きが雑すぎます。もう少し相手のちんぽをしっかり見てください」

「うっ、うるさいっ！」

戦いながら話すほどに余裕のある冴香に対し、どんどん焦りだけが膨らんで動きが乱れていく対戦相手。

かわいそうなほどの試合運びだ。

「まあ、私を相手に逃げないところは評価に値します。その闘志に敬意を払い、室戸流の性技を披露して差し上げましょう」

そう言って冴香は瞬時にバックステップし、いったん間合いをとったのち。
慌てて距離を詰めてくる相手に、薄い唇を動かした。
「室戸流、『花』の四手――」
「え……」
突っ込んでくる少女に、冴香も一歩踏み出し。
次の瞬間、二人はすれ違い。
「――『遅咲桜（おそざきさくら）』」
相手の背後に抜けた冴香が、静かな声でそう言って。
二秒間、リングの上に沈黙が降りて。
それから。
「んほぉおおああ！　ほおお、おほぉおおおっほぉおおおお！　ちんぽぉおお！　ちんぽイグぅううう！　ちんぽちんぽちんぽぉおお！　せいえぎぃいいい――！　せいえぎぃ、せいえぎどまんなぃいい――！」
この世のものとは思えない絶叫を上げながら、少女はリングの向こうの客たちに向かって恐ろしいまでの精液を噴き出しながらその場に崩れ落ちた。
「な、なんだ!?　いつイカせたんだ!?」

「あれが室戸流四十八手の一つ……生で見たのに見えなかったなんて」

少女の温かく臭い生の白濁液をかけられて、彼らは冴香の絶技に困惑の表情を浮かべながらも、少しでも多くの精液を浴びようと射精地点に群がっていく。

（す、すごい……今の、全然見えなかった……）

あまりの早業に、美結は目をごしごしと擦る。

見えていたのは冴香が相手とすれ違い、その後で勝手に向こうが暴発した光景だけ。

まるで手品か魔法かのように、冴香は新人を瞬時に敗北大量射精させたのだ。

「おおおぉああザーメンンン！　ザーメンミルク止まんないぃいい、女の子精液出すぎぃいいいいっ！　らめぇ死ぬぅ死んじゃう、射精止まんなくて死んじゃうぅうう――っ！」

リング上ではいまだ哀れな獲物が、エビ反りになって痙攣しながら精液を観客の顔面にまき散らすサービスを続けている。

（すれ違いざまに手コキでイカせたってこと……!?　あの一瞬であんなに精液出させるほど超速の手コキって……）

おそらくあのすれ違った一瞬で、数百回は上下運動させていたとみて間違いないだろう。

改めて四大流派の力というものを間近に感じ、美結の背中に冷たいものが奔った。

「この程度の勝利、何の意味もありません。私は……すでに私は……あの日から止まって

いるのですから」

《勝者、聖珠学園――〝雪月花〟室戸冴香！》

まだ射精し続けている敗者には目もくれず、冴香はひらりとリングを降りて。

その静かな強者のオーラに、観客たちも後ずさって道を空ける。

「お疲れ、室戸さん……その、すごかったね」

「どうも」

（汗ひとつかいてない……）

自分たちのもとに戻ってきた冴香に美結は声をかけたが、彼女はまるでコンビニに買い物にでも行ってきたかのように平静な態度のままだ。

純白の着物スタイルのリングコスチュームは汚れどころか皺ひとつなく、穢すことのできない美を体現しているかのよう。

椅子に腰掛けて鞄からペットボトルを取り出すと、中身を飲みながら冴香は訊ねた。

「少しは参考になりましたか、天音さん」

「い、いや速すぎて参考もなにも……」

あまりにも桁が違い過ぎて、全く糧にできない。

恐ろしいのは、あれでも全く本気でないことだ。

ちんぽファイターランク７、雪月花の二つ名は伊達ではないと美結は細胞レベルで理解する。

しかし冴香は首を横に振り。

「いえ、私ではなく、あちらです」

「え……」

その鋭く尖った顎で、リングを指す。

美結が視線をやったその先には。

「んほぉおおお……止まんない、止まんないのぉ……ちんぽ壊れちゃった、ちんぽ蛇口壊れて精液とまんない……永遠に精子出すちんぽになっちゃったぁ……ちんぽぉ……ちんぽぉおお……」

（ま、まだ射精してる！）

勝負がついて三分は経っているはずなのに、リング上ではまだ相手選手が痙攣しながらうわごとのように何か呟きつつ射精している光景があった。

驚く美結に、冴香は淡々と言う。

「負ければああなるという光景を、あなたが負ける前に一度見せておきたかったので、一回戦ですが室戸流の性技を一つ披露しました。雪・月・花――それぞれ十六手ずつ、合計

四十八手ある性技の一つを」
「……」
「ああなると知ってもなお、あなたはＦＴＢで戦い続けますか」
リング上ではふたなりのスタッフが三人がかりで、精液をまき散らし続ける相手選手を強制退場させ、マットを入れ替えていた。
そんな光景を見つつ、美結は答えた。
自分の決意は揺らがない。
ＦＴＢ（ここ）で戦うと決めたのだから。
「うん……それでも私、この場所で輝きたい」
「……そう、ですか」
その答えは、冴香が期待していたものだったか。
あるいは真逆の回答を欲していたのか。
もう、冴香自身にもよく分かっていなかった。
（私は……この人に何を見ているのでしょう……）
天音美結も室戸冴香も、共に二回戦へと進出し。
美結は次の相手にも勝利を収め、ＦＴＢ初出場にして連勝するという快挙を成し遂げた。

「やったー！　ねえねえ見てた!?　私また勝ったよ、これも室戸さんのおかげだよ！」
「分かりましたから落ち着いて」
リングを降りて冴香の手を取って満面の笑みで勝利を報告する美結に、冴香は呆れたようにそう言って手を振りほどく。
彼女の方はすでにDブロックのトップとなり、準決勝進出が決まっている。
それでも淡々としている冴香と、二回戦突破で鼻を高くしている美結。
経験者と初心者の立ち居振る舞いが露骨に分かれているのが、傍目からでも分かる。
「見ててよね室戸さん！　教えてもらったコキテクで、次の相手もイカせちゃうんだから！」
ウインクして親指を立てる美結に、冴香は「はあ……」と気のない返事だけを送って。
その三分後。
「おほぉおおお――！　ちんぽ、ちんぽぉ、ちんぽイクぅうう――！　もうダメ、ダメダメダメぇえええっ！　敗北射精しちゃった、初めて負けて精液出しちゃったぁあああ――！　んぁあああ射精止まんない、負けて精液出すの気持ちよくて射精止まんないよぉおおおお――！」
「ほら、やっぱり」

リングの上で金玉揉み手コキによって強制射精させられた美結は、観客に特濃の精液をたっぷりとぶちまけて、三回戦敗退と相成った。

「あー、美結ちん負けちゃったかー」

「まあでも、よくもったほうです。相手はかなり試合経験のある実力者、私でも名前くらいは知っているちんぽファイターでしたから」

真奈が残念そうに口を尖らせる。

一方で冴香はまだ射精している美結に呆れつつも、それでもある程度の所まで勝ち進んだ彼女に一定の評価をつけていた。

「気持ちいいー！　男の子ミルクびゅーびゅー気持ちいい――！　負けて出す男の子ミルク気持ちよすぎるのぉおおおお！　敗北射精たまんない、勝った時と同じくらい気持ちいいのぉおおお――！　んぉおおおちんぽ、ちんぽイク、ちんぽ敗北してイクぅうううう――っ！」

二分半ほどの射精の後、リングにあおむけで倒れてヒクヒクと痙攣する美結。

黒基調のリングコスチュームは、自らの白い精液がよく映える。

美結を射精へと導いた少女は公開陵辱する気がないのか早々にリングを降りると、残された彼女はふたなりのスタッフに肩を貸してもらい、いまだ精液をポタポタと垂らしつつ

リングから降りて冴香たちのもとに戻ってきた。
「はぁ……はへぇ……負けちゃった……」
「はいどうも、お疲れ様です」
絶頂の余韻が引いてきた美結は、あれだけ大見得を切って出ていって即敗北して帰ってきたことの恥ずかしさが今頃込み上がってきて、顔を耳まで真っ赤に染めている。
「だから言ったでしょう、そう甘くないと。よかったですね、公開陵辱されなくて」
「う、うん……」
スポーツドリンクをごくごく飲みながら、美結はリング上で行われている四回戦を見つつ思う。
（やっぱり簡単じゃないよね……二回戦も勝てたからもしかして、なんて思ってたけど、ＦＴＢは厳しいっ……）
自分の初挑戦はここで終わりだ。
だが、不思議と悔しさはなく。
むしろ次の戦いに向け、燃えている自分がそこにあった。
（もっともっと強くなりたい！　もっと心と体とちんぽを鍛えて、次はもっと高い所へ上ってみたい！）

こんなふうに負けても前向きに思えることなど、今までで一度もなかった。
ペニスとペニスで戦う、ふたなりの誇りをかけた戦いであるからこそ。
コンプレックスだったこの巨根を存分に活かして闘う、この舞台だからこそ。
この一度しかない青春を懸けるにふさわしいと、美結は全身の細胞で理解した。
「室戸さん、明日からもっと厳しい特訓つけて！」
「……いいですけど、少し前のめり過ぎですよ」
「ううん、もう止まってなんていらんない！　私、もっともっとちんぽファイターとして高みに上りたいから！」
美結は拳を握って、すでに高みに立っている少女に言う。
冴香はやや目を伏せて、それから言う。
「あなたの上りたい高み……私は今、おそらくそこに立っています。……ですが、あまりいい眺めではないかと」
「かもしれないけど、やっぱり自分の目で見るのは違うと思うし」
それに、と美結は続けた。
「室戸さんだって、今いるところが一番高い所だとは思ってないでしょ？」
ピクリ、と銀髪が揺れた。

エメラルドの瞳が見開かれ、身体が硬直する。
「もっと高い所から見たら、また別の景色が広がっているかもしれないし」
「それ、は……」
どうしてこうも、この少女は。
何も考えていないように見えて、時々胸をえぐることを言ってくるのだろう。
そんなふうに冴香は思った。
――いいですか。一瞬でも「極めた」と思ってしまえば、そこで人の成長は止まります。
――室戸流の性技は百年経っても、いえ、伝来から千四百年以上経った今でも常に変化し、移ろい続けています。あなた一人のかけた時間で完成するほど浅い流派ではありません。――
――それをゆめゆめ忘れず、常に研鑽を重ね、心身とちんぽの鍛錬に励むのですよ。
――あなたは誇りある四大流派、室戸流の正統継承者なのですから。――
――はい、おかあさま！　おことば、しっかりとちんぽにきざみこみました！――
「……」

「室戸さん？」

在りし日のことを思い返して沈黙してしまった冴香の顔を、美結が不安そうに覗き込んできた。

それで我に返り、回想を振り切って冴香は立ち上がる。

「……行ってきます。準決勝に」

（私は何のために……あの日にすべてを失ってなお、こうしてＦＴＢのリングに立っていて……その先に何もないと分かっているのに……）

四つのブロックの覇者がぶつかり合う決勝トーナメント。

これまでの小さなリングでなく、体育館中央に設置された大型のリングにて準決勝は行われる。当然観客もぎっしりとリング周囲に密集しており、館内の巨大スクリーンにもリングの様子が映し出されていた。

（高み……成長……そんなもの、もうこの心とちんぽには……）

《準決勝第二戦、はじめ！》

そこに上がり、コスチュームを脱ぎ、ゴングが鳴り。

その、一秒後に。

相手の選手は白目を剥き、白濁した敗北の証をこれでもかというほどに彼女の男性器か

ら噴射して果てる。
（なにも……響かない……）
精液を噴き上げて倒れる準決勝の相手を陵辱することもなく、冴香は静かにリングを後にして。
いまだに上げ続ける彼女の喘ぎ声すら耳に入らず、ベンチに腰掛けて深く息を吐いた。
（天音さん……あの人に近づきたくありません……あの人といると、私は心が乱れる……）
あの眩しすぎる、無垢で無知な少女が。
自分の止まっていた時計の針を、動かそうとしてくる。
それを不快でやめてほしいのか、あるいはそれを待っていたのか。
分かりすらしないから、余計に厄介なのだ。
（まあいいです……決勝も早く終わらせて帰りましょう）

ＦＴＢ新人戦シングルマッチは、十六時三十分に閉会式が行われ。
優勝のトロフィーは、下馬評通り聖珠学園の室戸冴香の手に渡った。
メディアの取材もことごとく断り、冴香は早々に会場を後にし、美結たち三人もついていく。

「いやー、やっぱり冴香っちは強いね！　こんな逸材がうちの学園に来てくれたら、来年以降の部員確保も安心安心！」
「すごかったわねぇ、冴香ちゃん。決勝でも全然緊張しないで、三十秒で勝っちゃったものねぇ？」
「うんっ、ほんとに室戸さんすごかった！　優勝して当然って感じで！」
上級生を含めた三人の賞賛を浴びつつも、冴香は一切表情を変えずに駅までの道を歩いていく。
「美結ちんも新人とは思えないほどいいとこまで行ったし、聖珠ＦＴＢ部の未来は明るいね！」
「えへへ……ありがと、真奈ちゃん先輩」
「その呼び方はやめてって言ったでしょ！」
金髪ツインテールの生意気そうな上級生は、またもピーッと頭から湯気を発する。
冴香以外は和やかな雰囲気で、ＦＴＢ部の四人は帰路に就く。
ともあれこれで新人戦シングルスは終了、美結は正式にＦＴＢ部の一員と相成ったわけだ。
「次の大会っていつなのかな!?　私、一日も早くまたリングに上がりたくて仕方ないよ！」

「次は夏の大会だよ。私たち三年はそこで引退」
わくわくする美結に、真奈が教える。
夏の戦いこそＦＴＢの本番、地区戦を勝ち抜いてきた猛者が一堂に会し東京一のちんぽファイターを決めるという。
「だいたい三か月かあ……それまでずっと練習だね」
「あぁ、でも、近日中にもう一つあるわよぅ？」
今度は部長の紫がねっとりと口を開いた。
真奈も「そうだ、アレ忘れてたね」と思い出す。
「な、なんですか⁉　またすぐ大会に出られるってコトですか？」
美結は期待と高揚感からナメクジを思わせる美少女部長に詰め寄るが、紫は困ったように目を細めてネトネト窘（たしな）める。
「落ち着いてぇ。この戦いは美結ちゃんだけじゃ出られないのよぅ」
「私……だけ？」
その言葉の意味が分からず首をかしげる美結に、夕月紫は言った。
「新人戦タッグマッチ。二人ひと組で戦うＦＴＢよぅ」
「ふたり……ひと組……」

その言葉に、はたと足が止まる。
確かにそれでは、美結だけでは出場できない。
新人戦のタッグマッチである以上、相方は一年生のみに絞られる。
が――。
「室戸さんっ！」
この銀髪美少女が、いる。
美結はいてもたってもいられず、冴香の肩に勢いよく手を乗せて求めた。
「ね、ねえ、タッグマッチ、一緒にとかどう……かな？」
声をかけられた冴香はいつも通りの無表情で振り向いたが、美結の手を静かに肩から下ろすとサラリと答える。
「お断りです。私はタッグマッチに興味ありません」
「そう言わずにさ、ね」
「そもそも、あなたと組む理由が分かりません。あなたは二勝したとはいえまだまだ駆け出しのちんぽファイター、足手まといになるだけです」
「そうだけど、でも室戸さんと一緒なら結構いけると思うんだよ！　ほら私、実戦で成長するタイプだし？」

スタスタと先に歩き出す冴香を追いかけるように、美結は根気よく説得を試みる。
ＦＴＢの舞台で戦えるなら、シングルでもタッグでもどんどんやってみたい。
自分の限界に挑戦してみたいのだ。
そしてそのためには、相棒となる彼女の力が要る。
他に一年生の部員もいないため、冴香と組む以外に方法がないのだ。
「これも私のこと鍛えてくれる一環だと思ってさ、ね」
「イヤですよ」
「お願い、おねがい！　私、いけるとこまで行ってみたいんだよ！」
手を合わせて拝むようなポーズをとる美結に、冴香は立ち止まってため息を吐く。
「やる気は結構ですが、そのやる気で他人を巻き込まないでください。自分の限界を試したいと逸るのも新人の特徴で、それで無理をしてちんぽを壊してしまった選手は少なくありません。大会参加は一回見送って地力の底上げを図ったらどうです」
「でも、青春は一回しかないんだよ！　このふたなり学園生活なんて、あっという間に過ぎちゃうんだから！　それまでにできるだけ大会に出て、完全燃焼したいから――」
美結の言葉は、そこで途切れた。
うつむいた冴香の顔が、一瞬ではあるがとても悲しげに歪んでいたから。

その美貌に、影が落ちて。

雪のような美しく白い肌だからこそ、落ちた影はより濃く見えた。

「天音さん。やっぱり、あなたのことは嫌いです。ＦＴＢのことを何も知らず、ただむやみに突っこんでいくだけの、お気楽なあなたは」

「室戸さん……」

「ＦＴＢで輝きたいなら好きにしてください。ですがそれに私を巻き込まないでください。強くなりたいのも、青春がしたいのも、全部お一人でどうぞ」

立ち尽くす美結を置いて、冴香は夕暮れの道を歩いて去っていき。

長い影が、彼女の小さな背中にそっとついていった。

NUMBER 01 天音美結（あまねみゆ）



私立聖珠学園一年生
ちんぽファイターランク2
タイプ:バランス/ベビーフェイス
得意技:冴香直伝手コキ、模倣「落月」
体型:161㎝/55kg
B90(F)/W57/H89
ふたなり:13～26㎝/ズル剥け
やや反りのあるストレート/カリ高
ステータス:体力B/筋力B/瞬発力B
ちんぽ攻撃力B/テクニックC/我慢強さC

岐阜県出身。ふたなりであることにコンプレックスを感じて上京、聖珠学園に転入してきた少女。FTBの存在すら知らず非常に早漏だったが、冴香の指導と元々の才能により著しい成長を続けている。空手をベースにしたスタンダードな打撃技と、90㎝のバストを使ったパイズリ、冴香直伝のオーソドックスながら強力な手コキが得意。

NUMBER 02 室戸冴香（むろとさえか）



私立聖珠学園一年生
ちんぽファイターランク7
二つ名「雪月花」
タイプ:テクニック/ノーマル
得意技:室戸流「花」の十五手「百花繚乱」
体型:164㎝/48kg
B85(E)/W55/H87
ふたなり:11～32㎝/真性包茎
ほぼまっすぐなストレート
ステータス:体力D/筋力E/瞬発力A
ちんぽ攻撃力B/テクニックS/我慢強さS

FTB四大流派の中でも技巧に秀でた「室戸流」の血を引くクールな銀髪少女。京都府出身。継承者になるべく厳しい修行を積んできており、軽い身のこなしから四十八手ある室戸流の性技を駆使しほとんどの相手を一瞬で射精させる。一方でフィジカル面は脆く、直接的なぶつかり合いに弱い。

第4話　もっと練習！

――もうやめさせろ。並のちんぽファイターがお前のやり方に合わせられるわけがない。

――聞いた？　あの子、また訓練で相方を壊したって。――

――どうせあいつには、私たち凡人ちんぽファイターの気持ちなんて分からないんだよ。

――名家の跡取りは大変ね、タッグマッチのパートナーも見つからないほどに強すぎて。

「……」

カーテンの隙間から差し込む朝日で、室戸冴香は目を覚ました。

掛け布団は今朝も当然のごとく、朝勃ちにより標高三十二センチの山を作っている。

しばしそのまま、冴香は天井を見つめてぼんやりと。

今の今まで見ていた夢を、おぼろげに思い返して。

「……凡百の格下が、何を勝手に……」
誰もいない空間で、小さく小さく悪態をついた。

試合翌日の月曜日、室戸冴香はＦＴＢ新人戦シングルマッチで優勝した件で全校朝礼の折に表彰された。
教室に戻ってからもホームルームで讃えられたが、彼女は終始無表情のまま。
「やっぱ、あの子性格悪くない？　ニコリともしないなんてさ」
「ま、まあまあ舞ちゃん……そんな悪く言わないであげてよ」
あの一件以来、冴香は教室で弁当を食べずに昼休みはどこかへ姿を消している。
今日の昼もここに冴香の姿はなく、それゆえ彼女と仲の良くない峰岸は悪口を言いたい放題だ。
だが美結は冴香の性格や背景を少しずつではあるが知るようになってきて、彼女のあのかたくなな態度にも理由があることを分かっている。
その理由が具体的に何なのかは、まだ分からないが。
「美結ちんＦＴＢ部に入ったんでしょ？　あの子、部活でもあんな感じなの？」
「ま、まあ基本的にはね……」

（室戸さん、どこでお弁当食べてるんだろ。トイレ……ってことはないよね）

なんとなく美結は心配になった。

ストイックな彼女は、どこで昼休みを過ごしているのだろうかと。

「……あ、私、小野先生に呼ばれてんだった！　職員室行かないと！」

気になるといてもたってもいられず、適当な出まかせを口から放ち、残りの弁当をかき込むと美結は教室を出て冴香を探しに向かった。

屋上にもおらず、図書室にもおらず、パソコン室にもいない。

彼女のいそうな場所を探してみるも、あの寡黙な銀髪美少女の姿はなかった。

（あとは、部室かなあ……）

残る候補はそのくらいしかない。

本校舎と離れた別館の地下、ＦＴＢ部の部室。

果たして、そこに彼女はいた。

（室戸さん！　……一人で練習してるんだ……）

冴香はリングの上に制服のまま上がり、同じ動きを機械のように丁寧に繰り返していた。

シャドーボクシングのごとく、何もない空間に相手ちんぽファイターがいるかのように立ち回っている。

天才と持て囃されていても、練習は怠らない。
（やっぱり、すごいなあ……）
汗を飛ばしてひたすら鍛錬に打ち込む彼女に、美結は目と心を奪われ図らずも勃起していた。
一通りの練習を終えたのか、やがて冴香は呼吸を整えながらスポーツタオルで汗を拭き。
「……で？　何をこそこそ見てるんです」
「いいっ⁉」
かと思えばドアのわずかな隙間に視線をやり、氷のような声で言う。
観念して美結は引き戸を開けると、「やっぱりあなたですか」と冴香はため息をついた。
「あ、あはは……ごめんね、覗くつもりはなかったんだけど」
気まずさに首の後ろに手を持っていきながら苦笑いする美結に、冴香はもう一度長く息を吐いて、部室の壁沿いに置かれた休憩用の長椅子に腰掛けた。
タオルを首にかけ、そばに置いてあったペットボトルを開栓してごくごく飲む冴香。
そんな彼女に美結は近寄って、訊く。
「ねえ、隣いい？」
「……どうぞ」

てっきり断られるかと思いきや、冴香はボトルから口を離してそう答え。
ぺたん、と美結が彼女の横に座ると、冴香は足元に置いてあった自分のバッグから制汗スプレーを取り出して服の中に噴霧していた。爽やかな香りが鼻をくすぐる。
「よくもまあ、私のような退屈な人間に付きまとえますね。ご友人と埒が明かない話をしているほうが楽しいのでは」
「そんなことないよ。室戸さん、おもしろ……っていうのも違うけど、素敵だと思う」
自分の方を見ずに言う彼女に、美結は首を横に振って返した。
美人でクールで、なにより強い。
昨日の新人戦も四大流派の名に恥じない、美しいまでの圧勝ぶり。
ちんぽファイターとして、彼女は純然たる憧れの存在だ。
それでいて人の見ていないところでは、ひたすら研鑽を惜しまないストイックさ。
そんな冴香に少しでも近づきたいと、思っている。
「ねえ、やっぱりタッグマッチのこと……ダメかな？」
「興味がないと言ったはずですが」
彼女とタッグを組みたいのもそうだ。
より多くの試合を経験したいという思いもあるが。

彼女の強さを、力を、もっと近くで感じてみたいのだ。
実力が天地ほどに離れていると、分かっていても。
「肩を並べられるとは思ってないよ。でも、私、もっと近くで室戸さんのこと見ていたくて……」
すぐそばの冴香に、美結は真剣な目で訴えかける。
彼女のエメラルド色の瞳に自分の姿が映っていて、それはまるで真意を映し出す鏡のようにも美結には見えた。
そうしたら、冴香は二度ほどまばたきをしてから訊く。
「なぜ私がタッグマッチに興味がないのか、知りたいですか」
「う、うん」
「したことがないんですよ、タッグマッチを」
意外だった。
あれほどの実力を持ちながら、タッグを組んだことがないと言う。
「正確には、タッグを組めないんです」
「それって……」
「お察しの通りです。相方を壊してしまうのです」

冴香は淡々と言った。

自分と組んだ相手は、冴香の強さについていけずにダウンしてしまうのだと。

「当時の門下生の中で、誰一人私についてこられるパートナーはいませんでした。そのときの私があまりにも強さを求め過ぎていたというのもあり、とにかく相手にも自分と同じであるべきだという姿勢を強い、その結果パートナーの心身を、そしてちんぽを壊してしまうことも多々ありました。愚かなことです。今にして思えば師範代らしくもありません」

「そんなに……」

（室戸さんが私たちと距離を置こうとするのも、そういう理由なのかなあ……）

かつての冴香は厳しすぎた。

それゆえ何人ものちんぽファイターを壊してしまい、その反動からこうして他人と一定の距離を保って接しているのかもしれない。

そんな風に美結は思った。

「……ですから、私は当時の家元に……まあ実母ですけど、タッグを組むことを禁じられたのです。それ以降ずっと私はシングルマッチ専門でした」

「そうだったんだ……」

冴香の過去を少し知り、美結は複雑な表情で下を向く。

かと思えばふと、何かを思いついたようにガバッと顔を上げて。
「ですから、タッグマッチのことは諦め……」
「ねえ、じゃあさ！」
彼女の言葉にかぶせるように、言った。
「逆に言えば、私が室戸さんの練習についていければ、タッグ組んでもいいってコト？」
「は……？」
冴香は面食らって、しばらく口を開けたまま固まってしまう。
「正気ですか天音さん？　あなたはまだデビューしたばかり、これまでの私の指導も超初心者向けのソレだったんです。料理で言えばお米の炊き方を教えたようなもの、タッグを組むにあたり相手に課していた訓練はあれと比べ物にならないほど過酷なんです。下手すればあなた、二度と勃起できない体になりますよ」
「ううん、私それでもやってみせるよ！　室戸さんとタッグ組むためなら何でもするから！」
「……どうしてこう……」
額に手を当てて、冴香は特大のため息を吐いた。
いくらなんでも酔狂が過ぎる。

かつての自分が課し、幾人ものちんぽファイターを壊してしまった特訓を自ら受けようというのだ。

それも、この間初勝利を挙げたばかりの新人が。

「どうなっても知りませんよ。天音さん、最悪普通の女の子になってしまいますからね」

「ううん、きっと大丈夫！　室戸さんとタッグ組んで試合に出てみせるから！」

美結が答えた瞬間に予鈴が鳴り、二人は部室を後にして、教室に戻って午後の授業を受け。

そして放課後、また部室に戻ってきた。

「さて、始めますよ。いいですね」

「う、うん！」

二人はすでに下を脱いで勃起したペニスを向け合い、リング上で対峙している。

部活の練習日でもないので、ここにいるのは美結と冴香の二人きりだ。

「新人戦タッグマッチは半月後……それまでにあなたが本当に私と並び立てるか見極め、もしＯＫであればそこから試合まで調整をかけるのに十日は必要です。したがって天音さん、あなたは五日で私とタッグを組めるようになってもらわなければなりません」

「……」

「日程も前回より遥かに短く、内容は昼休みに話した通り。これまでの甘い指導とは訳が違います。言っておきますが金玉が空になろうが失神しようが尿道から血が出ようがイカせ続けますからね、それに耐えられなければこの話はナシです」

ごくり、と美結は唾を呑み込む。

これまでとは比べ物にならない冴香の性技が、美結に襲い掛かるのだ。

だが、これは試練。

これに耐えられなければ、彼女とタッグなど組めはしない。もう後には引けなかった。

「では……」

フッ、と冴香の姿が消える。

この消失は、これまでの練習でもあった。

瞬時に背後に回り込み、後ろから手コキで射精させる彼女の常套手段。

（それくらいは分かるんだか……ら……）

美結は素早く振り返ったが、そこに彼女の姿はない。

「こっちです」

（う、上っ！）

声は、美結の頭上から聞こえ。
次の瞬間、目の前の視界が奪われ。
「おおっ、おほっ、おほぉおおお――！　なにこれぇえええ、精液、精液出てるぅううう！　んぁあああああちんぽぉおおおお――！　なんで、なんでぇえええ！　なんで射精してるのぉおおお！」
美結は訳も分からず、超大量の精液を噴射していた。
（なんで、なんでちんぽイってるのぉおおお！　何が起きたのかもわからないまま精液出させられてるっ、ちんぽ気持ちいい、気持ちいいよぉおおっ！）
十秒ほどドバドバと精液を噴射しながら、ようやく美結は理解した。
彼女は姿を消して空中へ跳び上がり、そこから落下しざまに足で美結の勃起したペニスを挟み。
そのまま落下の勢いで、足先からふとももへと美結のペニスを擦り上げながら着地、その快感と衝撃で彼女を強制射精させたのだ。
やっていることは足コキからの素股なのだが、落下の勢いを乗せたそれは素人はもちろん、中堅ちんぽファイターでさえ即絶頂は不可避だ。
着地した今もふとももで美結の肉棒を挟みながら、彼女の身体を正面からホールドして

逃がさないようにしつつ、素股で射精させ続けている。
「室戸流『月』の七手、『落月（らくげつ）』」
「んほぉあああああ！　むろとしゃんそれらめ、らめぇえええ！　むろとしゃんのふとももも気持ちいい、精液出させるためのふとももきもちいいよおおお！　おにくたっぷり詰まってるふとももっ、ふとももに扱かれて精液止まんない、精液止まんないぃいい！　ふとももまんこ気持ちいいのぉおお！」
強烈な摩擦で瞬時にイかされ、その後は柔らかな太ももによる執拗な愛撫と全身を使った柔らかな抱擁。激しさからの甘さ、快楽のギャップに、美結のペニスは狂ったようにふとももの間で震えながら精液をまき散らし、二つの睾丸も陰嚢（いんのう）の中で歓喜に跳ね回っている。
「ダメダメだめぇえええ！　精液止まんない、止まんなすぎるぅうう！　金玉壊れちゃう、金玉爆発しちゃうのぉおお！　らめぇそれ以上ふとももちんぽ扱きらめぇ、らめぇえええ――！　ちんぽ、ちんぽ気持ちいいよぉおおお――！」
「この程度でもう射精ですか。絶対にタッグを組むのでは？　金玉が爆発する前に諦めたらどうです」
冴香に抱き着いて涙を流しながら首を振りつつ大量射精を続ける美結に、冴香はふとも

もによる圧迫射精を一切やめずに無慈悲に告げる。
「やらぁあああ――！　射精気持ちいい、でもむろとしゃんとタッグ組みたいのぉおおお！　いっしょにちんぽで戦いたいのぉおお！　んはぁああ射精止まんないのぉおお！　射精してるけどむろとしゃんと戦いたいよぉおお――！」
「では耐えてください、もっと搾り取りますけど」
「んぁあああ――！　ふとももぎゅうぎゅう締めつけるのらめぇえええ！　ちんぽが、きんたまが、ぜんぶ壊れちゃうのぉおおお！　んぁああ射精、しゃせい、しゃせひぃいいい！　精液めちゃくちゃ出すぎてちんぽ一本じゃ足りない、ちんぽ十本ないと精液出し切れないぃいいい！　ちんぽに対して精液の量が多すぎるのぉおおおお――！」
　さらにふとももによる圧迫を増してきた冴香に、美結は狂ったように泣き叫びながら精液を放射し続けるのみ。
　三分近く射精させられ続け、冴香は美結を解放すると少女は死んだように精液まみれのリングにベチャリと倒れて白濁の飛沫を上げ、全身を痙攣させる。
「あぁ……あはぁ……これぇ……しゅごすぎりゅ……ちんぽぉ……」
「水飲んでください、五分後にまた搾り取るので。今日は十時半までやりますよ、師範代だった頃は新人だろうと徹夜でイカせ続けていましたからこれでも優しすぎると思ってく

ださい。それと明日から毎朝六時半に部室へ来てください、朝練もやらないと間に合いませんので」

「ウソぉ……こんなのぉ……あと六時間もぉ……ムリぃぃ……死んじゃう……気持ちよすぎて死んじゃうのぉおおお……ちんぽ……ちんぽ気持ちよすぎるぅう……」

地獄のような快楽は、まだ始まったばかりだ。

「三十秒しごき、その後十秒手を止めます。これを一セットとして二十回繰り返します。途中で射精したら失敗で一セット目からやり直しです。では行きますよ」

「はっ、はひぃいい――！　らめ、むろとしゃんらめぇえええ！　高速手コキきついぃ、強制精液搾りらめなのぉおおおお――！」

「今日もよくやるねー、美結ちんと冴香っち」

「本当ねぇ。タッグマッチに向けて気合入ってて嬉しいわぁ」

美結が冴香の課する地獄特訓を開始してから四日、ＦＴＢ部のリングでは今日もハードな訓練が行われていた。

新人戦タッグマッチまであと十一日。今日と明日の訓練に耐えられれば、冴香は美結を

タッグパートナーとして認め、試合に出てくれる。

そのために、彼女が課す試練に耐え、レベルを高めなければならない。

新人戦タッグマッチのルールは三本勝負――すなわち先に二回射精したペアの負けだ。

この二回とは、「一人につき一回」ではない。片方のちんぽファイターが二回出してしまった場合も「二回」としてカウントされ、そこで負けが決定する。

つまり美結が二回射精してしまえば、冴香は何もしていなくても強制的に負け。片方が弱いと、もう片方の足を露骨に引っ張ってしまうのだ。

四大流派の室戸流が、相方の無名新人のせいで何もできずに敗退となれば、世間の風当たりも相当強くなるだろう。自分への批判はともかく、冴香にまで迷惑をかけてしまうなど耐えがたいものがある。それ以前に、負けたら二人ともその場で公開陵辱されてしまうのだ。

（わっ、私のせいで室戸さんの顔に泥を塗っちゃうなんてダメだからぁ！　顔に塗るのは精液だけで十分だよぉおおお！　でもきもちいいっ、きもちぃいい！）

「ほおっ、ほっ、ほっ、ほぉおおおお――！　らめ、らめ、ほんとにっ、もうダメイク、イクイクイクっ、精液出ちゃうぅうう――！」

三年生の真奈と紫が見守る中、美結は必死にペニスに力を入れて冴香の快楽攻撃に耐え

ていたが、それも長くはもたず天井へ向けて精液を放射する。
「んぁあああ出ちゃった、出ちゃった、精液出ちゃったぁあああ！　耐えらんない、こんなの我慢できないぃいいいいいい！　我慢弱いちんぽでごめんなしゃい、大量精液まき散らしてごめんなしゃいぃいいいい！」
「……十八セット目で失敗ですか。まあ地力は上がりましたね。もう一度最初から行きますよ」
「待って、むり、むりっ、イったばっかりで……んぁあああああ――！」
嬌声と精液が絶えず上がる部室。
その中心でひたすら手コキ、時々フェラや足コキを交えながら美結の二十六センチの巨根から精液を搾り続ける冴香は、能面のような表情の裏で密かに驚いていた。
（すぐに音を上げるかと思いきや、意外にも食らいついてきている……技巧やちんぽパワーはまだまだですが、この根性というか粘り強さは正直かなりのレベルです。これならばタッグを組んでも割といい線まで行けるのではないでしょうか）
「おおおっほぉおおおおお――！　まだ出る、出る出る、出てる出てる出てるのぉおおおお――！　弱いくせに精液だけはいっぱい出すちんぽ恥ずかしいっ、おっきいくせに我慢弱いちんぽ恥ずかしいのぉおお――！　恥ずかしさで余計精液出ちゃううう――！」

大量に精液を撃ち放った後、美結はリングに倒れ込んで全身を痙攣させる。
そのさまを見下ろしつつ、冴香の頭には一つの考えが浮かんでいた。
（ここまでよく耐えている……これはそろそろ、用意していた最終試練に移行していいかもしれませんね）
冴香の意向で休憩を長めに取り、美結は体力と精子を回復した。
彼女が落ち着いてきたところで、冴香は練習を再開すると言って美結をリングに上がらせ、自分も反対側から上って向き合う。
「天音さん、今までよく私の訓練に耐えました。かつての私よりはマイルドでこそあるものの、この激しさに精液を何度も噴き上げつつも勃ち上がってくる天音さんは、私とタッグを組んでも問題ないレベルまで引き上がったと言っていいでしょう」
「ほ、ホント!?」
「ええ。ですので、これが最後の訓練になります」
認められたという喜びに顔を輝かせる美結に、冴香はこくんと頷いた。
それから視線を移し、リング外で見守っている二人の上級生に向かって話す。
「今回はお手数ですが末藤先輩、そして夕月部長にも協力して頂きます」
（先輩たちにも……？）

ここにきて特訓に三年生の二人が参加するということに、美結は少し驚く。
冴香はもう一度頷き、そして最終試練を申し伝えた。
「今から私たち三人がかりで、天音さんを百発射精させます。百回目の射精後に勃起していられれば、あなたと新人戦タッグマッチに出ると約束しましょう」
「ひゃ……百発!?」
とんでもない数が飛び出した。
確かにこれまでも何度も射精させられたが、百連発はいまだにない。
美結もこの聖珠学園に入学する前、一人で抜いていた頃に興味本位で何回射精できるか試したこともあったが、休憩を挟みつつ一日で四十五発が限界だったと記憶している。
それをおそらく休みなしで、百発――。
「あ、精液が出なくなっても続行します。要は百回連続ちんぽイキしていただくということで、最後ですからシンプルに行こうかと」
「ううう……」
あまりの恐ろしさに、さすがの美結のペニスも萎えそうになってしまう。
だが、この最終地獄を超えれば、冴香は自分とタッグを組んでくれる。
「分かった、やるよ！　真奈ちゃん先輩、部長、お願いします！」

「にへー、冴香っち面白そうなこと考えつくじゃん？　これは先輩としてひと肌脱いで、ついでにひと皮剥いてあげないとねー？」

「そうねぇ、かわいい後輩のためだもの？　私も協力させてもらうわぁ」

金髪小柄でつるぺたの上級生と、ナメクジを思わせるダウナー系爆乳部長も乗り気のようだ。

これから美結は、三人にひたすら犯され続ける。

射精して、射精して、射精して、また射精する。

それを百回繰り返し、最後の試練を突破するのだ。

「では、最初は末藤先輩からどうぞ。射精させられるならば何をしてもかまいませんので」

「はーい、それじゃいっきまーす！」

冴香に促され、小さな上級生の真奈が美結のペニスにしゃぶりつき。

「あっ、ああっ、真奈ちゃん先輩っ、だめっ、イク、イクぅうう……！」

得意の口技で、あっという間に美結を追い詰めて。

一分も経たず、少女の巨根からは最初の特濃白濁汁が迸る。

「んぁああ――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおお――！」

「はーい、一発目ー」

（い、一回目でこんなんじゃ……）

最初の射精でこれだけの快感。

これをあと九十九回も受けてしまうわけだ。

しかもイけばイくほど身体は敏感になってしまうため、快感は加速度的に上昇していく。

なんとか気持ちを強く持って意識をつなぎとめておかなければ、百回目の射精までに心身がもたない。

「休ませる余裕を与えないでください。二発目は部長、お願いします」

「はいはい、それじゃあ美結ちゃんのイったばっかりのちんぽを……こうやってお胸ではさんでぇ……」

「ひ、ひいいいっ！　ぶっ、部長、だめぇ、今すぐは……！」

息を整える暇すら与えられず、冴香の指示で紫がのしかかってパイズリを仕掛けてくる。

百センチ超えの爆乳に敏感になったペニスを挟み込まれ、為す術もなく二回目の絶頂が尿道を駆け巡って噴出された。

「んおぁあああ――！　二回目射精きちゃったぁあああああ！　二回目の精液出てる、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいのぉおお！　紫部長のパイズリしゅごいい、おっぱいに挟まれて敏感ちんぽ即イキすごいぃいい――！」

「二発目ねぇ。あと九十八発、頑張ってねぇ美結ちゃん？」
「むっ、むりぃ……あと九十八回も射精なんてできないぃいい……」
「できないのではなく、射精するんですよ。では三発目は私ですので」
パイズリで絶頂させた紫が美結からどくと、すぐさま冴香が入れ替わりで美結のまだ精液を垂らしているペニスを握り込んで高速で扱きあげ、即座に三発目となる射精をさせる。
「んにゃぁあああああ――！　ダメぇえええ、だめだめ精液でりゅううう！　ちんぽから三発目の濃い精液出てるぅううう！　もう無理もうむり、あと九十七回も無理ぃいいい――！」
三人は休みながら代わる代わる責めてくるが、美結は一秒たりとも休めない。
この時点で圧倒的に不利な上、試合でもないので逃げることも許されなければそもそも「負け」という概念すらない。
ただひたすら、百回射精させられるのみ。
まさに地獄の最終試練だ。
「十六発目、オナホコキー」
「んぁあああ――！　なにこれ、なにこれぇえええ！　ツブツブが先っぽに当たってっ、ダメぇこんなのむりぃいいい――！」

「二十三発目、縦パイズリよぅ」
「あぁっはぁあああああ――！　だめえ、縦のパイズリで挿入感アップしてるぅうう！　おっぱいまんこ、おっぱいまんこで強制射精すごいぃいいい――！」
「三十発目、室戸流『雪』の一手『淡雪（あわゆき）』」
「おおぁあああそれダメ、それらめなのぉおおお！　口と舌で細やかな刺激がたまらないのぉおおお――！」
「四十一発目、乳首を美結ちゃんの尿道に挿れてあげるわよぅ」
「ら、らめ、らめぇえええ！　部長の乳首ちっちゃなちんぽくらいあるのぉおおおお！　そんなのが、そんなのが、私の尿道にぃいいい！　はいっ、はいっちゃったぁあああああ！　だめえええ尿道まんこ犯されてるっ、尿道の処女奪われちゃったぁ！　いやぁああ精液出てる、精液出てるのに出口塞がれて……んぁあああ今抜いたらぁあああああ！」
「五十四発目、室戸流『花』の二手『白百合』」
「のぉおおっほぉおお――！　こんなの耐えられるわけない、こんなの無理に決まってるのぉおお――！　初心者に室戸流の技使うの大人げないと思いましゅぅうう――！」
「六十七発目、ディープスロートだよっ」
「無理ぃいいいいい！　無理なの、真奈ちゃん先輩のちっちゃな喉まんこしゅごいぃいい

い！　真奈ちゃん先輩の喉に中出し、喉内射精っ、喉内射精ぃいいい――！」

「八十二発目、膝裏で挟みつつ亀頭を擦ってイカせます」

「ダメったらダメぇええ、もう敏感にも程がある先っぽ徹底的にこすっちゃらめなのにぃいい――！　やだぁああ精液これ以上やらぁあああ――！」

「九十四発目、舌で尿道ほじくりながら金玉揉み手コキなんてどーう？」

「どうじゃないぃいい――！　こんなの即射精に決まってるのに議論の余地なんてないのぉおおお！　ちんぽ気持ちいい、ちんぽこわれちゃううう！」

「九十八発目ぇ、禁じ手の乳首内挿入しちゃうわよぅー？」

「んやぁああこんなのダメぇええ！　部長の乳首の中あったかくてすごいのぉおおお――！　乳首内射精！　乳首内射精ぃ！　乳首の中に射精するの最高なのぉおおおおおお――っ！」

「九十九発目、室戸流『花』の十四手『靱葛』」

「おぁあああああああ――！　もう精液止まんない、もういい加減に出なくなってもいいのに精液止まんないよぉおおおおおお！　こんな時だけなんで精液無限チャージされてるのぉおおお――！」

九十九回の射精を経て、美結は心身ともに限界をとうに超えていた。

だが、ようやく、本当にようやく、次の一回でこの地獄も終わる。
そうしたら、晴れて冴香とタッグを組めるのだ。
「では、最後は」
「三人でー」
「イカせちゃいましょうかぁ」
「ひ……っ」
だが、その最後の壁がとてつもなく高く分厚い。
じりじりと包囲を狭めていく、三人のふたなり少女。
美結は本能的に逃げようとしたが、もはや快楽で体が全く動かない。
「いくわよぅ？」
紫がその巨大な爆乳でペニスを包み込み、そのナメクジのような雰囲気からは想像もつかないほどの荒々しさで扱きあげ。
「よーし、美結ちん覚悟っ！」
大地震のような胸の躍動から見え隠れする亀頭に、真奈が得意のフェラでしゃぶりつき、小さな舌で徹底的に先端を苛め抜いて。
「さあ、これで最後です」

そして後ろから、冴香が三十二センチの超巨根を美結の秘所に突き入れて激しくピストンする。

その快楽は三倍どころの騒ぎではない。

ここまでの九十九発で敏感も敏感になったペニスに、三人が容赦なく快感を全方位から与えてくるのだ。

「んむぉおおおっほぉおおおお――！　らめぇ、らめえ、やめてぇえええ！　ぶちょう、まなちゃんせんぱい、むろとしゃん、やめへぇえええええ――！　三人がかりで犯すのらめぇ、三対一は卑怯すぎるのぉおおおお――！　ダメダメダメダメ精液でりゅ、今までで最大最高の特濃激ドロ幸せ男の子ミルク大量射精始まっちゃうぅうううう――！」

「いいですよ、百発も射精してしまう恥ずかしいちんぽから恥ずかしいミルクいっぱいどうぞ」

「美結ちゃんの最後の一発、私たちによーく見せてねぇ？」

「美結ちん頑張れ、頑張って最後の超気持ちいい射精しちゃえっ」

もはや人間が理解できる快感ではない。

三位一体の攻撃に、美結は逃げることも耐えることも忘れて快楽の渦に呑まれ喘ぎ続け。

そして、ついに。



「あぁあああ――！　ああー！　ああー！　ああっはあああ――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおお！　百発目の射精きたぁあ――！　百連発ちんぽから最後の射精きたぁあああ！　最後の一発が一番濃いのっ、最後の一発がっ、いちばんっ、きもちいいのぉおおおお――！　んぁあああああ百発射精しゅごいいいい、百回射精気持ちいいのぉおおおお――！」

「やったー！　美結ちんすごいよ、百連発射精ほんとに成し遂げちゃった！」

「そうねえ、まだ出続けてるわぁ、最後の一滴まで搾り取ってあげるねぇ」

「ほらもっとですよ、最後の射精なんですから思い切り出し尽くして」

真奈も、紫も、冴香も、美結の百連発の偉業を祝福するようにますますパイズリとフェラとピストンの動きを速め、美結の射精の勢いを倍加させる。

うねりを上げて流れる精液はリングからあふれ出し、部室全体を精液で浸していき。

「ああん、美結ちゃんの射精見てたら私もっ……ああっ、出るぅうう！」

「真奈もっ、真奈も美結ちんと一緒にイク、イクっ、イクぅうう――！」

その勢いに触発され、紫と真奈も自らのペニスから特濃の白濁液を噴き上げて。

冴香以外の三人が一斉に精液を噴射し、みるみるうちに部室の水深が上がっていく。

「あぁっはあぁあああ――！」

「精液ぃいいいい――！」
「止まんないのぉおおお――！」
そして、ありったけの精液を放出し、部室を五分の一ほど精没させた三人は。
体力の限界を迎えて同時にリングに倒れ、精液の飛沫がベチャリと上がる。
「はぁ……」
唯一射精しなかった冴香は、美結が倒れたことで引き抜かれた自らの肉棒を拭うと、今の今まで犯していた彼女に近づき。
「あはぁ……おほぉお……ちんぽぉ……ちんぽぉおおお……」
「……はい、ちゃんと勃起できていますね」
うわごとを言いながら痙攣している美結のペニスを、軽く握って確かめた。
百回の射精を終え、それでもなお屹立し、精液の残りを吐き出し続ける彼女の武器を。
これで合格だ。
夢と現（うつつ）の境目にある美結に、冴香は静かに言葉をかけた。
「約束です。新人戦タッグマッチ、あなたと一緒に出場しましょう」
「ちんぽぉおお……ちんぽがぁああ……」
その言葉は聞き入れられていないようだが、この瞬間に天音美結と室戸冴香はタッグを

形成した。
それを聞いて歓喜する美結だったが、ここからが第二段階。
新人戦タッグマッチに向けて二人は残り数日を休むことなく調整を重ね、いよいよ試合を翌日に控える。

「いいですか、ちんぽファイターの間にはこんな言葉があります。『勝利の女神にちんぽは一本しか生えていない』と。恐れて二の足を踏んでいては、勝利という女神のちんぽは相手に掴まれてしまうのです」
「わ、分かった！　もう一回！」
激しい調整と呼吸合わせ。
シングルマッチの時のように自分の力だけをどれだけ高めても、それだけで勝てるほどタッグマッチは甘くない。
パートナーと完璧に息を合わせて、初めて勝利のふたなり女神は微笑む。
個々の力量よりも、コンビネーションが物を言うのだ。
「私もタッグは初めてなので、天音さんのことをもっと深く知る必要があります。あなたの攻め、あなたの動きをもっとこの身で確かめなければなりません。遠慮はいりません、

再起不能にするつもりで来てください」

「うんっ！」

ハードな練習にも、美結の表情に疲れの色は見られない。

憧れの冴香と、タッグを組んで戦える。

その高揚感が疲労感さえ麻痺させ、苦痛であると感じることは一瞬たりともなかった。

「はあ、はあ……いいですね、今日は短めにここまでにしましょう」

「ふー、ふーっ……」

やがて汗と精液まみれになった二人は適当なところで練習を切り上げ、リングを降りて体を拭き、身を休めながら水分を摂取する。

今日は土曜日で授業もない。これ以上の練習は翌日に疲れを残すばかりか、うっかり射精してしまえば精液濃度検査に引っかかって失格となってしまう。

二人して部室の長椅子に腰掛け、呼吸が整ってきた美結は隣を向いて口を開いた。

「どうかな室戸さん、私やれそう？」

「ええ、今の段階でもかなりのところまで成長しています。私の訓練、および百連発射精にも耐え抜いた天音さんは、あなた自身気づいていないだけでちんぽファイターとしてはかなりの才能があることが分かってきましたから」

その賞賛に顔を輝かせ勃起させている美結に「だからと言って調子に乗っていいわけではありませんよ」と冴香は戒めた。

「才能があるだけで技巧も地力もまだまだなのですから。いわばあなたは原石、カットされて完成された他校の列強のちんぽファイターとは比べ物になりません」

窘められた美結は「そっか……」とやや声を落としてから、ふと話題を変えた。

「室戸さんは、なんでそんなにＦＴＢに一生懸命なの？」

「なんです、藪から肉棒に」

「前にもちょっとだけ聞いたよ、正統継承者候補として生まれた時から運命が決まってたって」

生まれながらにして道が決まっていて、継承者として育てられてきたと。

そのために過酷な修行や肉体改造にも耐えられたと。

しかし、何らかの理由で彼女は未来を掴めなかった。

正統継承者になれなかった。

美結にとっては、その理由にはあまり興味がない。

知りたいのは、なぜそれでいてなお室戸冴香がＦＴＢに打ち込むかだ。

誰も見ていないところで密かに汗を流し、鍛錬と研鑽を怠らない彼女が。

そう伝えると少しの沈黙の後、冴香は小さな声で言った。
「別に、意味などありません。ただＦＴＢ以外のことを何も知らないので、なんとなくＦＴＢ部に身を置いているだけです。今さら他のことを始める気にもなれませんでしたので」
「それにしたって一生懸命だもん、誰も見てないところで練習してるくらいだし」
「……」
「今だって私のわがままにここまで付き合ってくれるし、いつでも私にアドバイスくれるし……室戸さんがいなかったら私、負け込んでＦＴＢやめてたかもしれないから」
初勝利を挙げられたのも、早漏が改善したのも、すべて冴香の協力によるものだ。
初心者以前の自分にここまで良くしてくれるのは、彼女がＦＴＢに対して真摯に向き合っており、同じようにＦＴＢに真剣な自分への想いを拾ってくれたからに他ならない。
「最初は美人だけど感情がないみたいに見えてとっつきづらかったけど、こうしてひと月一緒にやってきて、室戸さんのこと少しずつだけど分かってきたし」
クールで愛想がないように見えて、ＦＴＢへの想いは人一倍なのが室戸冴香だ。
だからこそ、彼女が今もなおそれに懸ける想いの根源を美結は知りたい。
そう、隠すことなく美結は言った。
「知ってどうなるというわけでもないでしょう」

「ううん、室戸さんのこともっと知ったら、タッグマッチだってもっとうまくいく気がするもん」
「私、あなたのこと嫌いだと言いませんでしたっけ」
「でも、私は室戸さんのこと好きだよ？」
「っ……」
突き放すつもりで言ったセリフを一秒で返され、冴香も口ごもってしまう。
「なんだかんだ言って色々教えてくれるし、初心者の私のこと考えて特訓メニュー組んでくれるし、それに、その……してくれたし」
口元に手をやって頬を染めながら、美結は過日のことを思い出していた。
三十二センチの巨根により男を教えられ、死ぬかと思ったほどに射精を続けて狂わされた初体験。
彼女とセックスした時の射精の気持ちよさは、今でも忘れられない。
「あれは試合が近かったから仕方なくです。セックスしたからといって特別な関係になったつもりはありません」
「分かってるけど、それでも嬉しかったんだよ」
また、沈黙が降りて。

三年生の二人もいないため自分たち以外に誰もいない部室が、しんと静まり返る。
そうでなくても土曜日で生徒の少ない学園の別館は、自分たちが喋って動いていないと完全に無音となってしまう。
ややあって、冴香は口を開いた。
「……なんでもいいですが、タッグは今回限りですからね。私もタッグマッチは未経験ですし、いまさら誰かとバディを組む気にもなれませんから」
「う、うん……」
「では、明日は会場で」
言うだけ言った冴香は荷物をまとめるといつものように一人先に部室を後にし、足早に部室を出ていった。
（室戸さん、やっぱり私とタッグを組むのイヤなのかなあ……）
学園からの帰り道、鞄を肩にかけて一人で歩きながら美結は考える。
ここまでタッグを組むための特訓に耐えて彼女の首を縦に振らせた美結だが、それでも冴香は今回限りだという。
地力が上がっても、冴香の足を引っ張らないレベルにまで成長しても、それでも彼女はやはり自分の手を取ることは今後ないのだろうか。

ずっと、一人で戦い続けるのだろうか――。

（でも、室戸さんがそうしたいって言うなら仕方ないか）

美結には彼女をどうこう言う資格もなければその理由もない。

彼女が過去にどれほど厳しく、どれほど苛烈な目にあったかなど、実際に見ていない以上は何も言えない。

過去に何があって四大流派の正統継承者の座を奪われ、ＦＴＢの弱小校に流れ着いてきたのかも知らない。

彼女が話さない以上、こちらから首を突っ込むのも野暮な話だ。

（とにかく今は、明日の試合に向けて英気を養わないと……って、あれ？）

考えをまとめたところで、ふと美結は気がつく。

前方の視界で、先ほど別れたばかりの冴香の姿があった。

だが、明らかに様子がおかしい。

柄の悪そうな複数の若い男に取り囲まれ、何事か言い合っている。どう見ても穏やかな様子ではなかった。

これはまずい、助けなければ。

そう思った時には、美結の足はアスファルトを蹴っていた。

「やめっ……離してください！」
「んだよ、お前がコイツの代わりに俺らと遊んでくれればいいだけだろ」
「そうそう、そしたらこの猫も放してやるし」
三人の男に囲まれるようにして、冴香は華奢な体を掴まれ、申し訳程度に抵抗していた。
しかし彼らの膂力に女の子の冴香がかなうはずもなく、少女は人気のない所へ引きずられるようにして連れ去られていく。
「おっ、お前らぁ――っ！」
「あっ……天音さん！」
そこへ矢のように美結が駆け寄り、強引に男の手から冴香を引っぺがして乱入する。
男は掴んでいた冴香の腕を離し、乱暴に突き飛ばして彼女は地面に倒れ込んだ。
「っ……」
「室戸さん、大丈夫!?」
倒れる彼女の腕の中に、小さな白い毛玉のようなものがあった。それが何か確かめようとする前に、男たちの声が美結の耳を舐（ねぶ）る。
「なんだお前、こいつの友達か？」
「言っとくけど、先に絡んできたのはそっちだぜ」

「そうそう、俺ら被害者だし」
どう見ても男たちが冴香に乱暴している、もしくはその前段階のように見えていたのに、彼らは悪びれもせず言い放って。
それぱかりか、自分にも同じことをしようと下劣な手が伸びてくる。
「まあまあ、こっちの子のほうが体つきエロいし、なんなら二人まとめて――」
「触るなぁ――！」
その腕の間合いの外から、美結はハイキックで男の顎を捉え。
「なっ……こいつ！」
掴みかかろうとする別の相手の腕をかいくぐり、みぞおちに一撃を与えてうずくまらせ。
そこを踵落としで、完全に沈黙させる。
「このアマぁ！」
その間隙に、三人目に後ろから抱き着かれるように拘束され。
最初に蹴りを食らわせた男が、動けない美結を狙って正面から怒りを込めて殴りかかってくる。
しかし美結は捕まったまま、強烈な肘鉄で拘束する男を頽れさせ。
自由になるや否や、突っ込んでくる男に前蹴り。

蹴りが命中する瞬間に全体重を足先に乗せることで、自分以上の体重の男を数メートル後ろへ吹き飛ばす。

「どうだっ！」

「くそ……こいつ、ケンカ慣れしてやがる！」

「逃げっぞ！」

ボディーブローで動けなくなっている男を抱えるようにして、三人の悪漢たちは這う這うの体で逃走していく。

「ふう……空手やっててよかったよ。っと……室戸さん、大丈夫？」

「は、はい……助かりました……」

暴漢を撃退した美結は、いまだに倒れている冴香に手を伸ばして。

その手を取った冴香は、痛みに顔を歪めながらも立ち上がった。

そこで、美結も気がつく。

（あ……猫！）

冴香がその腕に抱いていたものは、まだ小さな白い毛並みの子猫。

捨て猫なのか首輪もなく、泥や土で汚れている。

「彼ら、この子をいじめていたんです。まだこんなに小さいのに蹴ったり投げたりして…

…それでやめるように言ったら、私を……」

ぺろぺろと、子猫は自らの傷も省みず冴香の擦った手を舐めていた。

心ない男たちから自分をかばってくれたことを、小さくても理解しているのだろう。

その様子を見て、美結は思ったことをそのままに言った。

「……室戸さん、優しいんだね」

「なっ……」

これには冴香も驚いたようで、目を丸くしている。

「だってそうでしょ？　自分だって危ないのにこの子を助けるために身体を張ってさ。室戸さん、分かりにくいけど本当はすごく優しいんだね」

「わ、私はそんな……」

室戸冴香は、白い頬を紅く染めていた。

普段クールでストイックな彼女が、こんなにも優しくて熱い心を持っていることを知ることができて、美結は少し嬉しくなった。

感情がないように見えて、そんなことは全くない。

彼女は優しくて温かい心を持った、血の通った人間なのだ。

「か、からかわないでください。それより、今はこの子を獣医さんに診てもらいませんと。

幸いまだ昼過ぎです、診療時間には間に合うはず……」

誤魔化すようにそう言って冴香は立ち上がると、鞄を拾い上げて猫を抱いたまま歩いて行き。

「あっ、室戸さ……」

その背中、歩き方を見て美結はふと気づく。

一瞬見間違いかと思ったが、間違いない。

ごくごくわずかな変化だったが、美結は空手に打ち込んでいただけあって見逃しはしなかった。

あの歩き方は――。

（室戸さん……もしかして足痛めて……）

NUMBER 03 夕月紫（ゆうづきゆかり）



私立聖珠学園三年生
ちんぽファイターランク3
タイプ:パワー/ノーマル
得意技:ヘビープレス
体型:171㎝/75kg
B101(H)/W65/H99
ふたなり:22～35㎝/ズル剥け
全体的にカーブした巨根
ステータス:体力D/筋力D/瞬発力E
ちんぽ攻撃力D/テクニックB/我慢強さC

聖珠学園 FTB 部部長（夏の大会で引退）。ナメクジのような緩慢な動きとネトネトした喋り方が特徴。かなり大柄で体重があり、相手にのしかかって身動きを封じて射精させる。

NUMBER 04 末藤真奈（すえどうまな）



私立聖珠学園三年生
ちんぽファイターランク2
タイプ:スピード/ヒール
得意技:ディープスロート
体型:150㎝/42kg
B71(A)/W55/H74
ふたなり:12～22㎝/仮性包茎
勃起すると剥ける/ストレート
ステータス:体力E/筋力E/瞬発力C
ちんぽ攻撃力C/テクニックB/我慢強さD

聖珠学園 FTB 部副部長（夏の大会で引退）。小柄で中途半端なドリルツインテールが特徴。胸がないぶんフェラを得意としている。美的感覚に優れており、美結のリングコスチュームをデザインした。

第５話　新人戦タッグマッチ

翌日、半月前の新人戦シングルマッチの舞台でもあった東京某所の大体育館に、美結と冴香、および三年生の二人は再びやってきた。

ＦＴＢ新人戦タッグマッチ。

憧れの冴香と組んでリングに上がることができる、その高揚感に美結のペニスは制服を破きそうなほどに屹立していた。

「いよいよかぁ……もう勃起しすぎてちんぽ痛いよ」

「リラックスしてくださいね、ここまでの練習を思い出して」

聖珠学園のブースで自分たちの出番を今か今かと待つ美結に、彼女の横に立つ冴香は相変わらずの涼しい顔だ。

彼女もこれまでタッグを組んだことはないのだが、この大盛り上がりの会場の中、それを微塵も感じさせない。

タッグマッチはシングルマッチと違い出場枠が各校一組とされているため、トーナメント自体は小規模であり、シングルマッチのようにブロック分けもされていない。

ゆえに、シングルマッチの時とは違い使用するリングは会場中央にある最も大きなそれ一つだけ。

しかしながら、タッグマッチこそＦＴＢの花形。

会場中央の大型リングには大勢の観客が詰めかけ、檜舞台で戦う少女たちの勇姿を目に収めようとひしめき、天井から吊り下げられた複数の巨大スクリーンには試合の様相がクッキリと映し出されている。

二人ひと組で戦うちんぽバトルは、ただ個人の力量だけで押し切れるものではない。相方とのコンビネーションや戦略・戦術性が問われ、観ているほうも熱が入る。

リングの上では片方の学園の生徒が二回目の射精をさせられ、それを何千もの観客に余すところなく見せつけていた。

彼女らを降した相手校の二人は男根をいきり立たせ、惨めな敗者の肉穴に挿入し思いのままに辱め、彼女らはその羞恥と快感にまたも精液をまき散らし痴態を晒す。

「……」

自分たちも負けてしまえば、あのように公開陵辱されてしまう。

いくら四大流派の冴香が味方と言えど、自分が二度射精してしまえばそこで負けなのだ。

相方の顔に泥と精液を塗らないためにも、絶対に負けられないと美結は意気込む。

が、その裏で二つほど、今の美結には気になることがあって。

それを、横の相方に問う。

「……室戸さん、昨日の猫ちゃんはどうなったの？」

試合前日、美結は帰宅中に素行の悪そうな男に絡まれている冴香を目撃しこれを救出した。

彼らが虐げていた子猫をかばって自分が身代わりに乱暴されそうになっていた冴香を、美結は得意の空手で撃退しその場は事なきを得たのだが。

猫の安否がどうしても気になり、冴香に訊ねずにはいられなかった。

クールに見えて弱者に優しい少女は、淡々と答える。

「一応獣医さんに診てもらって、特に大きな怪我はないということでした。今は病院に預けています。試合が終わったら一度引き取って、里親を探してみようかと。私も一人暮らしで学校通いなので、面倒みられませんし」

「そっか、よかった」

「それより今は試合のことを考えてください。一回戦からいきなり強豪、剛根学院が相手ですよ」

「う、うんっ……」

猫のことは一段落したようだが、自分たちの問題はこれからだ。

国立剛根学院。

言わずと知れた、ＦＴＢの超強豪校としてその名を馳せるふたなり学園。

長い歴史の中で数々の輝かしい経歴を持ち、第一線で活躍するプロちんぽファイターや優れたＦＴＢ指導者を最も多く輩出している。

力こそちんぽファイターの全てという独特の部訓を持ち、技巧や速さよりもパワーとウェイトに重きを置いた攻撃的なバトルスタイルが最大の特徴だ。

よりによって美結たちは、最初にそこと当たることになってしまったのだ。

もちろん新人戦である以上は相手選手も一年生のはずだが、冴香のように幼少時から鍛えられた実力者のはず。

そもそもこの新人戦タッグマッチがシングルマッチの後に開催されるのにも理由があり、シングルマッチはその結果いかんで誰と誰をタッグマッチに送るべきか、といった判断材料としての役割を果たしているのだ。

つまり剛根学院に限らず、半月前のシングルマッチで優秀な成績を収めた一年生のうち二人がタッグを組み、自分たちの前に立ちはだかってくるのは必定。美結のデビュー戦のときのように無名の初心者と当たる可能性はまずない。

「気を引き締めていかないと、あっという間に二連続射精で終了ですよ」
「う、うんっ……」
（室戸さん……足痛めてないのかな）
美結の気になっていることはもう一つある。
昨日の一件で男たちに突き飛ばされて転倒した冴香が、足を痛めていたように見えたのだ。
見たところ、冴香は平然としている。
もしかしたら自分の気のせいであったかも知れないし、そうであったなら何の問題もないのだ。
それを確かめようと美結が口を開きかけたとき。
「いいですか、とにかく向こうの狙いは天音さんです。プロの私とデビューしたばかりのあなた、どちらがイカせやすいかは火を見るより明らかですよね。相手は弱い天音さんを二回射精させて、一気に決着を狙ってくるはずです」
それにかぶせるように冴香が注意し、美結も「うん、分かってるつもり」と、本来言おうとしていたことではなかった言葉が口から出る。
「できれば私一人で二回射精させられればいいのですが、向こうも強豪、そう簡単に事が

運ぶとは思いません。天音さんがリングに立つとしても、決して無理はせず早めにタッチして私と代わってください。間違っても自分が頑張らなきゃなどと意気込んで、肩とちんぽに力を入れないこと。初心者は大概それで射精するんです」

相手は相当な手練れ。

ひとつの油断、一瞬の判断ミスも許されない戦いが、しょっぱなから要求される。

『一回戦第三試合、聖珠学園対剛根学院！』

アナウンスが響き、いよいよ自分たちはリングに上がらなければならなくなった。

冴香の足のことを聞きそびれてしまったが、もう時計の針は止まらない。

「二人とも、頑張ってねぇ」

「美結ちん、冴香っち、ファイトー！」

部長の紫、小柄な真奈の応援を背に受け、先に行く冴香を追いかけるように美結も招集場に赴く。

「おい、次は剛根と室戸流のいる聖珠だぞ！」

「一回戦で頂上ちんぽ対決だ！」

「この戦いが事実上の決勝戦ということですね」

観客もこれまで以上に盛り上がり、リングの周りにぎゅうぎゅうと押しかけて少女たち

の戦いを見届けようとする。

《聖珠学園の入場です！》

アナウンスに従い、美結はロープを跳び越え冴香はロープの間からスルリとリングイン。

「聖珠学園、天音美結！　正々堂々ちんぽバトル！」

「聖珠学園、〝雪月花〟室戸冴香。玲瓏なる射精へと誘います」

もう美結もリング上での作法は慣れたものだ。

二人で名乗り制服を脱ぎ捨て、ちんぽファイターの戦闘服姿となる。

この一瞬が闘争本能を最大限に引き上げ、ペニスを戦闘態勢に勃起させるのだ。

「室戸冴香が出たぞ！　前回のシングルマッチも優勝、調子は万全だ！」

「家を追い出されたらしいが、雪月花の二つ名に陰りなしか」

「あっちの黒髪の子は見ない顔ですね。無名の学園の無名の新人、果たして彼女のレベルにどこまで合わせられるでしょうか」

「おい新人、室戸流の足手まといになるなよ！」

「いやあの子シングルマッチでもそこそこいってたぞ、案外ダークホースになるかもな」

主に冴香に対してだが、観客の興奮もいきなり最高潮。

そしてやはりといえばやはりだが、そんな彼女と組む美結への風当たりは強い。

だがその程度、覚悟の上だ。

《続いて、剛根学院の入場です！》

アナウンスの直後、黒の学生服を身に纏った二人の少女がさっそうとリングインし、会場が大いに沸き立つ。

「剛根学院、黒崎夏希（くろさきなつき）！　力で射精させるのみ！」

「剛根学院、六車志保（むぐるましほ）！　力で射精させるのみ！」

全く同じ口上を述べ、二人は剛根の制服を脱いでリングコスチュームになった。

揃いの黒いセパレートのコスチュームは機能性を重視した陸上部のユニフォームのようなデザインで、下は男性器の形がハッキリと分かるスパッツ状。威圧感と機能性、そして性的さをありありと放っている。

黒髪ショートの黒崎と名乗った方は後ろに回り、茶髪セミロングで背の高い六車志保が前に出て戦闘態勢をとる。

二十二センチの剛直肉槍は美結や冴香のものほど大きくないが太さとカリ高は十分で、数多の相手を食らいイカせてきたペニスだということが十分に伝わる。

一年生とは思えない佇まい、間違いなく歴戦のちんぽファイターだ。

「エリート校、剛根の新人はどうだ！」

「今年の剛根新入部員は四十一人、そのうちのトップ二人だからな」
「あっちの無名の子はともかく、室戸から一本取れたらプロへの道も一気に開けるからね、大チャンスよね」
観客も彼女らの登場にまた盛り上がり、いよいよリング上での熱気が高まる。
打ち合わせ通りに冴香が前に出、美結は相手の控え選手と対角線上のコーナーに下がった。
そこで冴香と対峙していた六車志保は、指をビシッと美結に突きつけて言い放つ。
「そっちのお前、せいぜい室戸流の陰に隠れて震えてな！　虎の威を借るキツネみたいにな！」
「挑発に乗る必要はありませんよ、天音さん」
「わ、分かってる」
相手は実力で劣る美結を引きずり出して畳みかける気だ。
分かっていてわざわざ乗る義理もない。
《はじめ！》
今、ゴングが鳴り。
二人のちんぽファイターは同時に後方へ飛び退き、互いに様子を窺いつつジリジリと間

合いを詰めていく。
強者同士の戦い、さすがに冴香も瞬殺しにかからない。
（とにかく、室戸さんが出てくれている間に、少しでも相手のちんぽバトルスタイルと傾向を見極めないと！）
美結が今やれることは、相手の一挙手一投足を見逃さないことだ。
緊張感の中、拮抗状態を破ったのは冴香の静かな突進。
一息に間合いを詰め、左手を高速で伸ばして相手のペニスを掴みにかかる。
対して六車は腕でこれを防ぎ続け、反撃の機を窺おうと試みる。
「室戸流はまともにやり合ってイカせられる相手じゃない、狙うならあっちの新人だ！」
「了解、適当にいなしてあいつを引きずり出すよ！」
コーナーから黒崎が指示を飛ばし、六車も不敵に笑って防御し続ける。
（くっ、やっぱり室戸さんのことは眼中にないんだね！）
美結も唇を噛む。
勝つための常套手段とはいえ、弱い自分に狙いを絞ってきていることが明らかだ。
だがここで出ていっては相手校の思う壺。軽率な判断で冴香まで公開陵辱させてしまうわけにはいかない。

試合はしばし、膠着状態が続く。
「ふっ、室戸流の性技でも出してみるか!?」
「笑止。あなたごとき左手一本で十分です」
相手の挑発にも、場数を踏んできた冴香は動じない。
試合は動いていないように見えるが、有利に進めているのは聖珠学園のほうだ。
「くっそお！」
たまらず相手は蹴りを放った。
ガードの固い冴香に、身体攻撃で隙を作ってから快楽攻撃に移ろうと考えたようだ。
しかしその動きもたやすく読まれ、逆に足を勢いよく払われ、六車はリング上で転倒する。
「しまった……！」
「バカ、志保！　焦り過ぎだ！　転がれ転がれ！」
相方の黒崎が大声を上げる。
大きな隙ができた。
転倒の勢いを逆に利用しゴロゴロと転がって距離をとろうとする六車を追い、冴香は一気に快楽攻撃で仕留めようとして。

「!?」

一瞬だけ、動きが止まった。

その一瞬で六車は立ち上がり、冴香は相手にアプローチをかけられず後退して間合いをとる。

コーナーで今のやり取りを見ていた剛根学院の黒崎夏希は、彼女の挙動を見逃していなかった。

（あいつ……今ちょっと止まったぞ？）

そして、同じように自軍のコーナーで待機していた美結もそれに気づき。

顔を、青く染める。

（室戸さん……やっぱり足痛めてたんだ！）

不安が的中した。

昨日の男たちに突き飛ばされて倒れた冴香は、そこでやはり足を痛めていたらしい。

彼らさえいなければこのような事態にはならなかったのにと思うと、行き場のない怒りがふつふつと沸き起こる。

（室戸冴香……怪我でもしてるのか？）

一方、黒崎夏希も冴香の異変に気づいていた。

パートナーである志保を転ばせたまではいいが、その絶好の機に追撃の快楽攻撃をしてこない理由などそれ以外に考えられない。

（志保、奴は足を怪我している！）

（みたいだね……ならそこにつけ込むか）

アイコンタクトで剛根ペアは意思疎通を図り、狙いを冴香に絞る。

本来であれば冴香は適当にあしらい未熟な美結を狙うつもりだったが、この状況下ではむしろ冴香に狙いを絞った方が有利。

試合前に怪我をしている方が悪く、そこにつけ込むのは卑怯でもなんでもない。

「いくぞ、室戸流！」

「っ……」

俄然強気に出た六車志保は、再度冴香に突っこんでいき彼女の怒張する男の象徴に手を伸ばす。

それを紙一重でかわしながら、冴香は上げ続ける右足の悲鳴を聞いていた。

あの後、一応はテーピングとアイシングで応急処置を施したものの、やはり試合での激しい動きに耐え切れなかったようだ。

（相手に悟られる前に……いやもしかしたらすでに……とにかく決着を急がなくては）

万が一にも自分が射精してしまえば、動けない中で美結が相手選手に二人がかりで為す術なく強制絶頂させられてしまう。

そうなれば終わり、一回戦で敗退だ。

相手方は実力者、自分たちを勝利後に公開陵辱できる体力も残してくる。

（特に剛根は必ずと言っていいほど陵辱してくる傾向にある……弱者を犯すことで力を示すためという学校の、そして剛根ＦＴＢ部のポリシー……）

負けて辱められることなどあってはならない。

今さら室戸流の家名などどうでもいいが、それでも負けて犯されにいくほど冴香は酔狂ではないのだ。

（剛根さえ消えればあとはどうとでもなります！　ここで出し惜しみしてはいけません）

一回戦から強豪校と当たったことは不運だが、逆に考えればここで勝てばあとは脅威なし。

ならばなおのこと、室戸流の性技を披露して多少強引にでも勝ちをもぎ取っていったほうがいい。

意を決した冴香は距離をとって慎重に間合いを計り、相手が己の領域に踏み込んだ瞬間。

「行きますよ」

（消え……！）

一気に踏み込み、相手の手前でスライディングするように沈み込む。

開いた志保の股をくぐりながら、彼女の二十二センチのペニスを下から両手で包み込み。

「室戸流『雪』の五手――『流雪（ながれゆき）』！」

「……！」

通過するその一瞬で扱き上げ、そのまま彼女の後ろへとくぐり抜け。

その次の瞬間、六車志保は前方の誰もいない空間に向かって。

「おおっほぉあああ――！　ちっ、ちんぽがっ、私のちんぽがぁあああ――！　射精、射精、射精してるぅううう――！　ちんぽから精液出てるぅううう――！」

大量の精液を噴き上げながら崩れ落ち、観客に敗北の証をまき散らす。

射精する志保の後方で冴香は立ち上がって振り向き、自らの性技が完璧に決まったことを確かめる。

（よし、これで先制ですね）

「や、やったー！　室戸さんすごいよ！」

コーナーで見守っていた美結も、冴香の鮮やかな技に目を奪われて歓喜する。

これで剛根は後がなくなり、自分たちが俄然優位に立ったはず。

「ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおおお――！　そんなバカにゃぁああ、このわたしが、剛根のわたしがぁあああ――！　こんな無様な射精をぉおおっほおおおおお――！　ちんぽイク、いっくぅううう――！　精液どびゅどびゅ止まんないのぉおおおお――！」

「くっ、志保……！　バカな！」

一方で黒崎夏希は、相方の惨めな敗北射精に目を疑う。

力を信条とした尋常でないほどハードな特訓、数多の先輩ちんぽファイターから受けた快楽の洗礼を耐え、多くの同期から抜きん出て共にタッグを組むに至ったパートナーが、こうもあっさりと射精させられるのかと。

「くっ、情けない顔で射精して……！　このままでは先輩たちに申し訳が立たない！」

黒崎夏希は相方の敗北射精に舌打ちし、そんな彼女を挑発するように冴香は手招きしながら言った。

「次はあなたの番ですよ、すぐに相方と同じ射精地獄に送って差し上げます」

「なめるな！　剛根がこの程度で終わると思ったら大間違いだっ！」

リング中央でまだ射精している志保を転がすようにコーナーへ追いやり、剛根のもう一人のちんぽファイターが前に出る。

剛根学院一年生のエース、黒崎夏希。

黒髪ショートで背も高く、バストは九十五センチを誇る。無駄な肉など一切なく腹筋も程よく割れている引き締まった体躯、そしてちんぽファイターの武器である男性器はスパッツ越しにもクッキリと分かる凶暴な大きさと形。太さもカリ高も十分で、「攻撃のためのペニス」をこれでもかと体現している。

強豪校の新入部員の中でも、最も実力に秀でた期待の大型新人ちんぽファイターと言っていい。

「剛根の名に懸けて、このちんぽをイかせられると思うなよ！」

「どこのちんぽであろうと敗北絶頂させるまでです。今のうちに射精時の言葉でも考えておいてください」

ぶつかり合う互いのちんぽ闘気が可視化しているようだ。

それを纏い、黒崎は一直線に突進する。

「はああッ！」

「っ……！」

先の六車志保とは違い、いきなりペニスで斬りかかってきた。

踏み込みながら体をひねり、遠心力全開で己の肉棒を叩きつける。

それを冴香は自らの三十二センチの巨根で受け止め、二人の少女の雄の象徴がギリギリ

と押し合う。

相も変わらず無表情で受け止めていた冴香だったが、じきにその貌が変わる。

（バカな、これほどまでとは……！）

予想以上に相手の攻撃力が高い。

単純なちんぽパワーのみならば、鍛え抜かれた四大流派の自分すら上回っていることを感じる。

「剛根は力こそが全て！　手コキや素股などといった自分に快楽のないノーリスク戦法など弱者の性技（テクニック）！　ちんぽとちんぽをぶつけ合い力で押し切ることこそ剛根（われら）の誉れだ！」

「っ……いけません、ちんぽ気持ちよくっ……」

冴香の巨根の方が四センチ大きいが、黒崎の二十八センチの猛根は固さで上回る。ギリギリと鍔迫（つば）り合いならぬちんぽ迫り合いを経て、快楽に押されていくのは冴香のほうだった。

「む、室戸さん！」

美結は思わずコーナーから叫ぶ。

あの冴香が、今まで一度も射精するところを見なかったクールなちんぽファイターの冴香が、白い頬を紅く染めて快楽に抗い、三十二センチの包茎ペニスがブルブルと震えてい

る。

その先端からは透明な液がとめどなく溢れ、今にも白濁液が噴射されそうだ。

「ほらカウパーがダラダラ出てるぞ、無表情を装ってても気持ちいいんだろ、氷の美少女ちんぽファイター！」

「っ、そんなっ……気持ちよくなど、ありませ……！」

（む、室戸さんが押されるなんて……！）

グイグイと固いペニスを押し付けながら言葉で迫る黒崎と、力に物を言わせた快楽攻撃を必死に耐える冴香。

シングルマッチで圧倒的実力差を見せて優勝したはずの冴香が、純粋にちんぽパワーで押し負けている。

このままでは相手の猛攻に押し切られ、射精してしまう――。

「っく、くぁああ……！」

「どうした室戸流！　いつでも敗北射精していいんだぞ!?　ほらイけ、イけ、無様に敗北液を噴き上げてみせろぉ！」

「いっ、いやぁあああああ……！　ダメ、イクっ、ちんぽイクぅうう――っ！」

千切れそうな断末魔の後に。

包皮に隠れる亀頭、その鈴口が開き。
「んぁあああ――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおおおおお――！　ダメダメダメダメ精液っ、精液出ちゃうぅううう――！」
「室戸さぁあああああ――んっ！」
大体育館の天井にまで届くほど、室戸冴香は垂直に精液の柱を噴き上げた。
「あはぁあああ――！　ちんぽ、ちんぽちんぽちんぽぉおおお――！　ダメなのに、イっちゃダメなのにぃ、精液出ちゃって止まらないのぉおおお――！　見ないで、射精見ないでぇえええ！　こんな情けない射精姿見ないでぇえええ！」
超大量の白濁の奔流を吐き出し、室戸冴香は射精した。
それはすなわち、自分たちの命運があとわずかであることの証明。
二回射精してしまえば終わりのタッグマッチにおいて、いよいよ美結と冴香は追い込まれた。
「あの室戸冴香が射精した!?」
「すごい……あれが四大流派の射精……なんて濃さと勢いなんだ」
「ま、まだ負けてない！　まだ負けたわけじゃないが……！」
「これは分からなくなってきましたね」

そして、まさかの四大流派の射精という事態に観客も騒然とする。
無名の新人のほうではなく、実力もランクも文句なしの〝雪月花〟が射精するなど滅多にあることではない。
「あはぁ、あはぁあああ――！　止まらない、射精止まらないぃいい！　こんなことあっちゃらめ、わたひが射精するなんてあっちゃならないのぉおお！　気持ちいいっ、出しちゃいけない精液出すの気持ちいい――っ！　おねがい、お願い精液止まって、後生だから精液出すの止まってえええ！　言うこと聞いて私のちんぽぉおおおお――！　ダメぇ、ダメぇ、精液ダメぇえええ――っ！」
必死に冴香は自らの性器に求めるも、一度絶頂した雄の部分は金玉にため込まれた精液をすべて排出するまで止まらない。
観衆の目の前で、敵の目の前で、そして相方である美結の前で。
室戸冴香は、言い訳のできない屈服の証を放ち続ける。
自らが敗北射精したという最高の屈辱と羞恥が性的興奮をスパイラル状に高め、出せば出すほど精液の勢いが強まってしまう。
「んぉあああああ――！　イヤぁ、イヤぁあああ！　もう精液出したくない、もうこれ以上恥の上塗りしたくないのにぃいいい――！　見られてるぅ、四大流派のみっともない射

精見られてるのが気持ちよくてっ、出してる精液どんどん濃くなってくぅうう！」

「やった……！　やったぞ！　あの室戸流をイカせた！」

押し切った黒崎夏希は自らも快感で頬を染めていたものの、室戸流を自らの男性器で射精に導いたことに確かな手ごたえを感じ、グッとガッツポーズをとる。

（そんな……室戸さんがイっちゃったなんて……！）

美結は絶望する。

これでは自分が出ていくしかない。

だが、あの冴香を射精させるほどのちんぽパワーの持ち主に自分の力が通用するのか。

自分が出たところで、冴香と同じように射精してしまうだけなのではないか――。

マイナスなイメージばかりが高速で脳を駆け巡り、勃起していた自らの二十六センチの男根が戦意を失い萎えていく。

「これで互角……あとはお前だ新人！」

「っ！」

まだ余力のある黒崎は、コーナーの美結を指さして言い放つ。

互いにあと一回射精してしまえば終わり。

しかし先に射精していた剛根の六車は、すでに射精の快楽から復活していつでも交代で



きる状態にあった。

先に射精させたことが、かえって不利になっている。

（射精、射精気持ちいいっ……！　私としたことが……己の性技とちんぽパワーに溺れ、逆に不利を招くとは……怪我をしていた焦りもありますが、ひとえに私の慢心……！　あはぁ……ちんぽ、ちんぽ気持ちいい……）

大量にドプドプと射精しながら冴香は快楽の中で後悔するが、もう遅い。

（は、早く立たないと……天音さんを引きずり出され……でも、ちんぽが、ちんぽが気持ちよくて立てないっ……）

タッグマッチ三本勝負は、あくまで「二回射精で敗北」というルールがあるのみ。

一度射精したからといってその試合で脱落するわけではなく、タッチしなければそのまま試合を続行できる。

だが、脚に力を入れて立ち上がろうとした瞬間に強い痛みが奔り、冴香は力なく崩れ落ちてしまう。

「室戸さん⁉　室戸さんっ！」

（足の痛みが悪化してるんだ！　もう立てないほど……！）

彼女は隠しているだけだったのだ。

このままでは射精後の敏感な肉棒を弄ばれ、二度目の射精をさせられてしまう。
しかも復活した六車志保がリングに入り、黒崎と共にツープラトンを仕掛けてきた。
二人の怒張したペニスに自らの男根を挟まれ、両側からギリギリとプレスされる。
最悪の状況だ。
「おい、ウソだろ!?　あの室戸流が負ける……!?」
「足を痛めているようですね。練習中の怪我でしょうか」
「いいぞ、イかせろ剛根！　室戸冴香の敗北射精を見せてくれ！」
観客も予想外の事態に大きくざわつく。
いくら相手が名門校とはいえ新人戦タッグマッチの一回戦で室戸流が負けるなど、青天の霹靂と言ってもいい。
「は、はあぁっ、ダメ、ダメ……ちんぽ、ちんぽぉ……ダメ、射精する、わけには……！　くひっ、ひい……っ！」
「どうだ、私たちのダブルちんぽプレスは！　二十八センチと二十二センチ、合計五十センチのちんぽパワーに耐えられるか！」
「あっちの新人に助けを求めてもいいんだよ、高潔なちんぽファイター〝雪月花〟さん？」
「やっ、やめ……っ！　ち、ちんぽぉ、ちんぽぉおお……っ！　気持ち、いい……っ！」

あの氷のような美少女の冴香が顔を真っ赤にして、涙目になって快感に耐えている。
それを間近で見ていた美結のペニスは、痛いくらいに勃起していた。
（室戸さんが……室戸さんがイっちゃう！　敗北射精させられちゃう……！）
クールな美少女の恥ずかしい姿に興奮し。
そしてそれ以上に、別の熱い滾り（たぎ）によって。
（ダメ！　そんなの絶対にダメっ！）
全身をめぐる血液のすべてが、海綿体に集まっていく。
その滾りのまま、コーナーを飛び出して。
リング中央で快楽に苦しめられる冴香を、昨日の時のように助け出す。
「なにっ!?」
「室戸さんから……離れてっ！」
もつれ合う三人に乱入、六車を冴香から引き剥がし。
間一髪のところで冴香を救出すると、彼女を自分の背で守る。
（天音さん……！）
「次は私が相手だっ！」
歴戦の猛者である剛根の二人に、正面から向き合って。

天音美結は、ペニスを奮い立たせる。
「い、いけません天音さん！　下がってください！」
「下がるのは室戸さんだよ、あとは私に任せて！　その怪我でこれ以上戦えるわけないよ！」
驚きと焦りに目を見開いて大声を出す冴香だが、美結は退かない。
「ダメです！　あなたでは剛根のちんぽパワーの前に為す術もなく敗北射精するのが必定……！　言うことを聞いてください、あなたの出番は剛根が消えればいくらでもありますす！」
「私の出番なんてどうでもいい！　私はただ、室戸さんがこれ以上快楽に苦しむのを見たくないの！」
「……！」
相方の窮地に、ただ指を咥えて勃起して見ているだけなどできない。
何のためにタッグを組んだのだ。
いま助けに入らず、いつ助けるのだ。
いま戦わず、いつ戦うのだ。
股間にそそり勃つ肉棒は飾りではない。

たとえどれだけ相手が強くても。
戦わなければならない時なのだ。
「だって……だって私は……！」
己の意地と誇りにかけて。
屹立した男根に魂を宿して。
ＦＴＢの戦士として。
戦うときは、今。
「――ちんぽファイターなんだからっ！」
「天音さん……」
試合前、冴香にさんざん釘を刺されていた。
自分がやらなければと変に意気込んで、肩とちんぽに力を入れないこと、と。
初心者はだいたいそれで射精するのだと。
しかし。
（ここでやらなきゃちんぽファイターじゃない！　私は絶対に逃げないっ！）
闘志をペニスに集め、二十六センチの巨根を勃起させ、美結は剛根の二人に向き合う。
相手もすでに冴香の手で一回射精している。

どちらが先に射精させるか、それがそのまま勝敗の結果につながる。
「フン、なめられたものだな。我ら鍛えられた剛根相手に、半月前のシングルマッチでデビューしたばかりの新人が挑むとは」
「私たちの合計五十センチのちんぽを見ても萎えないところは評価に値するよ」
熟練のちんぽファイターである二人は、そう言って笑い。
やがて黒髪の、つい先ほど冴香を射精させた黒崎夏希がコーナーに下がり、美結の前にはもう片方の六車志保が立ち塞がる。
「志保、適当に遊んでやれ」
ごくり、と美結は唾を呑み込む。
勝てる勝てないといった思考は置いてきた。
ただ、戦うだけ。
（天音さん……私の不手際ですが、こうなった以上はあなただけが頼りです。どうか存分に、悔いのないちんぽバトルを……）
這うようにしてコーナーに下がった冴香は立ち上がれない状態のまま、リング中央で戦う相方を見守る。
「いくよっ！」

「来い、無名ルーキー！」
全速力で突進し、相手の男根を掴まんと手を伸ばす。
だが相手もやすやすとはやらせず、防御し反撃に美結のペニスへと手を伸ばしてくる。
（ここっ！）
「やあっ！　たぁ――っ！」
「チッ……！」
六車の伸ばした手を掴みながら身を引き、美結は相手の勢いを利用してその場に投げ倒した。
すかさず六車に覆いかぶさり、二十二センチのストレートな肉槍を掴んで扱きあげる。
「これでどう！」
「く……っ！」
冴香にもさんざん文字通り扱きあげられた手コキ。
ひたすら一心に相手の男部分を握り、快楽を蓄積させていく。
オーソドックスだがそれゆえ確実に、六車のペニスは快楽に包まれていく。
（いい握りです、力加減もちょうどいい）
「金玉もいっぱいふにふにしてあげるっ！」

「くっ、あはぁ……っ！」

右手の勢いを止めず、さらに左手で彼女の玉袋を下から包み込んで優しく転がす。

精子工場を優しく応援してあげて、たくさんの精液を出してくれるように。

「ほら、六車さんの金玉がすっごく頑張って、一生懸命精子作ってるよ！」

「なっ、なめるな……！　この程度の責め……っ、はぁ……っ！」

六車は頬を染め上げ、羞恥と快楽に耐えている。

（効いています、頑張って！）

冴香は心の中で応援する。

自分が鍛え上げたとはいえ、美結の性技は確実にレベルアップしていた。

「あの剛根に食らいついてる！」

「やるなあの新人、度胸あるぜ」

すぐに射精するとばかり思っていた観客も、美結の奮闘に少しずつざわつき始めていく。

「くっ、くそぉ……！」

ズルズルと六車は手コキに耐えながら這いずって後退していくが、美結も放すまいと食らいつく。

このまま射精まで持っていけば勝ちだが――。

「レフェリー、ロープ！」
「ＯＫ！　天音、ロープブレイクだ！」
レフェリーの声がして、美結は相手の肉棒から手を離した。
性技をかけられていても、ロープを掴めば解除させることができる。
美結は気づかなかったが、六車は自らの男根を扱かれながらもロープ際へ少しずつ移動していたようだ。
しかしながら、物凄い勢いの手コキに冴香は目を見張っていた。
（ロープが近くなければ、今ので射精させていたかも……）
「あんな新人に何やってる！　志保、交代だ！」
「っ……頼んだよ夏希！」
技の解除をした地点は、相手コーナーの近くでもあった。
剛根はタッチに成功し、黒崎夏希が出てくる。
（くっ、もう少しだったのに！）
「志保をあそこまで追い込んだことは褒めてやる。だがお前はここで終わりだ！」
黒崎のペニスは美結よりわずかに大きい二十八センチ。
しかし美結の雄根は、あふれ出すほどの闘志でいつも以上に激しく怒張している。

「勝負！」
「っ……！」
今、真っ向から二つのペニスが叩きつけられた。
固さと攻撃力では冴香のそれすら上回る一撃を、まともに受ける形となる。
だが、それでも。
「まさか……この一撃に耐えた……！」
尋常でない快楽がペニスを駆け上がるが、美結は全神経をペニスに集中して踏みとどまる。
「負けられないって言ったでしょ！　私は絶対に射精しないんだから！」
「ふざけろ！　ならこれを食らって無様にイけ！」
そう言った直後、黒崎は素早く斜め後ろへ飛び退き。
一瞬判断の遅れた美結に、怒張したペニスをいきり立たせて突撃する。
斜めの位置からジグザグに踏み込み、瞬時に美結の男根を己の肉剣で左右から斬り裂き後方へ抜ける――。
「必殺！　サンダーステップちんぽ！」
「んあぁあああっ！　あはぁああ――！」

（天音さん！）
一瞬で二度のちんぽ斬撃。
単純に二回の攻撃を受けるよりも、受ける快楽の度合いは段違いだ。
たまらず美結はその場に膝をつき、必死に己のペニスを握りしめて射精を抑え込もうとする。
（ち、ちんぽ、ちんぽぉおお……！　痺れる、ちんぽが痺れるぅ……！）
まるで雷撃を食らったかのような一瞬二撃。
ビリビリと痺れるペニスが快楽の後を引き、美結は立ち上がれない。
（天音さん！）
「これで終わりだぁああ！」
そこに、再び斜め前方の位置をとった黒崎が。
再びジグザグに踏み込みながら、射精直前の美結に向かって突撃する。
「これで決まるか！」
「よく頑張った方だが、さすがに新人が剛根に勝てるわけないか」
勝負はついたと、観客たちも全員が思っていた。
「サンダーステップちんぽぉおお！」

（今だっ……今しかないっ！）

その瞬間。

黒崎が美結のペニスに、最後の一撃を見舞う瞬間。

美結の姿は、消えていた。

「なっ……！」

稲妻の軌道で踏み込んだ黒崎は、あらぬ位置で立ち止まり周囲を見回す。

しかしリングのどこにも、瀕死だった美結の姿はない。

（場外に転落した!?　いやリング中央、そんなはずは……）

「こっちだよ！」

声は、上から聞こえ。

次の瞬間、黒崎夏希は。

空から落ちてきた美結に抱き着かれ、己のペニスには未曽有（みぞう）の快楽が迸っていた。

「んぉおあああああ――っ！　ちっ、ちんぽ、ちんぽぉおおお！　バカな、バカな、なんでぇえええ!?」

（今のは……室戸流『月』の七手『落月（らくげつ）』……！）

冴香は仰天した。

まさか、自分の持つ室戸流の技を美結が使うなど。

確かにあの技は特訓時に一度だけ披露し、美結を大量射精させたことがある。

（それを……見よう見真似で再現したというのですか）

もちろん見真似のそれは、本来の威力と快感の三分の一も出せていない。

いま美結が放った模倣の『落月』では落下による太ももものこすり上げだけでは射精に至らず、そのままつなげた素股でも絶頂させられていない。

だが驚くべきは、一度食らった性技を自分で再現するというそのセンス、そしてその学習能力。

相手の必殺技を前に絶体絶命の危機から、跳び上がって攻撃を避け、さらにそこから反撃する豪胆さ。

（なんという成長速度……！　なんというちんぽバトルセンス……この短期間でここまで……）

「これでっ……この素股でイっちゃえっ！」

「くっ、くはぁあ、ちんぽぉおお……っ！」

美結は最後の勝負に出た。

全身全霊の太ももコキで、相手のペニスを締め上げる。

（さっきのちんぽのぶつけ合い、この人は隠していたみたいだけど相当感じていた……！）

黒崎は冴香とも激しいペニスの押しつけあいをしていた。

冴香はそれにより快楽負けして射精してしまったが、その際に少なからず相手の男根にも自らのもので快楽を与えていた。

言ってみれば冴香の残した置き土産。

それはしっかりと、黒崎の肉棒に蓄積されていたのだ。

冴香の最後の攻撃を無駄にしないためにも、ここで決めるしかない。

（私は室戸さんと戦ってる……！　二人で戦ってるんだ！）

抱き着かれてペニスを扱かれる黒崎は、顔を耳まで真っ赤に染めて快楽に耐えている。

剛根の新人エースである彼女が、全くの無名のちんぽファイターにあわや強制射精させられようとしている。

観客たちは座ったまま両足で床を激しく踏み鳴らし、大体育館は興奮の坩堝（るつぼ）と化す。

「な、何者なんだあの新人は！」

「一年とはいえ、剛根をイかせそうだ！」

「頑張れ！　頑張れ天音！」

「イかせろ！　イかせろ――！」

一回戦から大波乱の連続。
その最終局面となる攻防は、いま会場に入ってきた者がいたら間違いなく決勝戦だと誤解するほどの熱気に満ち溢れている。
「イっちゃえ、イっちゃえっ、イっちゃえええええっ！」
「おおお、おほぉおおお、ちんぽぉおおお！　ちんぽがぁあああああっ！」
「夏希、今助けに……うっ！」
陥落寸前の黒崎を助けようと、六車がカットに入る。
しかし、それは何者かによって阻まれた。
「む、室戸冴香……！」
「天音さんがあれだけ頑張っているんです。私が何もしないわけには……いかないでしょう？」
足の痛みを必死で耐え、冴香が六車にしがみついてカットを妨害していた。
助ける者のいなくなったリング上では、ついに最後の時が訪れる。
「これで……イっちゃええ――っ！」
「ちんぽ、ちんぽ、ちんぽイクぅうううう！　精液、敗北精液出るうううっ！　私が、剛根一年エースの私がっ、こんな奴にぃいいい――！」



目に涙を浮かべ、黒崎夏希は無念の断末魔を上げ。

その、直後。

「いやぁあああああ――！　ちんぽぉおおおおおおおお！　ちんぽイクぅうううう――っ！　この私が、このわたしがぁ、力のちんぽがぁああ！　力のちんぽ敗北射精しちゃったのぉおおおお――！　気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいよぉおおお！　一回戦で敗北精液びゅーびゅーするの情けなくて気持ちいいのぉおお！　あはぁああちんぽぉおお、ちんぽがぁあああ！　室戸流ならともかくっ、こんなっ、こんな無名のちんぽファイターにぃいい――！」

白濁液が、美結の太ももの間から迸り。

太いレーザー砲のごとく、白濁の奔流が噴き上がった。

「や……やった！　やったぁ！　勝ったぁ――っ！」

勝敗は誰が見ても明らかだった。

強豪校、剛根の新人ナンバーワン黒崎夏希が、全くの無名のちんぽファイターに強制射精させられ。

特濃で大量の精液を噴き上げながらマットに沈む黒崎に、美結は跳び上がって全身で喜びを表現する。

「天音さん……本当に強くなりました……ここまでやれるとは……」
「そんな……夏希が射精するなんて……これで私たち剛根は、一回戦で敗退っ……」
コーナーで感極まる室戸冴香と、落胆に涙し崩れ落ちる六車志保。
これで、優勝候補であった超強豪校の剛根学院は早々にトーナメントから消えた。
「うぉおお、やるじゃねえか聖珠の新人！」
「剛根から一本取るとは、大したちんぽファイターですね」
「ほらやっぱりあの子はなんか違うなと最初から思ってたんだよ俺は！　何千人ものちんぽファイターを見てきた俺の目に狂いはなかっただろ！」
「こりゃ夏の大会は荒れるぜ！　とんでもない奴が現れたな！」
観客たちも大興奮し、四方から美結への賞賛を投げかける。
美結は自軍のコーナーに駆け寄り、座り込んでいる相棒に跳びついて叫ぶ。
「やった、やったよぉ室戸さぁあん！　室戸さんのおかげだよ――！」
泣きながら冴香に抱き着き、和服をアレンジした彼女のリングコスチュームを涙で濡らす美結。
緊張と戦意が抜け、感極まって涙腺が決壊してしまったのだ。
「室戸さんが鍛えてくれたから、室戸さんが私と組んでくれたから、室戸さんが一緒に戦

ってくれたから、私勝てたんだよ！」

「……本当に素晴らしい戦いぶりでした。まさかあなたが剛根相手に勝ちをもぎ取るとは……失礼ながらまったく思っていませんでした」

「室戸さんが一回射精させてくれたからだよ！　あと室戸さんが黒崎さんとのちんぽ擦り合いでイっちゃったときに、あの子のちんぽに気持ちいいの残してくれてたから！　アレなかったら絶対負けてたもん！」

冴香が足の怪我を押して室戸流の性技を披露し一回射精のアドバンテージを稼いだからこそ。

そして彼女が敗北する直前に、ペニスの鍔迫り合いで黒崎の男根に快楽を蓄積させておいてくれたからこそ。

美結は体力を総動員して、残り一回の射精を導けたのだ。

冴香の残したものがあったからこその、ギリギリでの勝利だった。

「私たち二人で掴んだ勝利だよ！　ねっ？」

「……そうですね。そういうことにしておきましょう」

美結の言葉に、冴香は穏やかな声で頷いて。

彼女の涙を、着物コスチュームの袖で拭ってやった。

二人してリングから降りると、そこでは救急セットを用意して待機していた真奈と紫がいて。

冴香の痛めた右足を応急処置しつつ、部長の紫は残念そうに言う。

「足の怪我が深刻ねぇ。これ以上試合したら悪化しちゃうわぁ」

「冴香っち、二回戦は棄権した方がいいよ。無理すると後々よくないって」

真奈もそれに乗る。

一回戦はなんとか切り抜けたが、このまま二回も三回も試合をするには困難を極める状態だ。

「そうですね……お二方の言う通りです。ここで棄権しましょう」

冴香はあっさりと頷いた。

プロのちんぽファイターとして、引き際は心得ている。

ここで無理をして悪化してしまえば、取り返しのつかない事態になってしまう可能性もありえる。

引き返せるうちに引き返した方が賢明だ。

「……優勝候補の剛根相手に勝った天音さんの成長と活躍を見られただけで、優勝以上の価値がありますし」

「そ、そうかな……」

冴香の賞賛に、美結は照れくささで赤面した。

「運営さんに棄権しますって伝えてくるわぁ。三人は先に帰り支度しておいてねぇ」

ナメクジのような口調と動きで、ズルズルと部長の紫は群衆の中に姿を消した。

優勝候補だった強豪、剛根学院。

四大流派を擁す新鋭、聖珠学園。

大会注目の二校が一回戦でどちらも消え、本大会は観客たちからすれば消化不良といった顛末であっただろう。

しかし美結、そして冴香は一回戦の結果に十分な手ごたえを感じ、一切の悔いは残らず。

ＦＴＢ新人戦タッグマッチは、彼女たちにとって大成功の結果に終わった。

先輩二人と別れ、美結に肩を借りながら、冴香は大体育館を後にして帰路につく。

「足、まだ痛む？」

「いえ、激しい動きをしなければそうでもありません」

右足を若干引きずっているが、試合の時のように全く歩けないというわけではないようだった。

それでも少しでも負担を軽くしようと肩を貸して歩く美結を、冴香はふと「天音さん」と言って止める。

少女の腕からスルリと抜け、向かい合って。

「正直、私は驚いています。あれだけ早漏で我慢弱かったあなたが、戦えない私の代わりに剛根学院を相手に勝利を得た……あなたの成長速度は目を見張るばかりです。指導した私自身さえ信じられないほど」

「それは、室戸さんが本気になって教えてくれたからだよ」

「いえ、どれだけ外部からサポートしても、最後に物を言うのは本人のちんぽファイターとしての力、そして才能なのです」

そう言って、冴香は。

今までほとんど変えなかった無表情の顔を、ふっと緩めて。

「天音さん……あなたはもう、立派なちんぽファイターです」

「あ……っ」

その変化に、美結は雷が陰茎に直撃したかのような衝撃と感動を覚えた。

なにせ。

（室戸さんが……初めて笑った……！）

今まで無表情だった氷の美少女が、初めて微笑んだのだ。
それは雪解けの春のように、柔らかくあたたかな微笑。
それを見て。
「……む、室戸さん……笑顔すっごくかわいい」
「は……何を」
思わず口をついて出てきた美結の言葉に、冴香はきょとんとして。
口元に自らの手をもっていき、そこで自分自身の口角が上がっていることに気づいたようで。
「あ……」
そしてそこで、自分の変化に驚いて目を丸くしていた。
(私が……笑って……)
もう何年、このような顔をしていなかっただろう。
いつからか感情は凍てつき、決して笑うことなどないと思っていたのに。
笑い方など忘れていたと思っていたのに。
この少女の成長が、勝利が、自分の心を溶かしたかのように。
「わ、私の笑顔など見ても面白くないでしょう」

「ううん、すっごくかわいい！　室戸さん、笑ってるのが一番だよ！」
真っ赤になって、視線を逸らす冴香。
それからしばし間をあけて、頬の熱を冷ますと冴香は再び美結の方を向いて切り出した。
「……天音さん、あなたはもしかすると、私をも超えるちんぽファイターになる可能性を秘めているかもしれません」
「えっ……」
「潜在能力だけで言うならば、今の私を遥かに凌駕している。それが今回の試合で明らかになったと見ていいでしょう」
彼女はまだまだ成長中だが。
まだまだ自分との実力差は開いているが。
それでも、ちんぽファイターとしての素質はある。
今まで自分が見てきた誰よりも。
（この人なら、タッグを組んでも……いや……）
自分と共に戦える、器がある。
そして、彼女と共に戦いたいと願う自分がいる。
（私が、タッグを組んでみたいんです）

そう思ったら。
自然とまた笑みが零れ、冴香はスッと右手を差し出していた。
「天音さん。よければ夏の大会も、一緒に戦いませんか」
共に肩と陰茎を並べて、戦う相棒。
もしかしたら、自分もまた。
それが、欲しかったのかも知れない。
「初めて私の方から、タッグを組みたいと思えた……私はこの直感と、あなたに賭けてみたいのです」
「む、室戸さんっ……！」
「イヤなら無理強いはしませんけれど、ね」
穏やかに笑い、そう言う冴香に。
美結は感極まって、目に涙を浮かべて。
次の瞬間、大声で彼女に抱き着いていた。
「室戸さぁあああ――ん！　好きぃいいいい――！」
「ちょっ……抱き着いてこないでください！」
「絶対優勝しよう！　夏は二人で絶対優勝しようっ！」

「わ、分かりましたからいったん離れてください！　周りの人も見てますから！」
困惑してなんとかパートナーを引っぺがそうとする冴香だが、美結は止まらない。
「ねえ、これから冴香って呼んでいい？　私のコトも美結って呼んでいいから！　もうタッグパートナーだからいいでしょ、ねっ、ねっ！」
「分かりました、分かりましたから！」
天音美結と、室戸冴香。
無限の可能性を秘めて成長する原石と、磨き上げられた天才が。
ここに、コンビを組んで。
これから出会う幾多の強敵と、熾烈なタッグマッチに挑む。
ＦＴＢ――ふたなりちんぽバトルに懸ける少女たちの、刹那の瞬きのごとき青春が、今始まろうとしていた。

「我ら剛根が、よりによって一回戦で敗退だと……」
ところ変わって東京某所、国立剛根学院の地下ＦＴＢ闘技場。
ＦＴＢの名門である剛根は、広大な施設と設備を有しこの闘技場もその一つ。
そこに新入部員四十一人が集まり、二人の上級生が彼女らの前に立っていた。

片方は金髪ロングの美しい気品ある風格の少女、もう片方はベリーショートで大柄の、男と見まごうほど屈強なちんぽファイター。

重苦しい空気に誰も声を出せず、その沈黙を破るように大柄な方の上級生が怒りに震えた声を発す。

「しかも室戸流ならともかく、デビューしたばかりの新人にイかせられて敗北など……！」

一年生の最前列には、数時間前まで戦い敗北した一年生タッグ、六車志保と黒崎夏希。

彼女らに向かい、上級生の少女は静かに叱咤する。

「我ら二年と三年がどれだけの期待を懸けて、お前たちを送り出したと思っている。このような無様な敗北、剛根学院としてあってはならないことだ」

「申し訳ありません、剛羅（ごうら）副部長……すべて私が、あのルーキー……天音美結の実力を見誤っていたがゆえ……」

「こ、これは違うんです！　あいつが、あの無名の新人があんなにやるだなんて……こんなこと予想できるわけなかったんです！」

「言い訳など剛根には無用」

黒崎はまだ自分に非がある旨の発言をしていたが、弁明に走った六車に剛羅と呼ばれた先輩ふたなりちんぽファイターは静かに怒りを滾らせる。

「特にお前だ六車。黒崎は室戸流を一度イかせたからいいものの、お前は何も役に立たなかったな」

「お、お許しください剛羅副部長！　もう一度チャンスをっ、次こそあの天音美結と室戸冴香を、私のちんぽで……！」

「貴様はいたずらに射精して剛根の名を貶めた。その罰は受けてもらうぞ」

「ひ……！」

言うが早いか、剛羅と呼ばれた大柄な副部長は下を脱ぐ。

そこには人間のものとも思えない、むしろ性器と思えない巨大すぎるペニスがそびえ勃っていて。

その凶悪さに射すくめられ、尻もちをつく六車の細い腰を持ち上げて――。

「あ……あがぁあああ！」

その超巨根を、一息に彼女の膣奥まで挿入する。

剛根学院の誇る、ちんぽ処刑。

あまりにも巨大な肉棒に貫かれ、六車志保の全身をたとえようのない快楽が駆け巡り。

「んはぁあああ――！　すごいっ、すごいっ、しゅごいぃいいいいい！　剛羅副部長のちんぽおっきすぎてイクっ、ちんぽイっくぅうう――！」

六車志保は駅弁の体勢のまま、二十二センチの男根からすさまじい勢いの白濁液を噴射する。

その勢いは明らかに人間の出せるものではなく、一生分の精液を今このときにすべて出しているかのよう。

「人生最後にして最高の快楽と共に、ちんぽファイターとしての死を迎えるがいい」

「きぼぢぃいい――！　ちんぽきぼぢいい――！　たすけてっ、だれか助けてぇえええ！　気持ちよすぎて二度と射精できなくなるっ、ちんぽファイターじゃなくなっちゃうぅうう！」

巨大ペニスを突き刺したまま、剛羅はこともなげに言ってのけ。

六車は必死に周囲の一年生へ、そして相方の少女へと助けを求めていた。

しかし、数時間前まで戦っていた仲間の悲惨な射精光景を目の当たりにしても、救いを求める声が耳に突き刺さっても、一年生たちが、黒崎夏希が彼女を助けに入ることは許されない。

それはこの絶対的な縦社会である剛根ＦＴＢ部において、重大な背信行為に直結するのだ。

ただ黙って、彼女の散り様を見届けることしか許されない。

「無理無理ムリむりぃいいいい――！　死ぬぅうう、しぬううう、死んじゃううう！　全身ちんぽから精液出し過ぎて死んじゃうぅうううう――！」

「死にはしない。だがお前がちんぽファイターとして再起することはない。剛根の看板に泥と精液を塗るという大罪を犯した貴様にはな」

黒崎と六車を除いた三十九人の新人ちんぽファイターたちは、目の前で起きた凄惨な快楽処刑に声ひとつ上げられなかった。

無様な敗北を喫してしまえば、このようにちんぽファイター生命を潰され、普通の女の子として生きていくしかなくなってしまう。

やがて六車のペニスから精液が出なくなると、剛羅は彼女の膣から巨大肉棒を引き抜くと精液まみれの少女の体をポイと捨ててから後輩たちに告げる。

「ちんぽファイターとして生き残りたくば練習に励め。他校の金玉精子タンクを残らず干上がらせろ。我が剛根はそうして名を馳せてきた」

それから、今まさにちんぽファイターとしての命の炎が消えゆきつつある六車志保の側に佇む一人の少女に声をかける。

「黒崎。お前も相方のように、ここでちんぽファイターとしての死を選ぶか？」

「いえ……」

新人のエースは、目を引き絞って答えた。
「必ず奴らに、我ら剛根が受けた屈辱を倍返しにしてご覧にいれます」
「フ……二度の敗北射精は許さんぞ。次にあのちんぽ処刑台にかかるのはお前だということを、よく金玉に銘じておけ」
「はっ……」
踵を返して去っていく副部長、そしてもう一人の金髪ふたなり少女。
六車志保は命に別状はないものの、人知を超えた快楽処刑を受けてテクノブレイクしてしまい、自らの出した精液の海の中でちんぽファイターとしての死を迎えてしまう。
（哀れな……だが剛根（ここ）ではこれが掟……志保、短い間だったがここまでだ）
タッグパートナーの死を悲しんでいる余裕などない。
今よりもさらにペニスを鍛え上げ、夏の大会では自分を負かした彼女らに雪辱を果たさなければならない。
（室戸冴香……そして天音美結……！　夏こそは覚悟しておけ、今回よりもっと多くの観客の前で、お前たちの敗北射精を、そして公開陵辱による醜態を晒させてやる！　一生分の精液を金玉に溜めて待っていろ！）
恐怖と絶望が支配する剛根地下闘技場で、黒崎夏希は復讐の炎を静かに燃やしていた。

第６話　都大会迫って

（雨が降らないと、朝から暑いですね）

新人戦タッグマッチから一週間経った六月下旬。

昨夜までの雨によりまだ水たまりがところどころに残る道を軽快に歩きながら、室戸冴香は聖珠学園への道を一人で歩いていた。

（もう足は完全に治りましたね。今日からはまた部に顔を出しましょうか）

あの時の怪我も快癒し、そんな風に考えていると。

「おっはよー、冴香！」

後ろから肩を叩かれ、振り向くとそこには一人の少女。

「み、美結さん」

「えへへー」

背中まであるロングの黒髪、やや幼さの残る顔立ちとそれに反する肉感的な体躯を持つ少女が。

自分の初めてのタッグパートナーが。

天音美結が、笑顔を向けていた。
「足の具合どう？　真奈ちゃん先輩も夕月部長も心配してるよ」
「もう完治しました。今日からはまた練習できます」
「そっか、よかったぁ！　冴香がいないと寂しいもん」
「……美結さんはなんだかいつも以上に元気ですね」
この少女が元気で朗らかなのはいつものことだが、今日はことさらにその笑顔がまぶしい。
自分の足の具合を聞いて機嫌がよくなったのかとも思ったが、第一声の時点で妙に浮かれている。
「えへへ、分かる？　分かっちゃうー？　いやーもう、舞い上がっちゃってるね私！」
「はぁ……何かいいことでもありましたか」
ご機嫌すぎて軽く鬱陶しいくらいなのだが、冴香は水を向けてやる。
そうしたら美結はますます得意げになって「ほら、見てよ！」と言って定期入れの中から一枚のカードを冴香に見せてきた。
黄色い、免許証のようなカードを。
それを――その色を見て、冴香もわずかばかりの驚きに目を丸くした。

「……ランク上がったんですか」
「えっへへー！　ちんぽファイターランク２！　白帯卒業だよ！」
美結が見せつけてきたのは、彼女のＦＴＢ選手カード。
およそ二か月前に選手登録したばかりの美結は、ランク１から２へと昇格していたらしい。
「今朝うちのポストに入ってたんだよ！　ＦＴＢ協会から！」
「……二か月でランク２とは珍しいですね。剛根に勝ったからでしょうか」
先日の新人戦タッグマッチは、一回戦で勝利こそしたものの室戸冴香の足の怪我が悪化し二回戦を放棄。
成績としては一回戦で消えたことになったが、内容はそれこそ事実上の決勝戦ともいうべきものだった。
優勝候補の剛根学院相手に、互角以上に立ち回って勝利を呼び込んだ美結。
彼女のその戦いぶりはＦＴＢ協会に大きく評価され、天音美結はちんぽファイターランク２に昇格したようだ。
「私のちんぽファイターとしての才能が認められたんだよね！　どう？　どう？　すごい？」

白から黄色に変わった新しい選手カードを、これ以上ないほど得意げに通学路で見せびらかす美結。

それを見て、冴香はしばし呆けていたが。

わざと大げさに肩をすくめて、自分も定期入れから銀色に輝くカードを抜いて意地悪く言ってやる。

「黄ばんだカードで何を誇るのやら。この色が見えますか」

「うっ……ランク7の銀色カード……」

その威光に美結は思わず後ずさる。

四大流派の室戸冴香の実力は、まだまだ美結との間に大きな開きがあることを、互いのカードの色が露骨に物語っていた。

「ほらほら、誰に向かってドヤ顔してるんです？　ランク2でそんな態度をとられても公開オナニー射精並みに恥ずかしいだけですよ」

「う、ううう……」

冴香は美貌に意地悪い笑みを浮かべて銀色カードをひけらかしていたが、やがてカードをしまい込み、たじろぐ美結に優しく言う。

「冗談ですよ。……おめでとうございます、美結さん。強くなりましたね」

「あ……っ」

意地の悪い笑みが消え、春の雪解けのような穏やかな微笑を湛え。

タッグパートナーの成長を、柔らかく祝福する冴香。

「え、えへへ……ありがと冴香！」

そんな彼女に美結もまた笑顔を取り戻し、二人は並んで通学路を歩く。

何も知らないままＦＴＢの世界に飛び込んできた美結に、冴香は良い印象を抱かず。

美結もまた冴香の冷たい態度に威圧され、なかなか距離を縮められないでいた。

しかし新人戦タッグマッチで確かになった結束は、互いを下の名前で呼び合い、時には意地の悪いジョークを飛ばすほどにまで固く強く結びついていた。

冴香は美結を認め、美結は冴香を敬愛し。

無名の学園の弱小ＦＴＢ部に、最強のタッグが結成された。

「私もこの勢いで、すぐ冴香に追いついちゃうんだから！」

「いいですけどランク４以降は昇段試験ありますよ。筆記と実技と、さらに６以降は論文と面接もあります。ちなみにランク６の合格率は毎年三パーセント以下ですので」

「うえぇ……!?　そんなに厳しいの？」

「筆記と言えばそろそろ期末テストですが大丈夫ですか？　夏休みに補習で大会に出られ

ないなんてのは勘弁ですよ」

「やめて！　考えたくない！　まだ何も手をつけてないよ！　昨日は勉強しようと思ってペンを握ったと思ってたら握ってたのはちんぽだったよ！」

ふたなり少女たちの一日は、こうして今日も始まりを迎え。

季節は夏へと移り変わり。

大舞台である夏のＦＴＢ大会は、すぐそこまで迫ってきていた。

「えっへへへ……」

「美結ちん、ずーっとカード見てニヤニヤしてるね」

放課後。

期末試験のためあと数日で活動禁止になるが、ＦＴＢ部は今日も部室に集う。

が、美結は新しくなった選手カードを眺めてニヤニヤして勃起しているだけで、練習に身が入っていない。

「しょうがないわよぅ。私もランク2に上がった時はそんな感じだったしぃ。ちんぽファイターにとってカードの色が変わるのは、それこそ格が上がったコトの証明だからねぇ」

部長の紫は相変わらずナメクジを思わせるネトネトした喋り方で、仕方ないというよう

に言って笑う。

「浮かれてばかりもいられませんよ。八月頭の夏季ＦＴＢ都大会は東京中から猛者が集う一大イベントです。新人戦とは異なり学年や体重で分けられない無差別級、試合形式は三本先取の五本勝負。長期戦も予想されます。体力と精力、そしてちんぽパワーのすべてを鍛え上げて挑まないと、美結さんの目標とする優勝は果たせませんよ」

ニヤニヤが止まらない美結を、今日から復帰した冴香が戒めた。

「大丈夫だよ！　冴香と一緒なら絶対いけるって！　新人戦だって、足の怪我さえなければ実質優勝みたいなもんだし！　あの剛根だって倒しちゃったもん！」

新人戦一回戦にして事実上の決勝戦であった対剛根学院戦を制した美結は、すっかり調子づいて得意げになっている。

「……その剛根も、きっと私たちにリベンジする気ビンビン、ちんぽもビンビンで今頃厳しい練習を積んでいるところでしょう。私はもちろん、意外な伏兵であった美結さんへの対策もおそらく徹底的に練られていますよ。映像記録もありますし」

「そ、そうだよね、普通に考えたら……」

「私たちだけうかうかしていると二人そろって敗北射精ですからね。私だって射精するときは射精するんです、ことわざにもあるでしょう、油断大敵精液びゅーびゅーですよ」

無敵に思える冴香とて、絶頂するときはしてしまう。
足の怪我というマイナス要素こそあれ、冴香も人間。快楽攻撃をされれば射精してしまうのは当たり前だ。
タッグマッチは自分のことだけ考えていればいいものでもない。
冴香が射精してしまいそうな時はカットなりタッチなりで助けてあげて、万が一彼女が射精してしまった場合は美結が一人で戦わなければならない。
「剛根に勝てたのはもちろん美結さんの実力ですが、相手側も無名の新人相手にいくらか油断していた、というのも事実です。ですが新人戦で剛根を倒した美結さんに、もはや剛根に限らずどこの学園も油断はしてこないでしょう。気とちんぽとまんこを引き締めて練習していきますよ」
「うん！」
カードをしまってスカートとショーツを脱いで畳み、ペニスをむき出しにしてリングに上がる美結。
そんな二人の一年生を見ながら。
「冴香っち、なんだか態度が柔らかくなったよねー」
「そうねぇ。新人戦で美結ちゃんが頑張っていたのが本当に嬉しかったのねぇ。今の方が

ずっと素敵だと思うわぁ」

真奈と紫は、冴香の様子に顔を綻ばす。

冷たく他者を寄せ付けなかった冴香の変化は、上級生たちにも伝わっている。

「な、なにをバカな……私はいつも通りですよ」

「そんなコト言ってー、美結ちんのこと下の名前で呼んでるくせにー」

「いいことねぇ、仲がいいって素晴らしいわぁ」

誤魔化そうとする冴香だが逆効果のようで、上級生たちはますますニマニマしている。

「ほ、ほら、私のコトなどどうでもいいでしょう、練習ですよ練習！」

「……ふふっ」

手をパンパンと叩いて無理やり話を終わらせようとする冴香に、リングの上で美結も破顔した。

あの新人戦タッグマッチで協力して強豪を退け、美結を一人前のちんぽファイターと認めてから。

室戸冴香はかたくなだった心を少しだけ解きほぐし、美結や三年生の先輩にも柔らかく接するようになった。

本人は否定しているが、それは彼女に訪れた確かな変化。

（よーし、頑張るぞ！　夏は絶対、冴香と一緒に優勝するんだから！）

美結は一段とやる気を増し、二十六センチの肉棒が限界にまで勃起する。

「おっ、おほぉおおお――！　おほぅ、おほおおうっ、らめぇ、らめ、ちんぽぉおおおお――！　ちんぽそんなにしごいちゃらめぇ、あはぁああちんぽちんぽちんぽぉおおおおおおお――！　ちんぽから雄ミルク大量発射中ぅううう――！」

かと思えば冴香とのスパーリングが始まった途端に美結は彼女に捕まり、後ろからの激しい手コキで十秒持たずに大量の精液を噴き散らかしていた。

「まったく相変わらずの我慢弱さですね、そんなんで優勝を狙うつもりですか。ほらランク2に上がったんでしょう、気合で精液止めてください」

「だって、らってぇえええ！　冴香の手ぇ気持ちよすぎ、冴香のお手てまんこ気持ちよすぎ事件なのぉおおおお――！　こんなの耐えられない、精液止まんないぃいいい！　炎上する二階建て木造住宅くらい余裕で消火射精できるほど精液出してるのぉおおおおお――！」

美結の肉棒をひたすら扱いて中の精液を排出する作業を続けながら、冴香は考える。

確かに彼女は強くなった。

ものの一か月半で、かつて自分が面倒を見た門下生の誰よりも速いペースで成長してい

る。

ちんぽファイターとしての強さはこうして簡単に射精してしまうほどにまだまだだが、ここぞというときの爆発力は信じがたいものすらある。

（となると、次の課題は……）

「おほぉおおお――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおおおおお――！　ちんぽから金玉ミルク出てるのぉ、白くて濃ゆくてぶりっぶりの新鮮ミルク産地直送で無料提供してるのぉおおおおお――！　あはぁああちんぽ、ちんぽぉおおおお！　ちんぽ汁、金玉ミルク、男の子エキスぅうう！　栄養満点の特濃ザーメン今日もまき散らして気持ちいいよぉおおおお――！」

たっぷり三十分以上かけて冴香は美結の精液をすべて抜くと、ぐったりと白濁の海に倒れ込んだ少女は全身を痙攣させて荒い息を吐く。

「ああ……あへぇえ……ちんぽ、ちんぽぉおお……やっと止めてくれたのぉお……もう精液出ない、金玉からっぽになっちゃったよぉ……」

そんな彼女に、冴香は相変わらずの平静な態度のまま口を開いた。

「時に美結さん、一つ確かめておきたいことがあるのですが」

「ふぇ……？　精液ならもう出し切ってちんぽ萎えちゃったよぉ……大人気特濃快感ちん

ぽミルクの入荷は明日の朝まで待ってぇ……」

自分たちが夏のタッグマッチで優勝するため、冴香は布石を打つ。

「あなた、まだ童貞でしたよね？」

その質問に、美結は大量射精の余韻に浸りながら「え……？」とだけ返す。

以前、冴香は美結の処女を奪った。

万が一新人戦シングルマッチで敗北してしまい、初対面の選手に公開陵辱されてもいいようにあらかじめ彼女に処女を喪失しておくように勧め、その結果美結は冴香を指名してきたのだ。

結局いまだに相手ちんぽファイターに挿入されるといった事態は起こっていないが、あの時彼女が捨てたのは処女のみ。

童貞はまだ捨てていないはずだ。

「新人戦の時は最悪処女だけ捨てておけば致命的にはならないと判断したのですが、状況が変わりました。夏は相手も強豪、手コキや素股などでは落とし切れず、ちんぽを相手に挿入する必要もあるでしょう」

「そ、そうかな……」

「それだけでしたら美結さん自身の判断で挿入しないという選択肢もあるのですが、なに

ぶんにもタッグマッチです。戦術上どうしても美結さんのちんぽが必要なこともあります」

例を挙げましょうか、と言って冴香は体重を感じさせない動きでリングから下りると、部室の隅にあったホワイトボードを持ってきて図を描いていく。

師範代としてこういう図解もさんざんやってきたのだろうか、冴香は非常に慣れた手つきで分かりやすい描画をしている。

「これを見てください。すでに相手タッグは片方が射精して動けず、我々にとって絶好のチャンスです。ここで残った相手にツープラトン攻撃でまんことケツ穴に二人でダブルちんぽ挿入すれば勝てそうですね？」

「う、うん」

美結も起き上がって、その図をまじまじと見つめる。

冴香はさらに説明した。

「ですがもしここで美結さんが童貞のせいでためらってしまうと、こっちのダウンしていた方が復活してきて……こうなって……さらにこう……最後はこのように反撃を受けてダブル大量敗北射精で負けてしまう、といった事態もありえます。ＦＴＢの試合は一瞬の判断ミスで即ちんぽイキが待っています。タッグマッチとなればなおさら、互いが互いのために動けなければ射精してしまうのみです。一寸先は真っ白ザーメンですよ」

言われてみればその通りだ。
タッグマッチに臨む以上、自分だって童貞は捨てたい。
下手に童貞を捨てきれず試合に臨み、冴香の指示に応えられず負けてしまうことがあってはならない。
自分一人が公開陵辱されるならいいが、冴香も巻き込んでしまうことは絶対に避けたい。
「そうだね……私童貞捨てるよ」
美結は決意すると、冴香も安心したように言う。
「それが賢明です。そしたらできれば今週中には相手を見つけて――」
「うん、冴香で童貞捨てたいな」
「……」
ある程度は予測できていた。
だがこうもあっさりと、美結がまた自分を指名するとは思っておらず、さすがに冴香は少しばかり黙してしまい。
「……いいんですか、また私で」
ようやく絞り出せた言葉が、これだった。
美結はこくんと頷く。

確かに童貞は捨てるべきだ。

ちんぽファイターとしても、男としても、童貞は捨てておきたい。

だが誰でもいいわけではなく、やはり好きな女の子に挿れて卒業したいのだ。

男の子としての、一生に一度の大切な儀式なのだから。

「冴香、処女もらってくれたでしょ？　だから童貞も冴香にあげたいの。冴香に処女あげて童貞は別の子にあげたら、浮気になっちゃうし」

「いや別に恋人でもありませんし、私は美結さんが誰で童貞捨てようが……」

「ダメ！　冴香じゃないとダメなの！　タッグパートナーなんだから！　冴香のまんこにちんぽぶちこんで膣内で金玉の精液全部出すこと考えたら、ほらもう勃起して精液フルチャージされちゃった！　どう責任とってくれるのこのビンビンちんぽ！」

先ほどまですべての精液を出し尽くしたはずの美結のペニスは、二十六センチの大きさを取り戻してガチガチに奮い勃っていた。

それを見て冴香は額に手を当て、「はあ……」とため息をつき。

「いいでしょう、そんなに言うならこれからホテルで一発やりますよ」

「わーい、よろしくぅ！」

相棒の了解を得た美結は、肉竿と金玉を揺らしてその場で跳びはねた。

部活を早めに切り上げて、美結と冴香は学園近くのラブホテルに入る。

ふたなり専門学園の近くのラブホテルはほとんどがＦＴＢ協会と提携しているため、当然のごとく冴香の提示した銀色選手カードの恩恵で料金は無料、愛想の悪い受付スタッフも態度を急変させて一番高い部屋をあてがってくれた。

そんなこんなで、美結にとって二回目のホテル。

前回は処女を捨てたが、今回は童貞を捨てにやってきた。

（私が童貞卒業なんて……考えたこともなかったなあ）

ふたなり学園に編入したこととＦＴＢの舞台で戦ってきたことでペニスへのコンプレックスは消えゆきつつあったが、それまでは相当に強い劣等感を抱いて美結は生きてきた。

そしてその劣等感は、多感な少女にとってありえもしない妄想を生み出すこともよくあった。

（かっこいい男の人が現れて、俺はお前に俺よりデカいちんぽが生えてたって気にしないよとか言って優しく抱いてくれて……そして二人で仲良く射精、なんて……）

そんな痛々しい妄想も幾度かしていたため、処女を奪われることを全く考えていなかったわけではなかった。現実には冴香の三十二センチの巨根で奪われた挙句、両性器に同時に襲い掛かる尋常でない快楽で訳の分からない言葉を口走りながら大量に精液を噴射して

気絶してしまうというロマンスもへったくれもない処女喪失であったが。

しかしながら、童貞を捨てることは完全に美結の頭の中になかった。

まさか自分が女の子とセックスを――女の子である冴香に「された」ことはあるわけだが――するとは思っていなかったのだ。

どうしたらいいのだろうか、ちゃんと挿入できるのだろうか、コンドームもつけたことがないのだが大丈夫か、冴香の膣内が気持ちよすぎて即射精してしまったら格好がつかないのではないか、などといった童貞特有の不安が次々と押し寄せる。

そんな美結の不安を察したのか、冴香は肩に優しく手を置いて。

「大丈夫ですよ、リラックスしてください。私が手伝いますから」

「あ……」

そのまま抱き寄せられるように二人並んでキングサイズのベッドに座り込み、冴香の舌が美結の首筋をぬろりと舐めていく。ゾクリとした快感が首筋から全身を駆け巡って脳に突き刺さり、それだけで思考回路が三割焼き切れる。

「これから美結さんには一人前の殿方になっていただくわけですが、今回は初めてなのでいつ射精してしまっても大丈夫ですし、私が可能な限りサポートしますのでそう気負わずに。まずはゆっくりと全身の力を抜いていきましょう」

「は、はいぃ……」

耳を舐られながら優しい声で囁かれると、抵抗する気など根こそぎ奪われてしまう。

右手は美結を抱き寄せたまま、左手で器用に美結の服をスルスルと脱がせていき、あらわになった美結の健康的な色の肌を撫でまわしていく。

下劣な欲望にまみれた男の触り方とは根本的に異なる、それでいて男のやり方の数倍は卑猥で生々しい、女の子が女の子にするときの触れ方。

「あ……っ、さえ……っ、あ……」

たまらず美結は早くも声が漏れ、顔が熱を帯びていく。

冴香もまた自分の服を片手で器用に脱いでいき、少女同士の肌が擦れ合う。

（冴香……やっぱり肌白くて綺麗……それにすっごく柔らかくてサラサラしてる……）

極上の絹のような肌触りに、雪よりも白い肌の色。

同じ女の子とは思えないほどに、冴香の身体は芸術品だった。

触りたい、彼女の肌に触れたいという欲求が生まれ、慣れない手つきでぎごちなく冴香の身体を美結も撫でていく。

互いの肌をまさぐり合いながら、しかし快楽が溜まっていくのは美結のみ。

単純に行為に慣れている冴香は、悲しいかな童貞の美結の指先程度では声も上げない。

淡々と美結の肩や鎖骨のあたりを撫でつつ、舌で耳や首筋を舐め上げて、彼女の快感を徐々に高めていく冴香。

いつの間にか美結の緊張感は消え、肩や首からは力が抜けていっているのが分かった。

（そろそろいいでしょうか）

段階を次に持っていくべく慣れた手つきでブラを外すと、美結の九十センチの大振りな胸があらわになる。

「胸大きいですね美結さん。これも試合では武器に……いえ、今はＦＴＢの話はやめておきましょうか」

ＦＴＢのために童貞を捨てに来ているのだが――といったことを一瞬美結は考えたが、もはやそんなことはどうでもよかった。

ただ冴香の手の動きに流され、敏感な胸を優しく揉みしだかれる。

神経が集中しているため小さい胸の方が敏感である、とはよく言われるが、胸に集まる神経の総数は大きい胸でも小さい胸でも変わらない。単に本人の感じやすさで決まるものであり、美結は九十センチの胸全体が極めて感じやすい傾向にあった。

「は……っ、さえかぁ……おっぱい、そんな優しく揉まれたら……んうっ、気持ちいいよお……」

「乳首もこんなに勃起させて……これもう小さいちんぽですね。ここからも精液出るんじゃないですか？　母乳でなく精液が出てきそうなほどいやらしく勃起させて」

「だっ、ダメぇ……！　乳首、乳首ちんぽ、いじっちゃらめぇ……」

執拗な胸揉みと乳首責めに、激しく首を横に振って快楽に耐えようとする美結。

すでに下半身は痛いくらいに怒張しており、ビクビクと時おり跳ねるように脈動していた。

「緊張で少し萎えていたのに、今はもうこんなにもちんぽ苦しそうですね」

「ひ、ひぁああっ！　ちっ、ちんぽ！　おっぱい揉みながらちんぽさわさわされたらぁ……！」

美結の背後に回り込み、左手で胸を揉みつつ右手を彼女のペニスへもってきてスカートの上から優しく撫でまわす。

先走り汁がスカートに沁みを作っていき、みるみるそれが広がって二枚の布越しにも美結の亀頭の形がハッキリと分かってしまう。

「カウパーでドロドロですよ、美結さん」

「い、言わないでぇ……ガマン汁でスカート汚れてるのは見れば分かるのぉ……わざわざ説明されると余計恥ずかしいよぉ……」

「恥ずかしいのがいいんでしょう、美結さんは。いっぱい恥ずかしい思いをして精液濃くして、濃くて恥ずかしい精液をいっぱい出して気持ちよくなりたいんですもんね」

耳元で後ろから囁いてやると、右手の中で美結の太い肉棒がまたビクンと大きく跳ねる。

それが少し面白くて、もっと言葉責めしたくなる。

「恥ずかしくて気持ちよくなってしまうなんて、とんだ変態ですね美結さんは。ほら、言ってみてください。『私は恥ずかしいと気持ちよくなって金玉の精液濃くしちゃう、どうしようもない変態ドスケベ童貞ちんぽファイターです』って。さあどうぞ」

「わっ、私はぁ……恥ずかしいと気持ちよくなってぇ……」

冴香に促されるまま、胸を揉まれペニスを扱かれながら顔を真っ赤にして恥ずかしい告白をする美結。

それは自分で自分が変態だと認めることに直結する。

「……『金玉の精液濃くしちゃう』」

「きっ、金玉の、精液っ、濃くしちゃうぅ……」

だと言うのに、その「認める」という行為がたまらなく気持ちよくて、一言一言をしっかり噛み締めながら美結は自分自身を貶めてそのぶんだけ高まってゆく。

「……『どうしようもない変態ドスケベ童貞ちんぽファイターです』」

「どっ、どうしようもないぃ！　へっ、変態っ！　ドスケベ！　童貞ちんぽファイターですぅうう！　んはぁああイクイクイクっ、精液出ちゃうぅうううう――っ！」

何よりも恥ずかしい告白をしながら、美結は冴香の手で特濃の精液を放射した。

ビクビクと震える二十六センチの巨根から放たれる精液は、不規則な放物線を描いてデラックススイートルームを飛翔して壁に叩きつけられる。

「んはぁあああああ――！　精液、精液っ、精液出てるぅうううう――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおおお――！　変態ドスケベちんぽファイターの恥ずかしい射精見てぇえええ！」

「ああ、いっぱい出てますね。もっと出しましょう、恥ずかしい精液をいっぱい出して恥ずかしくなりましょう。ただでさえ恥ずかしいのにこんなに出してますます恥ずかしいですね、でもそれがいいんですよね、童貞で変態のいやらしい美結さん？」

「はっ、恥ずかしい、はずかしいよぉおお！　女の子なのに男勝りの射精して恥ずかしいよぉおおお――！　女の子らしく控えめにかわいく射精したいのにいっ、性欲爆発の変態ちんぽが勝手にこんなに大量射精しちゃうのぉおお！　女の子らしさのかけらもない品性のない射精でごめんなしゃいいい――！　あはぁああちんぽちんぽちんぽちんぽぉおおお――！　精液精液ザーメンザーメン、金玉ちんぽミルクすごいのぉおおおお――！」

射精中のペニスを激しく扱きあげながら美結の羞恥心を言葉で加速させる冴香に、美結はどうすることもできず快楽に呑まれて精液を噴き上げ続けるのみ。

真っ白の濁流はスイートルームの壁から床に流れ落ち、精液の池がみるみる広がっていく。

やがて第一波を出し終えると、そのまま美結はぐったりと冴香に身体を預けて脱力する。

「緊張感は抜けましたか？」

「あぁ……あはぁ……色々抜きまくりだよぉ……」

「では、本番と行きましょうか」

その二文字で、たった今すべての精液を出し尽くした少女の巨根は瞬時にいきり立った。

いよいよ冴香との本番行為、童貞卒業の時が訪れる。

美結のペニスはつい先ほど精液を抜き切ったとは思えないほどに、猛々しくいきり立っていて。

銀髪美少女は、その美貌に淫靡な笑みを浮かべた。

「あら、もう元気に。本当に底なしの変態性欲童貞ちんぽですね」

（ああ……これから私、ちんぽ挿れちゃうんだ……童貞捨てちゃうんだぁ……）

その高揚感に、二十六センチの巨根ははち切れんばかりに怒張し今か今かとその時を待

っている。

（早く……早く挿れてあげないとぉ……ちんぽがかわいそうなの……冴香のまんこに挿れたい挿れたいって訴えてるの……）

最後の一枚を脱いだ全裸の冴香は、ベッドに仰向けになってこちらへ両手を伸ばし、美結を迎える態勢を整えている。

彼女の股間には、雄々しくそそり立った三十二センチの包茎巨根。

根元にぶら下がる玉袋を自身の手で持ち上げると、隠れていた少女の秘所があらわになる。

（ま……まんこ……冴香の……まんこぉ……）

上の口と下の口、さらに鈴口の三か所から涎を同時に垂らし、美結はこれ以上ないほどに雄としての欲望に衝き動かされ自らを猛らせていて。

「さあ、こちらへ」

「さ、冴香ぁ……っ！」

粘膜が奏でる特有の卑猥な音と共に開かれた少女の肉穴へと誘い込まれるように美結は冴香の華奢な体に覆いかぶさると、冴香は童貞少女の背中に手を回して優しく抱き寄せた。

「準備はいいですか？」

「さ、冴香……おねがい、私を男にしてっ……ちんぽ挿れさせて……」
「ええ、全力でお手伝いします。怖がらずにさあ、いらしてください」
抱き寄せていた手がペニスに触れる。そのまま冴香の手に導かれ、ゆっくりと入口に美結の先端があてがわれる。
そのまま少しずつ、初めて入る洞窟を慎重に探検する勇者のように、美結はゆっくりと彼女の中へと入っていく。
「あ、あああ、ああ……！　入ってく、私のちんぽが入ってくぅ……！　冴香のまんこにっ、冴香の赤ちゃん通る道をぬぷぬぷかき分けながらちんぽ入ってくよぉ……！」
「いいですよ、そのまま奥まで来てください……」
挿入しているのは美結なのに、まるで冴香に吸い込まれていくかのようだ。
抗いがたい吸引力で、美結の肉棒は肉壁をかき分けて驚くほどすんなりと入っていく。
（きっと冴香だから……これが舞ちゃんやクラスの子や、真奈ちゃん先輩や部長だったらこんなに上手く入らない……冴香だからこんなに上手く入るのぉ……だって私と冴香は最高のタッグパートナーだからぁ……体の相性も最高なの……っ）
やがて美結の二十六センチペニスは、冴香の中にすべて受け入れられた。
「あぁ……っ、はぁあ……！　入った、はいったぁ……私のちんぽ、ぜんぶ冴香の中に入

っちゃったのぉお……」

「童貞卒業おめでとうございます、美結さん。ふふっ、これで美結さんも一人前の殿方ですね」

「あ……あはぁ……冴香ぁ、冴香ぁあ……冴香のまんこで童貞卒業っ……うれしい、うれしいよぉ……」

自らで包み込んで彼女が男になったことを祝福する冴香に、美結は涙を流して歓喜する。

初めて知った女の膣内（なか）。それは想像を遥かに絶する魔窟だった。

まるで生きているようにうねり続ける膣壁が、精液を搾り取ろうと蠢（うごめ）いて締め付けてくる快感。

冴香のぬくもりを一番敏感なところで感じられる嬉しさ。

ペニスと脳が直結しているかのように、果てしない快楽の奔流が脳内にドバドバと流れ込んでくる。

「ちっ、ちんぽがぁ！　ちんぽが悦んでるのぉ……！　冴香のまんこ、あったかくてヌルヌルしてっ……ちんぽ優しく絞めつけてきてぇ……わたしのちんぽが悦んじゃってるのぉ……」

童貞卒業はこの時点で果たされた。

となれば、次に美結がすることは。

否、せざるを得ないことは――。

「だめぇえ、だめぇえええ……！　冴香のまんこ気持ちよすぎて腰が勝手に動いちゃううううう！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおお――！　ちんぽをまんこに入れるのがこんなに気持ちいいなんてぇえええ！」

快楽のまま、雄の本能のまま。

腰をひたすらに動かして、雌を蹂躙することのみ。

「んっ、いい動きですよ美結さんっ……雄の本能のままに激しく突いてくださいっ……」

「おほっ、おほぉおおお――！　まんこ、まんこ、さえかのまんこぉおおお――！　まんこにちんぽぶち込んでかきまわすのきもちいひぃいいい――！　冴香のまんこ、まんこまんこまんこぉおおお――！」

冴香も自らのペニスを豪快に揺らしながら、美結のダイナミックな腰遣いにある程度感じているのか白い頬をいくらか染めている。

「せっかく大きいのですから、ちんぽ挿入も十分攻撃手段になりえます……大きいけど早漏だった美結さんのちんぽは、弱点を克服して立派なちんぽファイターの武器にっ……なりましたから……」

ＦＴＢは単純に、色々大きい方が有利だ。
胸が大きければパイズリができるし、ペニスが大きければ挿入の際に相手を感じさせやすくなる。
攻める手数が多ければ、それだけ有利だ。
九十センチの柔らかなバストも、二十六センチの固すぎるペニスも、もはや男を誘うものでもなければ女をよがらせるものでもない。
ただ相手のふたなり少女を、敗北射精させるためのもの。
ちんぽファイターとしての、磨き上げられた肉体武器なのだ。
だが、今やそんなことは美結にとってどうでもいい。
ただ本能に任せて、冴香を犯すだけだ。
「ちんぽ気持ちいい、冴香のまんこ最高の肉オナホなのぉおおおお！　一生冴香のまんこに挿れてたい、一生冴香オナホ使いたいぃいいい――！」
壊れるまで突き崩し、死ぬまで腰を振り続け、最後に己の生の証をすべてぶちまけて果てるのみ。
「もう死んでもいい、冴香のまんこに中出ししたら死んでもいいよぉおおお！　冴香のまんこ気持ちよすぎて冴香の中から抜きたくないぃいいい！　冴香から離れるくらいなら今

ここで死ぬのぉおおおおお！」

「困りましたね、私とタッグ組んで戦うのでは……ないんですか？」

「あへぇえええ――っ！　今それ言わないで、今ＦＴＢのこと言わないれぇえええ！　今はセックスなの、冴香まんこにズポズポすることしか考えられないのぉおお！　今だけはちんぽファイターじゃなくてただのオスでいたいのぉおおお！　どうぶつなのぉお！　冴香のメスまんこちんぽで犯したいオスのけだものなのぉおおお――！」

ちんぽファイターであることも、男であることも、人間であることも捨て。

天音美結はただの雄獣として、冴香の雌穴を突き壊しかき乱すことしか頭にない。

否、頭も働いておらず、ただ下半身のもたらす性欲のみでしか動いていない。

「おぉおおお、出る出る出るでりゅうううう――！　オスミルク、男汁、雄ザーメン出りゅうううう！　雌のまんこの穴の中に私のきったなくてくっさい男の体液出すのぉおおお――！　精子たっぷり含まれてる赤ちゃんミルク出すからぁあああ、ぜんぶ雌まんこで受け止めてぇえええ――！」

「いいですよ、出してくださいっ……！　あなたの欲情まみれの雄汁を、私の膣内に全部……」

射精が近いことを感じ取った冴香は、そこでより一層膣圧をかけて美結から精液を搾り

取ろうとする。
その快感に為す術もなく最後の理性は決壊し、美結は女の子としてもヒトとしてもかけ離れた野太い声を上げて最大限に濃縮された汚濁液を冴香の膣内に吐き散らかす。
「ああ……っ、出てます、美結さんの精液がすごい勢いでっ……」
「ちんぽちんぽちんぽ精液精液精液ぃいいいい――！　今までで一番汚い雄の本能液ぜんぶ冴香の雌まんこに出てるぅううう！　妊娠して、妊娠して、妊娠してぇえええ！　冴香妊娠してぇえええ――！　私の本能まみれのきったない穢れた精液で冴香妊娠させるのぉおおおおおお！　私の遺伝子色濃く残したドスケベふたなり赤ちゃん産んでぇえええええ！　はらんでぇ、はらんでぇえええ！　赤ちゃん産んでぇえええええ――！」
ふたなりの精液では女性を妊娠させることはできない。
量が多い代わりに精子一つ一つの生存能力が男性のそれに比べると著しく劣り、卵子にたどり着く前に全滅してしまうと言われている。
だから相手が普通の女性でも、ふたなりの女性でも、膣内にいくらふたなりが精液を注ぎこんだとしても妊娠することはない。
それは美結がふたなりの学園に転入し数日で明らかになった事実であり真実であり、常識。

だからふたなり同士は気軽に性交するし、ＦＴＢなどという競技も生成発展されたのだ。
だからいくら膣内射精しても、自分がふたなりである以上冴香を孕ませることは不可能なのだ。
だが、それでも。
分かっていても、それでも。
「妊娠してぇ！　妊娠してぇえええ！　にんしんしてえええ！　はらんでぇえええ――！　子ども産んでぇえええええ――！」
愛する冴香に自らの子種をぶちまけて妊娠させたいというかなわない願望は、とめどなく放たれる精液と一緒にあふれ出て止まらない。
相手が誰であっても自分の子どもを孕んでほしいと思うのは、子種をばらまく雄としての本能なのだ。
できることなら一匹でも多くの雌に子孫を孕ませておきたいのが、雄の本能なのだから。
「うおおおおおちんぽ、ちんぽちんぽちんぽぉおおおお――！　赤ちゃん精液、赤ちゃんミルク、赤ちゃんの材料ぉおお――！　いくらでも出すから孕んでぇえええ！」
過去最高にして最長の射精だった。
美結は本能と欲望と一縷の願望のまま泣き叫びながら、冴香に自らの遺伝子を放ち続け。

賽の河原で石を積むがごとく無意味なふたなり同士の繁殖行動の果てに、意識を失って冴香の身体に覆いかぶさって倒れてしまった。

「ううぅ……はらんれぇ……はらんでよぉ……わたひの……あかちゃん……」

「……気持ちは分かりますけどね」

うわごとのように呟きながらまどろみに沈む美結の頭を、冴香は優しく撫でてやった。

そうして、思う。

（そう、ふたなり同士では子をなせない……もし本当にふたなり同士で子孫を残せたら……私も今頃は正統継承者に……いえ、逆に最初から生まれてこなかった可能性も……）

考え出すと、思考が沈んでいく。

（なぜでしょうね。なぜ私は生まれてしまったのか……）

継承者として、正しい血筋のもと生まれてきたのに。

生まれながらにして未来を約束されていたのに。

そのための厳しい修行にも耐えてきたのに。

かつてのあの日にほんのわずかな違和感を覚え、ほんのわずかな判断ミスがきっかけで。

今では由緒正しき四大流派の正統継承者どころか、すべてを失いたった一人。

そうなることが分かっているなら、生まれなければよかったのにとさえ思ったこともあ

る。

しかし。

（……ですけれど、もし私が正統継承者になっていたら……この聖珠学園であなたに会うことも、あなたとタッグを組むこともなかったわけですか）

「ううう……なんではらんでくれないのぉ……こんなに……冴香のこと好きなのにぃ……」

そのパートナーは、夢の中でも自分に膣内射精しているのか、泣きながら眠っている。

それを表すかのごとく、彼女のペニスからはまだゴプゴプと濁ったミルクが今も垂れ流されシーツを汚していく。

（美結さん……）

強すぎるあまり今まで一度も得られなかった、自分と陰茎を並べて戦うタッグパートナー。

自分には不要だと思いながらも、どこかで欲していた最高の相方。

それもまた、この道でしか得られなかったと考えると。

「……数奇なものですね。人の運命とは」

複雑な、しかしいくらか穏やかな笑みが。

銀髪美少女から、零れていき。

その二時間後、美結は目を開けた。
「……はっ！」
（ま、また気絶しちゃってた！）
そばでは冴香がすでに制服を着てベッドに腰掛けており、美結は起きた瞬間に喉の渇きと痛みを覚える。
「さっ……さえが……っ、えふ、えふ……」
「あれだけ絶叫していればそうなります。とりあえず水飲んでください、脱水症状で倒れてしまいますよ」
ガラガラ声を出す美結に、冴香はホテルの冷蔵庫から水を出して美結に差し出す。
それを全裸のまま一気に飲み干して、美結は長く息を吐いた。
「……終わった、んだよね？」
「ええ、童貞卒業おめでとうございます。これで試合も大丈夫ですね」
「う、うん……」
徐々に記憶が戻ってきた。
自分は半ば無意識のまま、冴香にあらん限りの精液を迸らせ。
妊娠してだの孕んでだの、好き放題叫びながら射精していたのだ。

恥ずかしさで顔が赤くなる美結に、冴香は「気にしていませんので」とだけフォローした。

それから身支度を整えホテルからの帰り道を並んで歩く途中、美結はずっと気になっていたことを口にする。

「ねえ冴香……その、ごめんね、私だけ気持ちよくなっちゃって」

「なにかと思えば、そんなことですか」

「だって、冴香イってなかったでしょ？」

美結の覚えている限りでは、彼女が絶頂を迎えた様子はなかった。

射精はもちろん、おそらく女性器のほうでも絶頂していないだろう。

「……私が童貞だったから、冴香を気持ちよくしてあげられなくて」

「いえ、美結さんのちんぽにまともに挿入されたら一般人ふたなりはおそらく全員ちんぽとまんこダブルイキしてますし、だいたいのちんぽファイターも敗北射精しますよ」

「え、そう？」

嘘偽りなく、冴香は言った。

彼女の巨根と激しいピストンは、凡百の少女なら為す術もなく狂い絶頂するほどのちんぽ攻撃力を備えていることを文字通り肌で感じ取ったからこそ言えることだ。

「私は感じにくいんです。前も言いましたがＦＴＢで勝つために体を作っていましたので、その影響でしょう」
「そっか……」
「というより、私そもそもセックスで絶頂したことないんですよ」
歩きながら、冴香はそう付け加えた。
「師範代として、教え子の筆下ろしをしたり、逆に教え子の処女を奪うことは幾度もありました。経験人数は数え切れません」
「……」
「しかし、そういったセックスで自分が気持ちよくなることは今まで一度もありませんでした」
もちろん先日の剛根との試合のように、ちんぽバトルで射精することは幾度もありましたが、と冴香は付け加える。
「生まれながらにしてちんぽファイターだった私には、普通のふたなりの子のように愛し合うセックスをすることなど元からできないのかもしれませんね」
かつて師範代だった頃も、門下生のふたなり少女たちが練習を抜け出して道場の陰や屋敷の裏山の中で盛り合っているのを目撃したことは何度かあった。

理解できなかった。
戦うためのペニスとヴァギナで、何を愛し合っているのかと。
ちんぽファイターに愛などいらないはずだ。
ただ己の肉体で相手を敗北射精へ追い込むことが目的であり、そのためだけに男性器と女性器が備わっているはずだ。
そう、思っていた。
（今にして思えば、彼女らへの羨望……ＦＴＢ以外に打ち込むことを許されなかった私自身への苛立ち……でしょうね）
「冷たい女だと思ってください。敗北での不可抗力の際にしか絶頂できないんです。だから動物的な生殖行為も、人間特有の愛の延長上にセックスがあるということも私にはよく分かりません。私はＦＴＢでしか生きられない哀れなちんぽ女なんです」
美結は黙っていたが。
やがて、こう言って彼女の足を止める。
「そんなこと、ないよ」
「美結さん……」
「冴香が本当はとっても優しい子だってこと、私は知ってるから」

新人戦タッグマッチの前日。

彼女は悪い男たちから、虐げられている子猫を身の危険も顧みず助けていた。

あの時に美結はハッキリと感じたのだ。

室戸冴香は非情などではなく血の通った人間であり、弱者に優しい少女なのだと。

「昔の冴香のことは知らないけどさ、私にとっての冴香はクールで強くてとっても優しいちんぽファイターだってこと、それだけは私の中で確かだから」

生まれながらにして運命が決まり。

その運命の円盤は、容易（たやす）く台座から蹴り落とされ。

（でも、今はそれでよかったのかも知れません）

失意のまま流れ着いたその先に、光があった。

予期せぬ出会いと、新たな可能性に巡りあえた。

室戸冴香の円盤は、泥の上でまだ回り続けている。

「……ありがとうございます、美結さん……」

「お礼なんていいよ！　あ、むしろお礼言うのはこっちだったね」

ぺこりと頭を下げる冴香に、美結は笑って手を振って。

それから少女の手を取って、顔を近づけて言った。

「ありがと冴香、童貞もらってくれて」
「い、いえ……」
「いつも私のこと支えてくれて、感謝してるんだから。ホントだよ」
「……なんです、やはり礼を言うのはこちらではないですか」
白くきめ細かい冴香の顔が、真っ赤に染まる。
どうにもこの少女には、かなわないらしい。
（こうして、素敵なタッグパートナーがそばに居るのですから）
夏季ＦＴＢ都大会まで、あとわずか。
二人の少女にとって、今までで一番熱い夏が幕を開ける。

第7話　夏季ＦＴＢ都大会一日目

「ついにきたーっ！　暑い！　そして熱いっ！　夏季ＦＴＢ都大会！」

八月五日。

なんとか期末試験で赤点を回避した美結は心置きなく夏休みを迎え、そしてＦＴＢ都大会の会場へ仲間たちと共にやってきた。

新人戦とは異なり、さらに大きい体育館。

関東大会や全国大会にも用いられる、ＦＴＢ御用達の大舞台だ。

ちんぽファイターならば一度はこのリングで戦いたいと言われるここは、一種の登竜門的な役割も担っている。

（周り見ても、強そうなふたなりの子がウロウロしてるなあ）

美結もふたなり学園に転入して四か月弱、普通の女性とふたなりの違いは雰囲気から察することができていた。

さらにはただのふたなりと、ＦＴＢで戦うちんぽファイターの違いも。

特有の闘気というものを感じ取れるようになってきた――気がするだけだが。

「まあここに集まる時点で猛者ぞろいですからね。美結さん大丈夫ですか？　ちんぽ萎えてません？」

「だ、だだ大丈夫だよ！　ほら見てちんぽはいつだってギンギン――」

「隠してください、試合前に武器を見せびらかしてどうするんです」

スカートをめくって己の武器を見せつけようとする美結を冴香は止めた。

むやみやたらにペニスを見せびらかすのは三流ちんぽファイターのすること、程度が知れるというもの。

美結も公共の場で性器を露出しそうになったことを今さら恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にしてうつむく。

それからふと思い出したように、そばにいる上級生の二人に声をかけた。

「真奈ちゃん先輩、夕月部長、最後の大会なのに私たちのために出場枠を譲ってもらってすみません……ありがとうございます」

今大会を最後に、三年生である紫と真奈は引退してしまう。

とはいえ二人ともふたなり大学に推薦が決まっているため、これからも部室にはちょくちょく顔を出すらしい。

しかしながら最後の大会となるこの夏季ＦＴＢ都大会タッグマッチにおいて、タッグは

各校にひと組のみという出場制限のもと自分たちに出番を譲ってくれた二人の上級生には、感謝してもし切れない。

「いいのよぅ？　二人がどこまで行けるか見る方が楽しいしぃ」

「そうそう！　マジで二人なら優勝狙える勢いだもんね！」

それでも彼女らは嬉しそうに、恐縮する美結をなだめていた。

最後の舞台を譲ってもらった二人のためにも、無様な敗北射精は見せられない。

熱気と闘気でむせかえるエントランスから会場内に入り、聖珠学園のブースに荷物を置き、更衣室で制服を脱いでリングコスチュームを着てその上に制服を着直して試合の準備を整える。

開会式も滞りなく進行し、いよいよ試合が始まった。

「夏季大会は大規模、二日に分けて行われます。今日は一日目、三回戦までとなります」

「日をまたぐんだね」

「ええ、ですから家に帰ってうっかり抜いてしまうと翌日の検査に引っかかって失格となってしまいますので気をつけてくださいね」

冴香がかいつまんで注意事項を述べていく。

大掛かりな大会で、トーナメントも一日では消化しきれない。

負けてしまえばそこで解散だが、勝ち残った場合は連日の戦いだ。コンディションの維持も求められる。

「そうだね！　私たち優勝するから、絶対次の日も試合するわけだし！」

「……まあ、自信もほどほどに」

前回の大会とは異なり、今回は美結も冴香も調子は万全だ。

剛根学院を倒して自信と実力がついた美結、怪我によるコンディション低下のない冴香。

聖珠学園は剛根と並んで、今大会の二大注目校とされている。

（そうだ、トーナメント表を確認しておこうっと）

美結は制服のポケットから、折りたたまれた一枚の小さな紙を広げる。

選手たちに配布されたこの紙には、今大会の組み合わせが載っている。

会場の壁のあちこちにも大きな紙が張り出され、空中から吊り下げられた電光掲示板にも同じものが示されている。

「私たちの初戦は一回戦の第二試合……相手は……なにこれ、ヌヌさお？」

「双竿（そうかん）学園、と読みます」

横から冴香が訂正する。

聖珠学園はトーナメント表の左から三番目、すなわち第二試合で早くも出番だ。

ここで順当に勝ち上がれば、二回戦の相手は現在第一試合をやっている学園のどちらかと当たることになる。

そして、二人が最も気になっている相手校は――。

（……ふむ、剛根とは決勝で当たることになりそうですね）

最強と呼ばれる、剛根学院。

その名はトーナメントの右端にあった。

前回のようにいきなり当たることはなく、最終決戦の相手になるかといったところだろう。

「冴香が万全の状態で、二人の全力で剛根を倒して優勝！　これ以上ないほどいい流れだねっ！」

美結は両の拳を胸の前に持ってきて、力強く言い。

ほどなくして出番が来たことを、アナウンスによって告げられる。

《一回戦第二試合、聖珠学園対双竿学園！》

「さ、美結さん。行きますよ」

「うんっ！」

冴香に声をかけられ、美結は相棒と共にリングイン。

先の第一試合と比べ物にならないほどの観客が、自分たちの闘う姿を見ようと集まってきている。

「来たぞ聖珠学園！　あの室戸流と！」

「新人戦で大活躍した天音ちゃんか！　今大会の最注目ペアだ！」

「美結ちゃん頑張ってー！　応援してるわよ！」

前回の新人戦タッグマッチで優勝候補の剛根を倒した美結は、一般客にもその名が一躍知れ渡っているようだ。前回の時のようにヤジを飛ばす者はもうおらず、彼女を一人前の――室戸冴香と並び立つちんぽファイターとして認めてくれていることが分かる。

彼ら彼女らに笑顔で手を振って応え、美結は聖珠学園の制服を脱ぎ捨てて。

「聖珠学園、天音美結！　正々堂々ちんぽバトル！」

黒基調で赤のアクセントがきいたビキニスタイルのコスチューム姿になり、スカートから二十六センチの勃起した巨根が勢いよく飛び出す。

「聖珠学園、〝雪月花〟室戸冴香。玲瓏なる射精へと誘います」

冴香も制服を脱いで純白の着物スタイルのコスチュームになり、観客たちは一層興奮する。

そこでリングそばの席から、男性アナウンサーの声が響き渡り。

《さあ登場してまいりました、聖珠学園の天音・室戸ペア！　四大流派の室戸冴香は言うに及ばず、彼女に並び勃つのは新人戦におきまして無名ながらも八面六臂の大活躍を見せ剛根を倒した天音美結！　今大会の最注目ペアであります！》

「じ、実況ついてるの!?」

「ついていないのは新人戦くらいで普通ＦＴＢは実況つきですよ」

驚きに目を見開く美結だが、何度も大会に出てきた冴香はさも当然のごとく言ってのける。

しかし実況があるとなると、ますます大舞台という感じでいやが上にも勃起してしまう。

（すごいなぁ……やっぱり夏の大会は違うね）

《……さあ、続きまして双竿学園の登場です！》

相手タッグも闘技場に上がってきた。

二人の少女がリングインし、揃って制服を脱ぎ捨てて名乗る。

その瞬間、美結の眼には信じられない光景が飛び込んできた。

揃いのリングコスチュームになった二人のちんぽファイターの股間には、当然のごとく勃起したペニスが隆々とそそり立っているのだが。

彼女らは――。

「双竿学園、二階堂蓮実（にかいどうはすみ）！　右のちんぽにプライドを！」
「双竿学園、二重橋沙織（にじゅうばしさおり）！　左のちんぽに栄光を！」
（ち、ちんぽが二本生えてる!?）
それぞれの股間に二本ずつ、合計四本のペニスが生えていた。
自分たち聖珠学園にも、このような女の子は美結の知る限りではいないはず。
まるで突然変異のふたなりだ。
《やってまいりました世界有数の複根専門学園！　股間にそびえる二つの肉棒、合計四つのクアドラペニス！　その威圧感は計り知れない！　数少ない二刀流ちんぽファイターの存在を、今大会でどこまで知らしめられるか！　それは少女たちの双肩ならぬ双根にかかっております！》
「フハハハハ！　驚いたか！　これが我ら双竿の誇るダブルちんぽファイターだ！　フハハハハ！」
「ちょっと蓮実、その高笑いは恥ずかしいからやめてってば！」
二階堂蓮実と名乗ったポニーテールの女の子は仰け反って高笑いし、もう一人の茶髪で巻き毛の眼鏡をかけた小さな女の子――二重橋沙織は恥ずかしそうに相棒を止める。
美結はすっかり動転し、隣の冴香の着物コスチュームの裾を引っ張って声を裏返す。

「さ、冴香！　あの子たち、ちんぽが二本生えてるよ⁉」
「双竿学園はふたなり専門学園の中でもかなり珍しい、二本のちんぽを持つふたなりしか入れない学園（ところ）です。二刀流ちんぽファイターとしての養成に力を入れている学園で、その特徴から生徒数は極端に少ないですが実力は侮れません」
さすがに冴香は知っているらしく、別段驚くこともないようだ。
しかし美結にとって、二本のペニスを持つ少女がいるという事実はまさに青天の霹靂。
（普通、女の子にちんぽは一本だけだと思ってたよ……）
（落ち着いてください、一本でも二本でもやることは変わりません。練習を思い出し、冷静に立ち回れば勝てる相手です）
美結と冴香はアイコンタクトで話し、まずは冴香が出る。
若干驚いて戦意が低下した美結が持ち直すまで、自分が戦って時間を作ろうという目論見だ。
「いきなり室戸流か、ならまずは私が出てやろう！」
「蓮実、油断しないでよ」
相手学園は黒髪の背が高い方、二階堂蓮実が前に出て。
今、試合開始のゴングが鳴る。

「さあ来い室戸流！　このダブルちんぽを恐れぬのならな！　フハハハハ！」
「あいにくと複根は何度か見たことがありますので。遠慮なく行きますよ」
静かに冴香は突っこんでいき、右手を高速で伸ばして蓮実のダブルペニスへ手を伸ばす。
蓮実もそうはさせまいとばかりにブロックしつつ、反撃の機を窺っている。
「ここか！」
やがて隙が見え、蓮実は一歩踏み込んで冴香に掴みかかろうとしたが。
次の瞬間、歓声が沸き起こる。
《なんと見事な跳躍！　室戸、風に舞う花びらを思わせる軽やかなジャンプで二階堂の背後をとった――！》
突っ込んだ蓮実の両肩に手を置いた冴香が、ふわりと相手を跳び越えて背後をとったのだ。
重量を感じさせない柔らかな動きで蓮実の後ろを取り、そのまま両手を左右から伸ばして相手の二本あるペニスを両手で掴む。
「室戸流『花』の四手――」
「させない！」
が、相方である二重橋沙織が冴香に後ろから抱き着いて攻撃を妨害。

そのまま彼女の三十二センチ包茎ペニスを扱きあげ、手コキによる快楽を蓄積させる。
《おっと簡単には室戸流の性技を出させない！　二重橋、背後からの手コキで妨害だ！》
「くっ……！」
その手を振りほどき態勢を整えようとする冴香だが、位置関係上二人の選手に挟まれてしまっている。
が、美結のいるコーナーも近い。
「冴香、交代！」
「はい」
タッチに成功し、美結がリングに躍り出て。
その間隙に双竿学園側もタッチ、二重橋沙織が前に出た。
《双方ともにここでタッチ！　聖珠学園、室戸に代わって出て参りましたのは大型新人天音美結！　もはや彼女はダークホースなどではありません、最大注目選手にして相手校からすれば最要注意のちんぽファイターです！　二重橋沙織、彼女にどこまで食らいついていけるか！》
（沙織ちゃん、か……ちんぽ、左右で大きさが違うんだね）
眼前の相手を見て、改めて美結は気づく。

蓮実のペニスは左右で同じ大きさと太さだったが、沙織のそれらは大きさが異なる。
具体的には蓮実は両方とも二十一センチで皮も剥けているストレートな肉棒だが、沙織の武器は片方が二十九センチと異様に大きい反面、もう片方は十センチあるかどうかの小ぶりな包茎ペニス。
大小ともに反りがあり、まさに日本刀の本差・脇差を思わせる二刀流だ。
単純に手数ならぬちんぽ数を二倍にして猛攻をかけてくる蓮実、大きさの異なる二本のペニスでそれぞれに異なった攻撃を仕掛けてくるテクニカルな沙織。
（美結さんはまだ戦術がストレートな傾向にあります、相性は若干悪い。早めに交代してあげたいところですね）
冴香はロープにもたれて休みながら考える。
美結もかなりの実力をつけてきているが、一回戦は確実に勝って抜けておきたい。
（無理しないでくださいね、美結さん）
「沙織ちゃん……試合中でもメガネって危なくない？」
「敵の心配なんて随分余裕なちんぽファイターね、これは私のトレードマークよ！　グダグダ言わないで、ちんぽファイターならちんぽでかかってきなさいっ！」
「いいけど手加減……じゃなかった、ちんぽ加減しないからね！」

大小二本のペニスが、リングの上で唸りを上げる。
眼鏡少女沙織は、小柄でフットワークも軽くなかなか美結も接近できない。
（ちっちゃいほうのちんぽは掴みづらいから、おっきいほうのちんぽを掴めばいけそうだけど……）
直接ペニスを握っての攻撃は難しいようだ。
一回戦の相手とはいえど都大会タッグマッチに出場するペア、簡単にはやらせてくれない。
それればかりか、一瞬の隙を突かれ。
「もらったわ！　ちんぽ八連斬！」
「んはぁああっ！　ちんぽイっちゃううう！」
一瞬で左右から八連続のちんぽ斬撃を食らい、美結のペニスには八重の快楽が襲い来る。
《二重橋のちんぽ八連斬――！　大小のペニスによる一瞬にして八連撃が天音のペニスに叩きつけられる！　これは快楽も八倍だ――！》
かろうじて即射精は免れたが、ちんぽファイターでない普通のふたなりや男性であればたちどころにダウンしていただろう。
「す、すごぃいい……こんな速いちんぽ攻撃されたらぁ……」

「まだまだ！　ダブルちんぽファイターの恐ろしさはここからなんだから！」

快楽にふらつく美結に、沙織はさらなる猛攻をかけてくる。

《大小のちんぽが織りなす華麗な連続攻撃だ！　天音、その手数に防戦一方！　反撃の機は訪れるのか⁉》

「くっ、あはぁああ……！　ちんぽ、ちんぽ気持ちいいっ……！　怒涛のダブルちんぽ連撃気持ちよすぎなのぉおおお……！」

「二刀流ちんぽファイターは攻撃力の低さを手数で補ってきます！　一撃の威力は軽いですが連続で食らうと危険です、コーナーに追い込まれないよう位置取りに気をつけて！」

冴香がコーナーから助言する。

（よし、ここは一気に！）

美結はいったんバックステップし、ロープに体重を預けて大きく撓（たわ）ませ。

次の瞬間、ロケットのように飛び出す。

「やあ――っ！」

《天音、ロープの反動を利用して突っ込んだ！　勢いを倍加させたランニングラリアット――！》

「かは……っ！」

さすがに首を狙うと反則のため、胸の上あたりを狙ったが綺麗に決まり、沙織の小柄な体は後方へ吹き飛ばされ倒れた。

《そのまま覆いかぶさった！　相方の室戸直伝の手コキはデビュー二か月と思えないほどに強烈！　シンプルにして強力な天音の手コキに二重橋耐えられるか！》

仰向けになりぶるんと揺れた二本のペニス、そのうちの大きい方に狙いを定めて美結は手コキを開始する。

二十九センチの大ペニスを右手で扱きあげ、左手では金玉を転がし刺激するスタンダードな戦法。

「くっ、くあぁ……らめ、ちんぽらめぇ……っ」

「ふふっ、イっちゃっていいよ？」

「やだぁ……こんなところで射精するわけにいかな、ひいんっ！」

扱かれている大ペニスのほうはもちろん、刺激を与えられていない小ペニスもビクビクと精液を出したそうに震えている。

「こっちはこんなにおっきくて剥けてて大人ちんぽなのに、こっちの子はちっちゃくて皮もかぶっててかわいいね？」

「ばっ、バカにしないでよ！　こんな……んうっ、ダメ、ちんぽイク、イクイクイク……！」

陰茎と金玉を愛撫され、さらには言葉責めも併用する美結に沙織は真っ赤になって快楽に耐える。

が、それも長く持たず。

ついに彼女は片方のペニスから、大量の精液を天へと噴き上げた。

「んほぉおおおちんぽぉおおおお――！　ちんぽイクぅうう！　右側のちんぽだけイってる、右のちんぽ射精してるぅうううう――！　右ちんぽ右ちんぽ右ちんぽぉおおお！　片方だけちんぽイキしてるのぉおおお――！」

《イった――！　二重橋沙織、大きい方のペニスから大量射精――！　聖珠学園がまずは先制だ――！》

（よし、やったっ！）

手ごたえを感じながらも、まだ美結は手コキをやめない。

相手が射精している間は、最後の一滴まで搾り出してあげて、最高の敗北快楽を味わわせてあげることがちんぽファイターの礼儀だ。

それ以上に、彼女の幼い顔が快楽に歪み、ペニスから精液を噴き上げるところを一秒でも長く見ていたいという単純な欲望もある。

「右ちんぽ、右ちんぽイクぅうううう――！　精液とまらない、とまんないのぉおおお！

右側のちんぽから精液全部出ちゃうううう――！」

しかしやはり、片方のペニスからの射精だけでは美結も満足できない。

せっかく二本ついているのだから、両方から出させてあげなければかわいそうだ。

「ほら沙織ちゃん、昔から言われてるでしょ！　右のちんぽ射精させられたらどうするの!?」

「左のちんぽもお願いしますぅうううう！」

「よしっ、じゃあお望み通り左も射精させてあげるっ！」

相手の本心からの望みに応え、美結は彼女の左の包茎短小ペニスも指で挟んで扱きあげる。

するとたちまちのうちに、十センチに満たない肉の蕾からも粘っこい敗北精液があふれ出し、大小二本の男性器から同時に精液が迸りマットを汚していく。

「んほぁあああ――！　ひだりっ、ひだりっ、左ちんぽもぉおおお！　左ちんぽも射精しちゃったぁあああ！　両方、りょうほうぅう！　両方のちんぽ射精ぇえええ！　一本だけでも恥ずかしいのに両方のちんぽから金玉汁出てるぅうう――！　ダブル敗北射精気持ちいいよぉおおお！　二本のちんぽイって精液二倍で快感も二倍なのぉおおお――！」

「ふふっ、かわいいよ沙織ちゃん……やっぱり二本ちんぽあるなら両方同時に射精したよ

ねっ、いいなぁ私ももう一本ちんぽ欲しいよ、せめていっぱい気持ちよくしてあげるね！」

「ダメぇえええもうダメ、ちんぽもうイきたくない、精液出したくないぃいいい――！　でも敗北射精気持ちいいのぉおお！　見てぇ、みんな見てぇえええ――！　恥ずかしくて情けない射精シーンいっぱい見て撮ってぇえええ――！　私のだらしない射精姿を世界中に拡散してぇえええ！　外歩けないくらいに私の射精シーン広めてぇえええ！」

一斉に焚かれるフラッシュの嵐、回り続けるビデオカメラ。

二本のペニスから大量の精液を噴射する二重橋沙織の痴態が、最新の記録媒体により後世に長く鮮やかに残ることとなる。

それを考えるだけで快楽は倍増し、沙織の右側のペニスからはさらに超大量の精液が迸る。

二分ほどそうして沙織は存分に射精姿を衆目に晒した後、レフェリーが割って入って美結を引き離す。

会場の電光掲示板に現在の試合状況が映し出されており、「二重橋沙織」の名前の前に赤いランプが一つ灯った。

あと二つ、ランプを点灯させれば美結たちの勝利。

「やったよ冴香！」

「お見事です、交代しますか？」
「ううん、まだいける！」
コーナーに戻ってきた美結は息を整えつつ、相手校のもう一人が出てくるのを待つ。
射精の止まった沙織はコーナーへと引っ込み、代わりに二階堂蓮実が前に出てきた。
《さあ、まだどちらの学園にも可能性はあります。二階堂蓮実、天音の快進撃を止められるか？》
「フハハハハハ！　よくぞ沙織を射精させたものだ！　だが私もイカせられるかな？」
「いいよ、来なよ！　あなたにも素敵な敗北射精をさせてあげるっ！」
劣勢にもかかわらず高笑い。
それが彼女の度量と実力を表しているようだが、今の美結は勢いに乗っている。
（沙織ちゃんは射精の余韻で動けない、カットにも入れない！　いま攻めれば一気に有利になれる！）
（一本取った程度で浮かれるとは、やはりまだ新人のようだな！）
同じ大きさの双根をいきり立たせ、ポニーテールとペニスを揺らせて突っ込んでくる蓮実。
美結はカウンター気味に一回転して裏拳を繰り出したが、それは蓮実の左手に止められ

て身動きを封じられる。
「っ！」
《おーっと止められた！　空手で鍛えられた身体攻撃技が天音の強みだが、二階堂には通用しないのか⁉》
そしてそのまま懐（ふところ）に入られ、二人の三本のペニスが密着し。
美結のペニスには、電流のような快感がビリッと奔る。
「あっ、はあっ！」
（ち、ちんぽが……蓮実ちゃんのダブルちんぽに挟まれて……⁉）
「いけません美結さん、後退して！」
何をされるか予測した冴香が叫んだが、もう遅い。
「フハハハハ！　受けてみろ！」
美結に密着した蓮実は、己の二本の男根で美結の巨根を挟み込み。
そのままグイと、腰の力のみで少女の身体を持ち上げて。
（えっ、やだ……！　ちんぽで挟まれて浮いて……！）
《ここで二階堂、天音美結のペニスを自らの二本の肉棒で挟み持ち上げた！　これは彼女の得意技――！》

回転を加え、美結の身体を豪快にマットに叩きつける。
「ちんぽシザーズホイップ！」
「んはぁあああ――！　ちんぽぉおおおお！　ちんぽ挟んで投げられるの気持ちいいいい――！」
敏感なペニスを両側から挟まれ持ち上げられ、さらにそのまま投げられるという未曽有の快楽。
なんとか射精は免れたものの背中から叩きつけられ、あまりの快感に身動きもできない。
「フハハハハ！　見たか天音美結、私の必殺技を！」
《決まったー！　ちんぽシザーズホイップ――！　天音、尋常でない快楽に立ち上がれません！》
（おほぉお……っ、いけない、動かないとっ……）
「もう一度食らって、射精するがいい！」
起き上がろうとしていた美結の一本しかないペニスを、蓮実は再び二本の男根で挟んで美結本体ごと持ち上げ。
「ちんぽシザーズホイップ！」
「んきゃぁあああああ――！　ちんぽ投げまたきたぁあああああ！　射精しちゃうっ、精液

出ちゃうよぉおおおお――っ！」

またしても回転を加えて大きく投げ飛ばし叩きつけ、マットが衝撃に揺らぐ。

立て続けに浴びせられたその衝撃と絶大なる快楽に美結は射精寸前にまで陥り、うつ伏せになって体をひくつかせて喘いでいた。

《ちんぽシザーズホイップ二発目――！　これは強烈、天音さすがに射精か――!?》

「ま、まだイってない……まだちんぽイってないのぉ……でも、もうっ、イきそう……出したい、精液出したいよぉおお……敗北精液びゅーびゅー出して気持ちよくなりたいぃ……」

「よく耐えました、交代です！」

乾いたタッチ音が響く。

幸いにも投げ飛ばされた方向は、冴香のコーナー近くだった。

あと一歩のところで踏みとどまった美結の代わりに、冴香がリングインしてなり代わる。

「くっ、投げる方向を誤ったか？」

「なにやってんのよバカちんぽ！　あと一歩のところで逃げられちゃったじゃない！」

「なあに心配はいらん！　室戸冴香もちんぽシザーズホイップで投げ飛ばしてやるまでさ！　その後はダブルちんぽで二穴挿入してくれる！　フハハハハ！」

相手コーナーからは射精の快楽から復活した沙織がぎゃいぎゃい言っているが、蓮実は気にした様子もなく高笑いして冴香に突っこんでいく。

彼女にもまた、自慢のちんぽシザーズホイップを食らわせる目論見だ。

しかし冴香は一見無防備に相手の接近を許すと、不意に転がって。

「!?」

視界から一瞬消えたことに戸惑った蓮実に、寝ころんだまま両足で彼女の二本のペニスを挟み込み。

「室戸流『月』の四手――『上弦月（じょうげんのつき）』」

そのまま一気に、目にも映らない高速で扱きあげ。

次の瞬間。

「おほぁあああ――！　ちんぽぉおおおお！　なにこれなにこの技ぁあああああ――！　ちんぽちんぽちんぽ精液精液精液ぃいいいい――！　ダブルちんぽからダブル精液出る出る出るぅうううう――！」

二階堂蓮実は一瞬にして為す術もなく、己の二本の男根から同時に精液を噴射して広範囲に大量の精液をまき散らす。

寝転んだ体勢から足を上げて、相手のペニスを挟んで扱きあげて射精させる足コキの妙



技だ。

（すっごい！　やっぱり室戸流は最強なんだ！）

美結は改めて戦慄する。

どんな相手であろうとたちどころに射精させる、古代から脈々と受け継がれる四大流派の性技。

それを体に叩きこまれている冴香に、射精させられない相手などいないのだ。

「うおおほぉおおお――！　これが四大流派の力なのぉおおお！　しゅごい、しゅごい、しゅごいのぉおおおお！　四大流派の技すごすぎぃいいい！　精液止まんない、止まんないどころか余計激しく出ちゃううう！　精液っ、精液っ、精液ぃいいいい――！　こんな射精初めて、こんな気持ちいい射精初めてなのぉおおおお！　もうオナニーなんかできないぃいいい――！　ほおっ、ほおっ、ほぉおおおお！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおお――！」

まだ寝転がったまま足コキを続けて精液の勢いを加速させる冴香を、レフェリーが顔を真っ青にして止める。

彼からしても、選手がこれほどの射精をさせられてしまう室戸流の性技を生で見て動揺と興奮を隠せないのだろう。

《なんという射精の勢いか！　これが現役四大流派の力ということでしょうか！　二階堂完全にダウン、両方のペニスから精液が止まらない！　リングの北側と東側に向け同時放射される尋常でない量の二本の精液、そちら側で観戦していたギャラリーにとっては災害かご褒美かそれすらも分かりません！　とにかく大量の精液放射だ――！》

「は、蓮実……あんたあんなに射精して、ズルい……じゃなくて、なにやってんのよバカちんぽ！」

沙織は隠し切れない羨望と共に、相方をなんとか復帰させようと声を張り上げるが、彼女自身の嬌声によりその声も届かず、相棒が限界まで精液を出すのをただ見ているだけしかできない。

そしてついに蓮実の蛇口からは、どちらからも精液が出なくなってしまい。

彼女の双根は、くたくたに萎えてしまっている。

「しゃ、射精できない……もう金玉からっぽだよぉおお……」

（ちんぽが二本あると射精の快感も二倍ですが、金玉は我々と同じく二個ワンセットしかないので、常人ふたなりの二倍早く溜めていた精液を出し切ってしまう……つまり精液切れになりやすく、勃起できずにＴＫＯしてしまいやすいのがダブルちんぽファイターの弱点です）

「ワン！　ツー！　スリー！　フォー！」

レフェリーがカウントをとる。

金玉が空になって射精できなくなったちんぽファイターは、競技を続けることができない。

萎えたペニスが十カウント以内に勃ち上がらなければ、その選手は失格となり試合から脱落する。

「ナイン！　……テン！」

《ここで二階堂蓮実失格――！　勃起できずに脱落だ――！　これで双竿学園は二回射精した上に二重橋ひとりのみ、絶体絶命です！》

「くっ……まだ負けてないとはいえ、これで蓮実は失格で私一人……あなたたち二人を相手にかなうワケないわ……ギブアップよ」

力なく首を横に振り、眼鏡の大小ペニス少女、二重橋沙織は降参の意志を示す。

これ以上どう頑張っても無駄だ。

その瞬間盛大にゴングが鳴り、美結と冴香は二回戦へと進出が決定した。

「やったー！　勝ったよ冴香！」

「まあこんなものでしょう。美結さんもよく射精させましたね」

美結と冴香はハイタッチして、勝利を喜び合う。
二本のペニスを持つ双竿学園は強敵だったが、それでも自分たちの性技とコンビネーションで一度も射精せずに乗り切った。
ほどなくしてリング上で大量射精していた二階堂蓮実が、むくりと起き上がる。
二本のペニスから限界まで精液を放出し、勃起できずに脱落してしまったために双竿はギブアップを余儀なくされたのだ。
「はあ、はあ……なんということか、まさか私が精液切れでＴＫＯとはな」
「大丈夫ですか」
マットの上で半身を起こしたままうめく蓮実に、冴香はスッと手を伸ばす。
その手を掴んで立ち上がると、複根少女は負けたにもかかわらず特有の高笑いを上げた。
「我らクアドラプルちんぽタッグを破るとは、見事なものだ！　フハハハハ！」
「もう、バカちんぽ！　なんであんたそうやって、負けても大笑いしてられるのよ！　私たちの夏は……もう終わっちゃったのよ……」
ぐすぐすと半泣きになって、眼鏡で小柄の二重橋沙織は相方へ声を裏返す。
これで自分たちは一回戦敗退、ひと夏の挑戦が終わってしまった。
ここで勝てなければ秋の関東大会にも、冬の全国大会にも進めない。

少女たちの夢は砕け散ったのだ。
そんな沙織に、蓮実は声を落として。
彼女の小さな肩に触れ、優しく言った。
「確かにこの夏は終わったかも知れないさ。だが沙織、私はまだ諦めたワケではないぞ？
最高のパートナーであるお前となら、必ず全国の舞台に出られると確信しているからな！」
「……！」
「諦めない限り、我らに終わりなど永遠に訪れんのだ！　フハハハハ！」
「……もうっ、そういうとこが……あんたのイヤなところ……なのよ」
顔を真っ赤にして小声で、沙織は泣き笑いのような顔になった。
それから改めて、四本のペニスを持つタッグは美結たちに向き合って餞（はなむけ）の言葉を送る。
「見事だったぞ聖珠コンビ！　二回戦も励むがいい！　フハハハハ！」
「私たちをイカせた以上、負けなんて許さないんだからね！」
「……うん、ありがとう！　また戦おうね！」
「お疲れ様でした。いい試合ができたことに感謝します」
美結は蓮実と、冴香は沙織と握手を交わし。
聖珠学園は、二回戦へと駒を進める。

「次の試合まで間がありますし、今のうちにお昼にしましょう。食べてすぐ試合だと気持ち悪くなってしまいますからね」

ひと呼吸を入れたあと、冴香の提案で聖珠学園の四人は自分たちのブースで昼食を摂ることにした。

途中で先ほど戦った双竿学園の二人もやってきて、束の間の和やかなひと時が訪れる。

リングの上では激しくペニスで戦うちんぽファイターも、リングを降りれば年頃の女の子。

他愛もない話やＦＴＢについての情報交換、今度一緒に遊びに行こうといった約束まで取り付けていく美結。

元気な美結と高笑いばかりしている二階堂蓮実は馬が合うのか、冴香の見ている前で急速に仲良くなっていく。

（……敵だったちんぽファイターとこんなにすぐに仲良くなるとは……これも美結さんの才能でしょうか）

おにぎりを咀嚼（そしゃく）しながら、冴香は不思議そうに少女たちの憩いを眺めていた。

他者を寄せつけない冴香と、他者とすぐに仲良くなる美結。

つくづく自分とは正反対だと冴香は思い。

だからこそ、こうしてタッグパートナーになり得たのかなどと考える。
昼食を食べ終わると双竿の二人は荷物をまとめて帰宅していき、自分たちはまた四人になる。
そろそろ一回戦がすべて終わる頃。
となれば、自分たちがしておくべきことは。
「美結さん、剛根の試合を見に行きましょう。決勝で当たる相手です、今のうちに様子を確認しますよ」
「う、うん！」
ちんぽバトルというものは、リングに上がる前から始まっている。
対戦相手の様子を見て、対策を立てられるだけ立ててから戦場に立つのだ。
特に剛根は決勝で当たる優勝候補、今のうちからその陣容と状態を知っておきたい。
冴香に連れられ、美結は試合が行われているリングへと赴く。
《……なんという圧倒的な試合運び！　まるで子どもと大人のようだ！　力でねじ伏せ勝利する、剛根のパワーファイトの前に為す術もないのか！》
実況の声が聞こえてきて、リングの上では四人のふたなり少女たちが戦っている光景が見える。

よりリングへ近づき、少女たち――とりわけ黒のリングコスチュームを身に纏う、剛根学院のちんぽファイターを美結は目に捉えた。

（あっちの子はこないだの新人戦で私がイカせた、黒崎さん！）

一年生ながら卓越した実力を誇り、黒髪ショートで引き締まった体躯と九十五センチのバスト、二十八センチの反り返った大型ペニスを持つ攻撃的なちんぽファイターだ。

足の怪我があったとはいえ、冴香は彼女に一度射精させられてしまうという屈辱を浴びせられた。

（試合には勝ちましたが、あなたへの借りはきっちり返しておきませんとね）

氷点下の炎を燃やし、冴香も静かに勃起する。

それから、相方として戦っている大柄な少女を見て。

「……ッ！」

「ど、どうしたの冴香？」

「ご……剛羅万砕子（ごうらまさこ）……!?　まさか……！」

彼女の名前を口にし、氷の美貌にヒビが入る。

滅多に見せない相棒の狼狽えぶりに、美結も不安になる。

ややあって、冴香は薄い唇を震わせて言う。

「あの大柄のちんぽファイター……あれはＦＴＢ四大流派、剛羅流の次期当主です」
「っ……！」
（四大流派ってことは、冴香と同じくらいの強さの……！）
美結は瞠目し、改めてリング上のその少女――剛羅万砕子を見やる。
第一印象は「巨大」だった。
背丈も百八十センチ近くあり、レスラーのようなガッチリした体躯。
しかしそれ以上に大きいと感じさせられたのは、彼女の股間にそびえ立つその得物。
「な、な、なにあれ!?　あのちんぽ、どう見ても五十センチはあるよ!?」
巨人の小指ほどある、恐ろしく長い上に太い男性器。
美結の二十六センチのペニスもかなりのものだが、その二倍を楽々マークしているまさに肉の巨槍だ。
たじろぐ美結に、冴香は解説していく。
「剛羅流は四大流派の中で最大の勢力を誇り、古来より『力の剛羅、技の室戸』と呼ばれてきています。禁止令が解けた明治時代に時の当主が設立した学園が剛羅學苑……今の剛根学院です。すなわちあのちんぽファイターは剛根学院設立者の直系の子孫であり、剛羅流の次期当主です」

「そ、そんなちんぽファイターが来てるの!?」

かつて母に連れられて参列した四大流派会談の場で彼女と顔を合わせたことも何度かありますので間違いはありません、と冴香は付け加えた。

新人戦では出場していなかったため、おそらく二年生か三年生だろう。

遠くからでも分かる威圧感、五十センチを超える長さでありながら重力に逆らって堂々とそびえ立つ爆根。

あんなものを挿入されてしまえば、崩壊射精あるのみ――。

そして、その予感を実現させるように。

《あああ……っ！　剛根学院の剛羅万砕子、ついに動けない田中（たなか）のまんこに自らの巨大ペニスを挿入――！　剛根の名をこれ以上ないほどに体現した五十センチ越えの極大ちんぽが突き刺さって……！》

「がぁあああ――！　まんこごわれだぁあああ――！　まんここわれて気持ちぃいいい――！　まんこ壊されて射精してるのぉおおおおお――！　ごえぇっ、おごぇあああ……！　おごぁあああちんぽぉおおお！　ちんぽきぼぢいいっ、まんこごわれでぢんぼぎもぢいいよぉおおお――！」

相手の選手はもはや人のそれではない嬌声を上げ、女の子としての大切なところを一瞬

で破壊され。

その衝撃と快楽によって、強羅のものと比べれば爪楊枝にすら見えるペニスからあらん限りの白濁液を強制射精させられていた。

「ひ……っ、ひいいっ……！」

あまりのおぞましさに、美結は無意識に後ずさる。

あの射精はダメだ。

彼女のペニスは武器でもなければ凶器でもない。

ちんぽファイターを抹殺――否、もっと単純に「破壊」するためのものだ。

最初にして最後の、最高の快楽。

それこそが、彼女のもたらす崩壊射精かと本能で察する。

「死ぬぅうう――！　しぬ、しぬっ、しんじゃうううううう――！　しんじゃうよぉおおお――！　ちんぽ気持ちよくて死んじゃうのぉおおおお――！」

《こっ、これはいけません！　ドクターストップがかかりました！　試合終了、終了です！》

「剛羅、もうダメだ！　ストップストップ！　相手死ぬぞ！　剛羅！」

レフェリーが強制的に試合を止め、スタッフ総出で崩壊射精中の少女をリングから下ろ

して会場内の医務室へと担架で運び出していく。
あまりの様相に、観客も騒然どころか沈黙して。
ところどころで、囁き合うように「やりすぎだろ……」「これが剛根のやり方……」「あの子はもう、かわいそうだけどちんぽファイターとしては……」などと言った声がかすかに耳に入る程度。
リングを降りた剛羅と黒崎は、無言でただならぬ威圧感を発しながら歩き、周囲の人間は勝手に彼女らの道を作るように左右へ開けていく。
そうして彼女らは、試合を観戦していた美結たちのそばまでやってきた。
「……」
「っ……」
ごくり、と唾を飲む美結。
あまりの威圧感で、声も出ない。
すると剛羅は「お前が天音美結か」と美結へ向けて口を開く。
かすかに首を動かして頷くと、巨大ペニスの持ち主は遠雷のような低い声で言った。
「春は黒崎が世話になったな。だが我ら剛根の看板に精液を塗ったままではおけん。お前たちは必ず、決勝で崩壊射精させて屈辱を雪がせてもらう」

「天音……決勝まで敗北射精するな。お前は必ずこの私がイカせてやる」
前回の戦いで美結に負けた黒崎夏希も、その鋭い瞳に復讐の炎を燃やして美結を睨んでくる。
それから剛羅は冴香の方に目をやり、威圧的に声をかけ。
「……久しいな、室戸流」
「どうも」
冴香も冷ややかな視線と、抑揚のない声で返す。
「剛根に姿がないと思えば、まさかこのような無名の学園にいたとはな。四大流派は例外なく剛根へ進学することが決まっているはずだが？」
「権利であって義務ではありませんよ。気まぐれで進学先変更したんです」
「噂には聞いている、お前は次期当主の座を――」
その瞬間、冴香の顔が険しくなり。
北極の風のごとき冷たい声で、巨大ちんぽファイターを押し留める。
「それ以上無駄に上の口を開くようなら、リングで下の口にちんぽ挿れますよ」
「それでどうする、よもやその三十二センチの短小ちんぽで敗北射精させられると？」
四大流派同士の、裂帛のごときちんぽ闘気がぶつかり合う。

構図が絵になるのだろう、遠巻きにカメラが回りフラッシュが焚かれているが、当人同士は気にも留めない。

十秒か一分か、美結にとっては永遠にすら思える睨み合いの後。

先に視線を外し、自分たちに背中を向けたのは剛羅だった。

「フン、決勝までにわざと負けて逃げるなよ」

「むしろそうして欲しいのでは。あなた方の面目を保つ唯一の手段ですものね」

「行くぞ、黒崎」

相方の一年生を連れ、剛羅はまたも人の波をかき分け――向こうが勝手によけていくのだが――美結たちの前から姿を消す。

ややあって、美結はハッと我に返り。

すぐそばで冷たいちんぽ闘気を放っていた冴香に、恐々と声をかける。

「さ、さ、冴香、すごかったね……私、間に入れる雰囲気じゃなかったよ」

「いえ、口ではあのように強気でしたが実際のところ私もガクブルです。剛羅流は半端ではない……まともにやり合えば私とて……」

その声は、緊張が抜けたのか打って変わって弱々しく震えていた。

圧倒的なまでの彼女のプレッシャーに、相当必死に虚勢を張っていたことがわかる。

「四大流派筆頭の剛羅は、やはり圧倒的……私でも勝てるかどうか……」
「そんなことないっ！　私と冴香だったら絶対優勝できるから！」
「美結さん……」
弱気になろうとする冴香の手を、美結は取って強く言った。
彼女の手はわずかに震えていたが、相棒の熱を感じてそれが止まる。
「私たちであの二人に、大勢のお客さんの前でみっともなくて気持ちいい敗北射精させてあげようよ！」
「……そうですね。私一人で彼女と戦うわけではありませんし」
フッと笑みが零れ、冴香はようやく張り詰めていた表情を緩めた。
「頑張りましょう、まずは二回戦です」
「うん！　絶対決勝まで行ってやるんだから！」

二回戦の相手は征茎学館と名乗り、出てきたちんぽファイターは顔も髪型も体型もペニスの大きさと形に至るまでほぼ完全に同一だった。
つまりは双子。
櫻崎花燐・花憐と名乗ったちんぽファイターたちは、長年一緒にいるゆえか連携こそ巧

みであるものの地力はそこまで高くないようで、すでに片方が一回射精している。
このまま二回目の射精も味わわせ、流れを一気に引き寄せたい。
「やあ――っ！」
美結はロープの反動を利用して、ランニングラリアットを仕掛ける。
勢いを倍加させた突撃は砲弾のごとき威力だが、櫻崎はこれを跳んでかわし。
（しまった、よけられ……）
と思えば、目の前からいなくなったはずの櫻崎がまた目の前に。
（あれ、よけられたハズ……？　ちがう、これはもう一人の！）
「かかったわね！」
一瞬動きを止めた美結に、正面から櫻崎が抱き着いて。
さらに後ろからも、同じ顔の少女が抱き着く。
双子は重なっていたのだ。
片方が美結のラリアットをかわし、かわされた美結は一瞬動きを止めてしまうが、そこで一人目の背後に隠れていたもう一人が正面から美結の身動きを封じ、背後に回っていた一人目の櫻崎が後ろから美結に抱き着いて。
《あーっと早くも双子の幻惑戦術！　かわされたはずなのにまだ目の前にいた、この一瞬

の動揺を突いて前後から双子は天音を捕らえます！　そして逃げ場を奪われた天音のペニスに、容赦なく二枚の舌が迫りくる！》

「くっ、くひぃんっ……だ、だめ、お尻の穴ぺろぺろしないれぇ、あはぁあちんぽしゃぶらないでぇえ……！　ケツ穴舌で甘くほじられながらフェラはダメなのぉ……！　ちんぽきもちいい、もうちんぽ気持ちよくなっちゃうっ……！」

双子の片方は後ろから美結の肛門へ舌を伸ばし、ちろちろと少女の敏感なアナルを舐め上げて快感を高め。

もう片方は前方から、美結の二十六センチペニスを咥えて前後にストロークする。

「どう、私のアナル舐め？　お尻の穴を舌でほじられると気持ちよくて、精子出したい出したいって気持ちがみるみる高まっていくでしょ？」

「それを私のフェラで一気に加速させて射精に導く……すでにあなたは私たちの手中に落ちたのよ」

《前はフェラチオ、後ろはアナル舐めだー！　さらに双子の四つの手が天音の金玉と竿を優しく愛撫していく！　これは苦しいっ、これは気持ちよさそうだー！　まさに以心伝心、双子ならではのコンビネーションちんぽご奉仕攻撃――！》

「ちんぽ、ちんぽちんぽぉおお――！　ちんぽイクっ、精液出ちゃう、精液上がってきて

るぅううう……！　イク、イクイクイクイク、イっちゃう……敗北射精きちゃうのぉおおお……！」

「しっかりしてください、一度下がってちんぽ落ち着けて！」

美結の快感は加速度的に高まり、敗北の証が尿道を駆け上がって今にもあふれ出しそうだ。

その刹那、コーナーから冴香がカットに入り美結のアナルを舐めていた双子の片方を引き離す。

《室戸がカット！　天音、辛くも射精を免れた！　しかし絶頂寸前、ちんぽがヒクついているのが実況席からでも分かります！　ここでタッチして交代、征茎の双子も片方が下がった！》

（本当にどちらがどちらか分かりませんね。この幻惑戦法が彼女らの強みでしょうか）

美結を下がらせて前に出た冴香は、眼前で構えている双子の片方を見て思う。

ペニスは二人とも二十センチ強と平均的な大きさだが、厄介なのはちんぽ攻撃力よりも彼女らのコンビネーションだ。逆に言えば単独でのちんぽ戦闘力はそこまで高くないと冴香は踏む。

（分断させて各個射精がベストですね）

となれば、パートナーが入ってきにくい自軍のコーナー近くに誘導して射精させるのが最善手。

つかず離れずの位置をキープしながら、適当に櫻崎の攻撃をいなしていく冴香。

徐々に櫻崎をこちら側のコーナーへ近づけていくが。

「冴香！　もう一人、後ろにピッタリくっついてる！」

美結の声で、その目論見も崩れていたことを知る。

シルエットが全く同じであることを利用して、双子のもう片方は影のように片方の背後にピタリとくっつきながら二人で冴香に接近していた。

そして櫻崎は、冴香の目の前で二人に分裂し。

「くっ、ああっ！」

《室戸捕まった――！　左右からのダブルフェラ、これも強烈――！　片方が亀頭を吸いもう片方は裏筋を舐める、かと思えば四本の手で金玉を優しく転がしながらの激しい手コキ！　ああっと今度は両側から舌で同時に舐め上げる！　変幻自在で複雑な一糸乱れぬ連携快楽ちんぽ攻めは幼い頃から一緒に暮らしていた双子だからこそできる芸当であります！」

「ほっ、ほぉおおっ……！　こっ、こんな、こんなので私のちんぽが……っ」

「冴香！」

幸いにもコーナーの近くだったためカットが間に合った。美結が片方を引き離し、もう片方は冴香が自力で跳ねのける。

《室戸のピンチに天音がカットに入ります！　まだ聖珠は射精しておりません、しかしながら征茎のコンビネーションちんぽ攻めに苦戦している！　この連携が並み居る敵校をイカせてきたといっても過言ではありません！　タッグデビューしてまだ三戦目の聖珠ペアには厳しいか！》

「私も美結さんも、ちんぽに快感が溜まってきてしまいましたね……不利な局面です」

冴香は立ち上がり、着物コスチュームを直しながら呟く。

姿が全く同じことを利用して、片方がもう片方に隠れるようにして不意の連携攻撃を仕掛けてくる。

それを見破らなければ、次こそ射精してしまいかねない。

「無駄よ無駄！　私たちのコンビネーションちんぽに勝てる道理はないわ！」

「たとえそれが四大流派、室戸流であってもね！」

今度は隠れもせず、堂々と二人で襲い掛かってくる双子ちんぽファイター。

しかし冴香のエメラルドの瞳は、輝きを失ってはいない。

「侮らないでください、室戸流はこの程度で敗れる浅い流派ではありません」
（常に二人で来るのなら、二人同時に射精させるまで！）
強引に盤上をひっくり返し、一気にけりをつけんとちんぽパワーを解放する。
「室戸流奥義、『花』の十五手――」
「！」
次の瞬間、冴香の姿が消え。
直後に一陣の風がリングに奔り、続いて二度、三度。
あちこちから、突風が吹き荒れリングを横切っていく。
「わっ……！」
「な、なんだぁあ!?」
観客が騒然とし、美結も腕で突風から顔をかばう。
《こっ……これはっ！　室戸の姿が消えた!?》
吹きすさぶ風は、四方八方から一直線にリングを飛び交って。
それが十五、六回続いた後、最後に特大の一撃がリングを斜め一直線に切り裂く。
「――『百花繚乱（ひゃっかりょうらん）』」
そして再び姿を現した冴香は、コーナーポストの上に乗っていて。

次の瞬間、二本の精液柱がリングから噴き上がった。
「んほぉおおあああ――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおおおお！　精液精液精液いいいい――！　精液出てる、出てるのぉおおお！　いきなり精液大量噴射最高ぉおおおお！　双子ちんぽからダブル射精見てぇえええ――！」
「射精、射精、射精ぃいいいい！　敗北精液お姉ちゃんと一緒に出してるぅううう！　なんでイってるのか分かんないけど敗北射精気持ちいいからどうでもいいのぉおおおお――！　んほおおおお！　ちんぽちんぽちんぽイクぅううう！　お姉ちゃんと一緒に射精するところみんな見てぇえええ――っ！」
《なぁんとぉおお！　征茎双子ペア同時に射精！　いったい何が起こったのか！　室戸が消えて次に姿を現したら双子が同時に射精していた！　ご覧の皆様にも何を言っているか分からないと思いますが私も分かりません！　分かるのは我々の肉眼では捉え切れない早業を室戸が披露したということだけです！》
実況が、観客が混乱する中、冴香は満足そうにコーナーポストから降りてぱんぱんと軽く手をはたく。
「少々本気を出し過ぎましたが、いかがです」
「さ、冴香……いったい何をしたの!?」

相棒の美結であっても、彼女の絶技を前に理解が追いつかず困惑するばかり。
本当に見えなかったのだ。
リング上ではまだ双子が、猛烈な勢いで精液をぶちまけながら絶叫している。
《ご覧いただきましょう、ハイスピードカメラが捉えた映像です！》
実況の声とともに、会場の天井から吊り下げられている巨大スクリーンに先ほどの映像がスーパースローで映し出される。
冴香が口を動かして、それから姿を消したところだ。
《ここで消え……いや、横のロープに飛び乗っていた！　それから対面のロープに向かって跳んでいる！》
肉眼で見えなかった彼女の動きが、一般人の目にも明らかになる。
《その通過中に櫻崎のペニスを扱いて……さらにまた飛び移ったトップロープからジャンプしてもう片方の櫻崎のペニスに触れつつ反対側のロープへ！　これを繰り返していたのか――！　肉眼では見えない超神速！　そして最後の一飛びでは二人を直線上に捉えてそれぞれのペニスを扱き抜きながらコーナーポストへ……そしてここで蓄積していた二人の快楽が一気に爆発して射精したと！》
うおおおお、とここでやっと真相を知った観客たちが熱狂する。

リング上に吹き荒れていた突風は、冴香がロープからロープへ跳び移っていた際に発生したもの。

わずか数秒の間に十数回の跳躍、およびその過程で無数の手コキを行い、攻撃が終わると同時に二人の快感は爆発して同時敗北射精したというわけだ。

《今ようやく、ようやく明らかになりました！　なんという早業、これが室戸流の真髄か！四大流派の実力は計り知れない――！》

「すげえ、すげえよ室戸！　奥義って言ったよな！　あれが最強の技なのか⁉」

「いや十五手だぞ、たしか室戸流の性技は『雪』『月』『花』でそれぞれ十六手、合計で四十八手あったはず」

「十六手目は中世から近世にかけて用いられていた殺人技ですね。試合では封印されていますので、実質あれが最強技のひとつということになるでしょう」

「なんにしても神業じゃね、あれでなんで正統継承者じゃねえんだよ」

観客たちが熱狂する中、美結も冴香の強さに改めて戦慄し、痛いほどにペニスを勃起させる。

（すごい、すごいよ冴香……！　剛根だって、剛羅流だって目じゃない！　室戸流は最強なんだよ！　絶対優勝できるじゃん！）

あの絶技を前に射精せずに耐えられるちんぽファイターなど、想像もつかない。
試合前に絡んできた剛根学院の剛羅万砕子であろうとも、あの『百花繚乱』の前には無力に違いない。
優勝は決まったようなものだ。
ゴングが鳴り響き、ここで試合終了が告げられる。
「これぇえ！　これがしたかったのぉおお！　リングでっ、お客さんの前でっ、だらしない敗北射精したいためにちんぽファイターになったのぉおおお！　勝つよりも負けて射精するほうがいいのぉおおお――！　ちんぽちんぽ精液精液、敗北ちんぽから無様射精うれしすぎるよぉおおお――！」
《姉妹ともに最高の敗北射精を味わっております！　この瞬間、聖珠学園の天音・室戸ペアが三回戦へと駒を進めました！》
二回戦、征茎学園の櫻崎双子。
彼女らも抜群のコンビネーションで攻めてくる強敵だったが、冴香の奥義により一気に流れを引き寄せ、そのまま勝利した。
リングを降りた美結は、顔を輝かせて興奮冷めやらぬまま続いて降りてきた冴香に抱き着く。

「冴香、すごかったよあの奥義！　あの技さえあれば私たちの優勝は決まったも同然だよね！」

「……いえ、久しぶりに出したので少しキレが鈍っていました。それに剛羅万砕子が相手では、この奥義ですら力不足かもしれません」

しかし、銀髪美少女の顔は晴れなかった。

美結にとっては無敵の快楽攻撃に見えたあの奥義ですら、剛羅流には及ばないという。

さすがの元気系少女も快晴から曇天に表情を変え、「そ、そんなに強いの……？」と沈む。

「ともかく、油断しないで行きましょう、美結さんにも頑張っていただかなければ優勝は難しいですから」

「う、うん！」

これで自分たちは三回戦進出、今日の試合はあと一回だ。

聖珠学園は、順調に勝ち上がっていく。

「……あれが室戸流の奥義の一つ、百花繚乱……か」

「剛羅副部長、あれをどう思われます」

一方で。

腕を組んで今の試合を観戦していた剛羅万砕子に、横から黒崎夏希が声をかける。
美結たちが剛根の試合を観戦していたように、彼女らも聖珠学園の試合を見て対策を練ろうとしていた。
が、その必要もなかったとばかりに剛羅流次期当主は鼻で笑い。
「フ……大したことはない」
そうして、過去の冴香を脳裏に描きながら思う。
（室戸流の……弱くなったものだな。かつては氷の修羅とさえ呼ばれ数多のちんぽファイターを震え上がらせてきた貴様が、あの程度の相手に軽々しく奥義を披露するなど。しかもその奥義の威力も、思ったほどのものでもないとくれば）
「我ら剛根の勝ちは揺るがん。決勝もつまらんものになりそうだ」
ザッ、と踵を返して、剛羅はリングから離れて歩き出す。

「んはぁあああ――！　ダメダメダメ、ちんぽちんぽちんぽいっくぅうううううう――！　情けない敗北射精きちゃうのぉおおおおお――！」
《イった――！　二回目の射精だ――！　娟夢（けんむ）学園の北条亜理紗（ほうじょうありさ）、背後に回られた天音に

よる九十センチの豊満なバストを背中に押し付けられながらの金玉揉み手コキで三十秒持たず、二発目となる白濁液を高く高く噴き上げております！》

三回戦となる、娟夢学園戦。

ここまでの二戦を勝ち上がってきた相手だからどの程度かと思えば、ちんぽ攻撃力もテクニックも低い二人は美結と冴香にそれぞれ一回ずつ射精させられ、早くも勝利にリーチがかかった。

（運だけで勝ってきたような相手ですね。私たちタッグの前には通用しません）

コーナーから試合運びを見ていた冴香も、自分たちの勝利を確信していた。

ここまでの三戦、自分たちはまだ一度も射精していない。

まさに快進撃といった勢いだ。

「よしっ、これであと一回イカせられれば！」

レフェリーに引き離された美結はニュートラルコーナーで呼吸を整えつつ、入れ替わりで出てくる相手校の選手を待つ。

射精した少女は自軍のコーナーに引っ込み、控えの少女と何やら話している。

「やっぱりまともに戦って勝てる相手じゃないわ……アレを使うのよ」

「……そうね、アレしかないわ」

（アレとは……？）

彼女らの会話を、冴香の耳は拾っていた。

何かよからぬことを企んでいるらしい。

反則行為は五カウントで負けだが、逆に言えば四カウントまでなら許されるということ。

追い詰められた相手が最後のあがきに何をしてくるか、油断はならない。

「よーし、このまま一気にっ！」

「美結さん、ダメです！」

が、美結は彼女らの会話が聞こえていなかったのか、出てきた相手校の選手にタックルを仕掛けて転倒させ、そのまま少女の下半身に覆いかぶさった。

《おーっと北条に代わって出てきた娼夢学園の石川麻友（いしかわまゆ）、あっさりと天音に倒されて男根を咥えられた――！　このままフェラで三回目となる敗北射精か――！》

「んむっ、じゅぷぷっ……ほら、気持ちいい？　気持ちいいミルクいっぱい出せるよ？　最高の敗北射精のお手伝いしてあげるから……」

一気に口で射精させようと、勢いをつけた前後運動で石川のペニスに刺激を与えていく美結だが。

「フフ……かかったわね！」

それを待っていたかのように、石川は脚で美結の身体をガッチリと捕まえた。
《ああっと!?　天音の口まんこに囚われた絶体絶命の石川、ここで自ら脚で天音の身体をホールドしました！　これはどういった戦略なのか！》
逃げなければ敗北射精してしまう状況下、逆に美結の身体を搦め捕る石川麻友。
今現在も彼女の男性器は、美結の口によって甘く激しい刺激が与えられているのにもかかわらずだ。
（いけません、やはり何かしようとしています！）
《室戸が危機を察知して助けに入った！　しかし間に合うのか!?》
「無理よ、この距離では逃げられないわ！　食らいなさい！」
そう言って石川は、美結を捕まえたままリングコスチュームの懐から何かを取り出して。
（スマホ……？）
「美結さん！」
取り出された薄くて小さな液晶画面から、サイケデリックな色合いの怪光線が放たれ。
美結を突き飛ばす形で彼女をかばってその光をまともに見てしまった冴香は、その場でぺたんと崩れ落ちた。
《おあああ――っと、これはいったい何が起きた！　天音をかばって妖しい光線を浴びた

室戸、糸の切れたマリオネットのように崩れ落ちた！　これは反則ではないのか！　レフェリーは相方の北条と何やら揉めていて暴挙に気づいていません！》

「さ、冴香!?　どうしたの？」

脚絡めから解放された美結が這いよって声をかけるが、冴香はぼんやりとあらぬ方向を見て思考停止している。

まるで中身がどこかへ行ってしまい、ここにいるのは抜け殻であるかのようだ。

「あ、あなた！　冴香に何したの!?」

驚きと不安と怒りをないまぜにして美結は相手校に問い詰めるが、敵ちんぽファイターたちは余裕の笑みを崩さない。

「フフ……すぐに分かるわ」

「我が校の科学部が作り出した、最新鋭の催眠アプリのね！」

（催眠……アプリ!?）

美結が考えようとした瞬間、横で相方の少女がゆらりと立ち上がった。

「冴香！　大丈夫!?」

「……」

声をかけるが、銀髪の着物美少女は何も返答しない。

ぎごちない動きで美結に向き合うと、次の瞬間両手で相棒を突き飛ばして尻もちをつかせた。

「きゃっ！　さ、冴香なにして……」

「みゆ……さん……」

そしてそのまま、スルスルと美結の身体にのしかかっていき。

彼女のスカートからのぞく二十六センチのペニスに、何のためらいもなくむしゃぶりついた。

「な、さ、冴香っ！　何してるの!?　冴香！」

《これはいったい何事か！　室戸冴香、味方であるはずの天音のちんぽを咥え込みフェラを始めてしまった――！　いきなりどうしてしまったのでしょうか、ＦＴＢにおいて自らの首を絞めるだけの味方への快楽攻撃！　何を、何を考えているのか！》

「冴香っ……ひいんっ、ダメぇ……ちんぽしゃぶるのダメ、やめてぇ気持ちよくなっちゃう、ちんぽ気持ちよくなっちゃうよぉ……」

（どうして、どうしてなの!?　なんで急に私のちんぽしゃぶり始めちゃったの!?）

混乱に快楽が上乗せされ、美結の思考力は著しく低下していく。

そしてその中で、一つの仮説に至る。

（まさか、催眠アプリってそういう……！）

催眠と言うのだから眠らせるのかと思っていたが、よもや冴香の自我を奪い操り人形としてしまうのか、と。

「フフフ、今ごろ気づいてももう遅いわ！　天音さん、あなたは味方にイカされてちんぽから敗北精液びゅーびゅー出しちゃうのよ！」

「そ、そんな……！　あはぁああっ、ちんぽぉおおお！」

相手校の北条が得意げな顔で言ってのけ、美結は絶望しそれもすぐさま快楽に置き換えられる。

（さ、冴香は操られて私のちんぽしゃぶらされてるんだ……なんとかしないと、このままじゃ射精しちゃうっ……）

《これは明らかな反則行為であります！　今大会では武器や凶器、および性感を高めるためのアイテムの持ち込みは禁止されている！　催眠アプリはこれらに含まれませんが事実上同様のアイテムと見ていいでしょう、あーっとさすがにレフェリーがカウントを取っております！》

リング上では冴香に怪光線を浴びせた石川に、レフェリーが反則のカウントを取っている。

しかし。

「そうね、アイテムの持ち込みは禁止だったわね。なら……こうよ！」

《あ――っ石川、携帯をリング外へ投げ捨てた――！　これではアイテムを持ち込んでいないということになってしまう！　反則カウントが四で止まってしまいました！　続行、続行です！》

「そ、そんなぁ……！　こんなのおかしいっ……いやぁああちんぽ、ちんぽぉおおお――！　冴香、やめて、ちんぽ気持ちよくするのやめてぇえええ――！」

反則カウントが止まってしまった以上、試合は続行されるのみ。

さすがに観客も四方から娼夢学園の卑劣な行いにブーイングの嵐だが、相手二人は気にも留めていない。

さらに携帯を捨ててもまだ催眠の効果は残っているらしく、冴香は正気を失った瞳で美結の巨根を咥え込み、舐め上げ、亀頭を手のひらで擦り上げ、正確かつ丹念な技巧で射精させようとしてくる。

「さ、冴香、しっかりして！　正気に戻ってよぉ！」

「何を言っているんれす？　私は正気ですよ、んちゅっ……正気で美結さんのおっきなちんぽ、イかせたいと思ってるんれす。早く精液出してくらはい、じゅるるるっ」

美結の言葉に冴香はようやく答えたが、明らかに正気でない声色でひたすら快楽攻撃を続けてくる。

（ひ、ひどい！　完全に催眠アプリで操られちゃってる！）

どうにかして催眠を解除して冴香を正気に戻さねば、このまま同士討ち射精させられてしまう。

射精したら負けに直結するＦＴＢにおいて、味方同士で快感を与え合って射精してしまうほど無意味な行動はない。

「美結さんのちんぽ、おいひぃ……はむっ、んじゅるるっ、んぷちゅ……っ、ずっと美結さんのちんぽしゃぶって、まっしろな敗北精液いっぱい出させたいって思ってたんれす……」

「そ、それは練習でさんざん……はっ、はぁああんっ！　あっ、あはあっ、はあああああんっ！　ちんぽぉおお、ちんぽしゃぶられてっ、洗脳冴香にちんぽしゃぶられて気持ちいいのぉおおお！　ダメ、ダメ、イクイクイク、ちんぽイっちゃうぅうう……！」

《天音、味方に襲われて絶体絶命のピンチだ――！　このまま射精してしまうのか――！》

会場のファンたちも、必死に耐える美結に声援を送っている。

相手校の二人は射精後の余韻から完全に回復してしまい、ニヤニヤ笑って自分たちの共食い行為を眺めている。

そして、ついに。

「ああっはぁあああああ――！　ちんぽぉおおお――！　射精、射精っ、射精きたぁあああああああ――！　この大会で初めての敗北射精きったぁあああああああ――！　気持ちいいっ、気持ちいいっ、精液出すの気持ちいいよぉおおおお――！」

《ダメだ――！　天音美結、味方の室戸によって自殺点射精だ――！　室戸流の性技をまともに受けて為す術もなく大量の白濁液が噴き上がる――！》

ファンからの悲鳴が上がり、電光掲示板には美結の名前の横に赤いランプが一つ灯ってしまう。

これで一回射精、あと二回射精してしまえば自分たちの逆転負けだ。

「さえかぁあああ――！　お願い冴香、正気に戻ってぇえええ――！　おほぉおおおおちんぽちんぽちんぽ、味方にイかされるの気持ちいいっ、大切なパートナーに射精させてもらうのすっごく気持ちいいのぉおお！　こんな射精したくなかったのにっ、こんな射精したくないのにすごい気持ちいいいいいいい！　オウンゴールミルク気持ちいい――！」

「美結しゃん、すてきれす……みゆしゃんの敗北しゃせい、リングでのみっともない無様

な射精、私ずっと見たかったんです……ほんとはずっとずっと私の手で美結さんのこと試合でイかせたくて……でも味方だからできなくて……だから今こうして射精させられて本当に幸せれす……」

エメラルドの瞳は光を失い、うつろな緑暗色に沈んでいる。

その死んだような目で、着物コスチュームを淫らに崩しながら美結の身体に覆いかぶさり、甘い吐息が亀頭にかかって美結はさらに興奮する。

「冴香、あなた操られてるのっ、そんなことほんとの冴香は思ってないのぉおおお！　こ、こんな状況でぇえぇ……！　こんな状況でも見境なく射精しちゃう私のちんぽはしたないよぉ……おほぉあああちんぽぉおお――！　味方にちんぽイかされてフレンドリーザーメンファイアするの最高らよぉおおお――！」

《精液が止まらない！　天音、自慢の巨根から大量の敗北ミルクをまき散らしております！　敵にイカされるならまだしも、味方によって射精してしまうとはなんたる無念！　それもよりによって室戸流の性技で絶頂してしまった――！　味方にすれば頼もしい彼女が敵に回った時の恐ろしさ、それはこの精液の量、そしてもはや固体ともいえるその濃さを見れば明らかであります！》

「あはぁあああちんぽぉおおお――！　ゆるしゃない、ゆるしゃにゃいのぉおおお！　わた

ひと冴香の絆を断ち切って同士討ち射精させたあんたたちのこと、ぜったいぜったいゆるしゃないんだからぁあああ――！」

「そんなにみっともなく射精しながら何言ってるのかしら、味方にイカされて精液出してる天音さん？」

「フフフ、これでもう終わりね聖珠も」

広範囲に大量射精しつつ、焦点の定まらない目で娟夢学園の二人を睨んで呂律の回らないまま叫ぶ美結だが、当然怖さも威圧感もあったものではなく、むしろ二人に鼻で笑われる始末。

屈辱この上ない。

「ちんぽちんぽ、ちんぽぉおおおおお――！　さえかおねがいっ、ちんぽから離れてぇ、イキ続けてるちんぽしゃぶって精液の勢い強くしないれぇえ！」

（ほぉおっ、ほぉおおおお、ちんぽ、ちんぽぉおおおお……待ってて冴香、絶対正気に戻してあげるから……そしてそのあとはあの二人を射精させて、お仕置きの公開陵辱してあげるんだからあ……っ）

快感と恥辱に顔を真っ赤に染めつつ、美結はいまだドクドクと射精しながら反撃の機を窺う。

《聖珠サイド、大混乱に陥っております！　相手校の持ち出した催眠アプリにかかってしまった室戸冴香、正気を失って味方の天音に襲い掛かり自殺点射精させてしまいました！　これで一対二、圧倒的優位だった聖珠がよりによって内部崩壊しようとしている！》

敵の卑劣な罠にかかり完全に理性と自我を失った冴香は美結の下半身にのしかかり、手と口と舌で美結の射精し続けるペニスを執拗に愛撫して精液の勢いをけしかけている。

このままでは美結は勃起できなくなり、試合から脱落してしまう。

そうなったら射精回数がまだ残されていても、敗北待ったなしだ。

「ダメダメダメダメぇえええ！　もうやめて冴香、ちんぽこれ以上気持ちよくしないれぇえええ！」

（な、なんとかして、なんとかして冴香の催眠を解かないとっ……ほんとに負けちゃうよぉ……！）

すでに五分近く美結は精液を会場にまき散らし、リング周囲前列から中列までの観客は彼女の精液を一人残らず浴びて大満足げだ。

だが美結本人は最高の快楽を享受しつつも、こんなところで敗退射精するわけにはいかないというちんぽファイターとしての矜持がまだ残っている。

相手はすでに二回射精しており、この状況を乗り越えれば勝てるのだ。

（も、もう、こうなったら！　冴香、ごめんっ！）

《あーっと天音、射精しながら掌底で室戸を突き飛ばした！　室戸、マットをゴロゴロ転がってコーナーポストに激突してそのままダウン！　今ようやく味方からの快楽攻撃から解放された天音ですが状況は非常に不利です、レフェリーが彼女のちんぽチェックを行っております！》

「は、はあ……はあ……ほら見てレフェリー、私のちんぽ見てぇ！　精液まみれでいやらしく勃起してる私のちんぽしっかり見てぇえ！　まだ勃起してるから！　まだやれるからっ！」

「ＯＫ天音、試合続行！」

レフェリーの眼前に己の武器を堂々と見せつけ、試合続行の意思があることをこれでもかとアピールする。美結の闘志はしっかりと彼に伝わった。

《続行、続行です！　まだ彼女の闘志と男根は折れておりません！　洗脳された室戸はダウンしましたがこれでなんとか一対二、先ほどよりは好転したと言えるでしょう、しかし大量射精で敏感になったペニスはよりイきやすくなっております、ここが天音の正念場だ！》

「絶対に許さないからね！　いっくよー！」

肉棒をぶるんと揺らしながら、美結は催眠をかけた張本人である石川麻友に狙いを絞って突っこんでいく。

相手そのものは強くもなんともなく、反則手段に頼らないと勝てないちんぽファイターだ。

現に自分の力量でも、すでに一回難なく射精に持っていけている。

が――。

「おっと、私たちにかまけていていいのかしら？」

「後ろを見てごらん、天音さん」

彼女らは余裕の笑みを消さず、美結の背後にいる冴香を指さして。

振り向くと、そこには掌底で突き飛ばされた冴香がぼんやりとした表情で立ち上がっている。

「――室戸冴香、オナニーしなさい」

「っ！」

その意思を持たない冴香に、北条亜理紗の命令が飛ぶと。

銀髪の美少女はコーナーポストにもたれかかったまま、自らの肉棒をズルリと取り出してその場で扱き始めた。

「さ、冴香っ⁉」
「は……はあっ……ちんぽ、ちんぽ気持ちいい……リングでちんぽオナニーするの気持ちいいですっ……」
《なんとこれは！　室戸、気絶から復活したかと思えばコーナーで自慰にふけり始めた！　自らの三十二センチ包茎ペニスを扱きながら、美貌をだらしなく緩ませて数万の観客の前で公開オナニーショーを開催している――！》
（催眠の効果がまだ残ってるんだ！）
愕然とする美結に、娼夢学園の二人はさらに絶望的な言葉を口にする。
「さあ、分かるわよね天音さん？　『射精しろ』って命令されたくなかったら、どうすればいいか」
「く……っ、卑怯だよっ！　それでもちんぽファイターなの⁉」
「卑怯なんてのは負けるほうの言い訳なのよ。さあ室戸さんに射精してほしくなかったら、両手を頭の上においてガニ股ポーズでちんぽ突き出しなさい」
あまりの悪辣非道ぶりに美結も怒るが、冴香を人質に取られてはどうしようもない。
相手に命令されるがまま、リング中央で腰を落としてペニスを突き出して自分から奉仕をねだるというちんぽファイターとして最低の格好をしてしまう。

《卑劣――！　こんなことがあっていいのでしょうか、天音、室戸を人質に取られて動けない――！　打つ手がなくなった天音のペニスを、北条亜理紗がねちっこく舐め上げていく！　天音無抵抗だ、女の子なのに足をいやらしく広げたみっともないポーズでされるがまま、どうしようもありません！》

「くっ、んううっ……ち、ちんぽ、ちんぽぺろぺろしないれぇ……」

無理な体勢、屈辱、そして快楽により足を震わせながら、美結は必死に恥ずかしいポーズを維持しつつ口技に耐える。

（さ、冴香の洗脳は時間で解けるかもしれないからっ……それまで私が我慢していれば、洗脳の切れた冴香が助けてくれるからぁ……！　だからこうしてガニ股でちんぽ突き出して自分からフェラしてもらうのだって仕方ないっ、仕方ないのぉ……！）

だが、そんな美結の必死で健気な思いはあっさりと打ち砕かれ。

冴香は美結の後ろで、あっさりと自ら果てて精液をぶちまけてしまう。

「ああっはぁあああ――！　ちんぽぉ、ちんぽぉおお！　リング上で公開オナニー射精気持ちいいいいいいい――！　見て、見てぇえええ！　私の射精見てぇえええ！　神聖なリングでオナニーして射精する背徳感と解放感がすごいのぉ、よりによってＦＴＢ四大流派がリングでオナニーするっていう絶対にやっちゃいけないことやってるのぉおおお――！



ああっはあああちんぽちんぽちんぽ、ちんぽ、ちんぽ、ちんぽイっくぅううう――！　オナニー精液大量にでてりゅぅううううう――！」

《だ――！　室戸、オナニーで自ら大量の敗北射精――！　ちんぽファイターとして、ＴＢを牽引する四大流派として、最もあってはならない行為に及んでいる！　これはいけません、あまりの大量射精、あまりの快感だ！　聖珠学園これで二回射精、圧倒的優位からがけっぷちに追い込まれた――！》

皮余りのペニスから放水車も顔負けの大量放射。リングの上でオナニーするという背徳感が彼女の興奮を何十倍にも後押ししているのだろう。美結は冴香の射精を見るのは二度目だが、前回の新人戦の時よりも数段濃度の高い白濁液が大体育館の吹き抜けの天井にまで噴き上がりリングとその周囲の観客に無差別に降り注ぐ。

熱くドロドロな液体と固体の中間物質は、さながら溶岩のごとし。

室戸冴香は己のペニスという活火山から、容赦なくそれを噴き上げて会場中に大災害を巻き起こしている。

「さ、冴香ぁ……！」

美結はどうすることもできず、彼女の精液を頭上から浴び続けて呆然と立ちすくみ、我に返って自分のペニスを舐めている北条に食って掛かる。

「や、約束が違うよぉ……！　冴香に射精させないって約束で私ちんぽ突き出して……んほぉおおお、ちんぽちんぽぉおおおお――！」

「バカね、敵の言ったコトを真に受けるなんて！　ちんぽも性根もまっすぐすぎるのがあなたの弱点よ、新米ピュアちんぽファイター天音さん？」

「あとは射精寸前まで高まったあなたをイカせれば、聖珠学園は三回射精で終わりよ！」

あまりにも絶望的な状況下だ。

冴香も美結も射精してしまい、美結は射精寸前にまで追い詰められている。

「勝ったわ！　さあイきなさい天音さん、思いっきりお客さんの前で敗北ザーメンを噴き出すのよ！」

「ダメぇちんぽ、ちんぽイクっ、ちんぽちんぽぉおおお――っ！　もうダメ、ダメダメ、敗北精液発射準備完了だよぉおおおお！　ちんぽぉおおお――！」

最後の一押しをかけようと、手コキの勢いを強くする北条。

精液は尿道を駆け上がり、鈴口がぱっくりと開いてその瞬間を告げる。

もはやここまで、万事休す。

「――そうはいきませんよ」

が、美結が敗北精液を噴き上げるその刹那。

冷たく抑揚のない声が響き、美結の瞳に光が宿る。
彼女の身体は敵から引き離され、目の前には純白の着物コスチュームの少女の背中があった。
「冴香!?　冴香！　洗脳が解けたんだね!?」
「ようやく目が覚めました、あの催眠は私の性欲に反応して脳に働きかけていたようで。一度出して賢者タイムになれば自然に解けるようですね」
《室戸復活した――！　催眠から解けた室戸冴香が絶体絶命の天音を救出――！　会場が一瞬で最高潮に燃え上がった、津波のような歓声であります！》
冴香は表に出していないだけで、性欲の強さは美結を遥かに上回る。
その大振りな金玉と射精量が何よりの証だ。
性欲が半端でなく強いおかげで、一度精液をすべて出し切ってからも十カウント以内に再勃起できる程度には精液が回復できるし、そのための鍛錬も昔からしているのだ。
完全に娼夢学園側の計算ミスだ。
「し、しまった……四大流派の性欲と回復力を侮っていたわ……」
「よくもこの私に恥ずかしくて気持ちいい思いをさせてくれましたね、覚悟はいいですか」
絶対零度のちんぽ闘気を噴き上げ、冴香は敵の前から姿を消し。

《消えた！　いや上だ――！》

次の瞬間、石川麻友の真上から落ちてきた。

雪のようにふわりと、肩車のような体勢で彼女の肩に乗っかり。

下に伸ばした足で、彼女に乗ったままペニスを扱きあげて射精させる。

「――室戸流『月』の五手、『下弦月（かげんのつき）』」

「おっほぉおおお――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおおおお！　敗北射精きたぁあああ――！　勝てないからって催眠アプリ使っちゃう卑劣ちんぽファイターの無様な最後見てぇえええ――！　卑怯な手を使ったちんぽファイターの末路なのぉおお、結局敗北射精しちゃうのぉおお――！　気持ちいい、気持ちいい、卑怯な手を使った因果応報射精きもちいいぃいい――！」

《やったー！　室戸流の性技炸裂、三回射精で聖珠学園の勝利――！》

一秒も持たず相手は白濁液を噴き上げ、冴香はいまだ石川に乗ったまま足コキで精液の勢いを加速させる。

たっぷり三分以上射精しぐったりとマットに倒れ込む石川と、彼女を助け起こそうとする北条に。

「まだ終わってないんだからね！　私たちを同士討ちさせて、冴香との絆を一瞬でも断ち

切った罰は、私のちんぽで与えてあげるんだから！」
「お仕置きの公開陵辱ですよ、さあ並んでこっちにお尻向けて、まんこ突き出してください」
「ひ……っ」
美結と冴香は巨根を奮い立たせ、裁きの肉棒を下そうとにじり寄る。
《おおっ……さすがに天音も室戸も、怒りにペニスをみなぎらせてビンビンに勃起しております！　悪辣なちんぽファイターに天誅を加える時がやってきた！　観客も今の試合で相当フラストレーションがたまっているもよう、彼女らの公開陵辱宣言に待ってましたと立ち上がった！》
有無を言わせず二人を観客席の方へ向けてトップロープに捕まらせ、今しがたマットにたっぷりと放出された石川麻友の精液を掬い取ってローション代わりにし、美結と冴香は互いのペニスへそれを丁寧に塗ってから。
いわゆる立ちバックの姿勢で、同時にペニスを膣内へ突き入れた。
「んほぉおお――！　罰きたぁ、パニッシュメントちんぽきたぁあああ！　卑怯な手を使っておいて負けた惨めなまんこに裁きのちんぽ入っちゃったのぉおお――！　即射精不可避なのぉおお！　ちんぽちんぽちんぽイクぅうう――！」

「あっはぁあああ――！　四大流派のデカちんぽ子宮の奥まで一瞬で届いて赤ちゃん部屋の奥えぐって気持ちいいいいい！　反則して負けた情けないまんこに天罰ちんぽ強烈なのぉおおお――！　精液、精液、精液出たぁあああああ――！　まんこ犯されて無様ザーメン飛ぶ飛ぶとぶとぶぅううう――！」

《今、二人のまんこに容赦なく突っ込んだ――！　娼夢学園の北条と石川、挿れられただけで射精しています！》

怒りとオスとしての本能のまま、美結は北条の、冴香は石川のヴァギナを自らのペニスで蹂躙する。

「ほら、反省してるの!?　私たちに同士討ちさせといてまさか無事で帰れるとは思ってないよね!?　怒りのちんぽ攻撃で最後の一滴まで射精しちゃえっ！」

「ここまで恥ずかしくて気持ちいい思いをさせて頂いたのは久しぶりですよ。そのお礼はこのちんぽで存分にお返しいたしますので。遠慮なさらず射精してください、泣こうが喚こうが金玉が空になろうがイカせて差し上げますよ」

北条も石川も、衆人環視の中で自分が女として犯されているという悦びに精液が止まらない。激しく突かれるたびにペニスが大きく揺れ、精液が不規則な軌道を描いて観客席の奥まで飛んでいく。

「ほらほら、あっちの方のお客さんにあんまり精液が飛んでってないよ！　もっと頑張って負けミルクいっぱい飛ばさないといつまで経っても終わらないよっ！」

「負けちんぽファイターは負けちんぽファイターらしく、犯されて射精する無様なシーンを皆さんに見せつけませんと」

「ごめんなしゃい、ごめんなしゃいいいい！　もう催眠アプリなんて使いませんからゆるひてぇえぇ！　んほぁあああお仕置きザーメン止まらない、悪いことした罰に射精するの最高ぉおおお――！」

「ゆるひてぇえぇ！　ゆるひてぇえぇ！　ほんとは催眠アプリなんか使いたく……んほぉおおまんこの奥きたぁあああ！　まんこまんこまんこぉおおお！　まんこ突かれて私の中の男の子と女の子が一緒にイっちゃうのぉおお！」

完全に二人は美結たちに屈服し、巨根で乱暴に犯されながら大量の精液を噴き上げていた。

その顔は最高の羞恥と屈辱がもたらす最高の快楽でとろけ切っており、女としても男としても至高の喜びで心身が満たされていることが誰の目にも分かる。

「もうしません、もうしませんからぁあああ！　だからもっとおしおきしてくらはいぃいい――！　天罰精液いっぱい膣内射精（なかだし）してくだしゃいいいい――！」

「いいよ、出してあげるっ……ああイクイクイク、ちんぽイクっ……！　卑劣ちんぽファイターに裁きのミルク出しちゃうぅうう――！　ちんぽちんぽちんぽ、天誅精子大量に膣内射精（なかだし）するのぉおおお――！」

たっぷり二十分、途中で犯す相手を一度交換し、美結と冴香は娼夢学園の二人を満足いくまで犯し尽くし、さらに美結は二人の膣内へ存分に天罰精液を出し尽くし。

「おほぉお……ほぉおお……もう出ない、ちんぽから精液でないぃいいい……」

「お仕置き公開陵辱……気持ちよすぎれしゅぅう……」

「よしっ、このくらいにしといてあげる！」

「二度と私たちに卑劣な手を使おうと思わないことですね」

ペニスから精液を噴き出しつつ崩れ落ちる二人に言い放ち、それからリング上でハイタッチし。

観客たちは大いに沸き上がり、これにて大会一日目の試合は終了。

聖珠学園は、翌日の四回戦へと勝ち上がった。

会場からの帰り道で。

「その、美結さん……申し訳ありません、美結さんのこと射精させた上に神聖なリングで

公開オナニー射精して痴態を晒すなど……迷惑と精液かけすぎでした」

先輩たちと別れて二人で歩いている時、冴香はふとそう言って美結に頭を下げる。

対して美結はわたわたと手を振り、フォローを入れた。

「そ、そんな！　冴香が謝ることじゃないし、そもそも私が油断しなかったらあんなことにはならなかったんだから」

「ですけどやはり、タッグパートナーを同士討ち射精させた上に、自分はオナニーして射精するなどちんぽファイターの風上にも置けません」

「もう、勝ったんだからいいじゃん！　それに一歩間違えれば私がそれやってたわけだから、冴香が自分を責めることないってば！」

「すみません……」

私だってリング上で公開ちんぽオナニーしてみたいよ、と美結は口を尖らせた。

「それに、ああいうのも新鮮で気持ちよかったし、いっぱい精液出せて試合にも勝ったから、結果的に得したよね？」

「な……それは、そうですけど……」

赤面してごにょごにょと言葉を濁すように返答しつつ、沈黙のまま数秒歩いて。

やがて少しうつむき、冴香は。

「ですがやはり、美結さんとはあんな形でなく……」
「えっ？　なんか言った？」
「いいえ、なにも」
小さく小さく零したが、それは美結に聞きとられることはなかったようで。
ホッとしたような、少し残念なような、そんな複雑な気持ちが彼女の胸の中で小さく渦巻いた。
「明日もがんばろうね、冴香！」
「……ええ。ここまで来たんです、優勝しましょうか」
都大会一日目、終了。
翌日は準々決勝となる、四回戦からのスタートだ。

～夏季ＦＴＢ都大会タッグマッチのルール～

・五本勝負で二人の合計射精回数が三回に達すると負け。
・試合時間は三十分。
・顔面・性器への打撃攻撃禁止。

・武器・凶器ならびにオナホやバイブ、媚薬などの快感を与えるアイテム持ち込み禁止。
・反則行為を行った場合五カウントで負け。
・選手の勃起が認められない場合、十カウント以内に勃起できなければ失格となりその試合からは脱落し、以降交代も合体技もできない（脱落により即座に負けとはならず、射精回数が二回までなら残り一人で続行できる。ただし片方が脱落しもう片方も失格となった場合はその場で負け）。
・リングアウトした場合は二十カウント以内にリングへ復帰できなければ失格となり脱落する。

NUMBER 05 二階堂蓮実（にかいどうはすみ）



私立双竿学園一年生
ちんぽファイターランク3
タイプ:バランス/ノーマル
得意技:ちんぽシザーズホイップ
体型:160㎝/51㎏
B85(D)/W57/H89
ふたなり:14～21㎝/ズル剥け/ストレート
同じ大きさのペニスを二本持つ
ステータス:体力C/筋力C/瞬発力B
ちんぽ攻撃力D/テクニックB/我慢強さD

二本のペニスを持つふたなりのみが入学できる双竿学園のちんぽファイター。高笑いを上げる癖があり、どんなことも高笑いで乗り切るポジティブな少女。彼女に限らず複根は精液の出口が二つあるため射精すると金玉が二倍早く空になってしまい TKO 負けしやすい。

NUMBER 06 二重橋沙織（にじゅうばしさおり）



私立双竿学園一年生
ちんぽファイターランク2
タイプ:テクニック/ノーマル
得意技:ちんぽ八連斬
体型:152㎝/44㎏
B75(B)/W56/H80
ふたなり:13～29㎝/ズル剥け
反りのある巨根(右)
ふたなり:5～10㎝/真正包茎
指でつまめる細さ(左)
ステータス:体力D/筋力E/瞬発力C
ちんぽ攻撃力E/テクニックC/我慢強さD

左右で違うサイズのペニスをもつ複根少女。試合中でもメガネを着用している。左右のペニスを用いた連続攻撃「ちんぽ八連斬」が得意技。羽目を外しやすい蓮実のブレーキ役をこなす。

NUMBER 07 さくらざきかりん 櫻崎花燐

NUMBER 08 さくらざきかれん 櫻崎花憐

私立征茎学館一年生
ちんぽファイターランク2
タイプ:テクニック/ノーマル
得意技:ちんぽイリュージョン
体型:161㎝/52kg
B83(C)/W58/H85
ふたなり:15～22㎝/仮性包茎
勃起して手で剥くと剥ける
二人とも同じペニス
ステータス:体力D/筋力C/瞬発力C
ちんぽ攻撃力B/テクニックB/我慢強さC

双子のちんぽファイターで外見上の違いはない。花憐のほうが姉。双子ならではの幻惑戦法と、以心伝心による連携戦術が得意。

第8話　夏季ＦＴＢ都大会二日目

夏季ＦＴＢ都大会、二日目。

美結たちは昨日と同じ会場に再来し、準々決勝となる四回戦へ向けて軽く動いて体を温める。

「調子はいかがですか」

「うん、ビンビン！」

美結も冴香もコンディションは良好だ。

三回戦では敵の催眠アプリにかかって不覚にも一回ずつ射精してしまったものの、好成績でトーナメントを駆け上がっている。

ここまでで残っているふたなり学園は八校。

もちろん、最大の強豪校である剛根学院もしっかり残っていた。

（やっぱり剛根とはこのまま決勝で戦うことになりそうだね……）

一日目の通算成績も出ているが、剛根は昨日の三試合で一度も射精していない。

一年生エースの黒崎夏希も半端でない実力者だが、なによりもその相方である剛羅万砕

子――四大流派筆頭、剛羅流の血を引く彼女の圧倒的なまでのちんぽ破壊力に、対戦相手はことごとく崩壊射精させられてきたという。

（だいたいあの人、もう見た目からおかしいって言うか人外だもん！　一人だけ作画が違う感じだよ！　怖すぎだよ！）

美結は心の中で愚痴るが、あれでも女の子であり、ちんぽファイターらしい。

ともあれ剛根と戦うまでに、あと二戦消化しなければならず。

《準々決勝第一試合、聖珠学園対神性女学院！》

「よーし！　行こっ、冴香！」

「ええ」

アナウンスにより出番がやってきたことを告げられ、美結と冴香は戦いの場へと赴く。

リングに上がって制服を脱ぎ捨て、二人はリングコスチュームになり。

そこで観客は一気に燃え上がり、戦いの高揚感でペニスは痛いほどに勃起する。

（よし、誰が相手でもちんぽ負けないっ！）

美結が改めて気合を入れていると、相手校もリングインしてきた。

落ち着いたデザインの学生服を脱ぎ捨て、神性女学院の二人はちんぽファイターの戦闘服になる。

「神性女学院、清澄遥（きよすみはるか）！　迷えるちんぽに救いの手を！」
「神性女学院、水天宮聖（すいてんぐうひじり）！　穢れた性欲を祓いましょう！」
（しゅ、宗教系なんだ!?）
美結も驚く。
まさにシスターといった感じのリングコスチューム。
いわゆる修道服がベースで色合いも紺だが、もちろんＦＴＢのリングコスチュームゆえ大幅なアレンジが施されている。
頭にはシスター服といえばアレといった感じの頭巾（ウィンプル）をかぶっていてそこはまだ原形を留めているのだが、トゥニカと呼ばれるワンピース状のシスター服の胸元は大きく開いていて二人ともに豊満な胸が三分の二以上露出しており、首から下げた金のロザリオが谷間に落ちている。さらに下半身となると前側の布は存在せず、両者とも二十五センチを超える大振りなズル剥けの勃起した男性器がむき出しである。
一見するととても聖職者の格好とは思えないが、修道服のコンセプトとＦＴＢの衣装としての方向性が両立された、聖なるちんぽファイターとしてこれ以上ないほどに完成されたリングコスチュームだ。
《出ました神性女学院！　ただの学園ではありません、ふたなり界隈において最大規模を

誇る宗教『ふたなりちんぽ教』の総本山でもあり、近年では修行の一環としてＦＴＢも盛んに取り入れている歴史ある宗教系ふたなり学園の登場です！　ふたなりゆえの過大な性欲を厳しく律し、心身を鍛え抜いて戦うふたなりちんぽ修道女（シスター）！　その実力は決して低くありません！》

「聖ちゃーん！　俺の性欲も祓ってくれー！」

「遥さーん！　俺本体ごと煩悩を浄化してくださーい！」

アナウンサーによる紹介に、観客も大いに盛り上がり。

美結は彼女らの股間にそびえ立つ、可憐な顔立ちに似合わぬ逞しい男の象徴に目を奪われていた。

（二人ともちんぽおっきい……さすがに準々決勝まで上がってくるとみんなちんぽおっきいよね……）

美結の二十六センチの逸物もクラスで羨ましがられるほどかなり立派なものだが、ここまで上がってくるとありふれていて自慢にもならない。

「まず私が行きましょうか、相手も相当な手練れです、油断せず行きましょう」

「うんっ、お願い冴香」

冴香が前に出て、神性側は金髪のほう――清澄遥といったか――が出てくる。

高らかにゴングが鳴ったが、互いに動かない。
「四大流派にも性欲はあるのですか？　ならそのちんぽから穢れた欲望を一滴残らずお祓い射精して差し上げましょう」
「あなたの器には収まらないかもしれませんよ、この金玉に渦巻く性欲は」
言葉を交わしつつ、冴香も遥も相手の様子を窺いじりじりと間合いを測る。
《準々決勝ともなると互いに迂闊（うかつ）には攻め込めません、緊迫した雰囲気が会場に広がっていきます。四大流派の室戸に聖なるちんぽパワーは通用するのか、逆にその性欲に清澄自身が呑み込まれるのか》
万単位の観客も静まり返り、固唾を呑んで両者の静かなやり取りを見守っているため実況の声がよく通る。
準々決勝ともなると試合の質も高くなり、見ている側も緊張するのだ。
長い膠着状態の後、先に動いたのは冴香。
《室戸動いた！　大きく後退してロープの反動を活かし……飛んだあっ！》
綺麗な放物線を描き、高く飛び上がって空中から強襲をかける冴香。
観客も一気に盛り上がり、静寂から大興奮へと場の空気が切り替わる。
「室戸流、『月』の七手『落月（らくげつ）』」

「くうっ！」

《お――っとかわされた！　室戸足から着地、すぐに間合いをとって仕切り直します！》

が、敵もさるもの。

とっさに転がって冴香の落下攻撃を回避し、瞬殺を免れる。

観客も清澄遥の素早い反応に、おおっと声を上げる。

（ああっ、室戸流の性技がよけられた！）

美結も驚く。さすがに敵もただではやらせてくれないようだ。

が、冴香はそこまで驚いていないようで、むしろ敵を賞賛するほど余裕がある。

「よく反応できましたね、頭上という人間の死角を取られておきながら」

「侮らないでください、これでも修道ふたなりですから。厳しい修行という点ではあなたと似ているかもしれませんね」

「……なるほど、ではその修行の質の差をお見せしましょうか」

最後の一言が余計だったのか、冴香のエメラルドの目が引き絞られ。

短い銀髪をふわりとなびかせ、一瞬で遥の背後を取る。

「速……っ！」

《室戸背後に回った！　そして驚愕する清澄の股下から両腕を入れて、ちんぽを後ろから

両手で握り込む！》

ただ足の間から腕を入れたのではなく、腕を交差させて遥の男根を両手で包み込み。

そこから一気に腕を回転させ、それによる快楽で射精に持ち込む。

「室戸流、『雪』の四手『吹雪（ふぶき）』」

「ほぉおおお――！　出る、出る、出てますぅうう！　ちんぽミルク出てますぅうう！　あはぁああダメっ、ダメダメダメぇえ！　性欲を祓うちんぽシスターが煩悩まみれ射精するなんてダメですぅうう！」

一瞬にしてペニスを包んだ両手を一回転、その超速の摩擦がもたらす快感が容赦なく清澄遥を敗北射精へと導く。

《イった――！　清澄、室戸流性技で強制射精だ――！　三百六十度の回転摩擦での変則手コキであります！　自らの煩悩にも負けたふたなりちんぽシスター、二重の意味での敗北射精の快感はいかほどか――！》

顔を真っ赤にして涙目になり、首をぶんぶん振って清澄遥は射精の快楽に全身をゆだねて特濃の白濁敗北液をリング外へ放出する。

「かっ、かみさまぁ！　神様が見てらっしゃるのにぃいい！　神様が見ていらっしゃるのに敗北射精ぃいい！　ごめんなしゃいっ、ちんぽシスターなのに礼拝オナニー以外で射精

してごめんなしゃいぃいい！　あはぁあああっ、ちんぽ気持ちいいぃぃ――！」

「これが修行の質の差ですよ、まだまだそのちんぽに分からせてあげます」

冴香の快楽攻撃はまだ終わらない。

射精し続けるペニスを右手で扱いてさらに勢いを倍加させ、左手で金玉を優しく愛撫しながら肛門に舌を入れていやらしく舐め上げ。

その三点の快楽責めで、遥を神とやらの前で盛大に煩悩敗北射精させる。

「らめぇええ！　もうそれ以上射精らめぇええ！　神様の前で煩悩射精だめれすぅうう！　ちんぽシスターが射精していいのはお祈りオナニーで射精するときだけなんですぅうう！　それ以外はいけない射精っ、いけない射精なのぉおお！　煩悩で射精すると神様に怒られちゃうのぉおおおお！」

「違いが分からないんですが？」

「ちがうっ、ちがうのぉおお！　ぜんぜんちがうのぉおお！　主よ、お許しくださいっ、遥は煩悩に負けてっ、オナニーじゃない射精でっ、いけない射精で気持ちよくなっちゃうちんぽシスターですぅうううう！　懺悔しながらちんぽ気持ちよくなっちゃってっ、敗北射精してごめんなひゃいぃいいい！　んほぉおおおちんぽ、ちんぽちんぽぉおおおお！　煩悩ビンビン勃起ちんぽから汚い汚いぶりっぶりの特濃欲望ザーメン射精ぎもぢぃいいいい

――！」

たっぷり五分ほど射精させ、レフェリーにより冴香は制止され、アナルから舌をつぷりと離してニュートラルコーナーへ。

「あへぇえぇ……神様ごめんなしゃいい……煩悩敗北射精気持ちいいのぉ……俗世に帰っちゃいますううう……」

「まったく、この程度で煩悩に負けるとは。私の方がちんぽシスターの才能が高いのでは」

会場の巨大電光掲示板、その「清澄遥」の文字の前に射精済みであることを示す赤いランプが一つ灯る。

《聖珠、まずは一本先取であります！　一度かわされたが室戸流の性技は四十八手、全く不利を感じさせない底の深さだ！》

「美結さん、交代です。ただし油断せずに」

「うんっ！」

一回先制して有利になったことで、冴香は美結にも活躍の場を与えんと交代する。

勝つだけなら自分が続投してもいいが、それではわざわざタッグマッチを見に来ている客が楽しめない。

観客を盛り上げてこそちんぽファイターなのだ。

それに美結が一回射精してしまっても、まだもう一度射精が許される。

《さあ、まだ射精カウントは一回のみ！　神性女学院にもチャンスは残っております！　両陣営ともに交代し、天音美結と水天宮聖の対決になりました！　ちんぽシスターの聖なる猛攻を天音かわし切れるか！》

「行きますよ！」

修道服コスチュームをなびかせペニスを揺らし、黒髪ロングシスターの水天宮聖が正面から突撃してくる。

素早く鋭い貫手の乱打。精神のみならず肉体も鍛え上げている、修行僧を思わせるかのような巧みな身のこなしに空手有段者である美結も防戦を強いられる。

「くっ、隙がない……！」

「今ですっ！」

一瞬だけガードが崩れ、そこに二十五センチ強の剛直が唸りを上げて美結の男性器を直撃する。

「ホーリーちんぽストライク！」

「はひいいいんっ！」

《強襲――！　まともに聖なる一撃を食らってしまった！　高いちんぽ攻撃力に聖属性が

乗り、天音のペニスに大ダメージだ！》

どの辺が聖なる力なのかよく分からないが、単純にして強烈な一撃であることには間違いない。

こらえがたい快感でふらつき隙のできる美結に、聖はさらなる連続攻撃を仕掛けてくる。

美結に抱き着くようにして密着し、彼女の巨根に自らの聖根をあてがいグイグイと押し付けてきたのだ。

「セイクリッドちんぽアンセム！」

「おっ、ほっ、ほぉおおお――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおお――！　ちんぽぉおおおおお――！」

《美しく強烈なちんぽの擦りつけ攻撃だ！　さながらヴァイオリンの弓のごとし！　その快楽によって相手は讃美歌のごとき高く澄んだ喘ぎ声を上げてしまうことから讃美歌（アンセム）と呼ばれるこの聖なる性技！　天音これは気持ちよさそうだ、人間ちんぽヴァイオリンと化した天音の口から悦楽の讃美歌が奏でられてゆく！　ちんぽバトルを見に来たはずなのに会場に来てみたらちんぽコンサートだった――！》

「ほおー！　ほおお――！　ちんぽぉおおお――！　ちんぽぉおおおお――！　気持ちいいいいい――！　ちんぽこすられるの気持ちいいのぉおおお――！」

（わっ、私がっ、こんな綺麗な声出せるなんてぇ……！　ちんぽファイターじゃなくてちんぽ歌手になれちゃうかも……ち、ちがう、そんなこと考えてる場合じゃないっ、抜け出さないと射精しちゃうっ！）

澄んだ嬌声を上げつつも、力ずくでなんとか聖のホールドから逃れて荒く息を吐く美結。

そこに、先ほどの冴香の性技によって射精していた相方の清澄遥が復活してリングインしてくる。

「行きますよ、シスターヒジリ！」

「ええ、シスターハルカ！　神の名のもとにあの技を！」

《天音射精寸前のピンチに清澄遥がやってきた！　ツープラトン攻撃を仕掛ける気だ！　聖なる合体技、まさかアレを繰り出そうというのか！》

フラフラな美結の背後に遥が回り込み、聖は正面から美結に組みつき、二人同時に下半身を攻めあげる。

「さあ、いたずらに射精し命の素を粗末にした罪を悔い改めなさい！」

「ディヴァインちんぽサンクチュアリ！」

《いった――！　二人がかりの合体技、前後からがっちりホールドしての口と手による快楽攻撃！　彼女らに挟まれた空間こそがまさに快感の聖域（サンクチュアリ）！　この『性域』から逃れるに

は射精することですべての罪を洗い流し切らねば脱出不可能だ――――！》

「おほぉおおお――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおお！　これきついっ、これすごいのぉおお！　逃げられないっ、ちんぽ逃げられないぃいいい――――！」

容赦のない前後からの聖なる快楽攻撃に、美結は為す術もない。

またも先ほどのように美しい嬌声を上げ、ペニスへの快楽に身を震わせて喘ぐのみだ。

「ちんぽ清められちゃうっ、性欲全部出されちゃうぅうう！　欲望ミルク全部摘出されてふにゃふにゃの萎えちんぽになっちゃうよぉおおお！　ちんぽで戦えなくなっちゃう、性欲なくなったらちんぽバトルできないぃいいい！」

顔を真っ赤にして涙目になる美結に、背後から金髪ふたなりシスター清澄遥が本来の意味での「説教」を始める。

「そう、闘争本能と性欲は元をたどると同じ煩悩なのです。性欲があるから勃起して戦いたくなりますし、戦いの高揚感で性欲が湧いて勃起してしまう悪循環なのです。この忌まわしき欲望を排除してこそ、ふたなりとして真実に通じるのですよ。あなたもちんぽファイターなどおやめになって、我らふたなりちんぽ教に入信なさい」

「そっ、そんなのやだぁああ！　私はちんぽファイターなのっ、ちんぽで戦いたいのぉおお！　だいたいそんなこと言ってるあなたたちだって今こうしてちんぽでバトルしてるの

にぃいい！」

美結は必死に言い返すが、ちんぽシスターたちは動じずに美結を前後から責めあげていく。

「お生憎様（あいにくさま）、私たちはあなた方ちんぽファイターをこうして敗北射精させて入信させることで、欲望まみれの俗世間から足を洗って清廉な信徒にさせるべく戦っているのです。一緒にしないでくださいませ」

「言ってみれば私たちは、ちんぽ神様から遣わされた聖（セイント）ちんぽファイター。あなたたちのような快楽と闘争本能で戦っている野蛮なちんぽファイターとは本質から異なるのです。分かったら入信の意志を示すべく、主の代理人である私たちの前で射精なさい」

《言っていることはなんだかよく分からないが天音を敗北射精させてついでに入信させようとしているのは明らかだ――！　天音、このままでは敗北どころか入信射精させられてちんぽファイターを引退してしまう！　ペニスで戦いたいなら抜け出すしかありません！　ちんぽバトルの世界に残るか残らないかの瀬戸際だ――！》

金玉を手で優しく愛撫されながら、舌で竿を舐め上げられ。

かと思えばクリトリスをつまみ上げられ、尿道を指でほじくり返される。

「おほぉおお、ほぉおおおっ！　ほおおおちんぽおおおっ、まんこぉおおおお！　ちんぽ



もまんこも気持ちいいっ、男の子と女の子ダブルアクメしちゃう、敗北入信射精決めちゃうよぉおお！　ちんぽ、まんこ、ちんぽぉおおお！」

必死に抵抗する美結だが、聖と遥は亀頭を優しく舌でねぶりながら甘い誘惑を囁いていく。

「御安心なさい、ちんぽ教の決まりは一日三十回、メッカとなる我ら神性女学院大聖堂の方を向いてお祈りオナニー射精すればいいだけですよ。たったそれだけであなたも幸せになれるのです」

「そっ、それだけぇえ!?　それだけでいいなんてとっても簡単らよぉおお！　一日三十回射精なんて余裕すぎりゅううう――！　おほおおお、ちんぽぉおおおお！」

「落ち着いてください、変な物買わされますよ！」

さすがに見かねた冴香がカットに向かう。

このままでは美結は敗北射精するだけではなく、変な宗教に入信させられてしまう。

しかし。

「布教の邪魔はさせません！」

《おーっと清澄遥、合体技を解いて室戸の方に向かいカットを妨害！　天音の方の拘束も緩んだが時すでに遅いっ、快楽で抵抗できなくなった天音に……》

「さあ、聖なるちんぽの剣であなたの邪気を打ち払って差し上げます！」

正面から美結を捕らえている水天宮聖が、己の聖根を美結の女陰へ狙い定めて一撃のもとに奥まで突き挿れる。

「んぁあああ――！　ちんぽ入ったぁあああああ――！　聖なるちんぽがっ、私のまんこにいいいい！　挿れられただけでまんこイクぅうううう――！」

《破邪顕正――！　水天宮の肉棒が天音のヴァギナに挿入された！　天音、身体を仰け反らせて絶頂しています！　射精はしていませんが女の子の方は挿れられただけで即イキであります！　聖なるちんぽは性欲まんこに効果抜群だ――！》

「美結さん！」

遥に抱き着かれながら、冴香は相棒が犯されたことに声を上げる。

聖は華奢な体躯ながら、男もかくやといった荒々しい腰遣いで一切の容赦なく美結をえぐり抜いていく。

さらに空いた手で美結のペニスを乱暴に扱きあげ、男性器と女性器に激しい快楽が寄せては返す波のように襲い掛かる。

「あへぇえイクっ、イクイクイクまんこイっくぅうう――！　一番奥までちんぽでえぐられてるのっ、赤ちゃん作るところまで犯されてるのぉおお！」

「さあ入信なさい、この邪念ちんぽから欲望をすべて流し清め、我らちんぽ神様の信徒となることをこの場で誓うのです！」

「やだぁ、やだぁああ！　私はちんぽファイターなのっ、宗教に興味ないのぉおお！　んぉおおまんこっ、ちんぽぉおおお！　まんこじゅぽじゅぽしながらちんぽしごきらめぇえええ！」

《入信すれば禁欲を強いられちんぽファイター生命が終わってしまう天音、必死に耐えている！　しかし時間の問題か！　今にもその邪念溢れるちんぽから敗北入信射精してしまいそうだ！》

先端から迸る透明な先走り汁は、さながら男性の射精のような勢いでびゅっ、びゅっと飛散しマットを汚していく。

この程度では済まない大量射精が、すぐそこにまで迫ってきている。

「あっはああカウパー止まらない、カウパー射精気持ちいいいい！　らめっ、らめえええ、敗北入信ちんぽミルク出ちゃうよぉおおお！」

「観念して入信なさい、煩悩を断ち切って幸せを掴むのです！　さらに今入信すれば、どこにいても私たちの学院大聖堂の方角が分かる特製コンパスと、家に置いていつでもお祈りできるミニご神体と、さらにはちんぽ教の教本五十巻、ＤＶＤ十巻、これら入信スター

ターセットをすべて無料でお付けして差し上げますよ！」
「おっ、おとくっ、お得ぅうう！　そんないっぱい貰えるなんてお得すぎりゅぅうう！　揺らいじゃう、私の心とちんぽが入信したくなっちゃうよぉおお！」
「しっかりしてください美結さん、別にもらっても嬉しくないものばかりでしょうが！」
遥に抱き着かれて身動きできないまま冴香が突っ込むが、美結の耳には入らない。
ひたすら快楽の波に押され、最後の煩悩射精を決めてしまう瀬戸際に立たされている。
「あひぇえ、ちんぽぉおお、まんこぉおおお！　モノでつられてまんこ犯されてちんぽから入信精液出ちゃうのぉおお！　ダメぇダメダメ、ダメダメイっくぅうう――！　入信射精きちゃうぅうう――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおお――！」
美結の射精は避けられない。
こうなった以上、彼女が射精しつつ入信を回避するには。
「く……こうなれば最後の手段です！」
遥の拘束を振りほどき、電光石火で冴香は二人へ接近し。
伸ばした手で、射精直前の美結の巨根へ触れて。
「室戸流『雪』の一手『淡雪（あわゆき）』！」
「んおおおっほぉおおおおお――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおお――！　出ちゃっ

た、敗北入信精液出ちゃったぁあああ！　入信しちゃった、ちんぽ教に入信しちゃったぁあああ――！」

その直後に美結は大量の精液を噴き上げ、煩悩の白濁を天高くへと噴き上げた。

これで彼女は入信射精してしまい、ちんぽファイターとしての生命が終わったと誰もが思っていたが。

「大丈夫です美結さん、今の射精は私の手でイったのですよ」

《……いや、違う！　天音射精している、しかしその直前に室戸が割り込んで味方である天音の亀頭を擦り上げております！　これは自殺点射精でありますが、神性女学院によって射精させられたとはみなされません！　天音は入信射精ではなく普通に射精しただけだ――！》

実況の叫びに、観客も興奮して騒ぎ立てる。

「まったく世話の焼けるちんぽファイターですよ、ほら安心して射精してください」

「あはぁあああああ――！　うれしいっ、うれしいいい！　入信しないで射精できてうれしいぃいいい！　これなら大丈夫なのっ、思いっきり射精しても安心だよぉおおお！　あはぁあああちんぽちんぽちんぽぉおおお！　普通の射精気持ちいいのぉおお！　普通に射精するのが一番気持ちいいよぉおお――！」

精液をびゅるびゅると存分に噴き上げる美結は放って、冴香は立ち上がって得意げに聖へ言ってのける。

「残念でしたね、これでは入信射精とは言えません。煩悩まみれの射精ですからね」

「くっ、余計なことを……！」

強制入信に失敗した水天宮聖も、美結の陰部からペニスを引き抜いて無念そうに呟く。

《室戸の機転で、天音すんでのところで入信回避射精！　射精カウントは一つ累積されましたが、まだ天音はちんぽファイターであります！　この室戸のとっさの判断、そして行動に観客もスタンディングオベーションだ――！　いや正直それでいいのかと思うところも無きにしもあらずですが、なんかまあ大丈夫なのでしょう！》

辛くも入信を免れた美結はたっぷりと煩悩にまみれた精液を抜き終わると、冴香に支えられて立ち上がった。

これで射精回数は互いに一回ずつ、条件的には互角だ。

「はあ、はあ……よくも変な宗教に入信させようとしてきたね！　こっから反撃開始なんだから！」

「もう少しで幸せになれるところでしたのに、神様から差し伸べられた救いの手を払いのけるとはなんと罰当たりな。ああ主よ、あの者たちに優しきちんぽ加護を」

射精直後ながら大振りの肉棒を勃起させて闘志をむき出しにする美結に、聖も遥も両手を組んで祈るように目を閉じた。

美結の膣内に挿入していたことで快感が高まっていた聖は後ろへ下がり、金髪ちんぽシスターの遥が出てくる。

「いきますよ！　今度こそあなた方を二人まとめて入信射精させて差し上げます！」

「そうはいかないよ！　私はちんぽファイターなんだから！」

美結と遥がリング中央で組み合い、互いの剛直をぶつけて快感を与え合う。

「ホーリーちんぽストライク！」

「はっ！」

振りかぶって一閃された聖なる男根をかわし、反撃に強烈な肉棒による一撃を下から掬い上げるように相手のペニスへ叩きこむ。

「食らええ――っ！」

「んはぁあああ――！　ちんぽぉおおお！」

《まともに入った！　先ほど受けたホーリーちんぽストライクを見切ってからの痛烈な反撃！　清澄、ちんぽに吹き飛ばされて空中で一回転して倒れました！》

（もらった！）

ちんぽ打ち上げ攻撃で仰向けに倒れた遥に覆いかぶさり、その二十五センチの聖なる肉棒を口で思い切り奥まで咥え込む。

「はむ……っ、じゅるっ、んじゅっ……っぷぁ、ちんぽおっきいね遥さん？　こんなにおっきくて性欲すごそうなちんぽなのに禁欲なんて大変でしょ？　私が抜いてあげるからね」

「いっ、いけません！　私の聖なるちんぽを煩悩まみれの口でしゃぶらないで！　今すぐおやめなさい！　私の聖根が欲に穢れてしまいます！　あはぁああちんぽちんぽっ、ちんぽ気持ちよくなっちゃいますぅうう！　主よどうか私の性欲をお鎮めくださいっ、煩悩に負けない力を私にっ……！」

遥は顔を真っ赤にして美結の頭を掴んで離そうとするが、男の弱点を咥えこまれさらには金玉まで掌で優しく転がされては抵抗する力も入らない。

大きな肉棒を咥えつつ、美結は言葉責めでも遥を追い詰めていく。

「じゅぶっ……苦しい時の神頼みって感じだね？　でも私に身を任せてくれれば、神様なんかに頼らなくてもすっごく気持ちいいことさせてあげられるよ？　ほら、この本当は性欲まみれの、シスターに似合わない血管浮き出まくりのズル剥け黒光りデカちんぽから、きったなくてくっさい煩悩ドロドロの特濃女の子ミルク、いっぱいどぴゅどぴゅ出しちゃ

おっ？」

「ダメですぅ、神様がお許しになりませんんんっ！　性欲に負けて射精などちんぽシスターとしてあってはならないことですぅうう！　ああっ主よお護りくださいっ、ちんぽに負けそうになる私をお救いくださいぃいいいい！　金玉に渦巻く穢れた欲望を消し去ってくださいぃいい、もうダメっ、ダメですぅうう！　ちんぽイキしますぅうう！」

美結のフェラと金玉愛撫に、遥は頭巾から覗く金髪を振り乱して快楽に悶え狂う。

相方のピンチに、水天宮聖がカットに入るべく駆け寄っていくが。

「くっ、シスターハルカ！　今助けに参りま……っ！」

「そうはいきませんよ、あなたも煩悩欲望射精してもらいます」

《あーっと室戸に捕まった！　大蛇のように体全体で絡みついて水天宮をマットに倒す！　リング上では二人のちんぽシスターが同時に快楽責めを受けて射精寸前だ――！》

聖職者であるふたなりちんぽシスターが、煩悩と欲望に負けてなされるがままに快楽を貪り、涙目で頬を染めて勃起ペニスをひくつかせている光景は観客の興奮を異様に煽り、食い入るようにリング上を見つめる者、一心不乱にフラッシュを焚く者、ひたすらビデオカメラを回す者で占められていた。

「あはぁあああ――！　主よお許しくださいっ、シスターハルカ、イきますぅうううう！

煩悩ちんぽから欲望の特濃精液出しますぅうう――！」

「んぁあああっ！　シスターヒジリ射精しますぅうう！　主の御前で禁忌の射精いたしますぅうう！」

そして、限界を迎えた二人のちんぽシスターは。

神へ懺悔し、その聖根から同時に敗北の特濃煩悩精液を天へまで噴き上げて禁欲を破る。

「おぉおおお――！　精液精液精液っ、ちんぽちんぽちんぽぉおおおお！　試合に負けて欲望にも負けた敗北精液気持ちいいぃいいい！　出しちゃいけない穢れた精液っ、ドロドロのくっさい精液出すの気持ちよすぎですぅうううう――！」

「んはぁあああああ――！　ちんぽぉおおお！　ちんぽぉおおおお――！　見てぇ、見てぇえええ、主よご覧になってぇえええ！　お言いつけを破って欲望に負けて無様に気持ちよく精液噴き出す私をご覧くださいぃいいいい――！　ちんぽシスター失格の烙印をこの穢れた煩悩ちんぽに押してくださいぃいいいい――！」

懺悔しながら欲望を抑えきれずに信じがたいほどの大量にして超良質の特濃精液をあらん限りに放出する二人の聖職者。垂直に噴き上がった二本の精液は吹き抜けの天井近くまで達し、そこから重力に従い下々の民へ平等に降り注いでいく。

《イった――！　二人同時に煩悩敗北禁忌射精だ――！　禁欲を礼賛（らいさん）し溜め込み続けた彼

女らの精液は最高品質の特濃ゼリーであります！　まさに『聖』液、聖なる精液が会場全体に恵みの雨のごとく降り注ぐ――！　禁欲を破り幸せいっぱいに射精する彼女らの聖液、これを浴びれば我々も幸せになれること間違いなしだ――！》

「やったー！　勝った――！」

「よかったですね、入信せずに済んで」

リングにも降り注ぐ聖液の雨、それを浴びつつ美結と冴香はハイタッチで勝利を喜び合う。

準々決勝、対神性女学院戦も途中危うかったが一回射精のみで勝利。

これで残る試合はあと二つ、次はいよいよ準決勝だ。

《さあ熱狂の夏季ＦＴＢ都大会もいよいよもって準決勝！　第一試合はここまで快勝を続けて参りました最注目校の聖珠学園と、鳳落学苑（ほうらくがくえん）の対決であります！》

「これに勝てば決勝だね、冴香！」

意気込んで準決勝の舞台に上がりリングコスチューム姿になった美結と冴香だったが、相手校のタッグが待っても待っても現れない。

《……んん？　鳳落の選手がなかなかリングインしてきませんが……》

アナウンサーの声は、突如轟くエンジン音にかき消され。
不意に一部の観客が悲鳴を上げ、美結たちがそちらを向くと大型バイクが花道を突っ切ってリングへ向かって一直線に爆走、大きく弧を描いてジャンプしてきた。
「わ、わああ――っ！」
「また愉快な登場の仕方ですね」
あまりのことに驚いてその場で転倒する美結と、動じずに宙を舞うバイクを見上げる冴香。
リングの真上まで飛んだバイクから二人の少女が跳び下りてマットに着地、乗り捨てられたバイクはそのままあらぬ方向に飛んでいって大破してしまう。
《うわーっバイクで突っ込んで登場してきた！　観客の迷惑などまるで考えておりません！　怪我人は出ておりませんでしょうか！》
「フン、女のちんぽ見に来たスケベ客なんか一人二人死んだところでどうでもいいぜ！」
「アハハハ！　むしろ轢かれて喜んじゃう変態さんたちだもんね！」
（こ、こわっ！）
異様なパフォーマンスでリングインしてきた、どう見てもアウトローな雰囲気のちんぽファイターが二人。

ボロボロの制服を脱ぎ捨てると、紫をベースに赤で血塗られた意匠を施したような不安感を煽るセパレート風のリングコスチューム姿になって彼女らは吼える。

「鳳落学苑、ビシャス大谷（おおたに）！　惨憺（さんたん）な敗北射精をさせてやる！」

長身でド派手なメイクを施している方がビシャス大谷。

金髪をライオンの鬣（たてがみ）のごとく全方位に立たせ、デスメタルバンドのボーカルのようなメイクを顔に施していてひたすらに恐怖を煽ってくる。

立派なのは顔だけではなく、あの剛羅ほどではないがプロレスラーを思わせるガッチリした体型だ。その体躯と顔から危険なラフファイトを得意とすることは戦う前から明らか。

ペニスも文句なしに大きく黒光りしており、しかも何やら銀色に輝くビーズのような物が亀頭に複数埋め込んであり非常に禍々しい。

「鳳落学苑、ルキフェル紫藤（しどう）！　あなたの悲鳴とイキ顔ちょうだい！」

一方、小柄で貧乳で紫髪のツインテール、そして仮面で顔の上半分を隠している覆面ちんぽファイターがルキフェル紫藤。

堕天使（ルキフェル）という割には小悪魔のようないでたちで、背中にコウモリのような作り物の翼がついており、お尻からは先端に返しのついた、いかにもな悪魔の尻尾がにょろっと突き出ている。どうも肛門に直接挿入しているようで、挑発的な腰振りに応じてぴょこぴょこと

揺れている。

覆面のため表情は見えないが、その口は美結たちを小馬鹿にするようにニヤけていた。

もちろん男根も小柄な体躯に似合わず非常に大きく、大谷のように埋め込んでいるものはないものの根元には淫らな紋様が描かれている。

どちらも見てすぐわかる、悪役（ヒール）ちんぽファイターだ。

《で、で、出てまいりました！　極悪、凶悪、劣悪非道の鳳落学苑コンビ！　素行不良、成績不振、一般男性を逆レイプ、様々な理由で学園を退学になったふたなりたちの最後に行きつく場、それが鳳落学苑であります！　ルール無用のなんでもありなヒールちんぽファイターを多数輩出、悪の最高峰学園……ひいっ！》

「おいコラ実況！　能書きタラタラ垂れてんじゃねぇんだよクソ野郎が！　さっさとこいつらをぶっ殺させろや！」

アナウンサーのいる長テーブルへ向けて隠し持っていたフォークを投げつけ彼を驚愕させ、紹介を強引に中断させるビシャス大谷。

「こ、怖ぇえ……」

「ビシャスひっこめー！」

観客たちも一斉に、まだ試合が始まっていないうちからブーイングの嵐だ。

しかしあれほど派手なパフォーマンスをしておきながら、準決勝にまで勝ち残ってきたという戦績。

反則が主体であろうことは明らかだが、それにしたところで見掛け倒しの相手ではない。

「鳳落学苑はふたなり学園の最底辺校でありながら、ヒールちんぽファイターの養成機関として名を馳せている極悪校です。相手はもう反則以外なにもしてこないと見ていいでしょう。とにかくあらゆる可能性を考えてください」

「うん、あれだけあからさまならね」

冴香の助言に美結は頷き前に出ると、相手校は金髪派手メイクのビシャス大谷が前に出る。

レフェリーが二人へ入念なボディチェックを行い、凶器を持参していないか確認していた。

それが終わると不意に大谷は、周囲の観客に向けて大声で罵詈雑言を浴びせかける。

「オイ！　どうせテメーらどいつもこいつも、この二人がアヘ面晒して射精するところが見たくてわざわざクソ暑い中来てる変態なんだろ!?　そんで家に帰ってしこしこオナニーか、スケベ豚野郎どもが！」

「な、なあっ！」

客全体を敵に回すような暴言に、さすがに美結も食って掛かる。
自分たちの戦いを見て声援を送り、共に勝利の喜びを分かち合い、共に燃え上がってくれるファンたちを貶されては、ちんぽファイターとして黙っていられない。
「お客さんに暴言なんてダメだよ！　みんな私たちの試合が見たくて遠くから来てくれたんだから！」
「ああん、こんな変態野郎どもの考えてることなんかお見通しなんだよ！　文句あんならちんぽでかかってこいや！」
「むううう……っ！」
《リングの上はまさに一触即発状態であります！　ベビーフェイスの天音美結、ヒールちんぽファイターである大谷の暴言を無視できない！　二十六センチのペニスが怒りに勃起しております！》
美結とビシャス大谷はリング上で火花を散らし合い、やがてゴングが高らかに鳴る。
それと同時に大谷は突っこんでいき、大仰にテイクバックを取って拳を唸らせ。
「くたばりやがれ！」
《うわーっ開幕早々いきなりグーで顔面を殴りにいった――！　天音大丈夫か！》
美結の鼻を砕きにかかったが、間一髪美結は腕で拳を受け流し。

「はあっ！」
「チッ！」
死角からハイキックで反撃し、ガードされたものの相手を押し戻す。
空手で鍛えられた立ち合いと戦闘センスがなせる業だ。
「やるじゃねえのよ！　だったらこれでどうよ！」
《大谷、どこからか竹刀を持ち出した――！　しかも突きばかり！　危険すぎます、喉にでも食らったら大惨事だ――！》
どうやらリング下で鳳落学苑のＦＴＢ部員たちが凶器を用意しているようだが、それにしたところで堂々と反則行為に及んでくる彼女の劣悪さに美結もガードポーズのまま後退して様子を窺う以外に現状できることはない。
「大谷、武器の持ち込みは反則だ！　ワン、ツー……」
「うっせえなクソザコレフェリー！　だったらテメーにくれてやるよ！」
《あーっと、反則カウントを取るレフェリーに竹刀を投げつけてカウントを物理的に止めてしまった――！　レフェリーは吹っ飛ばされてリング外に転落して気絶！　もうやりたい放題だ、自分がルールだと言わんばかりなビシャス大谷の暴挙にブーイング祭りであります！　さらに覆面ちんぽファイター、ルキフェル紫藤もリングに上がって来て二人がか

りで天音を追い詰める！》

珍しく仕事をしたレフェリーだったが、それも二カウントの間のみ。

無法地帯となった狭いリングで二人につけまわされ、美結はあっさりとニュートラルコーナーに追い詰められてしまった。

「アハハハ、これでどう！」

「――――！」

貧乳覆面ツインテール少女がどこか無邪気ながらも嗜虐的な笑い声を上げたかと思うと、美結は体中を焼き尽くされるような激しい痛みを覚えて崩れ落ちてしまう。

《おわぁーっ紫藤、何を取り出したかと思えばスタンガンだ！　高圧電流が天音の金玉に直接浴びせられる！　文字通り快楽の電流がザーメンタンクに直撃！　精子工場がショートして機能停止寸前だ――！》

「おおっほおおおおおお――！　金玉電流ビリビリ気持ちよすぎぃいいいい――！　電気ショックで金玉すごい、金玉しびれて気持ちいい――！」

さすがに安全を考えて電圧は大幅に下げられてはいるようだが、それでも信じられない快楽が睾丸を駆け巡り、美結は全身をガクガクと震えさせて電撃快楽責めに耐えようとするが体に力が入らない。

さらに。

「おらよ、食らいなぁ！」

《大谷、一斗缶攻撃――！　どこから出してきた！　後頭部は危ないっ、危ないぞ――！》

ゴアン、と鈍い音が響き、大きな銀色の缶がひしゃげるほどの一撃がダウンした美結の後頭部に炸裂する。

電流がまだ体に残っていて動けない美結に、二人がかりで打撃攻撃と快楽攻撃を重ねていく凶悪タッグ。

「ホラホラ金玉踏んであげる、痛いのが気持ちいんでしょ、恥ずかしー！　なっさけなーい！　キャハハハハハ！」

「いやぁああっ、金玉痛いっ、気持ちいい――！　ちんぽ足蹴にされて気持ちいいよぉおお――！」

《ルキフェル紫藤、覆面の下の幼そうな顔立ちからは想像もつかないサディスティックさで天音のペニスを執拗に足で虐めている！　ちっちゃな女の子に笑われながらちんぽを蹴られ金玉を踏まれるなんてご褒美もいいところだ――！》

電流で身動きできない美結を、急所攻撃と凶器攻撃で痛めつけていくヒールタッグ。

これ以上は許さないとばかりに、冴香が着物コスチュームをなびかせて妨害に向かう。
「ケッ、来たか室戸流がよ」
ド派手なメイク顔を冴香の方に向け、前進して迎撃態勢を整える大谷。
後ろ手に持っていた銀色の凶器を煌めかせ、接近してきた冴香の銀色の頭部へ突き刺す。
「オラァ死ねぇ、室戸流！」
《大谷、フォークで室戸の頭を刺しにいった――！　危ない、危なーい！　しかし室戸、これをふわりとかわして背後へ……》
「室戸流『雪』の、――――ッ！」
「後ろががら空きよっ！」
《あーっと紫藤、一本鞭で室戸を妨害だ！　さらに二回、三回、しなりを上げて執拗に打ち据える！　いけません一本鞭は本当に痛いっ！　室戸たまらずダウンだ――！》
「ああっ、あはぁ！」
さすがに四大流派といえども、物理的な痛みには耐えられない。
うつ伏せにダウンし、そのまま背中を何度も何度も痛烈に打たれ、苦悶の表情を浮かべて目には涙を溜める冴香。
「ホラホラもっと痛がって情けない顔見せて、クソブタ客のオナニーのオカズを提供なさ

いよっ！」

「さ、冴香っ……！」

助けに行きたい美結だが、まだ電撃と金玉への蹴りのダメージが残っていて動けない上によしんば動けても大谷に捕まってしまう。

大切なパートナーが容赦なく一本鞭で痛めつけられる光景を黙って見て、その様に勃起することしかできない。

「ああーっ、あはぁあああ――！　こ、こんな……あああああっ！　やめてぇえええ！　痛い、痛いぃい！」

《室戸の澄んだ悲鳴が会場中にこだまする！　鳳落学苑、ここまで一度も反則以外の行動をとっておりません！　なんたる悪逆ぶりでしょうか、彼女らをちんぽファイターと認めないという声にも頷けるというものでしょう！　しかしながらこの二人が一定の人気を得ていることもまた事実！　観客からは彼女らへの非難だけでなく、もっと室戸を痛めつけろといった声も上がっております！》

ある意味、彼女らにかかればお気に入りのちんぽファイターが痛めつけられる光景や、彼女らの苦悶の表情が見られるのだ。そういった絵面を期待して、ビシャスやルキフェルを支持する者もそれなりに多い。



彼女ら自身もそれを分かっていて、相手選手を痛めつけているのだ。
「オラオラどうした高潔な四大流派が！　私ら邪道ちんぽファイターごとき簡単にイカせられんだろ？」
「こうなっちゃうとただのメスブタね、なっさけなーい！」
竹刀で頭部をビシビシと叩く大谷に、一本鞭で執拗に冴香の身体を打ち続ける紫藤。
しかし美結がようやく動けるようになり、冴香を救うべく二人に駆け寄って。
「やあ――っ！」
《天音復活、タックルで紫藤を吹っ飛ばした！　室戸ようやく解放され、コーナーに下がります！　大谷も下がり、リング上では天音と紫藤の対決という形になりました！》
「よくも冴香をあんなひどい目に！　あんたたちなんて私のちんぽでイかせてあげるんだから！」
「ふんっ、できるもんならやってみなさいよ！　あなたもヒイヒイ言わせてあげる！」
ひゅうん、と一本鞭をしならせて威嚇するルキフェル紫藤。高い風切り音は聴覚的に相手を恐怖させるが、空手をやっていた美結は武器を持った相手への対処法というものも心得ている。
手先ではなく相手の目を見て、軌道を読んで。

「死んじゃえっ！」
「ここっ！」
襲い来る鞭をかわして接近、武器を持つ紫藤の手首を取ってひねる。一本鞭が手から離れマットに落ちた。
「あっ、あああっ！　痛い痛いっ！」
「人のこと痛めつけておいて、自分が痛いのはイヤなの？」
甲高い悲鳴を上げる紫藤の小柄な体をマットに投げ倒し覆いかぶさり、九十センチの豊満な胸で彼女のやや小さなペニスを挟み込む。
《天音、鞭をかわして反撃！　自前の巨乳でパイズリ攻撃を仕掛けます！　甘く柔らかで優しい女性の恵み、おっぱいを存分に活かしての快楽攻撃だ――！》
「ほらっ、どう？　気持ちいい？」
「ふ、ふざけないでよっ！　こんなの……くうっ、ちっ、ちんぽぉ……」
覆面の下の顔を赤らめ、紫藤は必死にパイズリに耐えている。
どうやらＳだけあって他人を痛めつけることは得意でも、逆に自分がされるのは苦手らしい。攻撃的な人間ほど打たれ弱い、ひいては自分の弱さを隠すために他者を攻撃せざるを得ないのだ。

このまま胸での奉仕を続けていれば、ルキフェル紫藤は射精する――。

「調子に乗ってんじゃねえぞオラァ！」

「うぐ……っ！」

《ああ――っとここで大谷の乱入だ！　パイズリする天音の脇腹を足の甲、サッカーボールキックで妨害！　観客からまたもブーイングであります！》

しかし、もう一人の大柄で派手なちんぽファイター、ビシャス大谷にパイズリを強制解除されてしまう。

「ううっ……」

「よ、よくもやってくれたわね！　お返しにこれを食らいなさい！」

マットを転がって痛覚に耐えながら起き上がろうとする美結に、紫藤はまたも懐から何かを取り出して高く掲げる。

天井からのライトに照らされキラキラと輝く、粘りのある液体がそこから垂れ落ちていた。

《オナホだ――！　ある意味凶器、ルール違反のジョークグッズ持ち込みだ――！　レフェリー早く戻ってきてくれ――！》

高々と掲げたオナホールを、美結の巨根へ躊躇なく装着。

ぬぶぶぶっ、と粘性のある音を立て、たっぷりと塗られたローションのおかげで簡単にオナホールは奥まで呑み込んでいく。

「はぁあああああ――！　オナホっ、オナホらめぇえええ！　人工まんこらめぇえええ――！」

挿れられただけで射精してしまいそうになる、複雑な内部構造を持つオナホール。しかも非貫通型で快感はさらに倍増している。

《天音、オナホに責められて大ピンチだ――！　しかも紫藤、ローションを追加しながら徹底的にコキ上げていく――！　人の膣内（なか）とは違い完全にちんぽを気持ちよくするためだけに開発されたオナホールは単純に気持ちよさで人間の膣を上回ります、反則アイテムの猛攻に天音耐えられるのか――！》

「ふふん、どう？　このオナホには百倍希釈の超強力な媚薬が原液のまま、ローションと一緒にたーっぷり入ってるのよ！　もうちんぽ熱くてたまらないでしょ？　人工まんこにたっぷり膣内射精していいのよ？」

オナホールを握った手を上下に動かしながら、覆面少女は意地悪く笑う。

「そっ、そんなっ、そんなぁあああ！　ずるいっ、ずるいぃいい！　オナホ持ち込みだけでもずるいのに媚薬たっぷり塗ってるなんてちんぽファイターの風上にも置けない卑劣さ

なのぉおおお！　あはぁあああ気持ちいいっ、気持ちぃいいい！」

ジュポジュポと動かすオナホとペニスの隙間から、その媚薬ローションを絶えず追加して美結を快楽から逃がさない紫藤。

原液媚薬が亀頭の粘膜に直接触れ、火傷しそうなほどの快楽がペニスから脳へ直通で流れ込み続ける。

《天音絶体絶命だ――！　室戸まだダメージが深く動けない、このままオナホに敗北射精してしまうのか――！》

さらに状況は悪くなる。

リング下の鳳落学苑ＦＴＢ部員が紫藤に渡したものは、電動でウィンウィンと動くバイブ。

それを思い切り、オナホで絶頂間際であった美結の女性器へ金玉をどかして突き入れる。

「あひぇえええ！　バイブ、バイブ入ったぁああ――！　気持ちいいっ、ニセちんぽうねうね動いてまんこかき回して気持ちいいい――！　しっ、しかもこれにも媚薬塗られてぇえええ！　媚薬につけ込まれた人工ちんぽがまんこにぶち込まれてよがり狂ってるのぉおおおお！　人間が人間の作ったものに犯されてるっ、機械と道具に負けちゃう、人間の敗北射精きちゃうぅうう！　人類は自ら作ったもので滅ぼされちゃうよぉおお！」

「み、美結さん……」

冴香は必死に体を起こして助けに行こうとするが、鞭の痛みと大谷に蹴られた痛みのせいでまだ動けない。

媚薬たっぷりのオナホとバイブで両性器を蹂躙され、為す術もなく追い詰められていく美結を見つめて劣情を掻き立てられ勃起することしかできない。

「らめぇイク、イクイクイクいっくぅううう――！　ちんぽイクのっ、ちんぽから敗北射精……んほぉおおおああああ出たぁあああああ！　出たあああ、でたあああ、ちんぽミルクでたぁああ――！」

《天音ぇえええ――！　イってしまいました、悪に屈したベビーフェイスのみじめな敗北射精だ――！　守るべきファンの前で悲惨なほど激しい大量射精をする光景は無様としか言いようがありませんっ、やはりこの生きづらい現代社会にヒーローなど存在しなかったのか――！》

オナホを抜き取られ、むき出しになったペニスからはものすごい勢いの精液の柱が噴き上がり四方の観客へと特濃精子が降り注ぐ。

「見てぇえええ！　見てぇえええええ！　悪と機械に負けたちんぽファイターの無惨な最後見てぇえええ！　この世には絶望しかないんだっていう現実を私の敗北射精で確かめてぇえ

ええ――！　あはあああごめんなさいっ、悪に負けてごめんなしゃいっ、みんなに希望を与えられなくて絶望射精してごめんなしゃいいいいい！　でも気持ちいいからいいのっ、気持ちいいことは正義だからいいのぉおおお！　ファンのみんなを裏切った最低のちんぽファイターの最低な射精見てぇえええええ――！」

これで聖珠は一回射精、ビハインドを抱えることになった。

圧倒的不利な状況で、美結はひたすらに欲望のまま射精を続けて無様な姿を晒し続ける。

「んほぉおお、ちんぽちんぽちんぽ、ミルクミルクミルクぅううう――！　悪のちんぽファイターに負けて精液出すの気持ちいいぃ――！」

「アハハハ、すごい勢い……わぷっ」

そんな美結の射精を嘲笑っていた紫藤だったが、不意に美結のペニスが変な風に波打ち、彼女の精液をうっかり顔面で受けてしまう。

それが彼女にとって、一生の不覚だった。

「ほぉおおちんぽちんぽちんぽぉおおおお――！　負けミルク止まんない、悪に屈した精液が止まんないのおおおお――！」

「ちょ、ちょっと……ひゃああ！」

美結の放出する大量の精液。それをまともに顔面に浴びてしまえば、そこに張りついて

いる覆面が水圧ならぬ精液圧で外れ飛んでしまうのは必定――。

「あ……あああっ！　きゃあああ――！」

「ふぇっ……ちんぽぉお？」

会場内に、可憐な悲鳴が響き。

呆けて射精した美結も、目の前にいた敵がいなくなっていたことに気づく。

否、いなくなったのではなく――。

《おーっと、天音の噴射した精液の勢いで紫藤のマスクが取れてしまった――！　そしてその下にはなんとぉお！　想像を遥かに超える、可憐な少女の素顔が――――！》

「ひ、ひいっ……マスクが、マスクが……」

彼女の顔を隠していたマスクがどこかへ行ってしまい、信じられないほど可愛らしい少女が現れたということ。

まさに目の覚める衝撃、精液を放っていた美結も正気に戻る。

自分のすぐそばには、吹き飛ばされて宙を舞ってベチャリと落ちてきた精液まみれの彼女のマスク。

「かっ、かわいいっ……お人形さんみたいだよ」

「み、み、見ないでくださいっ……」

今までの小悪魔的な嗜虐癖あふれる笑顔はどこへやら、大きな瞳を潤ませ顔を真っ赤にして狼狽えるルキフェル紫藤。

「か、返してぇ……マスクを返してくださいぃぃ……」

しかも今までと打って変わって消え入りそうな声で、マスクを持つ美結に涙ながらに懇願するありさま。

そのギャップに、美結ばかりでなく観客も大興奮して一斉にカメラを向けている。

「や、やめてぇ……！　みなさん撮らないでください、こんな恥ずかしい私の顔なんか撮らないでくださいぃ……うっ、ううっ……」

戦うどころか抵抗の意志すら見せず、紫藤はぺたんと座り込んでしくしく泣き始めてしまった。

（か、かわいすぎるっ！）

先ほどまで怒りしか沸かなかった卑劣な覆面ちんぽファイターが、ここまで可愛らしく豹変するとは美結も思っていなかった。その落差にノックアウトされそうになる。

《なんと――！　ルキフェル紫藤完全に戦意喪失だ！　覆面ちんぽファイターの命ともいえるマスクを奪われ、可憐な素顔を晒して恥じらうソレは、女の子が持つ最強ともいえる攻撃だ――！》

「ううっ、ううう……ごめんなさい、許してくださいぃ……私、昔から童顔でいつまで経ってもかわいいかわいいって言われ続けて、それが嫌で顔を隠して覆面ちんぽファイターになったのに……もうおしまいですっ、素顔がバレたらＦＴＢで生きていけません……」

めそめそ泣き濡れる紫藤に、美結はもう完全に劣情を滾らせて勃起していた。

今すぐこの可愛らしい素顔のヒールちんぽファイターを犯し、その人形のような美貌をとろとろに歪ませて敗北射精させてあげたい。

美結が思うのはそれだけだ。

（ああっちんぽっ、ちんぽ痛いくらい勃起してる……犯したい犯したい、紫藤ちゃんめちゃくちゃにブチ犯したいよぉ……まんこにちんぽブチ込んでグチャグチャにしてあげたい……）

「紫藤ちゃん、エッチしよっ！」

「えっ、ひゃあああ！」

性欲のままに彼女を突き飛ばし、後ろから自らの巨根を挿入。

悪役少女の小さな膣を一息に押し広げ、美結は彼女の一番奥にまでペニスを突き入れた。

「あはぁああ――！　ちんぽ入ったぁあああ――！」

「んおおお……！　紫藤ちゃんのまんこちっちゃくてキツキツぅ……！」

《天音、素顔になった紫藤のまんこに迷いなく挿入――！　かわいい女の子がいたらちんぽ挿れたくなるのは男の本能だ――！》

挿れられた衝撃でぶるんと自らの小さめなペニスを震わせて喘ぐ紫藤と、彼女の膣内（なか）の気持ちよさに声を漏らして体をひくつかせる美結。

「ちんぽっ、ちんぽ、ちんぽぉおお――！　美結さんのちんぽ入って私のちんぽ気持ちよすぎるのぉおおおおお――！」

「ああっ、まんこっ、紫藤ちゃんのまんこぉおおお！　すごい気持ちいいっ、ちんぽ震えてるのもかわいいっ……！　射精しちゃお紫藤ちゃん、お客さんにそのかわいい顔で出す精液いっぱいかけてあげよっ？」

「ダメです、ダメダメダメぇ！　精液出ちゃうっ、素顔射精きちゃうぅう！　ああっはあああちんぽちんぽぉおおお！　出る出る出る出る、素顔で出す恥ずかしい精液いっぱい出ちゃうううう――！」

小柄な体をグイと後ろから持ち上げ、射精の瞬間に紫藤を抱きかかえるようにして多くのファンへ彼女の射精シーンが見えるようにしようとする美結。

その直後に彼女は、噴水のように大量の白濁液を放射して果てる。

「ちんぽぉおお――！　見ないで、ちんぽは見てもいいけど顔は見ないでぇえええ！　素顔

の時点で恥ずかしいのに、射精してるイキ顔見られるなんて恥ずかしすぎて死んじゃうぅうう――！」

「紫藤ちゃん、せっかくそんなにかわいいんだから勿体ないよ、お客さんに素顔のまま精液いっぱい出してあげなよ！　みんな喜んでるよ！」

《必死に顔を隠しながらも射精は止まらない！　顔を隠してちんぽ隠さずとはよく言ったものだ――！　初めて見せるルキフェル紫藤の素顔射精に観客は大興奮、これまでの残虐ファイトにブーイングを垂れていた彼らも手のひらを返して大歓声を上げております！》

後ろから抱き上げつつピストンする美結に、紫藤の精液の量と濃さはさらに増して超特濃のゼリーとなる。

「出ましゅ、出ましゅぅうう！　素顔で敗北射精最高なのぉおおおお！　恥ずかしさで精液特濃ぶりっぶりになっちゃいましゅぅうう――！　これからは敗北射精するときは自分でマスクとって射精しますっ、約束しましゅぅうう！　だからみなさん私の素顔敗北射精いっぱい見てくださいぃいいい――！　素顔ちんぽイキ見てぇえええ！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおおお――！」

《その可憐な素顔で下品な言葉を絶叫しながら敗北射精するルキフェル紫藤、わずか数分でちんぽファイターとしての株が爆上がりであります！　先ほどまでの残虐少女はもうお

りません、ここにいるのは誰よりも可憐な顔で何よりも下品な単語を連呼しながら大量射精する超絶美少女ちんぽファイターだ――！》

美結もさすがに抱き上げ続けながら犯すのに疲れ、紫藤をロープにつかまらせて立ちバックで犯し続ける。

その間も彼女は素顔射精を間断なく続け、たった今ファンになったばかりの観衆に特濃サービスを続けていく。

そうして五分ほどの射精を続けていると、意識を取り戻したレフェリーが今さらやってきて美結を引き離し紫藤はその場に精液を噴き上げながら倒れ込む。

「ちんぽ、ちんぽぉおお……もう精液出ない、素顔射精で金玉からっぽになっちゃいましたぁ……」

《ルキフェル紫藤失格――！　覆面ちんぽファイターの見せた恥ずかしすぎる素顔大量射精で金玉空っぽの完全ノックアウト！　これで鳳落学苑はビシャス大谷のみだ――！》

ぐすぐすと泣きながら、脱落した紫藤は大谷にすり寄っていく。

「ううっ……ごめんなさい大谷さん、素顔がバレたらもう戦えません……」

「ったく、美貌にコンプレックスなんて贅沢な悩みだっつの」

呆れたように頭を掻き、ビシャス大谷はため息を吐いた。

しかしこれで紫藤は射精し尽くし、そうでなくてもマスクを取られて戦意喪失。

だが――。

「まだ負けたわけじゃねぇ！　テメーらは二人まとめて地獄に送ってやるよ！」

《準決勝第一試合、鳳落学苑はルキフェル紫藤の失格によりビシャス大谷のみで続行！　こうなってしまえば極悪コンビも怖くありません、しかしながら今大会で引退の三年生大谷、鬼の形相で天音室戸ペアを威嚇しております！》

相方を失いたった一人になろうとも、真珠を埋め込んだペニスを奮い立たせて暴れる獣。

ヒールちんぽファイターとして最後の舞台を飾るべく、ビシャス大谷は猛り狂う。

その派手なメイクを施した上での鬼気迫る勢いに、ブーイングを飛ばしていた観客たちも固唾を呑む。

「死ねぇ、クソちんぽファイターがぁ！」

《大谷、チェーンで首を絞めてきた！　これはきついっ、乙女の柔肌に鎖が食い込む――！》

「う、うぐぐ……！」

どこからか持ち出してきた鎖を美結の首に巻きつけ、思い切り締め上げる大谷。

とっさに手を入れて首が直に絞まるのだけは避けた美結だが、それでも苦しいことには

変わりない。
「大谷、反則だ！　ワン、ツー、スリー、フォー……」
レフェリーの反則カウントギリギリまで美結を痛めつけてから、彼女の身体を蹴って解放する大谷。
美結はせき込みながらゴロゴロとコーナーまで転がって相方にタッチし、鞭の痛みが抜けた冴香が前に出る。
《首を絞められた天音から室戸へタッチ！　鞭打ちのダメージが抜けた室戸へ大谷突っ込んでいく！》
両腕を広げて突進していく大谷に、冴香はふわりとした跳躍でこれをかわし。
慌てて振り向いた大谷だったが、どこにも相手の姿がない。
「なっ……どこだ！」
「こっちですよ」
声は大谷の左から。
消えた冴香の姿は、ロープ際かつ大谷の真横にあり。
そこから、一直線に突っ込む。
「室戸流『花』の七手『竜胆（りんどう）』」

「う……お、おほぉおお、ちんぽぉおおおおお――！」

真横からダッシュし、相手の目の前を通過して走り抜け。

その通過の瞬間、超速の手コキで射精に導く。

ビシャス大谷の真珠を埋め込んだ巨大ペニスから、大量の白濁液が噴き上がった。

《決まった――！　室戸流性技で大谷たまらず敗北射精――！　これで射精回数二発目、聖珠決勝進出にリーチがかかった――！》

「ちんぽぉおお――！　んほおおおおちんぽ、ちんぽ敗北射精してるぅううう――！」

「美結さん、一気に！」

「うんっ！」

《天音、室戸のツープラトン攻撃だー！　天音が正面から縦パイズリで大谷のちんぽを挟み込み、後ろから室戸がアナル舐めと金玉愛撫で的確に追い詰める！　これは厳しい――！》

「くっ、くほおっ、くほぉおおお……！　ちんぽっ、ちんぽぉおおお……！」

「ほら、イっちゃいなよ大谷さん！　一人で私たちタッグにかなうワケないんだから！」

「さっきはとても痛い目に遭わせてくれましたね、ならば私たちはとっても気持ちよくして差し上げますので」

連続射精を促し、一気に流れを引き寄せにかかる聖珠タッグ。
相方は脱落しているためカットにも期待できず、為す術なく真珠入りペニスからは敗北の精液が噴き上がる。
「ちんぽぉおおお――！　ちんぽちんぽちんぽ、ちんぽぉおおおおお！　こんなクソッタレ野郎どもに私のちんぽがぁあああ――！」
《大谷イった――！　真珠を埋め込んだ凶悪ペニスから大量の白濁液を出して絶頂――！　悪の最高峰ちんぽファイターも射精しているときは雌の顔だ――！　鳳落学苑三回射精、準決勝第一試合は天音・室戸の聖珠学園の勝利であります！　聖珠学園、決勝進出だ――！》
「あへぇえええちんぽぉおおおお――！　極悪ちんぽ射精気持ちいいぃいいいい！　真珠入りちんぽからみっともない敗北精液出てるぅううう――！　悪はやっぱり正義に負ける運命なのぉおおおお――！　ごめんなしゃい、ベビーフェイスに負けちゃうクソダサヒールちんぽファイターでごめんなしゃいいいいい！　極悪で真っ黒に染まったちんぽからピュアな敗北白濁ザーメン出てるのぉおおおお――！　んほぉおおちんぽちんぽちんぽぉおおお！　ちんぽぉおおおおおお！　ちんぽぉおおおおお――！」
「やったー！」

美結は大谷の敗北射精に、跳び上がって喜ぶ。
ラフファイトオンリーのビシャス大谷と、反則アイテムで徹底的に痛めつけてくるルキフェル紫藤。
極悪底辺校のヒールタッグには苦戦を強いられたものの、これでついに決勝進出。
あと一つ勝てば、念願の優勝だ。
「ほぉお……おほおおお……ちんぽ、ちんぽぉおおおお……」
五分ほどの射精を経て快感の余韻が引くと、ビシャス大谷はマット上でむくりと起き上がってため息を吐いた。
「はぁ……これで引退か……最後にあのクソゴリラの剛羅をブッ射精させてやりたかったけどな」
「それは私たちの役目ですよ」
サラッと返す冴香に、大谷は怒るかと思えば派手なペイントを施した顔をフッと緩めて静かに笑い、立ち上がった。
「あんたら、強かったな。機会があったらどっかでまたやり合おうぜ」
（あれ、案外いい人……？）
スっと手を差し出して美結に握手を求めてくる大谷。罠かと一瞬思ったが、試合も終わ

っている以上はそんなことをしても意味がないと気づきそれに応じた。
　すると大谷は握った美結の手をグイと持ち上げ、リング中央で彼女を褒め称える。
　そのありように、観客たちも歓声を上げて拍手を送った。
「絶対優勝しろよな、あんたら！」
「う、うん……！　ありがと……」
　しかる後にビシャスはまだマスクを失いめそめそ泣いているルキフェル紫藤をひょいと小脇に抱えて、キャーキャー騒ぐファン――主に女性たちへ軽く手を挙げ応えながら去っていく。
「ううう……ごめんなさい大谷さん、こんな形で引退試合にしてしまってぇ……私、恥ずかしくて情けないですぅ……うっ、うっ」
「あーもう、いいっていいって。お前とのタッグ楽しかったぜ。秋からはお前が極悪軍団の中核だ、しっかり頼むぞ。だからほら泣くなって。自信持て紫藤。大丈夫、極悪軍団の奴らもみんなお前についてきてくれるさ」
　そんな二人の背中を見送りつつ自分たちもリングから降りながら、美結はぽかんとしたように言う。
「意外といい人だったね……？」

「ヒールは基本的にいい人が多いですよ。常識や相手への敬意、それとどこまで痛めつけていいかの判断がきちんとできていないと務まりませんから」

サラリと言ってのける冴香に、美結は恥ずかしさで顔が熱くなる。

地はいい人だった彼女のマイクパフォーマンスを演技だと気づかず、素で食って掛かってしまった。

「いいんじゃないですか、結果的にギミックとして盛り上がりましたし。無演技に勝る演技もありません」

「はうぅ……」

「ともあれこれで決勝進出ですが、相手校はやはり……」

冴香が口にしたその瞬間。

先ほど自分たちが降りたリングの上で、人のものとは思えない絶叫が上がり。

「おごぁああ――！　ちんぽぉおおお――！　ちんぽ一瞬でこわれたあああああ！　崩壊射精きたぁあああああ――！　おあがぁあああちんぽぉおおお――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおお！　死ぬ、しぬっ、じぬぅううう――！　射精しながら死ぬぅううう――！」

白目を剥いて精液を噴き上げる少女と、彼女を自らの五十センチを超える肉棒で破壊した巨躯の少女がそこにいた。

レフェリーに強制的に試合を止められ、準決勝第二試合が開始三十秒で決着を見る。
《準決勝第二試合、勝者……剛根学院！》
「やはり剛根ですか、予想通りですね」
「うえぇ……ちんぽも萎えるプレッシャーだよ……って、ひいいっ、こっち来る！」
堂々とリングを降りてこちらに向かって来る、剛根タッグ。
自分たちを目指していることは明らかだ。
やがて彼女らは美結たちと対面し、超大柄の少女が威圧的に口を開く。
「……逃げずに上がってきたか、聖珠学園」
「どうも」
剛羅万砕子。
百八十センチ、百キロを超す巨躯と、五十センチを超える超剛直肉棒。
ＦＴＢ四大流派筆頭である「剛羅流」の次期当主である彼女を倒さなければ、優勝はない。
「室戸流……貴様を崩壊射精させるこの時を待っていた。今のうちに射精する時に何を言うか考えておくといい」
「あなたは負けた時の言い訳でも考えておくといいですよ。四大流派筆頭が他の四大流派

に後れを取ったことの、メディアに対する釈明を」
「非力ゆえ『技』に逃げた軟弱流派が。口の利き方に気をつけろ」
「……室戸流を軽んじていると、いくらあなたでも足を掬われますよ」
昨日に続き、またも舌戦を始める二つの流派。
美結がその迫力に慄(おのの)いていると、相方の黒崎もまた美結へ話しかけてきた。
「天音美結……金玉に敗北精液はしっかりと溜めてあるだろうな」
「そ、そ、それはこっちのセリフだよっ。新人戦のにっ、二の舞にしてあげるんだから！　そ、そういえばあの時の黒崎さん、可愛い顔でびゅーびゅー射精してたよねっ！」
同じように挑発的な言葉を投げかける黒崎夏希に、美結も精いっぱいの気概で返す。
彼女もまた、剛羅と比べれば劣るとはいえ相当な実力のちんぽファイターだ。
「……あんなのはマグレだ。それをこれからの決勝で証明してやる」
「の、望むところだから！　またいっぱい精液出させてあげるよっ」
言うだけ言って黒崎は去っていき、剛羅も冴香から視線を外して自分たちの学園のブースへ歩いて行く。
決勝戦は今から三十分後に開始されます、とアナウンスがあった。
（あと三十分、か……）

ついにここまで上がってこられた。
しかし最後の壁は果てしなく高く、そして分厚い。
武者震いか、恐怖か。
震えている美結に、冴香が声をかける。
「やるしかありませんよ美結さん。ちんぽ勃起してますか？」
「だ、だ、大丈夫！　最終調整しよ、冴香！」
正直なところ、剛羅は怖くてたまらない。
だが、自分たちだってここまで勝ち上がってきた。
ここまで来て、負けるわけにはいかない。
敗北射精してしまうわけにはいかない。
必ず優勝してみせると、美結は自分のペニスを奮い立たせる。

NUMBER 09 きよすみはるか 清澄遥

（シスターハルカ）



私立神性女学院一年生
ちんぽファイターランク3
タイプ:バランス/ベビーフェイス
得意技:ホーリーちんぽストライク
体型:158cm/55kg
B91(F)/W55/H93
ふたなり:15～26cm/ズル剥け
黒光りするストレート/太く逞しい
ステータス:体力B/筋力B/瞬発力B
ちんぽ攻撃力B/テクニックB/我慢強さA

宗教系学園のふたなりちんぽシスター、金髪のほう。心身の鍛錬にFTBを取り入れており、禁欲を礼賛し体を鍛えているため射精しにくく能力は高い。普段は学園内の大聖堂でお祈りオナニーをしている。ご神体に精液をかけることでちんぽ加護が得られるらしい。

NUMBER 10 すいてんぐうひじり 水天宮聖

（シスターヒジリ）



私立神性女学院二年生
ちんぽファイターランク3
タイプ:バランス/ベビーフェイス
得意技:セイクリッドちんぽアンセム
体型:166cm/60kg
B98(H)/W58/H95
ふたなり:18～27cm/ズル剥け
カーブした太い巨根/血管が浮き出ている
ステータス:体力B/筋力B/瞬発力A
ちんぽ攻撃力A/テクニックB
我慢強さA+

ふたなりちんぽシスター黒髪のほう。高い素質を持ち、数多のちんぽファイターを敗北入信射精させて布教に貢献した聖セイントちんぽファイター。普段は学園に礼拝にきた者たちへちんぽ神様の教えを説いている。柔らかな物腰で慈愛に溢れるシスターだが、インチキ宗教呼ばわりされると烈火のごとく怒り出すらしい。

NUMBER 11 ルキフェル紫藤（しどう）



私立鳳落学苑一年生
ちんぽファイターランク2
タイプ:テクニック/ヒール
得意技:一本鞭連続殴打
体型:151㎝/45kg
B70(A)/W54/H74
ふたなり:11～19㎝/仮性包茎
勃起しても少し被っている
ステータス:体力D/筋力E/瞬発力B
ちんぽ攻撃力E/テクニックB/我慢強さE

顔の上半分をマスクで隠した覆面ちんぽファイター。非常にサディスティックな性格で、身体能力は低いがあらゆるアイテムを駆使して対戦相手を快楽漬けにする。しかしドSゆえ自分がやられるのには弱く、反撃を許すと簡単に射精してしまう。覆面の下は非常に愛くるしい顔立ちで、それがコンプレックスのためマスクを取られると途端に弱気になってしまう。本人いわく覆面をしているほうが「素」らしい。

NUMBER 12 ビシャス大谷（おおたに）



私立鳳落学苑三年生
ちんぽファイターランク4
タイプ:パワー/ヒール
得意技:金玉蹴り
体型:170㎝/68kg
B93(G)/W63/H95
ふたなり:14～27㎝/ズル剥け
ストレート/亀頭に真珠埋め込みあり
ステータス:体力A/筋力A/瞬発力C
ちんぽ攻撃力A/テクニックD/我慢強さA

鳳落学苑FTB部部長（夏の大会で引退）。反則を厭わないラフファイトで数多のちんぽファイターを恐怖に陥れてきたヒールちんぽファイター。大柄な体躯、派手なメイクと髪形で相手を威圧し、観客への暴言やレフェリーへの攻撃などエゴイストヒールと狂人ヒールを足したようなギミック。反則抜きでもかなり強い。素は非常にいい人で、後輩への面倒見もよく自身のファンに対しても丁寧に接する几帳面な人物。さらにプライベートでは別人のように貞淑な美少女へと変貌するらしいが……？

第９話　夏季ＦＴＢ都大会決勝

《会場は異様な熱気に包まれております！　それもそのはず、夏季ＦＴＢ都大会はいよいよ決勝戦！　そしてその二校は大方の予想通り、新進気鋭の聖珠学園と歴史ある伝統強豪校剛根学院！　共にＦＴＢ四大流派を擁する四大流派同士の対決でもあります！　最高のカードを前に、観客たちも押すな押すなと詰めかけています！》

ついにこの時がやってきた。

二日間に渡る、夏季ＦＴＢ都大会――その決勝戦が間もなく執り行われる。

一万人を超すＦＴＢファンたちからの声援を全身と男性器に受け、美結と冴香はリングインして制服を脱ぎ、コスチューム姿になる。

《さぁ、まずリングインしてまいりましたのは聖珠学園の天音・室戸タッグ！　四大流派の中でも技巧に秀でた『室戸流』の血を引く銀髪美少女ちんぽファイター室戸冴香、そして彼女に並び勃つのは今大会一番の注目選手である天音美結！　この大会でも戦うたびにメキメキと成長する彼女、その可能性に期待せずにはいられません！　室戸の実力は言うに及ばず、土壇場に強い天音の底力が優勝への鍵となりますか！》

（これに勝てば優勝……優勝だっ！）

だが、やすやすと勝たせてくれないことは明らか。

ここまでは冴香の力と二人のコンビネーションでどうにか乗り切ってきたが、最後の相手はやはり別格。

今、そのタッグの片方がトップロープを跳び越えリングインし、制服を脱ぎ捨てて黒のリングコスチューム姿になる。

黒髪ショートで引き締まった肉体を持ち、九十五センチのバストと反り返った二十八センチの超硬度ペニスを誇る攻撃的なちんぽファイターだ。

「剛根学院、黒崎夏希！　力で射精させるのみ！」

《来ました！　強豪校、剛根学院におきまして入学直後から注目を集める若きエースちんぽファイター黒崎夏希！　新人戦では天音に不覚を取りましたがその実力は学生ちんぽファイターの域を大きく跳び越えております！　まったくもって油断なりません、そ、そして……！》

実況の声が上ずり。

ズシャッ、と足音をリングに響かせ「彼女」は現れる。

ただ現れただけでリング上に暴風が吹き荒れるかのごとき、別格のちんぽ闘気を漂わせ

て。

「――剛根学院〝破壊帝〟剛羅万砕子。弱きちんぽを粉砕せん！」

《で、で、で……出てきてしまいましたぁ！　剛根学院創立者直系の子孫にして、ＦＴＢ四大流派筆頭『剛羅流』次期当主、『破壊帝』こと剛羅万砕子の出御（しゅつぎょ）であります！　身長は百八十センチ、体重なんと百十キロ！　力でねじ伏せ射精させることを信条とした剛羅流におきましても、十代に一度の完成された当主と評されるこの少女こそ、まさに最強にして絶対のちんぽ帝王！　その五十三センチの超絶巨根に崩壊射精させられてきたちんぽファイターは数知れず、今大会でも対戦相手をことごとく葬ってきた彼女に、天音・室戸ペアは果たしてどう勃ち向かうのか！　というか人間の勝てる相手なのでしょうか！》

「ひ、ひいい……っ！　やっぱ無理無理ムリムリ、怖いよぉ！」

「落ち着いてください美結さん、作戦通りに彼女は私が相手しますので」

改めてリング上で対峙し、彼女の巨躯と超巨根を前に足がすくんでしまう美結。猟銃でもなければ倒せる気がしない。

冴香が彼女の肩に手を置いて落ち着かせ、その上でじっと剛羅を見つめて考える。

（一応対策は練ってきましたが、どこまで通用するか……）

都大会一日目が終わった後、美結と冴香は帰宅する前に会場近くのハンバーガーショッ

プで二時間ほど対剛根学院戦に向けた作戦を練っていた。
アナログ人間な冴香によって何枚もの紙を消費し、ああでもないこうでもないと唸ってはみたものの、やはり剛羅の圧倒的なちんぽ攻撃力に対抗する手段は見つけにくかった。
結局、二人の至った結論は。
「剛羅とまともに当たるのは避け、黒崎夏希に狙いを絞りましょう」
という流れ。
黒崎に狙いを絞り、大量射精で勃起不能に追い込んで失格とさせ、二対一になればまだ可能性はある。
チャンスは試合序盤から中盤にかけて、黒崎が出てきた時だ。
剛羅を孤立させられれば大幅に楽だし、仮に彼女を射精させられなくても時間切れの判定勝ちを狙うことができる。
「とにかく黒崎夏希を狙うこと。ですが相手もこの程度の作戦は読めているでしょうし、黒崎のちんぽ戦闘力もあくまで剛羅と比べれば劣るだけで十分ちんぽファイターとして強力なほうです。くれぐれも油断せずに行きましょう、ワンミスが命取りです」
「黒崎さんをイカせる前に、タッチされて剛羅さんが出てきたらどうしよう？」
「……残念ながら美結さんではどう頑張っても相手になりません、彼女が出てきたらすぐ

私に代わってください。私とてアレは正面からではまず勝てる相手ではありませんが、なんとかチャンスを作るくらいはできるかも知れませんから」

というのが、昨日話した作戦会議の内容だ。

（ですがやはり、リング上での彼女は別格……正面からではまず勝ち目はありません）

四大流派同士での対決という構図は、世間が大いに望む割には滅多に実現しない。

当主同士で年齢に差がある場合も多いが、何よりの理由は他の流派が剛羅流に挑めばほとんどの確率で敗北射精してしまい、それにより流派としての勢力を弱めてしまう結果につながるからだ。

それほどまでに、古来より剛羅流は四大流派の中でも頭一つ抜けた実力、そしてちんぽ攻撃力を誇る。

冴香の包茎ペニスは、わずか三十二センチ。

どう頑張っても剛羅万砕子の五十三センチの大業物に太刀打ちできるものではない。

ましてや美結など、彼女の半分以下だ。

（しかし、勝利への鍵は美結さんが握っている……）

今は彼女を信じ、機を見出すしかない。

リングの上には、予想通りにまず黒崎が出てきている。

ここは美結に任せ、可能であれば一回射精させてもらいたい。
「頼みます、美結さん」
「分かった、行くよっ」
《まずは天音対黒崎の構図だ！　過日の新人戦と同じ組み合わせであります！　当時まったく無名だった天音に敗北射精を喫した黒崎、その眼はリベンジに燃えている！　天音、油断してはなりません！》
実況の声もどこか遠く感じる。
ましてやすぐそばで何か注意事項を言っているレフェリーの声など全く耳に入らない。
それほどまでに眼前の黒崎が放つちんぽ闘気は、美結の身をチリチリと焦がしていく。
「天音……今こそリベンジの時だ！　行くぞ！」
「いいよ、かかってきなよ！」
今、高らかにゴングが鳴り。
夏季ＦＴＢ都大会、その最後の戦いが幕を開ける。
《黒崎、ゴングと同時に仕掛けた――！　回転しながら天音に襲い掛かる、速攻でちんぽ斬撃を食らわし射精させるつもりだ！》
「はあああああっ！」

「くっ……」

二十八センチの巨根を振りかざしコマのように回転しながら突っ込んでくる黒崎を、美結はいったんかわしてから戻ってきたところを迎え撃つ。

「やあ――！」

回転する黒崎をハイキックで弾き飛ばし、ロープに振って戻ってきたところを掌底でもう一撃。

「チッ！」

《黒崎ガード！　しかし天音、お構いなしに連続掌底で押していく！》

一瞬でも守勢に回れば、苛烈な猛攻に押し切られてしまう。

それは新人戦の時から十分に分かっているのだ。

「やあっ！　てぇ――っ！」

「なめるなぁ！　この程度！」

が。

何度目かに伸ばした腕を掴まれ、そのまま瞬時に背後に回られ。

（しまっ……！）

なんとか抜け出そうとする美結だったが、強引にバックから挿入される。

「あっ、あはぁああ！　まんこっ、まんこ犯されてるぅううう！」
「美結さん！」
《黒崎早くも天音に挿入した！　ＦＴＢにおいて女性器への挿入は自らのペニスへ快感が及ぶため諸刃の剣と言われております、しかし力での射精を信条とする剛根学院、並びに黒崎はそれを意に介さない！　射精する前に射精させる、シンプルにして絶対のそれがあるのみだ！　強烈なピストン運動により肉と肉がぶつかり合い、天音の嬌声がリングに響き渡ります！》
「はっ、はっ、はぁあああ――！　まんこ、まんこ、まんこぉおおお！」
さらに黒崎は美結を立ちバックで犯しながら、彼女の巨根を手で猛烈に扱き始める。
「これでどうだ！」
「らっ、らめぇ、まんこずぽずぽしながらちんぽしごきらめぇえええ……！　イっちゃう、イっちゃう、敗北射精決めちゃうよぉおお！」
早くもピンチだ。
冴香が飛び出してカットに向かい、黒崎を強引に引き離す。
「いったんちんぽ落ち着けてください、ですがすぐに交代を頼みます！」
「ご、ごめん冴香っ……」

射精への快楽が溜まっていた美結はいったん退きつつ、こみ上げてきた性欲を押し下げる。

黒崎を冴香が相手するのは悪手だが、状況を悪くしないためにも一度時間を稼がないとならない。

「いきますよ」

あわよくば、ここで射精に導く。

新人戦の時に射精させられた、その借りも返しておくべく。

「室戸流『花』の八手『睡蓮（すいれん）』」

《おーっと室戸、妙な動きでフラフラとリングを蛇行する！　速いのか遅いのか分からない不規則なステップだ！》

独特の足運びによりフラフラ歩きながら近づき、幻惑させて一瞬のもとに接近、手コキで射精に導くのがこの性技。

（今です）

（甘いッ！）

が、しかし。

一瞬の時のうちにすり抜けながら行った手コキは、黒崎に半身でかわされた。

観客も、おおっ、と声を上げて温まる。
「なっ……」
（睡蓮が読まれた!?　この運足に惑わされないとは……）
《これは黒崎、不規則な室戸の動きを見切ってかわした！　室戸流性技が通用しません！》
攻撃一辺倒ではない黒崎の地力に、さすがに冴香もわずかながら動揺し。
その直後、回復した美結が手を伸ばしてタッチを求めてきていた。
「冴香っ、交代！　もう大丈夫！」
「は、はい」
作戦通りに、あくまで黒崎の相手は美結に。
攻め損なったからといって深入りすると、それだけ消耗して剛羅との戦いで厳しくなってしまう。
《聖珠学園、短い間隔でタッチを繰り返しています！　剛羅のために室戸を温存する作戦のようだ！》
「その程度、読めぬはずもない」
自軍コーナーで、剛羅は腕を組んで言う。
聖珠の考えていることなどお見通しだとばかりに。

（黒崎、あまり遊びすぎるな）
（はい、天音など即座に）
アイコンタクトで剛根タッグは会話し、出てきた美結に黒崎はまた突っこんでいく。
連続正拳突きで迎撃する美結だが、黒崎は腕でガードしながらボクサーのような動きでダッキングしこれをかわしつつ、懐に入ってアッパーカット。
「あぐっ……！」
《まともに入った、天音これは苦しい！　そして黒崎、相手の斜め前に陣取った！　これは彼女の得意技――！》
高速で稲妻を描くような軌道でステップインし、瞬間的に二度の強烈な肉棒打撃を美結のペニスへ炸裂させる。
これこそ。
「サンダーステップちんぽ！」
「ああっはぁぁあああ――！　ちんぽぉおおお！」
《出た――っサンダーステップちんぽ！　ジグザグにステップして二度のちんぽ打撃を食らわす彼女の十八番が直撃です！　天音これは気持ちいい、たまらずダウンだ――！》
（うっ……あはぁあああ……新人戦の時より威力が上がってるよぉ……こんなの射精しち

ゃう、ちんぽ負けちゃうぅ……！）

「まだまだ！　復讐はこれからだ！」

サンダーステップちんぽで後ろへ抜けた黒崎は、そのままコーナーポストを駆け上がって空中へ跳び上がり。

ふらつく美結へ狙いを定め、彼女の勃起したペニスをめがけて落下、自らの巨根を叩きつける。

「閃け、霹靂！」

「おはぁあああああ――！　真上からのちんぽ叩きつけダイレクトにヒットぉおおっほぉおおおおお！」

男性器の落下叩きつけを命中させ、美結に絶大な快楽を与えて。

さらに正面から、一回転して遠心力を全開にしたペニスの一撃で吹き飛ばす。

「轟け、雷霆！」

「あはぁあああああ――！　ちんぽで吹っ飛ばされちゃうぅうう！」

思い切り吹き飛ばされロープを大きく撓ませ、その反動で美結の身体は戻ってくる。

そこを狙い澄まし、痛烈な男根の一撃が三度（みたび）美結の肉棒へ炸裂。

「打神雷公鞭（だしんらいこうべん）っ！」

「おおほぉおおお――！　ちんぽぉおおお――！　ちんぽ強すぎぃ、ちんぽアタックきつすぎぃいい！」

《なんという強烈な連続ちんぽ攻撃！　力でねじ伏せ射精させる剛根学院の在り様を一年生にしてここまで体現している黒崎夏希、やはり彼女はこの学院にあるべき逸材だ！　天音大丈夫か、まだ射精には至っていないようですが、果たして力のちんぽの前に対抗策はあるか！》

その場にうつ伏せでダウンして自分のペニスを守りつつ、顔を真っ赤にして涙目になり全身をひくつかせて快楽に耐える美結。

しかし極端な防御姿勢は指導・警告の対象になるため、あまり長くこうしてはいられない。

ちんぽファイターは、立ち上がって闘うのみなのだ。

「はあっ、はあ……」

「美結さん、交代を……！」

コーナーから冴香が手を伸ばす。

敏感になっている美結を守り、また自分が前に出なければならない。

美結もそれに従い、もつれる足でなんとか自軍コーナーへ引っ込もうとするが。

「逃がすか！　お前はここで終わりだ！」
「っ……！」
黒崎に腕を掴まれ、グイと引っ張られて彼女の方を向いてしまう美結。
快感がまだ残っていて絶体絶命の彼女に、黒崎はペニスをいきり勃たせて猛攻をかける。
動けない美結に、一瞬にして四度のちんぽ打撃を食らわせ。
「若雷（わかいかずち）！　土雷（つちいかずち）！　鳴雷（なるいかずち）！　伏雷（ふすいかずち）！」
「あはぁ、あはぁあああああ――！」
一瞬にして自らの巨根を左右からペニスで打たれ、さらに二つの金玉もしたたかに打ち付けられ。
「大雷（おおいかずち）！　黒雷（くろいかずち）！」
「うああっ、あはああ！　金玉らめぇえええ――！」
「火雷（ほのいかずち）！」
「おほぉおお――！　おっぱいぃいいい――！」
しかる後に豊満なバストを思い切りペニスで打ち付けられ、抗いがたい快楽が胸に奔り。
そして、背後に回り込んだ黒崎による最後の一撃が、美結の女の子の部分へ炸裂する。
「折雷（さくいかずち）ッ！」

「んほぉあああああああ――！　ちんぽ、ちんぽちんぽぉおおおお！　ちんぽが、ちんぽ敗北射精きたぁあああああ――！」

「美結さん……っ！」

二度目となる強烈な挿入、それによる絶大な快楽で。

天音美結は黒崎の前に、強制敗北射精を味わわされる。

《イったぁあああ――！　天音バックから挿入され大量に敗北射精、黒崎の一瞬八撃がクリーンヒットして剛根学院の先制だ――！》

「これがお前を敗北射精させるために厳しい修行で身につけた必殺技――『八色雷公（やくさのいかずち）』だ」

「あはぁあああああ――！　精液出るっ、出るっ、出てるぅううう！　冴香ごめんっ、ちんぽっ、ちんぽちんぽちんぽぉおお――！　大事な決勝戦で先制敗北射精しちゃったぁあああ――！　あはぁあああちんぽミルク止まんない、ちんぽミルク出しまくり飛ばしまくりお客さんにぶっかけまくりなのぉおおお！　みっともない敗北精液止まんないよぉおおおお――！」

後ろから黒崎夏希に貫かれ、絶大な快楽の奔流のままに二十六センチの男根から白濁液をこれでもかと爆射しながら崩れ落ちる美結。

彼女の女性器から自らのペニスを引き抜き、黒崎はさも当然のように言い放った。

「当然だ。これがお前と私の、ちんぽパワーの差だ」

「あはぁあああ――！　勝てない、勝てないぃいいい！　黒崎さんのちんぽ強すぎなのぉおおお――！　ちんぽ負けしちゃった、この子には勝てないってちんぽが覚えちゃったぁあああ！　ちんぽにトラウマ、トラウマできちゃったぁあああ！　ちんぽトラウマ射精気持ちいいのぉおお――！」

四度のペニスへの打撃の後に二度の金玉への攻撃、さらに胸を思い切り刺激され、最後にはヴァギナへの強烈な挿入。

一瞬八撃をまともに食らい、美結は無様にも敗北射精してしまう。

《決まった――っ、『八色雷公』！　イザナミの全身にとりついたとされる八の雷神、その名を冠する超速のちんぽ八連撃！　天音、決勝の舞台で無様に敗北射精っ、特濃の負けミルクを提供中だ――！》

「く……美結さん！」

見守っていた冴香が、コーナーで肩を落とす。

これは痛い。

（さすがに相手も一度負けたからといって簡単に射精させられるほど甘くはないと……それどころか逆に美結さんが射精させられてしまうとは）

自分たちはまだあと一回射精しても大丈夫だが、これは大幅に不利になった。
美結が射精により一時的に戦闘不能になった以上、黒崎の相手を冴香がしなければならず。
そこで消耗してしまったところに剛羅が出てきたら、一気に窮地へと追い込まれる。
（やられる前にやるしかありませんね）
できるだけ早く、黒崎を射精させなければならない。
《さあ室戸出てきた、まだ聖珠学園は一回射精しただけであります、わずかに差がついただけに過ぎない、ここからどう魅せてくれるか注目であります！　天音もコーナーに戻って身体とちんぽを休めている、まだその眼は死んではいません！》
慎重に間合いをとり、冴香は黒崎の攻撃をいなしながら機を窺い。
やがて自分との距離が近すぎず遠すぎない時に、彼女の脚が比較的大きく開かれたその一瞬を狙い澄まし。
「いきますよ」
音もなく突進し、相手の目の前で沈み込む。
《あ――っと出るのか室戸流の性技！　この型は！》
「室戸流『雪』の五手『流雪（ながれゆき）』！」

新人戦で黒崎の相方を射精させた性技だ。
相手の股下をスライディングでくぐり抜けながら、両手でペニスを下から包んで一瞬のもとに強制射精させる。
が、それもまた。
「甘い！」
股間に伸ばした黒崎の手によりガードされ、冴香はただ股下をくぐり抜けただけに終わってしまう。
「その動きはビデオで百回は見た、同じ技が通用すると思うな！」
「そうですか、ではここからの派生技はご存じですか」
が、冴香はすでに次の行動に出ていた。
股下をくぐり抜け、黒崎の背後を取った銀髪の少女は。
そのまま高く跳ね上がり、二次関数のグラフのような極端に縦長の放物線を描いて宙に舞い、観客の喝采を浴びる。
「室戸流『雪』の九手――」
「く……！」
振り返って目標を定めようとした黒崎だったが、もう遅い。

目の前で真っ逆さまに落ちてきた冴香の両手に自らのモノを挟み込まれ、錐で穴を開ける時のように一瞬にして激しくこすり上げられ。

「――『凍滝（いてだき）』！」

「おおっほぉおおおお――！　おほぉおおおお、おおおっほおおおあぁああ！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおおお――！　出る出る出る出る、精液出るぅうううう！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおお――！　ちんぽから敗北精液出ちゃうぅうう――！」

受け身を取りつつマットに着地した冴香の前で、崩れ落ちながら敗北射精してしまう。

《イったぁ――――！　室戸流性技炸裂ぅうう――！　これで射精カウントは一回ずつ、互角となりました！　ああっと黒崎、あまりの快感に自らちんぽを扱いて射精の勢いを増大させている！　超大量の敗北精液噴射ショーだ――！》

（や、やった！　これで一回射精、五分五分だよ！）

冴香の華麗な性技に、美結も大興奮して勃起する。

一度かわされたように見せかけて、派生技で仕留めるその技巧に観客も大盛り上がりだ。

もちろん、黒崎の温かい精液を浴びることにより盛り上がっている者もいるが――。

「ちんぽ、ちんぽっ、ちんぽぉおお！　すごいの、すごいのぉおお！　力のちんぽ敗北射精しちゃったのぉおおおお！　恥ずかしいミルクいっぱい出てるのっ、みんな飲んでっ、

黒崎夏希の金玉から産地直送でお届けする新鮮な恥ずかしい敗北ミルクいっぱい飲んでぇえええ――！」

《ものすごい射精であります！　これは金玉が空になる勢いだ、ＴＫＯで黒崎が失格となれば聖珠学園は大幅に有利になる！　さらに室戸、崩れ落ちて自らのちんぽを扱き上げ射精する黒崎のそれを舐め上げてさらに精液の勢いを加速させています！　金玉を転がしながらアナルに指を入れて最高の射精のお手伝いだ――！》

冴香もそれを狙って、黒崎の精液を残らず搾り取ろうとしている。

とにかくここで彼女を脱落させて剛羅万砕子を孤立させ、二対一に持ち込んでやっと互角に近い戦いができるのだ。

何としても黒崎にはいなくなってもらわなければならない。

「ゆるしてっ、ゆるひてぇえええ！　金玉ふにふにしないれぇえええ――！　金玉はだめ、射精してる金玉優しくふにふにするのだけはらめなのぉおおおお！　金玉は女の子の一番デリケートなとこなのぉおおお！　全部出ちゃう、残らず精子出しちゃうぅうう――！」

三分以上の大量射精の後、収縮したペニスから精液の残りをとぷとぷと零してダウンする黒崎にレフェリーがカウントを取る。

（これで勃起しなければ……）

冴香は立ち上がって手の甲で口を拭いつつ、呼吸を整えながら祈るような気持ちでカウントを耳にする。

黒崎もなんとか勃とうとしていたが、やがてカウントは十を迎え。

「はあ、はあ……くっ……くそぉお……この私がっ、力のちんぽがっ……」

《黒崎夏希まさかの失格だ――！　大量射精で勃起できないっ、これにより試合から脱落し、以降剛根学院は剛羅一人で続行であります！　これは果てしなく大きいっ、聖珠学園に可能性の灯がともった――！》

（よし、やりました）

小さく頷き、冴香は事が上手く成ったことを確かめる。

コーナーに目をやると、美結が喜んでバンザイして跳びはねている。

「やったよ冴香――！　勝てるっ、勝てるよ！」

「……いえ、これでやっと戦いが始まるレベルです。油断せずに」

そう、これでようやくイーブンかそれに近い条件だ。

まだ敵の本命は、無傷で残っているのだから。

「その程度で勝ったつもりになるか、めでたい粗ちんぽファイターどもよ！」

《つ、つ、つ、ついに剛羅が腕組みを解いた！　相方の脱落により孤立し圧倒的不利な状

況でもこの余裕、この迫力、そしてこのちんぽ闘気！　今ＦＴＢ界最強のちんぽファイター、『破壊帝』剛羅万砕子がっ、ゆっくりと、ゆっくりと戦場に足を踏み入れる！　地獄がっ、地獄の門が開かれようとしております！》

観客が悲鳴と歓声を上げ、美結もその迫力に後ずさる。

冴香も、平静を装ってはいたが。

短い銀髪と、着物コスチュームの袖がかすかに震えていた。

「貴様らをまとめて崩壊射精させ、このくだらん大会に幕を引いてやるわ！」

「来ましたね、剛羅万砕子……ここからが本番です」

《皆さまリングを、リングをご覧ください！　室戸冴香対、剛羅万砕子！　ＦＴＢ四大流派同士の直接対決が！　いま！　ここにあります！　力の剛羅に技の室戸、まさに最高のカードが実現しました！》

観客も、実況も、滅多に見られない四大流派同士の直接対決に大いに盛り上がる。

この試合を生で観戦している一万人の観客は、後々にまで伝説を語り継ぐ生き証人となるのだ。興奮しないはずがない。

「剛羅！　剛羅！」

「室戸！　室戸！」

「剛羅！　剛羅！」
「室戸！　室戸！」
どちらを応援する声も、同じくらいの大きさで響き渡る。
それを全身に浴びながら、二人は互いから一瞬たりとも目を離さず会話する。
「予想以上に盛り上がるものだな、我らの戦いは」
「そのようですね、まあ私は自分の仕事をするだけですが」
「敗北射精か？」
「あなたの役目ですよ、それは」
言葉はそこで途切れ。
数秒の間を置いて。
剛羅の目の前から、冴香はフッと消失する。
《上だ――！》
「フン……！」
上空から落ちてきて自らの包茎ペニスを叩きつけようとする冴香に、剛羅は巨大な手をぬうっと伸ばして掴みかかる。
「はっ！」

その手の甲を軽く蹴り、巨腕を駆け下りながら冴香は剛羅の背後へ着地、後ろからペニスへ手を伸ばす。

が――。

「ぬうん！」

「ぐっ……！」

《おわあっ室戸、半回転しながら振り抜かれた巨大ちんぽにガードごと吹き飛ばされる！　そのままロープに振られ……》

「砕けろ！」

「がは……！」

《戻ってきたところに痛烈なちんぽラリアット――！　まともに食らってしまった！　大丈夫か室戸、肋骨は折れていませんでしょうか！》

「冴香あっ！」

美結が悲鳴を上げる。

対決開始早々、鬼の金棒のような巨大ペニスによる猛攻が冴香の細い身体を襲う。

体重の差が二・五倍ほどあり、まともな格闘技であれば対戦自体が実現しない。

だが、これはＦＴＢ。

射精すれば負けという唯一にして絶対のルールがあるのみだ。
《室戸大丈夫か、どうにか起き上がった、しかし序盤から剛羅にペースを握られているのは明らかであります！　なんとかして反撃に移りたいところだがさあどうする！》
「諦めろ。お前に勝機など最初からない。お前に限らず、ちんぽファイターの誰であってもな」
「……」
「たとえ室戸流の正統継承者、すみ――」
「その名を言うんじゃありません！」
剛羅の言葉に、冴香は今までで一番激しい語気で遮って。
美結も、相方の突然の怒りにびっくりする。
（冴香!?）
「室戸流『月』の六手、『月天昇（げつてんしょう）』！」
一瞬にして剛羅に近づき、コマのように回転しながら跳び上がる冴香。
三十二センチのペニスをそれによって振り回し、相手のペニスへぶつけつつ自身は空中に浮きあがりさらなる追撃の起点となるのがこの性技。
観客たちもその動きに酔いしれ、ため息と歓声が上がる。

「――『雪』の九手、『凍滝（いてだき）』！」

さらにそのまま落下し、両手で剛羅の巨大ペニスを扱きあげながらマットへ着地。

わずか数秒で、二度の強烈な快楽攻撃を浴びせる。

しかし――。

「フン……蚊でもいたか？」

「く……！」

（ぜ、全然効いてない！）

剛羅は射精するどころか、一ミリたりとも動いていない。

冴香も、美結も愕然とし。

「ちんぽ攻撃というのは……」

「冴香っ、あぶない！」

唸りを上げて振るい抜かれた巨大男根が、空気すら切り裂いて冴香の包茎ペニスへ直撃する。

「こういうものだ！」

「あっはぁあああ――！　ちんぽぉおお――！」

強烈どころではない。

それこそ人間のものとも思えない、鬼神のごとき一撃が炸裂し、冴香はきりもみ回転で吹き飛ばされコーナーポストへ叩きつけられた。

「さっ……冴香ぁあああ――っ！」

美結が涙目になって悲鳴を上げる。

あんな一撃があっていいものか。

あんなもの、崩壊射精するしかないではないか――。

《ちんぽに吹き飛ばされた――！　想像もつかない激烈な攻撃、そして激烈な快楽であります！　室戸必死にこらえている、しかしもうギリギリだ！　同じ四大流派でありながら、ここまで手も足もペニスも出ないのか！　室戸で倒せないというのなら、いったい誰がこの少女を倒せるというのでしょう！》

「が……っ、あはぁあああ……！　ちんぽっ、ちんぽ、ちんぽぉおおお……気持ちいい、ちんぽ気持ちいいっ……射精、射精したいっ、ちんぽから精液出したいです……！　この女に屈してっ、敗北精液たくさん出してしまいたい……っ」

あの一撃を食らって射精していないのは、ひとえに冴香が長年にわたり厳しい修行を積んできたからこそだ。

一般的なちんぽファイターであれば、その衝撃と快楽に一生分の精液を出し尽くして勃

起不全に陥りちんぽファイターとしての死を迎えるしか道はない。
文字通りの即死技なのだ。
「はあ、はあっ、はあ……」
「冴香っ！」
「き……来てはいけません、美結さん！」
無我夢中で助けに入ろうとする美結を、冴香は喘ぎながらも強い語気で押しとどめる。
彼女では剛羅相手に為す術もなく崩壊射精し、最悪その場でちんぽファイターとしての死を迎えてしまう。
こうなれば、打つ手は一つのみ。
快楽に打ち震える身体を無理やり起こし、冴香はちんぽ闘気を爆発させて叫ぶ。
「室戸流奥義！『花』の十五手『百花繚乱』！」
（これで試合を決めるしかありません！）
起死回生を狙うべく、奥義を発動する冴香。
音もなく銀髪美少女はリングから消失し、代わりに戦場に突風が吹き荒れる。
《室戸消えたぁあああ――！　これは二回戦で見せた超高速の奥義だ、目も開けられないほどの突風がリングに吹き荒ぶ！　観客も最高潮に沸き上がっております！》

観客も一度見ているだけあり、「冴香が消えた＝奥義発動」だということが分かっているため大いに沸き立つ。

もちろん、コーナーで見守っている美結であっても。

（やった！　冴香の奥義っ！）

リング中央で佇む剛羅の周囲を薙ぐように、幾筋もの突風が吹き抜けていく。

トップロープからトップロープへ跳び移り、その過程で相手のペニスを一瞬にして扱き抜き、それを超速で何度も繰り返すのがこの奥義だ。

十五、六、七――。

数え切れないほどの迅速な突撃の後、最後にひときわ強烈な疾風が巻き起こり。

消えていた冴香の姿が、コーナーポスト上に再び現れる。

「これでいかがです！」

《反撃を許さない強烈な超速手コキ！　これはさすがに剛羅流といえども無事では済まないでしょう！》

（冴香っ！　これイったよ冴香！）

美結は勝利を確信する。

そうでなくても相手を一瞬で射精させる室戸流性技の、その中でもこれは奥義だ。

いかに剛羅と言えど、この技を食らって射精しないなど――。

「フン、その程度か室戸流」

「う、うそっ……！　冴香の奥義が、全然効いてないなんて……！」

が、美結の希望的観測はあっさりと打ち砕かれ。

コーナーポストに乗った冴香も、絶望に美貌を歪ませる。

《な、な、なんとまったく効いていない！　まったく効いておりませんっ！　剛羅、室戸流奥義にカウパー液すら漏らさず仁王立ちだ！　あえて全段受けておきながらこの余裕、ちんぽ耐久力が果てしない！　まさに不落の砦、合肥新城（がっぴしんじょう）がごときストロングホールドであります！》

（そんなはずは……手コキは全段確実に入っていたはずです……！　まともに受けておいて効いていない、など……）

絶望する聖珠サイドに、剛羅は分かっていたとばかりに鼻から息を吐く。

「貴様らのちんぽ攻撃はそれで終わりか。私の前にはたとえ奥義であろうとも通用しないことを全身の細胞で理解したようなら、後は己の非力を嘆いて射精しろ」

「く……！」

《万事休すであります、進退ここに窮まった――！　聖珠学園、すべての打ち手を封殺さ

れて為す術がありません！　人類には剛羅万砕子を倒すことはできないのか――！》

絶望が、リングに降りていく。

勝てない、無理だ、そんな空気が会場中を支配していき。

「まだだよっ！」

その重苦しい空気は、少女の声で切り裂かれる。

美結がリング中央に飛び出し、冴香をかばうように立ち塞がった。

「冴香は休んでて！　もう一回あの奥義をぶつければ、もしかしたらチャンスあるかもだから！」

たとえ一度の奥義でビクともしなくとも、二度三度と奥義を重ねればさしもの剛羅も揺らぐかもしれない。

しかし奥義は奥義であるがゆえ、身体への消耗も激しい。

冴香が再び『百花繚乱』を繰り出せるようになるまで、自分が時間を稼ぐことができれば勝機は生まれる。

「可能性はまだ作れる！　絶対あきらめないんだから！」

「美結さん……分かりました、お願いします！」

相棒の決意を汲み、冴香はコーナーへ下がって体を休める。

《ここで聖珠タッチ、室戸下がった！　天音、一縷の望みを相棒に託し時間を稼ぐ腹づもりであります！　絶望的な状況でもわずかな光明を見出そうとするその姿勢！　戦いを諦めないその在り様こそ、まさにちんぽファイターたる姿であります！　観客も総立ちで万雷の拍手だ――！》

「無駄なことを……」

「無駄かどうか、試してみなよ！」

自分では勝てないのは分かっている。

だが、これはタッグマッチだ。

二人の力を合わせれば、剛羅流だろうと必ず射精させられる。

そのためなら、時間稼ぎでもなんでもしてやる。

「さあ来なよ、剛羅さんっ！」

「よかろう、ならば二度と記憶から消えぬほどの気持ちよすぎる敗北射精を味わうがいい！」

百十キロの巨体を駆り、剛羅が接近してくる。

まともに受けて立つのは愚の骨頂、一度左に跳んでかわしてから背後を取って。

「やぁ――っ！」

《天音鋭くハイキック！　しかし剛羅微動だにしません！　筋肉という最硬の鎧を身に纏っている剛羅万砕子には、物理攻撃全般が通用しない！》

蹴りを繰り出したものの、全くもって通用しない。

唯一彼女への物理攻撃が通る場所と言えば金玉くらいだが、金的攻撃は反則となってしまう。

それは美結のちんぽファイターとしてのプライドが許さない。

「砕けろ！」

「っ……！」

思い切り振りかぶってから、ゴウと空気を唸らせて横薙ぎに飛んでくる超巨根。

かろうじてバックステップでかわした美結だったが、発生した衝撃波がペニスへ襲い掛かりそれだけでも甚大な快感が走る。

「あはぁ……っ、ちんぽぉおお……っ！　直撃してなくてもちんぽ気持ちいいのぉ……っ」

《天音ギリギリでよけた、しかし剛羅の一撃はたとえ空振りしてもちんぽ衝撃波による遠距離快楽攻撃が待っている！　常軌を逸したこのちんぽ攻撃力を前に、四大流派でない天音はいかに立ち回るか！》

ビリビリとしたペニスへの快楽。

それを必死に抑え込み、次に来る一撃に備える美結。
「耐えるだけで精いっぱいか。貴様もちんぽファイターの端くれなら、そのちんぽで向かって来るがいい」
「っ……言われなくたって！」
挑発に乗るわけではないが、ちんぽファイターとしてと言われては黙っていられない。
空手で鍛えられた足腰を活かし、美結は高く跳び上がる。
《天音跳んだ――！　これは新人戦でも見せた、室戸冴香の得意技……の模倣！》
「見よう見まねの、室戸流『月』の七手！　『落月』っ！」
（美結、さん……）
コーナーで休む冴香も美結が見せた二度目となる模倣に、あの時のそれがまぐれ当たりではなかったことを確信する。
やはり美結は、ちんぽファイターとしての才能があるのだ。
《天音空中から落ちてくる！　足で相手のちんぽを挟みながら落下の勢いで擦り上げる室戸流性技、模倣とはいえその威力は本家に匹敵するほどだ！》
「フン……」
だが。

天へ向けてぬうっと巨大な掌を剛羅は向け、次の瞬間美結は空中で止まる。
《ああーっと剛羅、落ちてきた天音のちんぽを鷲掴み！　強制的に天音の技を止め……！》
「力知らずが、己の無力に慟哭射精しろ！」
「っ、きゃあああああ――っ！」
ペニスを掴んだままの右手を豪快に頭上でブンブン振り回し、美結は三半規管を痛めつけられ吐きそうなほどの不快感を覚え。
《なんと剛羅、天音のちんぽを掴んだまま空中で振り回している！　これは苦しい、天音大丈夫か――！》
「砕けろッ！」
「っがはぁあああ……！　ちんぽ、ちんぽちんぽちんぽぉおおおおお――！」
《そして思い切りマットへ叩きつけた――！　リング全体が縦に揺れるっ、いけませんこれは無事では済まない、天音敗北射精か！》
空中で美結を振り回したあげく、長身から繰り出される強烈な叩きつけ。
力に物を言わせた強引な快楽攻撃に、美結は目の前が真っ白になり星がチカチカと飛び交う。
「美結さんっ！」

「しゃ、しゃせい……ぜったい射精しないのぉ……！」

飛びそうになる意識の中、美結は必死にそれだけを考えて踏みとどまる。

並のふたなりや男性がこれを受けていれば、丸一日射精して向こう一週間は勃起できないほどの快楽だ。

しかし、美結はちんぽファイターだ。

敗北射精だけは、絶対にできない。

「しぶとい奴だ、室戸の相方として決勝まで上がってくるだけのことはあるか。ならばその闘志に敬意を表し、剛羅流性技でちんぽファイターとしての引導を渡してやろう！」

「はぁ、はあ……ちんぽ、ちんぽぉおおおお……」

仰向けに倒れたまま、うわごとのように喘ぐ美結。

彼女のペニスはまだ戦えるとばかりに、闘志をみなぎらせて天井へ向けて勃起していた。

その、ちんぽファイターの証を。

「ま、まさか……やめてください剛羅！　やめ……！」

「剛羅流――『圧砕』！」

巨大な剛羅の掌が挟み込み、合掌をするようにして両側からプレスする。

グシャア、と嫌な音が響き渡り。

「あ……っ」
「フン」
一秒ほどの、沈黙の後。
ありえないほどの精液が、剛羅の手の間から噴き上がる。
「あああああ――！　ちんぽ、ちんぽちんぽちんぽちんぽぉおおおおお！　ああ――！　ああ――！　あああああがぁああ――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおお！　ちんぽ潰されて崩壊射精きたぁあああああ――！」
《イったぁあああああ――！　ご、剛羅流性技炸裂、天音超大量の崩壊射精だぁあああ！　その圧倒的な力で両側からちんぽを挟んで潰す、シンプルだが絶大なる剛羅流の技にひとたまりもなく崩壊射精――！》
「美結さんっ！」
観客がどよめき、冴香が絶叫し。
全身を狂ったように震わせる美結は、まだ剛羅の手の中で超絶大量射精をし続けている。
「しぬ、死ぬっ、ちんぽ死ぬぅううう！　ちんぽ死んじゃうぅううう！　崩壊射精でちんぽ死ぬぅううううう――！」
「フン、他愛もない」

片手でグイと美結の身体を転がす剛羅。
彼女は白目を剥いてガクガクと痙攣しながら射精し続け、リング中を自らの精液で真っ白に染め上げ四方へと溢れさせていく。
「美結さん！　美結さん！　しっかりしてください！」
「おぉおおお……おぉおあああ……ちんぽちんぽ、ちんぽぉおおおお……」
まさか、と冴香は直感する。
あの射精の仕方は、ちんぽファイター最後の射精（それ）だ。
最高の快楽と引き換えに、二度と射精できない。
それはつまり、ちんぽファイターとしての――。
（美結さんが……死……）
「ちんぽぉ……ちんぽぉおおおお……」
冴香の全身が熱くなり、視界が真っ赤に染まる。
ようやく見つけた、自らとタッグを組んで戦えるちんぽファイターが。
まだ都大会の決勝だというのに、こんなところで死んでしまった。
自分でも驚くほどの怒りが沸き立ち、そしてそれを止めることはできない。
「よくも美結さんを！　私の大切なタッグパートナーを……！」

「フン、こやつがちんぽファイターとして貧弱だから悪いのだ。そしてそんな粗ちんぽファイターをタッグパートナーにしたお前もな」

「言いたいことはそれだけですか……私の性技で敗北射精するにあたって、もう何も言うことはありませんね！」

氷のような超低温のちんぽ闘気が爆発する。

対して剛羅もここで一気に粉砕せんと、自らのちんぽ闘気をみなぎらせて相対する。

が――。

「さ、冴香……」

「美結さん！」

そこで不意に、意識を取り戻した美結が口を開き。

冴香も剛羅から目を離し、まだ倒れたままの美結を見やる。

そして、そこで気がつく。

彼女の股間にある、二十六センチの屹立したものを。

「……っ、美結さん！　あなた、まだ勃起できて……！」

「はあ、はあ……ごめん、冴香……私、射精しちゃった……」

その猛々しく怒張したペニスを弱々しく自らの手で扱きながら、美結は冴香に詫びつつ

尿道内に残った精液を搾り出していた。

《ご覧ください、天音のちんぽを！　剛羅の性技を受けてなおまだ勃起している！　射精こそしたものの、いまだ彼女の男根は勃起していきり勃っております！　天音美結は生きている、ちんぽファイターとして死んではいない――！》

「なん、だと……」

（剛羅流性技を受けて、ちんぽファイターとしての死を迎えなかった者など……）

さすがの剛羅も動揺し、目を疑う。

しかし美結は確かに勃起して、まだ戦える状態にあった。

「美結さん……よかった……」

心の底から安堵し、冴香はホッと息を漏らす。

まだ彼女と、タッグを組んでＦＴＢができることに。

「……フン、だが貴様らが二回射精したことには変わらん。あと一回の射精で聖珠学園は終わりだ！」

剛羅は勝ちを確信し、二人のちんぽファイターに言い放つ。

だが、美結が必死に戦って時間を稼いだことで。

冴香はいくらか体力を取り戻し、奥義発動の準備が整った。



「美結さんの射精は無駄にしません！　この性技に私たちタッグの命運をすべて懸けます！」

これが本当の最後の攻撃だ。

もう一度、乾坤一擲の奥義を放つ。

自分たち聖珠学園の、運命をかけて。

「室戸流奥義！　『花』の十五手――『百花繚乱』！」

《室戸再び消えたぁあああ――！　今度こそ決まってくれ百花繚乱！　突風がリングに吹き荒れる、体力をすべて費やして放つ乾坤一擲の奥義だぁあああ！》

（冴香……！）

美結が祈り、観客が沸き立ち、実況が叫ぶ。

その中心では、剛羅一人しかいないリング上で。

姿を消した冴香の、超速連続突進による突風が幾筋も吹き荒れる。

「はぁあああああ――ッ！」

《一度目の奥義よりさらに突進回数が増えている！　タッグの命運すべて乗せた連続超速突進手コキであります！　倒せるか、不動の帝王こと剛羅万砕子を！》

二十、二十五、三十――。

体力にも余裕がないぶん、この一撃に冴香はすべてを懸けている。
やがて四十回に達するかと思われた連続突進手コキの果てに、ひときわ強烈な突撃手コキを敢行し。
「これで……どうです！」
《やった――！　これは決まったか、渾身の百花繚乱二発目であります！　天音が身を挺して作った時間で可能となった奥義連発、まさに聖珠タッグの力を合わせた性技ですが、果たしてっ……！》
会場の誰もが、固唾を呑んで剛羅の様子を窺う。
これで決まっていれば、彼女は五十三センチの超巨根から大量の敗北精液を噴き上げて倒れる――。
「……フン……それで終わりか、貴様ら」
「そん、な……」
だが、そこにいたのは変わらず仁王立ちしているちんぽファイターの帝王。
美結と冴香が力を合わせて繰り出した連続奥義ですら、全く通用していない。
《ダメだぁああ――！　全く効いていない！　二度目の全力室戸流奥義、それすら全く剛羅に届いておりません！　これが現実なのでしょうか！　これが当然の帰結だというのな

ら、ちんぽの神様はあまりにも残酷だ――！》

ぐらり、と冴香の身体が揺らぎ。

そのままコーナーポストから転げ落ち、マットの上に力なく倒れる。

《ああっと室戸、絶望したのかコーナーポストから転落した！　万事休す、もう完全に終わりか――！》

体力を使い切った上、その果てに何の成果も挙げられなかったがゆえの絶望。

もう完全に戦えなくなり、冴香はリング上で倒れてしまい動けない。

「冴香ぁああ！」

美結が相方に絶叫する。

動けない冴香に、剛羅は巨大ペニスをいからせてゆっくりと近づいて。

「室戸流の崩壊射精で、この下らん都大会に幕を下ろしてやる」

己の亀頭を、倒れる冴香の女陰にあてがい。

勝敗を決める最後の一突きを、彼女の膣内に浴びせようとしている。

「はあ、はあ、はあ……っ！」

《室戸どうしようもありません、二度の奥義で体が動かない！　天音も大量射精の余韻でカットに入れません、とうとう命運尽き果てた！　剛羅の五十センチ超えペニスが今、彼

女のまんこに突き刺されようとしております！》

「やめてぇえぇ――！」

美結の懇願は、当然聞き入れられず。

そして、今。

一切の躊躇なく、剛羅は自らのペニスを一撃で冴香の奥まで突き挿れて。

室戸冴香は、一瞬すら持ちこたえられずに。

「あああぁっはぁあああああ――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおお！　出る出る出る出る精液出るっ、敗北精液でりゅううう――！」

三十二センチの真正包茎ペニスから、大量かつ特濃の敗北精液を噴き上げた。

これで合計三回目となる、聖珠学園の射精。

それはすなわち美結と冴香が、剛羅万砕子に屈服させられた証。

それを、冴香はペニスから十分すぎるほどに噴き上げる。

「あはぁあああ――！　ちんぽぉおおおお！　ちんぽ負けちゃったぁあああ――！　見て、見てっ、見てぇえぇえ！　室戸流の無様な敗北射精っ、剛羅流に負けた室戸流の惨めな射精見てぇえぇえぇ――！　剛羅流の前には室戸流なんて足下にも及ばないということを証明しちゃったのっ、流派の名を貶めた情けない私の無様で惨めで恥ずかしい射精見てぇえぇ

――！」

《ついに三回目の射精だぁああ！　聖珠学園、ここまで勝ち上がって参りましたが〝破壊帝〟剛羅万砕子の前に為す術もなく果ててしまった！　自らの白濁液で家名を存分に穢した惨めさと気持ちよさは想像に難くないっ、澄ました顔をとろとろに惚けさせて無様な敗北精液大量発射だ――！》

「あはぁあああ――！　そうれすっ、そうれしゅぅううう！　わたひは剛羅流に負けてっ、室戸流の家名を最底辺にまで落として穢したっ、弱くて最低で愚劣なクズちんぽファイターでしゅぅううう――！　みんな見てっ、私のみっともない射精するとこ見て軽蔑してぇえええ！　けいべつっ、けいべつぅううう！　けいべつされたいのぉおおお！　軽蔑されながら精子出すのすっごく気持ちいいのぉおおお！　死にかけの虫を見るような目で私の射精見てぇえええ！　あはぁあああちんぽちんぽ、ちんぽちんぽちんぽ、惨めなちんぽから無様な屈服精液出てるの見てぇえええ――！」

「冴香ぁ……ううっ、ごめんね、私が二回も射精しちゃったから……」

相方の無様すぎる敗北屈服射精に、美結は悔しさと非力さ、そして冴香の淫らな姿に勃起して自らの男根を無意識に扱きあげる。

剛羅は冴香のヴァギナから自らの逸物を引き抜くと、彼女の愛液で濡れた五十三センチ

の肉棍棒を拭って高らかに宣言する。

「見たか！　これが無謀にも私に挑んだ室戸流の、無様で惨めな敗北射精姿だ！　力の剛羅流こそがＦＴＢ四大流派最強であるということが証明されたのだ！　よって今から、二度と私にちんぽを向けられぬよう公開陵辱してくれる！」

うおおおお、と観客が盛り上がる。

試合が終われば、敗者は勝者に公開陵辱される。

ここまで勝ち上がってきた聖珠学園であっても、負ければ陵辱されるのだ。

《剛羅、公開陵辱宣言だ――！　トーナメントは当然ながら最終勝者は一組のみ、残りは全員敗者であります！　決勝まで上がってきた聖珠であろうが、負ければ犯されるのみ！　特にあの室戸が犯されるとなれば、観客の興奮もうなぎ上りだ――！》

「う……」

精液を存分に出し尽くした冴香は、快感の余韻の中でうめく。

負ければ犯されるのはＦＴＢのルールだ。

四大流派として、それに異を唱えるつもりは冴香にはないが。

（美結さんだけは……美結さんだけは守らないと……）

ここで美結に、剛羅のペニスを挿れられることだけはならない。

自分は鍛えられているため、剛羅のペニスを挿入されてもまだ耐えられる。
しかし美結は普通のちんぽファイターだ。
剛羅の超巨大な肉棒を女性器に突き挿れられれば、今度こそ崩壊射精してちんぽファイターとして戦えなくなってしまう。
美結に挿れられることだけは避けなければならない。
ようやく見つけた、大切なタッグパートナーをここで失うわけにはいかない。
「ご、剛羅……」
切れ切れに、冴香は声を絞り出して剛羅に希う。
「犯すのは構いません……ですが美結さんだけは……勘弁してあげてください」
「ほう、敗者が勝者に注文か。室戸流は己の立場を分からないほどに暗愚な流派のようだな」
「く……」
「だが私も鬼ではない……頼み方によれば考えてやらんでもないが」
腕を組んで冴香を見下ろし、言葉の裏で要求する。
大勢の観客の前で、みっともない格好で情けなくお願いをしてみろと。
冴香もそれを分かって、歯を食いしばりつつ自らの着物コスチュームをリング上で脱い

でいく。

（冴香!?）

そしてそれを綺麗に畳んでから、一万を超える観客に視姦されつつ剛羅の前で全裸土下座で頼み込む。

「お願いします……美結さんにだけは挿れないで……」

「聞こえんな」

「美結さんにだけは……ちんぽ挿れないでください……」

「ハッキリと頼もうか、最後列の観客にも聞こえるよう大声で明瞭にな」

「つぐ……！　ぐう……っ」

涙をいっぱいに溜め、屈辱に身悶えする冴香。

やがて少女は恥辱と劣情に、真っ赤になって勃起しながら叫んだ。

「お願いします！　室戸流としてこの通りお願いいたします！　美結さんのまんこにだけは挿れないでください！」

《室戸、全裸土下座で屈辱の懇願だ――！　あまりにもみじめ、みじめすぎる四大流派の痴態であります――！　天音を剛羅から守るために文字通りすべてを捨てて、死より恥ずべき敵への命乞いを選んだ室戸！　ちんぽファイターとして最低の所業を、よりによって

室戸流が行っているという事態に観衆も大盛り上がり！　一斉に焚かれるフラッシュ、一斉に回るビデオカメラ！　室戸冴香の情けなさすぎる大痴態が数多の媒体に残ってしまう――！》

（うっ、ううっ……こんなっ……屈辱……勃起が止まりません……）

マットに頭と亀頭を擦りつけながら、ちんぽファイターとして最も唾棄すべき「敗北射精後の公開陵辱免除懇願」をしていることに興奮し勃起してしまう冴香。

そんな彼女をさらに追い詰めるべく、頭上から遠雷のような声が降ってくる。

「天音美結に挿れなければいいのか？　ならばこのちんぽをどうせよと？」

「わ、私に……私に挿入してください」

「貴様のどこにだ？　何度も言っているだろう、ハッキリと頼むとな」

「くっ……くっ……！」

さらに屈辱を浴びせようとして来る剛羅。

冴香は土下座したまま涙を浮かべ、マットに押し付けられる亀頭からも透明な汁が浮かび上がる。

「わたしのっ……ま……まんこ、にっ……」

「だから聞こえんと言っているだろう、大きな声でハッキリと頼もうか」

「……わっ、私のまんこに！　無謀にも剛羅流に挑み無様な敗北射精をしたっ、室戸冴香のみじめで哀れな負けまんこに！　あなた様の逞しいちんぽをっ、ぶち込んでめちゃくちゃに犯していただくよう！　この通り、室戸流としてこの通りっ、どうか心よりお願い申し上げますっ……！」

悲痛な叫び声が、会場中に響き渡り。

さらなる勢いでカメラのフラッシュが焚かれ、観客がどよめく。

剛羅と室戸が戦えば、室戸の方が敗れると大方の観客は予想できていた。

実際にはかなり善戦した方だが、それでも負けは負け。

しかし驚いたのは、負けても無表情で犯されるだけと思われたあの「雪月花」こと室戸冴香が、あんなにも哀れで浅ましい懇願を泣きながら全裸で土下座までしてのけるということ。

会場の反応を確認した後、剛羅はさも大儀そうに言う。

「フン、四大流派にそこまで心の底より懇願されては致し方ないか」

「く……っ、あ、ありがたき……幸せ……ですっ……！」

頭を上げないまま、なにも纏わない尻を観客席に突き出したポーズで泣きながら心にもない礼の言葉を叫ぶ冴香。

「さ……冴香ぁ……！　私のために、私を守るためにっ、こんな……ううっ……」

相棒の悲惨なありさまに、美結はボロボロと涙を流して痛いくらいに勃起する。

屈辱の極みだ。

美結をちんぽファイターとして引退させないために、身を挺して剛羅からかばい。

四大流派の血を引く高潔なちんぽファイターが、衆目の前で全裸土下座して自分を犯してくださいと懇願している。

（私のために冴香がっ、全裸土下座で恥ずかしいおねだりなんて……！　悔しさでちんぽが勃起しちゃうよぉ……）

「まんこ突き出せ。貴様の矮小な望み通り、天音にはちんぽ挿れずに貴様のまんこだけで我慢してくれる」

「は、はいっ……」

「冴香ぁ……っ」

「勃起している場合じゃないぞ天音。お前は代わりにこの私が公開陵辱してやる、こっちにこい」

剛羅相手に喜んで尻を向ける冴香の無様な姿に泣きながら勃起する美結を、黒崎が現実に引き戻す。

あくまで剛羅が美結への公開陵辱をしないだけであり、美結もまた敗者として黒崎に犯されてリング上で辱められるのだ。

今、美結と冴香はリング中央で剛根タッグに捕まり。

観客によく見えるよう、同時に立ちバックで犯される。

「あっはぁあああああ――！　ちんぽちんぽちんぽぉおおおおおおお――！　ちんぽ入った、レイプされたっ、試合に負けて公開陵辱されちゃったぁあああああああ！　こっ、これがっ、これが公開陵辱ぅううう！　すっごい気持ちいいよぉおおお！　負けてまんこ犯されるの気持ちよすぎぃいいい！　こんなの無理っ、負け癖ついちゃうっ、こんなの毎回わざと負けちゃうよぉおおお――！」

「あっ……がぁあああ……！　ちんぽっ、ちんぽちんぽぉおおおおおお――！　まんこ壊れるっ、こわれちゃううう！　ああ見られてる、撮られてるぅううう！　もっと見てっ、撮ってぇえええ！　犯されてる私の情けないところ見てぇえええ――！」

《今、剛根タッグが聖珠二人へ同時に挿入――！　そしてその上で剛羅も黒崎も、獲物を激しく蹂躙し食らい尽くしていく――！》

「どうだ天音！　これが私とお前の力の差だ！　その身体に、心に、ちんぽに、思い切り刻みつけてイけ！」

「はぁあああ――！　こんなのすごいっ、すごいのぉおおおお！　黒崎さんのちんぽすごすぎてもう逆らえないよぉおおお！　ちんぽ負けて犯されるの最高らよぉおおお――！」

精液を出し尽くしたはずの黒崎だが、美結への敵対心とここで完膚なきまでに力の差を分からせてやるという意志のもと、二十八センチの超硬度ペニスで容赦なく美結の膣内をえぐり抜いていく。

その激しい快楽に、美結は男根を揺らしながら喘ぐことしかできない。

敗者は抵抗すら許されず、ただ勝者の肉便器となるしかないのだ。

「生意気にも新人戦では屈辱を浴びせてくれたな！　これが私のかぶった恥ずかしさと気持ちよさだ！　十倍にして返してやる！　どうだ！　このっ！　イけっ！　イけっ！　大勢の前で無様にまんこ犯されて屈服射精しろっ！」

「そんなっ、そんなぁああ！　私はただっ、ちんぽファイターとしてっ、全力で戦っただけなのにぃいいい！　おほぉおおちんぽっ、そんなっ、そんな理不尽に恨まれてもっ、あはぁああちんぽちんぽまんこちんぽぉおおおおおお――！」

怒りを込めた黒崎の連続ピストン攻撃に、美結は精液を断続的に発射しながらイキ狂う。

男としてのプライドを折られて完全に力負けし、自分より強い相手に女の身体を差し出

すことの充足感はふたなりとして他の何よりも代えがたい幸福だ。
　しかしながら、まだ美結はちんぽファイターとしての矜持が残っている。
　ズポズポと犯されながらもなお、キッと黒崎を睨んで喘ぎながら叫ぶ。
「あっ、あんたたちなんかっ！　次の大会では私と冴香が絶対射精させてぇえええ！　絶対次は私たちが公開陵辱してあげるんだからぁあああああ！　いっぱい気持ちよくして……あひぃいい、ちんぽぉおおお！」
「フン、まんこ犯されてちんぽから精液まき散らしながらリベンジ宣言か！　そんなだらしないイキ顔でよく寝言なんか言えたものだな天音！　食らえ！　食らえ！　ちんぽ食らえ！　イけ！　もっと無様に射精しろ！」
「あはぁああ！　ちんぽ！　ちんぽ！　ちんぽちんぽちんぽぉおおお――！　ぜったいっ、ぜったい次はわたひたちがぁ……あはぁあああちんぽちんぽぉおおお！　精液精液精液ぃいいい！　敗北屈服ミルク濃いっ、負けて犯されて悔しい思いが精液ミルク無限に濃くしてくれるのぉおおお！　濃ゆい濃ゆい負けミルク大量射精気持ちぃいい――！」
　すぐそばで黒崎に貫かれながらみっともない顔で精液をまき散らす美結に、剛羅は腰を振って冴香を犯しながらその獲物に問いかける。
「どうだ室戸、これでいいのか。天音は黒崎に犯されて悦んでいるぞ」

「はっ、はぎぃ……！　あっ、ありがっ、ありがとうございますぅ……こんな無様な負け犬のお願いを聞いていただいてっ、おほおおおっ、ちんぽ、ちんぽぉおおお……剛羅様は大変慈悲深いちんぽファイターれすぅ、おあっはぁあああ、ちんぽちんぽちんぽぉおおおお――！」

美結をかばい自らを犠牲に、剛羅の五十三センチの超爆根ピストンを膣と子宮で受け止めながら冴香は快感に悶えつつ屈辱に勃起する。

「あぎぃ、ひぎぃいい……！　一突きごとにっ、子宮の奥までぇえええ！　室戸流の跡継ぎ赤ちゃん作る部屋が犯されて気持ちいいのぉおおお！」

「フン、正統継承者の座を奪われておきながらまだ世継ぎなど考えているか。ならばその幻想ごと、子宮もろとも破壊してくれる！」

「あがぁあああ――！　子宮奥らめぇえええ！　精液ぃいいい！　子宮奥突かれて精液出る出る出てるのぉおおおおお――！」

美結も、冴香も、無理やり雄の肉棒に犯されるという、女の本能に刻み込まれた最高の幸福と快楽を全身とペニスで享受し、男根から敗北と屈服の証を放ち続ける。

少女たちの痴態と醜態は公式・非公式を問わず数々の記録媒体にしっかりと余さず残り、ＦＴＢの歴史とともに何千年の時を超えて燦然と輝き続けるだろう。



やがてその至福の時も、終焉を迎え。
「これで終わりだぁあああ！」
「ならばこちらもそろそろ終幕と行こうか……ぬおおおおっ！」
最後の一突きを、共に敵の一番奥へ叩き込み。
その瞬間、美結と冴香は今までの大会で一番激しい射精を同時に放つ。
「あがぁあああ――！　おほぉおお、おっほぉおおおあああああちんぽぉおおお――！　ちんぽちんぽちんぽ、ちんぽからすっごい屈服精液出たぁあああ――！　見てっ、見てぇえええ！　みんな見てぇ、聖珠学園一年生天音美結のなっさけない屈服射精見てぇえええええ――！　ちんぽちんぽ精液精液っ、女の子ザーメン幸せ敗北ちんぽミルクでりゅううううう――！」
「あはぁあああああ、ちんぽぉおおおお――！　見て、見て、四大流派室戸流〝雪月花〟室戸冴香のみっともなくて無様すぎる敗北屈服射精見てぇえええ――！　澄ました顔して調子に乗ってここまで来ておいて無様に負けた室戸冴香の情けなくてはしたない破廉恥なっ、きったなくてくっさい特濃ドロドロネバネバ雄ミルク出すとこ見てぇえええ――！」
二人同時に、特濃かつ超大量の精液を観客全員に余すところなくぶっかけて。
ようやく剛根の二人は美結たちを解放し、リングを悠々と降りていく。

リング上には、全裸の美結と冴香が仰向けに倒れたまま残されて。

「はあ、はあ……冴香ぁ……ごめんね……私のせいで……」

「……いえ、美結さんはよく頑張りました……私こそ不甲斐なくてすみません」

「ううんっ……次はぜったい私たちが公開陵辱して、あの人たちを今の百倍は気持ちよくしてたっくさんびゅーびゅー精液出させてあげようね……っ」

「はい……いっぱい気持ちいいお返ししてあげましょう」

精液まみれの手をどちらからともなく握り合い、そのまま二人はマット上で全裸のまま意識を失う。

夏季ＦＴＢ都大会は幕を下ろした。

美結・冴香の聖珠学園は剛根学院相手に意外なほど善戦したものの、結果的には１-３で完敗。

準優勝となり、少女たちの夏は終わりを迎える。

NUMBER 13 黒崎夏希（くろさきなつき）



国立剛根学院一年生
ちんぽファイターランク4
タイプ:バランス/ノーマル
得意技:サンダーステップちんぽ
体型:166cm/58kg
B95(G)/W59/H96
ふたなり:13～28cm/ズル剥け
反り返った非常に硬いペニス
ステータス:体力A/筋力A/瞬発力A
ちんぽ攻撃力A/テクニックA/我慢強さA

強豪校、剛根学院 FTB 部の一年エース。新人戦で負けたことから美結をかなり敵視している。非常に高い能力を開花させており、剛羅の後を継ぐ者として有望視されている。雷をイメージしたちんぽ攻撃を数多く持ち、攻撃あるのみのスタイルを貫く。ストイックな性格で鍛錬を怠らないが、部屋はファンシーグッズで溢れているらしい。

NUMBER 14 剛羅万砕子（ごうらまさこ）



国立剛根学院二年生
ちんぽファイターランク8
二つ名「破壊帝」
タイプ:パワー/ノーマル
得意技:剛羅流「圧砕」
体型:180cm/110kg
B115(D)/W105/H109
ふたなり:18cm～53cm/ズル剥け
完全なストレート/カリ非常に高い/金玉も巨大
ステータス:体力S/筋力S/瞬発力B
ちんぽ攻撃力S+/テクニックD/我慢強さ(－)

剛根学院 FTB 部副部長（夏の大会後に部長）。四大流派筆頭である剛羅流の次期当主。「十代に一度の完成された剛羅流当主」と称される。剛羅流の理（ことわり）に従い力でねじ伏せ射精させることを信条としており、過去に彼女を敗北射精させた者はいないとされている。ちなみに「万砕子」はリングネームであり本名は「剛羅真紗子」（読みは同じ）。

エピローグ

表彰式の後、会場裏の人目につかないところで。
優勝を決めた剛根学院の二人は、立ったまま今大会を振り返る。
「剛羅副部長……いえ、この瞬間に部長でしたね。大変お疲れ様でした」
「ああ、まだ課題は残るがな」
黒髪ショートの黒崎夏希が、相方である剛羅万砕子をねぎらう。
この大会で三年生が引退した今、二年生で副部長の剛羅は剛根学院ＦＴＢ部の部長へと昇格したのだ。
「……それにしても剛羅部長の戦い、やはり圧倒的でした。剛羅部長の前には、同じ四大流派の室戸であっても足下にも及ばず、ましてや天音など問題外の矮小な器でしたね」
「フ、そう思うか」
もちろんです――と言いかけて。
黒崎は、剛羅の顔が険しくなっていたことに気づく。
もう優勝も決め、巨大な純金製のトロフィーは剛根ＦＴＢ部員が先に持ち帰ったにもか

かわらず。
ちんぽファイターとしての緊張を解かず、腕を組んだまま目を引き絞っていた。
「気づいていた者はいなかったようだがな」
「……？」
「あの二度目の奥義を食らった直後、ほんの一滴ではあるが――」
私のちんぽからは、カウパー液が溢れていた。
そう、剛羅は言った。
「ば……バカな！　剛羅部長が！　嘘でしょう！」
信じられないとばかりに、声を裏返す黒崎。
敗北射精はおろか、カウパーの一滴すら出さないことで知られる最強のちんぽファイターが我慢汁を出していたなど、青天の霹靂とも呼べる事態。
「この私に手傷を負わせたちんぽファイターは初めてだ。……まったく、恐ろしいものよ」
「そうでしたか……室戸冴香、剛羅部長に劣るとはいえ腐っても四大流派ということか……」
顎に手を当てて難しい顔をする黒崎に、剛羅は呆れたようにため息をつき。
静かながら厳しい声で、こう言う。

「黒崎、お前は試合中に目を開けて寝ていたのか」
「そ、それはどういう……」
「確かにカウパーを出させた直接の原因は室戸の奥義だ。だが奴に二度目の奥義を発動させたのは誰だ。体に著しい負担のかかる奴の奥義を、一試合で二連発させしめたのはいったい誰か」
言われて、黒崎も思い返す。
確かにあれほど派手で強烈な奥義――剛羅にはほぼ通用しなかったが――は、身体に多大な負担がかかることは明らかだ。
普通なら一試合で二回発動するなど正気の沙汰ではないし、よしんばできても無理がたたって故障などを引き起こしかねない。
それを可能にさせたのは、冴香の相方――。
――冴香は休んでて！　もう一回あの奥義をぶつければ、もしかしたらチャンスあるかもだから！――
――可能性はまだ作れる！　絶対あきらめないんだから！――
「天音、美結……！」
「そうだ、奴が時間を稼いだことで室戸は休むことができ、奥義の連発を可能にした」

導き出した黒崎の結論に、剛羅も頷く。
何ひとつ勝ち目のなかった、完全な絶望の淵にあって。
一条の光を見出そうとした、あのあくなき勝利への執念。
彼女の持つそれこそが、なによりも恐ろしいのだと剛羅は言った。
「確かに天音はちんぽファイターとしてはまだ下から数えた方が早いほどの実力だ。だがあの闘志、あの執念、そして私に臆することなく向かってきたあの気迫。奴は弱いのではない、まだ強くないだけだということだ。なにより剛羅流の性技を受けても、ちんぽファイターとして死ななかった時点で、奴には底知れないものを感じさせる」
「……」
「存外、私を敗北射精させる者は室戸ではなく、あの天音美結かも知れんな」
そう言って、剛羅万砕子は腕組みを解き。
夕方ではあるがまだ日の高い空を仰いで、かすかに笑う。
「フ……学生ＦＴＢなど低レベルでくだらんと思っていたが、なかなかどうして多少は楽しませてくれそうだ」
（天音美結……！　完膚なきまでに打ち破ってもまだ、私たちに脅威となって在り続けるか）

爪が手のひらに食い込むほど、気がつけば黒崎は拳を握っていた。
彼女が自分たちに残した脅威を。
決して無視できない、ちんぽファイターを。
（……だったら、次に戦うときにこそ！　貴様の心とちんぽを、完全に圧し折ってやる！）
今度こそ必ず、自分たちの誇る力のペニスで粉砕してやらんと息を巻く。

「完敗だったね、剛根はやっぱ強かったよ」
それから二時間後。
小さな銀色のトロフィーを抱いて、夕日が照らす帰路につく美結は少し残念そうに、けれどやり切った笑顔で横の相棒に声をかけた。
剛根タッグに公開陵辱され、金玉の精液を残らず出し尽くしてリング上で気絶してしまい、目が覚めた時には会場内の医務室に二人はいて。
気絶していたため表彰式には代理で三年生の紫部長と真奈が出て、銀色のトロフィーを自分たちに渡してくれたのだ。
「そう、ですね……ですが美結さんが剛羅万砕子を相手にあれほど頑張るとは思いませんでした。つくづく私の想定をいい意味で裏切ってくれるちんぽファイターです、ランクも

上がりましたしね」

その折、ＦＴＢ協会に呼び出された紫部長によって、美結が剛根相手に善戦したことでちんぽファイターランク３への昇格が決定した旨を伝えられた。ランク３になればＦＴＢ関連施設の利用料が安くなったりするなど、少しずつ強さに対する恩恵が得られてくる。

昇段試験のないランク３までであれば大会および試合の成績を判断材料にその場で昇格することはたまにあるが、それでもこの早さは異例だと冴香は言う。

もちろん美結も嬉しかったのだが、やはり優勝できなかったために素直には喜べない。

「えへへ、ありがとね。……でもやっぱ、優勝はしたかったなぁ」

「美結さんは、なんでそんなに優勝したかったんですか」

冴香の問いに、美結は唇に指を当てながらやや上を仰いで考えて。

夕日を見ながら、答える。

「なんていうか、全力で打ち込めることがしたかったんだよ」

「全力で？」

「私、前は空手やってたんだけど、こんな体だったからちんぽが道着にこすれて感じちゃって続けられなくて。頭も悪かったから文化系なことも苦手でさ。恋愛だって、ちんぽついてる女の子となんてしたくないじゃん男の子は？」

一定の需要はありそうですけど、と冴香は言いたかったがあえて黙って先を促す。

「……だからさ、聖珠に転校してきて、ＦＴＢの存在を知って、私に全力でやれることはこれしかないって。んで、どうせやるんだったらそれこそ青春を懸けてやれるところまでやってみようって。だから優勝したかったんだ」

「……」

「結局準優勝だったけど、でも冴香と一緒にここまで戦えてすっごく楽しかったし、次は絶対剛根に勝って優勝したいって新しい目標もできたから、もっともっとＦＴＢしたいなって思うんだ」

美結の答えに納得した冴香は、それ以上は問わず。

代わりに今度は美結が、相棒へ問いを投げかける。

「ねえ、冴香」

「なんです？」

「また次の大会も、私とタッグ組んで戦ってくれる？」

期待を込めた彼女の目を、まっすぐに見て。

短い銀髪を風に遊ばせ、冴香は微笑んで頷く。

「ええ、もちろんです。私にとってもあなたはようやく見つけた、大切なタッグパートナ

ーですから……っ、だから抱き着いてこないでください！」

「冴香ぁあああ――！　好きっ、好きぃいいい！　今度こそぜったい優勝しよ、ぜったい優勝できるんだからっ！」

その返答に、美結も満面の笑みで抱き着いて。

冴香は文句を言いながらも、彼女を優しく引っぺがしていた。

（……タッグマッチがこんなに楽しいものだとは……本当に美結さん、あなたは私にたくさんのものを与えてくれる……師範代としてＦＴＢのことはすべて知り尽くしたと思っていたのに……）

最初はタッグマッチ自体が自分に縁のないものだと思っていた。

ましてや彼女とタッグなど、狂気の沙汰としか思えなかった。

単純に、ＦＴＢの闇を知らずヘラヘラしている美結のことが気に入らなかった。

だが今は違う。

彼女と一緒に戦って、自分自身も成長していることを実感できている。

敗れはしたものの、剛根タッグとの試合も価値あるものであったと確信している。

「あなたとなら、私もちんぽファイターとして……」

だから、もっと。

自分も、ＦＴＢの舞台で――。

（更なる高みを、目指せるはずです）

その確信を得た冴香は、より輝かしい笑顔を相棒に向けていた。

継承者の座を奪われても。

家から追い出されても。

流れ着いたこの学園で出会えた、彼女とならば。

闇雲に強さを求めていた今までとは違うやり方で、ＦＴＢのリングで戦うことができる。

それは冴香にとって、まったく新しいＦＴＢの形だった。

ちんぽバトルは、こんなにも楽しいのだと。

「一緒に頑張りましょう、美結さん」

「うんっ！　冴香とだったら、どこまでだっていける！」

それに美結も応え、差し出された冴香の白い手を強く握る。

もっともっと、戦いたい。

もっともっと、男の象徴でイかせ合いたい。

このふたなりの身体がコンプレックスだったことなど、嘘のようだ。

今はとにかくＦＴＢが楽しくて楽しくて、青春の全てをかけて打ち込みたくてたまらな

い。

そしてそれは、彼女と組んで戦うことで何倍にも大きくなる。

「次の大会はもっとレベル高いですよ。大丈夫ですか？」

「もっちろん！　相手が強ければ強いほど、ちんぽ勃起するから！　剛根にもリベンジできるし！」

都大会で準優勝した聖珠学園は、剛根学院と並んで関東大会への参加資格を得ている。

そこでも強豪ちんぽファイターが揃い、熾烈にして白熱のちんぽバトルが展開されるだろう。

だが美結の男の象徴は、望むところとばかりにガチガチに怒張して戦意をあらわにしていた。

「次こそは二人で絶対優勝しようね、冴香！」

「……ええ、そのつもりです」

そしてそれは、冴香の真性包茎ペニスであっても同じ。

はちきれんばかりに勃起して、次の大舞台へ向けて海綿体に血液を充満させていた。

（ちんぽバトルって、すっごく楽しい！）

（これがＦＴＢタッグマッチ……上等、上等です！）

ＦＴＢ――ふたなりちんぽバトル。

ふたなり同士が己の誇りを懸けて男性器で戦いイかせ合い、射精したほうが負けというだけの格闘技。

この世界を知らなかった天然少女と、知り尽くしていた天才少女が。

確実に勝利を呼び込むペニスと、無限の可能性をもたらすペニスが。

対照的な二人の肉棒が重なり合ったとき、リング上にかつてない旋風が巻き起こった。

天音美結と、室戸冴香。

彼女らの戦いと青春は、まだまだ終わりそうにない。

番外編　催眠敗北

都大会三回戦にて、美結と冴香は相手校の罠に落ち、催眠アプリの力で二人とも射精してしまった。

《信じられない事態であります！　聖珠学園、相手の卑劣な催眠アプリによって室戸が操られてしまいました！　天音は正気を失った相棒の口で射精、室戸に至ってはリング上公開オナニーで射精という大惨事！　あと一回どちらかが射精してしまえばここでまさかの敗退となってしまいます！　絶体絶命の窮地をどう巻き返すのでしょうか！》

会場は娼夢学園タッグへのひどいブーイングと、美結たちの捲土重来に期待する声援で満たされていた。

一部、あの冴香のオナニー姿を見せた相手タッグへの賞賛および美結たちが敗北し犯される展開を望んでいる者たちの声もあるが。

「はぁ……あはぁああ……ダメ、このままじゃダメなのぉ……気持ちよすぎて負けちゃう、ちんぽ負けちゃうよぉおお……」

冴香がオナニーで大量射精している間、美結は彼女を人質に取られ、為す術なく男の逸

物を突き出して北条亜理紗と石川麻友にダブルフェラされることを余儀なくされていた。
その約束も反故にされ冴香はオナニー命令で射精してしまい、残る美結も二人の絶え間ない口責めにより追い詰められている。
「勝ったわ！　さあイきなさい天音さん、思いっきりお客さんの前で敗北ザーメンを噴き出すのよ！」
「ダメぇちんぽ、ちんぽイクっ、ちんぽちんぽぉおおお――っ！　もうダメ、ダメダメ、敗北精液発射準備完了だよぉおおおお！　ちんぽぉおおお――！」
最後のひと押しをかけようと、手コキの勢いを強くする北条。
精液は尿道を駆け上がり、鈴口がぱっくりと開いてその瞬間を告げる。
もはやここまで、万事休す。
《室戸全く目を覚ましません、精液を全部抜いても正気に戻らないのか！　萎えたと思っていた肉棒もすぐさま勃起してまたオナニー続行であります！　底なしの性欲だ！》
相方もまた、催眠が解ける気配すらなくオナニーを続行してしまい、助けが期待できない美結は相手タッグにダブルフェラを続けられ。
「らめぇイクっ、ちんぽイクぅうう――！　でるっ、出ちゃうっ、精液いっぱいでちゃうよぉおお――！」

「あはぁああまたイクっ、精液出ます……リング上でちんぽ扱きオナニーするの最高でまた射精しちゃいます……んはぁあイク、精液でりゅううう――！」

そして、今。

《だぁあああ――！　天音・室戸ともに同時射精してしまった――！　三回どころか四回も射精してしまい、この時点で聖珠学園は三回戦敗退であります！》

少女たち二人の逞しい男根から、負けを意味する大量の白濁液が吹き抜けのスタジアム天井まで立ち昇っていく。

「んほぉおおお負けちゃった、負けちゃったのぉおおお――！　くやしいっ、悔しくてきもちいいっ、負けて悔しいのが気持ちいいのぉおお！　ちんぽが悔しさで喜んでるのぉおおお――！」

「あっはぁああちんぽ、ちんぽちんぽぉおおお――！　四大流派の私がっ、こんなところで格下のちんぽファイターたちにイカされて負けるの気持ちいいっ、みっともない負け方して気持ちよすぎるぅうう！　みてっ、見てぇええ！　室戸流の情けない敗北射精見てぇえええええ――！」

自分たちの夢が、よもやこのようなところで唐突に潰えるなど美結も冴香も全く想像の外だった。

催眠アプリなどという卑怯な手に屈し、大勢の観客の前で敗北の証を噴き上げ続ける二人は、負けたことへの悔しさとそれに伴う計り知れない快楽で満たされている。

会場を埋め尽くす大勢の客が、一様に悲嘆の声を上げていたものの、快楽に絶叫する美結たちにはそれも耳に入らない。

敗北という代償を支払い、最高の幸福を手に入れてしまった。

数分に渡る射精の末、美結と冴香は共に肉棒をくたりと萎えさせて精液まみれのマットに崩れ落ち。

「ふふっ、それじゃあ負けた子たちには義務を果たしてもらわないとねぇ……」

北条亜理紗が自らのペニスを勃起させつつ舌なめずりをすると、観客たちも興奮にざわつく。

敗者はリング上で、勝者に公開陵辱されてしまう。

反則だろうと負けは負け、これから美結と冴香は衆人環視の中で痴態を晒さなければならない。

（ど、どうしよう……犯されちゃうっ、レイプされちゃうよぉ……）

これから襲い来る淫らな未来を想像して、美結は息を荒らげて射精直後の肉棒を反応させてしまう。

試合中は一切そのようなことを考えなかったというのに、ここにきて彼女の中にある「犯されたい」という願望がムクムクと頭をもたげて下半身へ信号を伝え、金玉の裏に隠れる女陰が勝手に蜜を氾濫させていく。

「はあっ、あはぁ……きて、きてぇ……敗北ちんぽファイターの情けないまんこにちんぽぶち込んでぇ……」

「素直ね、負けた子はそうじゃないと」

本能に従い四つん這いになり、尻を突き出して挿入を心の底から望む美結に、石川麻友は気を良くして自らの勃起した勝者の肉棒を一気に突き挿れる。

「負けたまんこには……こう！」

「あひぇえええ――！　ちんぽ、ちんぽきたぁあああ――！　敗北まんこにちんぽ挿入(はい)ってるのぉおお！　うれしいっ、うれしいいい！　負けて犯されて嬉しいよぉおお！」

一撃で子宮口まで突かれ、全身を揺らすような快感に美結は即座に崩落して上の口から桃色の叫びを上げる。

さらにそのまま全力のピストンを受け、四方からの視線を一身に浴びながらこの世のものとは思えない快楽と幸福に喘ぎ続ける。

「ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおお！　ちんぽガンガン突かれてまんこ気持ちよす

ぎるよぉおお！　んほぉおおさいこう、さいこうぅうう！　負けてよかったっ、こんな気持ちいいこと負けないと味わえないのぉおおお！」

激しく後ろから蹂躙され、美結はマットにうつ伏せになって自らの手で男根を慰めながら涙とカウパーを流して悦びに溺れる。

そんな光景を横目で見つつ、北条亜理紗はぐったりと頽れる冴香に上から言葉を浴びせかけた。

「ほら室戸さん、あなたの相方はちんぽ挿れられてあんなみっともなく幸せそうに叫んでるわよ」

「うう……美結さん……」

自分のせいで負けてしまい、無力感と射精の余韻に浸りながら力なく冴香は相棒の名を呼ぶ。

その声は美結に届くことなく、彼女は石川にバックで犯されて下品に喘いでいる。

「そしてあなたも今から私のちんぽに犯されるの。嬉しい？　嬉しいわよね。だってそんなにまんこぐちょぐちょにしてるんだもの」

「……！」

北条に言われたように、すでにこの時点で冴香の女の子の部分は洪水のように濡れそぼ

っていた。

（ど、どうして……こんな格下の相手に犯されるというのにっ、私はなぜ期待してまんこを濡らしているのですか……）

「それはあなたもまた、四大流派以前に一人の女だからよ」

混乱する冴香に、北条はさも当然のように言ってのける。

「女なら誰でも心の奥底に『雄に犯されたい、ちんぽでぐちゃぐちゃにレイプされたい』という願望があるからよ。心のどこかで待ち望んでいたんでしょう？　こうなることを」

「ちっ、違います……！　誰があなたみたいな低級ちんぽファイターに……」

必死に否定しようとする冴香だが、身体の反応は止められない。

実際はこれもまた催眠アプリの効果だ。

心の奥底に眠る犯されたいという願望をアプリの力によって増幅されているため、嫌悪感や闘争本能を凌駕するレベルで「犯されたい」と思ってしまっているために体が反応してしまうのだ。

（犯されたくないはずなのに……どうして）

冴香本人はそんな理由を知る由もなく、無惨にも男の象徴が彼女の秘所にあてがわれる。

「ほら、ちんぽ欲しいんでしょ？　格下のちんぽ挿れられて神聖なリングで動物みたいに

犯されたいのよね」

「く……ち、違います……私は……」

犯されたい、今すぐ挿れて欲しい、ぐちゃぐちゃにされたい。

ダメだ、こんなこと認められない。

犯されたい、犯されたい、レイプして欲しい、犯されたい。

ダメだ。

犯されたい犯されたい、犯されたい犯されたい、犯されたい犯されたい——。

思考がどんどん流されていき、ついには自分の口から願いを乞うてしまう冴香。

「お……お願いします、私のぐちょぐちょに濡れた淫らな敗北まんこにっ、あなたの逞しい勝者ちんぽ挿れて気持ちよくしてください……」

「ふうん、やっと立場が分かってきたみたいね。ならお望み通り——犯してあげるわ！」

相手からの同意を得て——もっとも公開陵辱の権利が与えられている以上同意など不要だが——北条亜理紗は思い切り、自らの男根を冴香の奥へと突き挿れる。

「ああっはぁあああああ——！　まんこ、まんこぉおおお！　まんこにちんぽ挿入ちゃったのぉおお！」

《今、室戸の膣にペニスが挿入——！　四大流派の血を引く高潔な少女がはしたなくおね

だりした上でのペニス挿入、室戸クールな美貌を一撃で崩されメスの顔になっております！》

自分よりも小さいとはいえ向こうも都大会レベルのちんぽファイター、その男性器は鍛えられて大きさも固さも申し分なく、無抵抗で挿入させてしまえば即座に快楽に屈してしまう。

「きもちいいっ、まんこ気持ちいいい！　格下のちんぽ挿れられてまんこ悦んでるっ、だらしないまんこがちんぽ締め付けて精液おねだりしてるのぉおお！」

リングの上で犯される二人に、観客たちは興奮して一斉にシャッターを切りビデオを回し公開無料撮影会が始まってしまう。

新進気鋭のちんぽファイターと、高潔な四大流派の血を引くふたなり少女が同時に、それも実力で言えば二段階は格下の相手に犯されて悦んでいる情けない痴態に会場は大盛り上がりだ。

そんな彼らを利用してしまおうと、娼夢学園の二人はあることを思いついた。

「亜理紗、このドスケベちんぽファイターたちには、私たちのちんぽ二本だけじゃ足りないみたいよ」

「そうね……だったらこんなのはどうかしら」

先ほどのスマホを手に、北条亜理紗はある場所へと歩みを進めていく。
そこには、リング上の光景を撮り続けているカメラがあり。
その映像は会場の天井から吊り下げられた巨大スクリーンに出力され、試合の光景が観客席のどこからでも明瞭に見えるようになっている。
そのカメラのレンズに向けて。
《うわーっなんだ！　巨大スクリーンから怪しい光がっ……》
「こうすれば、手っ取り早く催眠光を拡散できるわよね」
北条はスマホの画面をかざすと、催眠アプリを起動させ。
カメラはその光をスクリーンへと出力し、会場中の観客へ催眠光線を拡散させてしまう。
「特定の対象にかけるものとは違って、まとめて大勢を操るから単純な命令しかできないけど……」
「観客の皆さん、この情けない敗北ちんぽファイターたちを犯してみたくないかしら？」
北条の一言で、会場は水を打ったような沈黙が降りたあと。
堰（せき）を切ったかのように、彼らは雄の本能のままリングへ四方から押し寄せる。
「ひ……きゃああ！」
《た、大変なことになってしまいました！　催眠アプリの光を広範囲に拡散され、観客の

大半が理性を失いリングになだれ込んでいきます！》

リングに上がった彼らはためらうことなく服を脱いで雄の象徴を露出させると、次々に美結と冴香に迫っていく。

「お、男の人のちんぽ……こんなにいっぱい、私を犯すために勃起してるのぉ……」

「あはぁあちんぽ、右を見ても左を見てもちんぽ……殿方のちんぽがこんなにいっぱいっ、うれしい、うれしいです……」

三百六十度から迫る雄臭に二人の理性と恐怖感は薄れ、残ったのは雌の卑しい欲求のみ。このたくさんの性器を、自分の身体で受け入れて気持ちよくさせてあげたい、そして自分たちも気持ちよくなりたいと――。

「み、美結ちゃん、俺のちんぽ咥えてくれ！」

「ああ、あのクールな室戸に、俺今フェラさせてるんだ……やべえこんなのすぐ射精ちまう……うっ」

肉棒が頬に押し付けられ、白濁液が顔に、髪に、喉の奥にぶちまけられる。

男性ゆえに一回の量は少なめであるものの、これだけの人数が集まって集中砲火を浴びせられればその量は莫大なもの。

美結も冴香も、彼らの相手を始めて五分経つ頃には全身をドロドロの欲汁で穢されてい

た。

「あはぁせいえき、せいえきいっぱいぃ……ちんぽいっぱい、男の人のザーメンいっぱいぃ……」

「もっとぉ……もっとかけて、出してください……私の全身を精液便所にして、皆さんの精液をありったけください……」

正気を失った彼らは、ついに少女たちの肉穴へと狙いを定め。

「も、もう我慢できねぇ！　挿れるぞ！」

「俺も……冴香ちゃんのまんこに！」

「じゃあ俺は……美結ちゃんのケツにぶち込んでやるっ」

少女たちの四つの穴が、あっという間に肉の栓でふさがれる。

「んほぉおおまんこっ、ケツ穴ぁあああ！」

「あはぁっ、ちんぽ、ちんぽがぁあああ！」

少女たちの若く、さらに鍛えられた肉穴に耐えられる男性はなかなか存在せず、男たちは次々と膣内・肛内で果てて熱く濃い精液をぶちまけていく。

「うおおやべえ美結ちゃんのケツ穴！　中ですげえ締まって……やべえもう出るっ！」

「さ、冴香ちゃんのまんこあったけぇ……クールなのに膣内はあったかくて気持ちよすぎ

て……うぉお、出るぞ！」

そして彼らの精子を体内で受け止め、雌としての欲求を満たされ自らの雄を際限なく勃起させていく美結と冴香。

「もっとぉ！　もっと気持ちよくなってぇえ！　まんことケツ穴使って本能満たしてぇえぇ！　ちんぽ勃起しちゃうっ、中出しされるたびちんぽおっきくなっちゃうぅうう！」

「種付けっ、種付けしてぇえぇ！　男の人の精子いっぱい子宮にくださいぃいい！　殿方のあったかいちんぽミルク奥まで届かせてぇえぇ！　あはぁダメぇ我慢できないっ、だれでもいいからちんぽしごいてぇえ！　女として悦んでる私のちんぽ触って精液抜かせてぇえぇえ！」

口をふさがれ、女の秘所を蹂躙され、肛門をえぐられ、突かれるたびに揺れるペニスを男の手で弄ばれる。

全身で彼らに犯され、美結と冴香は正常な思考を失い、なされるがままに犯されていくのみ。

「女のくせにこんなデカいちんぽしやがって！　恥ずかしくないのかおらっ！　イけっ！　ちんぽイけっ！」

「俺らより何倍もデカいちんぽから何倍も精液出して、ちんぽファイターってのは本当に

どうしようもない淫乱女なんだな！」

彼らの罵声すらペニスに心地よく響き、急ピッチで特濃の男汁が少女たちの金玉で精製され。

一分と持たず、長大な肉棒から彼ら数百人分の精液を二人は一斉に迸らせた。

「んほぉおおおおちんぽちんぽちんぽぉおおおおお！　男の人に犯されてすっごい濃い精液出ちゃったのぉおおお！　気持ちいいっ、集団レイプで精液搾り取られて気持ちいいのぉおお！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおお！」

「あはぁあああ、精子、精子っ、精液ぃいいいい！　殿方に犯されて雌ちんぽから雄ミルクいっぱいぎもっぢぃいいいい――！　もっと、もっと扱いてぇえええ！　精液いっぱい出させてぇえええ！」

美結の太く逞しい男根から、冴香の長く皮の余った肉棒から、超大量の精液が彼らのそれを押し流す勢いで出し尽くされる。

男たちにかわるがわる犯され、精液を噴き出させられ、延々と続く狂った宴。

その中心で、美結と冴香は勃起したペニスから屈服の証を溢れさせて淫猥に笑み彼らに媚びる。

「もっとぉ……もっと精液ほしい、もっと精液出したいのぉおお……全身で精液飲ませて

ぇ……みんなで私のちんぽ搾ってぇえぇ……」

「おとこのひとの……殿方の精液……もっと飲みたい、浴びたい……私のこときったない精液で埋め尽くしてくださいぃ……そして私のこのだらしないちんぽからっ、みなさんの手で精液出させて欲しいですぅ……」

見るも無惨な姿になった二人に、娼夢学園の二人は暗い笑みを湛えてリングを後にする。

「ふふっ、男性の汚い精液にまみれるなんて最低のちんぽファイターね」

「もうＦＴＢはできないんじゃないかしら、集団レイプの虜になっちゃったからね」

出しても出しても代わりの男たちがリングへと上がり、砂糖を見つけた蟻がごとく美結たちに群がり犯し精液を搾り取り種付けしてゆく。

いくらでもある男性の肉棒を一本残らず愛し、慈しみ、奉仕し、精液を搾り出し、自らも大量に射精するふたなりの少女たち。

ただ雌の本能に従い、雄の劣情を満たすために。

収拾のつかなくなったリングの上で、美結と冴香は男たちの、そして自分たちの精液に溺れ、底なしの白濁快楽沼へ意識ごと沈んでいった――。

番外編　冴香の悪夢

夏季都大会から二日後、深夜。

室戸冴香は自室のベッドで、悪夢にうなされていた。

薄いタオルケットが股間部分を頂点として高く盛り上がり山を作っていることから、性的な夢を見ていることが分かる。

「んん……んうっ、んうぅう……んううっ、んううっ」

そのタオルケットの頂点が不意に染みていき、かと思えばそこからごぷごぷと濁った汁が布越しに噴き上がって山の麓へ流れ落ちていく。

冴香は、寝ながら射精していた。

どれほど気持ちいい夢を見ているのか、唇からは甘ったるい声が漏れ、蠱惑的に肢体をよじらせながら、少女はまどろみの中で射精しつつ淫らにたゆたい続ける。

《イった――！　室戸冴香三回目の敗北射精であります！　四大流派筆頭、剛羅万砕子の前にひと太刀すら入れられず大量精液噴射だ――！》

「ちんぽ、ちんぽちんぽぉおおお――！　ちんぽ気持ちいいっ、負けて精液まき散らすの気持ちよすぎるのぉおおお――！」

高らかなゴングの音すらかき消す、自らの卑猥な喘ぎ声。

三回目の射精を味わい、最高の甘美な快感の中で負けてしまい。

そしてＦＴＢのルールに従い、敗者となった冴香はそのまま勝者たる剛羅万砕子に公開陵辱される運びとなってしまう。

「はへぇ、ちんぽくるっ、敗北まんこにちんぽきちゃうぅ……すっごい気持ちいいのきちゃ……ひぎぃいいっ！」

冴香はリングの中央で、剛羅にうつ伏せに組み敷かれて寝バックの要領でヴァギナへ挿入され、その快感でまたも射精してしまった。

「はひいっ、ちんぽ、ちんぽきたぁああ――！　五十三センチのぶっといちんぽまんこに挿入（はい）ってるっ、無理やり広げられてガバガバになっちゃうのぉおお！」

一撃で子宮の奥まで貫かれ、それによる絶大な快楽で即座に雄のミルクを噴射してしまう冴香。

これまで三回も大量射精していたとは思えない濃さと勢いで、リング上にて公開陵辱白濁汁をまき散らしていく。

「気持ちいいっ、きもぢぃい――！　ぶっといちんぽすきっ、好きなのぉおお！　最高っ、ちんぽ最高ぉおおお！」

（な、なぜ私はまた剛羅と試合を……それに美結さんは……）

気を失うほどの肉体的快楽の中で、冴香は必死に考える。

唐突に試合で犯されている自分。

さらになぜか、リングのどこにも相方の美結がいない。

シングルマッチであるかのように、冴香は一人で剛羅と戦い、そして敗北射精して公開陵辱されている。

大木の幹のような太い肉の塊がゴリゴリと子宮をえぐり、内臓がすべて持っていかれる快楽に射精を続ける冴香。

そこにもう一人、責め手が唐突に加わった。

黒髪ショートで引き締まった身体の、黒崎夏希が。

二十八センチの黒光りした男の象徴を見せつけ、犯される冴香に迫ってくる。

「新人戦ではよくも私のこと気持ちよく射精させてくれたな。その全身に、ちんぽに、たっぷりお返ししてやるから覚悟しろ」

（そ、そんな……黒崎夏希まで加わって……）

二対一で前後から犯され、為す術もない。

夏希の固く太いペニスが上の口を犯し、剛羅の規格外な肉大剣が下の口を破壊し尽くす。

「んぶっ、んむっ、んぼぉおお！　んむぉおお、むぉおおっ！」

「牛みたいな声出して、四大流派の威厳もないな。ちょうどそのぶら下がってるちんぽが牛のおっぱいみたいじゃないか、ならこの下品なちんぽ乳をちゃんと搾ってやらなきゃな」

そう言って黒崎は冴香の口から自らのモノを引き抜くと、剛羅に犯され続ける冴香の腹の下へ手を入れて物欲しそうに揺れている真性包茎の肉茎を鷲掴んだ。

「おほぉっ、おおっ、ちんぽ、ちんぽぉおお！」

「ほらこうやって乳搾りならぬ精液搾りしてやる、この変態ドスケベ雌ちんぽ牛が！」

後ろから激しく犯されながら、容赦のない手コキで搾り取られる。女性器への快感がそのまま男性器へと伝わり、たちまちのうちに冴香は射精してマットを精液で汚していく。

「んはぁあぁっ、ちんぽぉおお！　ちんぽ、ちんぽぉおお！　ちんぽ牛さんみたいに乱暴に搾られてるっ、ちんぽミルク搾りされてるのぉおお！　雌牛っ、雌牛なのぉおお！　ちんぽごしごしされて汚いミルク搾られてる最低のちんぽ雌牛なのぉおお！」

後ろから巨躯にがっちりホールドされた上で膣奥どころか子宮の奥まで犯され逃げ場がない状態で、一切の遠慮も手加減もなく強烈な力でペニスを扱きあげられてしまえば射精

する以外に道はない。

「らめぇミルクっ、ミルク止まんないぃいい！　きったなくてくっさい最低のちんぽミルク生産してるっ、ちんぽ気持ちよくされて特濃牛乳産地直送で出荷してるのぉおおお！」

剛羅の一突きごとに金玉が精液を大量に生産し、それを黒崎の搾精で即座に吸い出されて放出する。

溜めておく猶予も与えられず、ひたすら延々と栄養満点の精液ミルクを提供し続ける冴香は、もはや四大流派でもなければちんぽファイターでもないただのふたなり雌牛でしかなかった。

どれだけ犯され搾り尽くされたのか、やがて剛根の二人は冴香を解放し少女の体は精液まみれのマットにべちょりと崩れ落ちる。

頬を染め荒い息を吐いて冴香が放精の余韻に浸っていると、剛羅と黒崎はおぼろげな視界の中でスッと消失して。

「え……」

次の瞬間目の前にいたのは、顔も知らない少女だった。白の道着に身を包み、前を大きく盛り上げている勃起したちんぽファイターの少女。

彼女が不意にニヤッと笑い、口を開いた。

「お久しぶりですね師範代。その顔だと私のことなんて覚えてないでしょうけど」
「……！」
どこか暗い笑みを浮かべたその少女が、何の前触れもなく冴香の目の前でもう一人増えた。
「見せてもらいましたよ、最低の負け試合。冴香様、すっごく気持ちよさそうに敗北射精してましたね」
「私たちのちんぽ散々扱きあげておきながら、あんなにあっさり敗北射精しちゃうなんて恥ずかしい」
二人の少女は四人に増え、四人の少女が八人になり。
リングの上で、少女たちはどんどん無から湧いてくる。
「あ、あなた……がたは……」
思い出した。
自分が室戸流師範代だった頃に厳しく指導しすぎて壊してしまった、数多の門下生ちんぽファイターたち。
いちいち顔も覚えていなかった彼女らが一斉にペニスをいきり勃たせて、冴香を取り囲んでいる。

「よくも私のちんぽを快感で壊してくれましたね、師範代」
「いっぱい射精させてくれたお返しに、今日はみんなで師範代のことたっくさん射精させてあげますから」
「覚悟してくださいね、冴香様？」
これまで散々気持ちよくさせてきた門下生たちが、恨みと憎しみを込めて勃起して群がってくる。
彼女らに何をされるか分かった冴香は、本能的に後ずさって距離を取ろうとするが、リングは正方形で逃げ場などないし、そもそも大量射精で動けない。
四方から群がってくる門下生たちにあっさりと捕まり、冴香はわずかな力で首を振って拒絶の意を示すが。
「なに女みたいに嫌がってるのよ、まんこ濡らしてちんぽおっ勃ててるドスケベ変態ちんぽ師範代のくせして！」
力の入らない冴香を数の暴力で無理やり組み敷き、門下生の一人が容赦なくヴァギナへ己の男根を突き挿れる。
「おほぉおお――！　ちんぽ、ちんぽきたぁあああ――！　ちんぽきくっ、効いてるぅううう！　大したことない門下生のちんぽなのにまんこに効くぅうう！」

予想以上の快楽にたまらず冴香は悶絶し、皮余りの亀頭からカウパーを迸らせ仰け反り叫ぶ。

「なあんだ、結局師範代もまんこにちんぽ挿れられれば悦んじゃうちんぽメスだったってわけね」

「ち、ちがうっ、ちがいま……おほぉお――！　おっ、おっ、おっほぉおお、ちんぽぉおお――！」

否定しようとした冴香の子宮の口に亀頭がぶつけられ、上の口から出る言葉は嬌声に変わる。

「違わないでしょこのちんぽ女！　まんこハメられて勃起ちんぽぶるんぶるん揺らしながらカウパー飛ばす変態師範代のくせに！」

「だったらケツ穴にも挿れてやるわよ、この貧弱ちんぽ師範代！」

罵倒と共に肛門が無理やり拡張され、そこに二本目の雄根が菊花を散らすように無遠慮に突き刺さった。

「ほほぉおケツっ、けつあなぁああ！　うんこの出る穴ちんぽにおかされてるっ、うんこあなにちんぽはいってるのぉおおお！」

「冴香様の糞穴あったかぁい……どうですか、糞みたいに見下していたちんぽが糞の出る

穴に入ってきた気持ちよさは。ねえ糞師範代？」

「きもちいいっ、きもちいいですぅうう！　糞の出る穴を糞みたいなちんぽファイターに犯されて気持ちい……はへえぇごめんなさいっ、糞は私ですっ、室戸冴香は糞ちんぽファイターで糞師範代れすぅうう！」

最も不浄な穴をえぐられ、快感に喘ぎえずき自らを徹底的に糞と称して悦びよがるふたなり美少女。

もはやプライドの欠片もなく、下品に快楽をかき集めて犬のように貪るだけの浅ましい存在と化していた。

「んほぉおおらめっ、らめぇえええ！　変態ちんぽ師範代のまんことケツ穴ずぽずぽ突きながらみんなでちんぽ扱くのらめぇえええ！　ダメぇほんとに出ちゃうっ、精液いっぱいびゅるびゅる出ちゃうぅううう！」

「ほら出しなさいよ変態ちんぽ師範代！　私たちのことといっつも上から目線で見てた高潔なちんぽから汚い精液出してみなさいってば！」

必死に懇願するも、門下生たちのピストンと手コキは止まらない。

あえなく冴香の理性は崩壊し、肉欲の赴くまま皮余りのペニスから屈服の証を体外へ放出する。

「イクイクイクイクイっくぅううう――！　ちんぽ、ちんぽ、ちんぽぉおおおお！　ちんぽ汁ぅううう！　見下してた門下生にまんことケツ穴犯されてちんぽしごかれてくっさいミルク出してるぅううう――！」

「なにが『簡単に射精してそれでも室戸流ですか』よ！　あのときの言葉そっくりあんたに返してやるわ！」

「いいざまね、〝元〟室戸流正統継承者！　情けない敗北射精して、そんなだから継承者の座も奪われるのよ！」

散々惨めな光景を晒しつつも、彼女らの罵りとなじりは止まらない。

その言葉ですらペニスが反応し、ビクンビクンと脈打って射精の勢いを増していく。

「はひいっ、そうれすっ、そうれすぅううう！　こんなだらしない射精してるわたひが室戸流の当主になれるなんて無理だったんれすぅううう！　ごめんなひゃい、ちんぽ我慢弱いくせに当主になろうとしてごめんなひゃいぃいいい！」

「まだ自分の立場が分かってないようね、謝る内容が違うでしょ？」

「そっ、そうれした、そうれしたぁああ！　ごめんなしゃい、弱いくせにっ、すぐ射精する変態ちんぽのくせにっ、いつも上から偉そうなこと言ってみなさんのことといじめてごめんなしゃいぃいい！　一番弱いちんぽのくせに偉そうにしてごめんなひゃいいい！　門下

生さまのちんぽのほうが強くて偉いんれすっ、わたひのちんぽなんか最低の包茎粗ちんぽれすぅうう！」

ドバドバと射精しながら自分がこれまでつらく当たってきた門下生に対し、呂律の回らない舌と反省の色も見られない緩みきった表情で謝罪する冴香。

格下に犯され射精させられ、あまつさえ彼女らに謝るという屈辱の三重奏に、冴香の金玉は過剰反応して精液を加速度的に生産していき射精は止まらない。

「とまんないっ、射精とまんないのぉおお！　気持ちよすぎて金玉よろこんでるっ、金玉よろこんでたくさん精子つくってりゅうううう！　精液出すより溜まる方が早くて射精おわんないっ、男なのに女の子イキみたいに無限イキしてゅのぉおお！　ちんぽ、ちんぽきもちいいっ、精液出すのぎもちぃいいい――！」

「だいぶ自分の立場が分かってきたわね、このドスケベ変態ちんぽファイター」

「私たち全員が満足するまで終わらないからね。ちんぽファイターの性欲と回復力……師範代なら当然知ってるわよね？」

「は……はへぇ……そんなぁ……」

男性の数倍から数十倍の射精量および精液の生産速度を誇るちんぽファイターが、数十人。

彼女らが全員満足するには、自分一人の奉仕では永遠に回し切れず。
すなわち、一生この少女たちの慰み者にされるという未来しか訪れない。
快楽の無間地獄に、冴香の肉棒はさらに大きくなり精液の濃さと量は増す一方。
「おわんないっ、おわんないぃぃ！　射精おわんない、ちんぽ気持ちよくなるのとまんないのぉおお！　永遠にちんぽ気持ちよく射精しちゃう、永遠にちんぽイキしちゃうぅうう！　んっほぉおおちんぽ、ちんぽちんぽ、ちんぽぉおおおお――！」
螺旋階段を転げ落ちていくように、冴香は永久に続く快楽の深みに溺れていった。

「ちんぽ、ちんぽぉおおおお――！」
そこで冴香は目を覚まし、深夜三時半に絶叫しながら跳ね起きて。
目が覚めた瞬間、股間に激流のごとく襲い掛かる快楽の波をまともに受けていることに気づく。
「ちんぽぉおお――！　ちんぽイってるっ、射精してるのぉお！　夢で射精しながら現実でも射精してたのっ、夢から現実に変わってもちんぽイキ続けてるのぉおおお――！」
まさに文字通りの夢精。
朦朧とした意識の中、射精中だった肉棒を無我夢中で握り、扱き、射精の勢いを加速さ

せて快楽をしゃぶり尽くそうとする冴香。

「ちんぽ、ちんぽちんぽちんぽぉおおお！　もうなんでもでもいいのっ、ちんぽ気持ちよければなんでもいいのぉおお――！　精液出すのが一番幸せなのぉおお！　んっはぁあああまたイクっ、ちんぽイっくぅうううう――！」

寝ながら射精し、起きてからもそのままオナニー射精を続け。

ようやく欲求が収まって意識もハッキリしてきたときには、シーツもマットレスも濃厚な半固体白濁雄液で汚し尽くされていた。

「はぁ……はぁ……また……この夢ですか……」

まだ股間に残る甘美な射精後の快感と、夢の中での敗北と屈服による多幸感に包まれながら、我に返った冴香は安堵とほんのわずかの落胆を声に滲ませ呟いていた。

あとがき

風邪を引いて仕事を休みゼイゼイ言っていたときに「ふたなりがペニスでイかせ合う格闘技」などといったものを突然思いつき、それまで一度も18禁を書いたことがないのに三十八度の熱で朦朧としながら起き上がって書き始めて、そのままキルタイムコミュニケーション様に書籍化していただく運びとなりました下山田ナンプラーの助と申します、お手に取っていただき誠にありがとうございます。まだ熱が出ているのではないかと思っています。

近年はふたなりもだいぶメジャーになってきた感がございますが、その中でもちんぽバトルものはまだまだ発展途上な領域でとてもニッチだと思います。にもかかわらずウェブ版ではとても多くの方に応援して頂き、書籍化のお声もかけて頂き、素敵なイラストを描いて頂き、こうして本をお手に取って頂き、拙作と私はあらゆる方々に支えられ非常に恵まれていると感じております。この場をお借りして深くお礼申し上げます。

皆様が拙作を通してふたなりやちんぽバトルに少しでも興味を持って頂き、ひいては拙作がちんぽバトル業界の活性化の一助になることができましたら、作者としてこれ以上の

幸せはございません。

それでは、またどこか別の場所でお会いできることを心より願っております。また次の作品でもお目にかかれたら嬉しく思います。

二次元ドリームノベルズ410

FTB！
～ふたなりちんぽタッグバトル～
【電子書籍版】

著　者
下山田ナンプラーの助

装　丁
マイクロハウス

発　行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル１Ｆ
●編集部TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Shimoyamada Numplanosuke 2018
当ファイルは、二次元ドリームノベルズ『FTB！　～ふたなりちんぽタッグバトル～』
（2018年3月2日　初版発行）に基づいて作成しております。

http://ktcom.jp/

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど
どしどしお書きください！　読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ **http://ktcom.jp/goiken/**

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
（株）キルタイムコミュニケーション　二次元ドリームノベルズ感想係

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！
【偶数月】隔月発売
2・4・6・8・10・12月
妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！
【奇数月】隔月発売
1・3・5・7・9・11月
正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー！
【電子版】毎月配信
書籍版は奇数月発売！
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
コミックUNREAL
COMIC UNREAL
敗北乙女エクスタシー
Defeat Maiden Ecstasy
あなたのキモチイイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!
電子書籍版も好評発売中
編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
最新情報は公式サイトへ！
キルタイムコミュニケーション
検索



KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▸最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

S T O R Y



ふたなり少女の天音美結は、転校先の学園でFTB部と出会う。FTBとはふたなり同士がイカせ合い、負けた方が陵辱されるスポーツである。入部を決めた美結は天才ちんぽファイターの冴香による稽古を経て、立派なファイターへと成長していく。そして二人はFTBの大会に出場することを決意。男顔負けの剛直ペニスによる攻撃、卑劣な催眠攻撃、Wふたなり責めといった様々な技を持つ強豪達を相手に、美結と冴香はちんぽファイターの頂点に立つことができるのか!?